

科学図書館叢書

抱朴子内篇

葛洪 著

科学図書館



抱朴子内篇

葛洪 著
小柳司氣太
飯島忠夫 訳

凡 例

抱朴子を道教の經典と為すは、稍や失当の嫌なきに非るも、道教が一の体系をなして、後世に弘まるに至りしは、本書の力、与りて多きに居る。参同契、黄庭經の類あるも、その所説は、一局部に涉りて、未だ抱朴子の如く、全般に論及する者あらざるなり、故に特に本書を採る。抱朴子の著者葛洪は、西晋の末榮に生榮せし人にして、字を稚川といふ、抱朴子はその号なり。少より儒学を修め、後ち神仙道術を好みて、世を避くるの志あり。咸和の初め散騎常侍大著作に召されたれども就かず、後ち羅浮山に留り、道を修め丹を鍊り、七年にして『抱朴子』内篇二十篇、外篇五十篇を著し、八十一歳を以て歿す。（晉書の本伝及び外篇の自叙）神仙伝十卷も亦たその著にかゝる。

本書の翻譯に当りて、外篇を省きたるは、その内容、主として世教の隆替、人事の得失にわたり、道教と、没交渉なるとを以てなり。

本書の底本は、孫星衍の校刊に拠り、愈樾の讀抱朴子（春在堂叢書中の曲園雜纂）及び孫詒讓の札迻を参照す。而して注釈に至りては、未だ前人の著述あらず、加之に原文晦澁読み易からず、故事憑拠明かに知り難きものあり、而して印刷の期已に迫るを以て、研究の暇あらず、唯その大体に及ぶのみ。

注釈に参考したる群書の標目、左の如し。

史……………	史記	詩……………	詩經	列……………	列子	吳……………	吳越春秋	莊……………	莊子
左……………	左伝	淮……………	淮南子	墨……………	墨子	高……………	高士伝	呂……………	呂氏春秋
晏……………	晏氏春秋	韓……………	韓非子	管……………	管子	荀……………	荀子	論……………	論衡
博……………	博物志	国……………	国語	三……………	三国志	漢……………	漢書	山……………	山海經
搜……………	搜神記	晋……………	晋書	太……………	太平御覽	本……………	本草綱目	後……………	後漢書
列……………	列仙伝	神……………	神仙伝						

大正十二年三月

訳者 識

目次

3 目次

凡例		一
抱朴子内篇自序		五
抱朴子内篇卷一 暢玄		七
抱朴子内篇卷二 論僊		三
抱朴子内篇卷三 对俗		三
抱朴子内篇卷四 金丹		三
抱朴子内篇卷五 至理		五
抱朴子内篇卷六 微旨		七
抱朴子内篇卷七 塞難		八
抱朴子内篇卷八 积滯		九
抱朴子内篇卷九 道意		一〇
抱朴子内篇卷十 明本		一三
抱朴子内篇卷十一 仙藥		一六
抱朴子内篇卷十二 辨問		一七

抱朴子內篇卷十三	極言		二七
抱朴子內篇卷十四	勤求		一四
抱朴子內篇卷十五	雜庇		一九
抱朴子內篇卷十六	黃白		二六
抱朴子內篇卷十七	登涉		二三
抱朴子內篇卷十八	地真		二五
抱朴子內篇卷十九	遐覽		二九
抱朴子內篇卷二十	祛惑		二八
附別 旨			二八〇

抱朴子内篇自序

葛 洪

洪は、体、超逸の才に乏しくして、偶たまま無為の業を好む。假令、翅つばさを奮はゞ能く玄霄そらを凌しのぎ、足を馳すれば能く風を追ひ景を躡むを得とも、猶ほ故に勁つよき翮はねを戢をさめて、鷦鷯みぎやういの群に入り、逸はやき足を蔵おさめて、跛ちんぱの驢馬ろばに伴なはんとす。況んや大塊は我に与ふるに尋常の短羽を以てし、造化は我に仮すに至驚じの蹇あしなへを以てすをや、自ら知る者は審かにして、能はざる者は止む。豈に敢へて蒼蠅の翼を力めて、天に冲ぶの拳を慕ひ、跛ひべつ蹇の足に策むちうちて、飛兔の軌節あどを追ひ、嫫母ほぼ（淮の説山訓を見よ）の醜みにくき顔を飾りて、媒灼せうしやくの美談を求め、沙礫れきの賤しき質たちを推して、千金の価を和肆くはし（卞和の美玉を売る店）に求めんや。それ焦僇せうけう（短人種の名にして列の湯問篇を見よ）の歩を以て、夸父こほ（巨人の名にして同上の篇に見よ）の縦あどを追ふは、近才あど（近頃の才子、一本に、近才の越人となす、越人の出典不明）の蹟つまつく所以なり。要離の羸つかれたるを以て（呂の十一）強ひて鼎を扛あぐるの勢に赴むくは、秦人の筋を断つ所以なり（秦の武王をいふ、史の秦本紀を見よ）是を以て望を榮華の途みちに絶ちて、志を窮否の域さかひに安んず。契の実藿あかぎの葉には八珍の甘きあり、蓬よもぎの戸簞たけの門には藻稅さうぜつ（水藻を画きたる梁上の短柱にして美しき建築をいふ）の樂みあり。故に権貴の家は、咫尺しせきの近きに在るも従はず、道を知るの士あれば、艱遠かんえんと雖も必ず造いたる。奇書を考覽すること、既に少なからず、然れども率おほむね隱語多くして、卒にはかに解し難し。至精に非れば尋究する能はず、篤勤に非れば悉く見る能はざるなり。道士の淵博沿聞なる者は寡くして、臆断妄説する者は衆し。往々好事の

者ありて、之を修めんとするも、従ふ所を知らず、又諮問すべきに由なし。今此の書を為りて、粗^ほぼ長生の理を挙ぐ。その至妙なる者は、之を翰墨に宣ぶるを得ず、故にその較^{あらまし}略を略言して、以て一隅を示し、悲憤^{ひふん}の徒の之を省みるを翼^{ねが}ふ、思、半ばに過ぐるに庶^ち幾^かからんか。豈にこの道に暗き者の為に、能く微を究め遠きを暢^のぶるを必せんや、聊かその先づ覺^{さと}る所を論ずるのみ。世儒は徒^ただ周孔に服膺するを知りて、一生を桎^{くひ}梏^{かせ}の中に送り、神仙の事を信ずるなく、直ちに目して妖妄の説となす。余が本書を見ば、特^たに大に之を笑ふのみならず、又た將に真正を謗^{そし}毀らんとす。故に之を余が旧著に合せしめずして、別にこの一部を為り、名づけて内篇といふ、凡べて二十卷あり。外篇と各々次第を起^{おこ}す。之を名山石室に蔵するに足らざるも、且^{しば}らく金匱^{きんき}に絨^とぢて、以て識者に示さんとす。その与^{とも}に道を言ふべからざる者は、見しめざるなり。誰だ来世の長生を好む者をして、其の惑^とを釈^とかしむるを貴ぶ、豈に信を不信者に求めんや。謹んで序す。

抱朴子内篇卷一

暢玄（玄理を暢べ）
（明かすこと）

抱朴子曰く、

玄（玄妙不可知の大道）は自然の始祖にして、万殊ばんしゆの大宗なり。その深きことは、昧くらくして視るべからず、故に微びといはれ、その違きことは、遙はるかにして辺際へんがいなし、故に妙といはる。九重の空を覆おほはんばかりの高さあり、八方の隅すみを籠こめんほどの広ひろがりあり。日月よりも光りかゞやき、電いなづまの馳はするよりも速し。或は倏たちち燦かがやきて影の如くに逝き、或は見るまに沸わき出でて星の如くに流る。或は深く流れて淵の如く澄すみ、或は乱れ散ちりて雲の如く浮ぶ。あらゆる物類も、この玄によりて見あらはるれば、実体あるかとも思はる、さりながら奥おくぶかく潜みて、いと静かなれば、何れに求むべきやうもなし、大地の奥底おくていに深く沈み、星辰のはてまで上のほりわたる。金石もその剛かたきを比くらぶる能はず、滴したる露もその柔やわらかさを等くする能はず。方形なれども矩まがりがねと同じからず、円まじかなれども規ぶんまはしとは異なり。来るも見ることなく、往くも追ふこと能はず。天も之によりて高く、地も之によりて卑ひくく、雲も之によりて行き、雨も之によりて施しかる。

この玄の中に含ふくめる真一の元氣は、陰陽の鑄型いがたとなり、万物の太始を吐き或は納れ、無盡蔵の力もて、其を限りなく鑄い、上は二十八宿をも回らし動かす。天地の開闢かいびやくを巧みになしとげ、造化の靈機を自由にあやつること、馬を御すにも似たり。四時の氣を呼吸し、虚冲淵嘿

の本体を奥ふかく統べ括り、湮がり結ばれるものをば舒べ闡く、濁りたるものをば抑へ下し、清みたるものをば揚げ浮ばしめて、河渭（二水）の水を加減す。さればいかに増すとも溢れず、挹めども置きず、与ふるも榮となさず、奪ふも憔悴れたりとせざるは、玄の本体なり。故に玄の在る所は、其の樂み窮らず、玄の去る所は、形器弊れて、精神も亦逝る。

それ五声（宮商角徵羽）八音（金石糸竹匏土革木）清商（曲）流徵（上）は耳を迷はしめて、自然の聴力を損ず。鮮やかにして華やかなもの、艶ありていろどるもの、暉り輝きてきらびやかなるものは、目を迷はしめて、自然の視力を傷る。宴安逸豫なると、清き醪、芳き醴とは性を乱し、治めかしき容、媚びたる姿、鉛華の粧、素き質は生命を伐る。故に玄の道を知るものは寿命永かるべきも、玄の道知らざるものは存しがたし。外界に誘惑せられ、それを顧眄みると顧眄みざるとは、寿命の殺と生とを司どる神器ともいふべく、酒盃など唇吻に親むと親まざるとは、興と亡とを分つ關鍵といふべし。綺くしき榭は高く聳えて、雲漢をみおろす計りなり、藻などにて飾れる室、華やかな椽など、参差として建ち竝び、組みたる帳は霧の如く合し、羅の帳は雲の如く離る、西毛（西域より来る毛皮の類）は閑房に陳ねられ、黄金の觴は華の如く、遠近に交も馳す、清き絃とともに斉く唱ふる声はかしましく、鄭の国風の舞の容は紛紜として委蛇なり、哀しき簫（竹管を廿四又は十六並べた楽器）は雲井はるかに霞のうちにひゞきわたり、羽根もて飾れる天蓋の屋形船は漣瀖に浮ぶ、芳ばしき華を蘭の囿に掇り、紅の花を珠もてたゝみなせる池に弄ぶ、峻き坂に

登り遠きを望みて百憂を忘れ、深き谷に俯覽みおろして朝餐あさけの晩おそきを遣る、入りてはまばゆき千門の宴に列し、出でては華はなやかな儀式もて朱あかき輪わの車を驅る。然れども樂極れば哀集り、盈つること至れば必ず虧かることあり。故に音曲終れば慨嘆がいたんの声発し、讌宴えんや罷めば心自ら悲し。是れ実に理勢まねの召くところにして、猶ほ影響の相帰するが如きものなり。抑も彼の歡樂榮華は、一時の仮借にして真にあらず、故に一たび過ぎ去るときは形迹もなく遣らる。

それ玄の道は何人にあれ、之を得たる者は内心うちこころを主となし、之を失ふ者は外ほかに惑まよさる。之を用ふる者は神の如く自由に、之を忘るゝ者は一種の器具に過ぎず。これ玄道の要言なり。之を得る者は、黄金造りの鉞まさかり（天子てんしの武器ぶき）の威を待たずして貴く、之を体認するものは、稀有けうの貨たからを須たたずして富む、高くして登るべからず、深くして測るべからず、水に映ずる月の流る光に乗りて、駒こまのあがきの絶間たえまなき日の逝く景かげに策むちうつ。限りなき虚空こくうを凌ぎ、充ちわたる大氣を貫き、辺際はてなき上に出でて、辺際はてなき下に入る。行方ゆくへもしらぬ門かどの戸を叩たたきて、見渡す限り遙かなる野原のほらに遊ぶ、恍惚くわくつとして有にも非ず無にも非ず、彷彿ほうふつとして陰にもあらず顕にも非ず、九華きうくわ（仙葉せんえつの名）と雲端うんたんに咽のみ、六氣りくき（平日へいじ、日中にちちゆう、日没にっぽく、夜半やはんの氣及あ）を丹霞あかきかすみの中に咀くふ、遠くして知りがたきところに徘徊はいかいし、微かすかにして見るべからざるところに翱翔かうかくる、かの空に横よこはる虹をも履はき、星のめぐる道をも踐みにじる。此等はすべて玄の道を会得したるものなり。その次は、真まこととに足るを知りて分に安んず、かゝる人は、従容として世を遁れ、光を山林やしなに頤

ふ。鸞^{らんりゅう}の翼^{つばさ}を紆^{まじ}ふも賤^{ひと}しき夫^{ひと}とともに居り、
（賤しき人は、原文の細介の意識、愈説には、外篇の任命）
 篇を引いて、魴^{うなぎ}の誤となす、魴^{うなぎ}は、竝^{なら}びに類^る）
 浩然^{つゑ}の氣^きを蓬^{よもぎ}の戸簾^{たけ}の門^{かど}に養^{やしな}ふ。檻樓^{つゞれ}を衣^き、索^{くわく}を帶^{おび}となすも、竜文^{りゆうもん}の美^{うらや}はしき衣服^{いふく}を羨^{うらや}まず。
 策^{さく}にたすけられ重^{おも}き荷^にを背^せに負^おふも、護衛^{ごゑい}などうちつゞきたる四馬^{しうば}の馬車^{ばしや}を求めず。夜光^{やかう}の
 名玉^{なうたま}に似たる徳^{とく}あるも、そは嵩^{たか}き山^{さん}の岫^{しう}に蔵^{かく}めて、他山^{たさん}の石^{いし}もて礪^{みが}くことを望^{もち}まず（詩の鶴鳴に本づく）。
 靈龜^{れいき}の如^{ごと}き智^ちあるも、そは深^{ふか}き淵^{ふち}に沈^{しづ}めて、鑽^きられ灼^やかるゝ災^{さい}を違^さる（龜甲を焼いてトをなす）。一動^{いちどう}一息^{いつしつ}、
 止^{とど}ることを知りて窮^{きう}めず、何^{なん}れに往^{かう}くも足^あらざるなし。赫奕^{かがや}く一朝^{いちやう}の榮華^{えいけ}を棄^すてゝ、車^{くるま}をも
 債^{やが}らんとする人生^{じんせい}の險路^{けんろ}を避^さく。蒼苔^{あおきけ}むす崖^{がけ}の間に吟^うし嘯^{せう}ぶきて、万物^{ばんぶつ}を塵^{ちり}と思^{おも}ひ、茂^{さか}れる
 木蔭^{もくかげ}に顔^かを怡^{たの}しめて、富貴^{ふき}の家^{いえ}の朱^しき戸^こも、我身^{わみ}にとりては、繩^{くわ}の枢^くにも及^{およ}ばずとなす。未^す
 を甫田^{ひろきた}に乗りて、王侯^{わうこう}より召^めさるゝ節^{しるし}をば退^{しりぞ}け、執鞭^{しつべん}（賤役^{しやんやく}を）の若^{ごと}しとなす。菽^{まめ}を啜^すり泉^{せん}
 に嗽^{くちやう}ぎて、藜^{あかざ}の葉^は、藿^{まめ}の実^みを大牢^{だいろう}の味^{あじ}ありとなす。泰然^{たいぜん}として、無為^{むゐ}の場^ばに盡^{つく}きざるの歡喜^{くわんぎ}
 あり、欣然^{こんぜん}として、不爭^{ふしやう}の地^ちに貴賤^{きけん}を齊^{ひとし}くす。醇^{じゆん}を含^ほみ撲^{ぼく}を守^{まも}り、欲^ほなく憂^{うれ}なし。天真^{てんしん}を全^{ぜん}
 くして形器^{けいき}を虚^{むな}しくし、平坦^{へんたん}に居^ゐり淡白^{たんぱく}を味^{あじ}ふ。恢恢蕩蕩浩浩茫茫^{くわいはいだうだうかうかうぼうぼう}（皆^{みな}な広大^{くわうだい}）として造化^{くわくわ}と
 同じく、自然^{じぜん}に渾成^{こんせい}す。闇^{くら}きが如^{ごと}くにして明^{めい}かに、濁^{じやく}るが如^{ごと}くにして清^{せい}み、遅^{おそ}きに似^にて疾^とく、
 虧^かくるに似^にて盈^みつ。豈^{いかで}に庖人^{ぱうじん}その職^{しやく}を治^しめずとも、尸祝^{ししう}たるもの、席^{せき}を蹴^けたて、樽俎^{そんそ}をのり
 越^こえて、自^{みづか}ら之^{これ}に代^からんや（包人云々のことは） 又^{また}は棟梁^{とうりやう}たるもの、墨繩^{すみなは}ををうち捨てゝ、徒^{ただ}らに
 拙工^{せつこう}の如^{ごと}く手を傷^やつくるものあらんや（棟梁云々は）。か^かの腐^{くさ}りたる鼠^{ねずみ}の臭^{くさ}きながらは、鳴臯^{めいこう}

又は鳶の類こそ善き味と思ひ、之を獲るときは樂み、失ふときは憂へんも、鸞鳳の如き鳥は見向きだにせじ（鳶が腐鼠を得しとき、会ま鳳鳥上より之を見おろす、以為へら）道を得たる人の俗界に於けるは之にも似たり。藐然として流俗の誉を喜ばず、担爾として雷同の毀を懼れず、外物を以てその至精を汨さず、利害を以てその純粹を汚さず。故に富を窮め貴を極むるも、之を誘ふに足らず、称誉賛頌するも、何ぞ之を悦ばずに足らんや。矛もて刺し鏝にて煮殺すも、之を劫やかすに足らず、謗り讟るも何ぞ之を威むるに足らんや。何となれば常にあらゆる煩累のたづなを絶ちて、始めより外物と雑はらざればなり。

若しそれ隋侯の珠（隋国の君主が蛇を助けて報いられ）を操りて雀を弾き殺し、秦王の痔を舐りて多数の車馬を賜はり（莊子の列禦寇）朽ちたる緇の如き枯枝に登りて、鳥の巢を探り、呂梁（名）の急流に泳いで魚を求めんか、得失償はずして榮辱処を易へ、旦には自ら孤と称する（王侯自ら称して孤の朕と称するが如し）王侯の賓客となりて、優遇せらるゝも、夕には忽ち誅殺の禍にかゝり、その骸は野原に暴されて、狐鳥などの餌となる。弱き棟の如く才力も撓み、鼎足の支ふる力なくして食物の覆へる如く、職責も盡す能はず（棟と鼎との比喩は易に本づく）あたらし一生を、あらし浪の中に傾け溺らして振はざるは、世俗の、心を馳せ企て及ばんとすることならんも、達人の寒心して悽愴む所以なり。故に至人は、韶夏（美はしき音楽の名）の音あるも之を沈黙し、美はしく彩どれる徳あるも之を深く韜む。その六本の翮を、五域（東西南北中）の広き野原に奮ふて、蒙鳩などの小鳥が、芦葦の間に巢くひ、

自ら安全なりと思ふが如くならず（蒙鳩云々は荀子の勸学篇に見よ）その鱗角を無用の地に翳かくして、狸貉たぬきむじななどの如く、いぶせき曲りたる穴の備禦そなへを恃たのまず（狸貉云々は淮南子の修務訓に見よ）下に俯したりとて倨わごる鷄とひより怒らるゝことなく（上文の腐鼠を見よ）上に仰ぎたりとて亢童の悔あるなし（神変不思議の童も、あまり高く上るときは、禍あること、易に見よ）かゝる徳あるも、人之を識るものなし。邈はるかなるかな、邈はるかなるかな。

抱朴子内篇卷二

論僊（神仙の有
無を論ず）

或る人、問うて曰く、

神僊は死せずと、信なるか。

抱朴子答へて曰く、

至明（しめい）を有するも、形あるものをば、畢（ついで）とく見るべからず。極聰（きよくそう）を稟（う）くるも、声あるものをば、盡（ことごと）く聞くべからず。大章、豎亥（じやうがい）（禹の時に見はる、淮の地形訓に見よ）の足あるも、その常に履（ふ）む所は、履まざる所の多きに若（し）かず。禹益齊諧（うえきせいはい）（禹益は二聖人の名、齊諧は神怪の事を記したる書）の智あるも、嘗（か）つて識（し）るところのものは、識らざるところのものの衆（おほ）きに若かざるなり。万物は芸々（うんうん）（盛（さか）んな）として限（かぎり）なく、如何なる所にも生ぜざるなし、況（いはん）や列僊（多数の神仙）の人は、多く書史に伝へらる、何ぞ之れなしといふことを得んや。

是に於て、問ふ者、大に笑うて曰く、

それ始めあるものは必ず卒（つひ）りあり、存するものは必ず亡（な）ぶことあり。故に三皇、五帝、孔子、周公旦（たんの）の如き聖も、棄疾（きしき）（楚の公子、左に見ゆ、然れども智者といふべからず、疑はらくは櫛里疾）張良陳平の智も、端木賜（たんとくし）（孔子の門人子貢の名、原）隨賈（ずいか）、酈生（れきせい）の辨（わ）も孟賁（もうはん）、夏育（かいく）、五丁（ごてい）（蜀の山路を切り開きたりといふ五人の力士水経註に見よ）の勇あるも、咸（みな）死するは、人理の常然にして必至の大端なり。徒（た）だ草木などの霜に先だち

て枯瘁^{こすい}し、夏に当りて彫^{しほ}み、又は稻などの穂^こさきを見はすも花開かず、或は実^みらずして萎^{しほ}みおつることを聞けども、万年の寿^うを享けて、久視^{きうし}（いつまでも目をあけて）已^やまざるものを聞かず。故に古人は学ぶも仙を求めず、言ふも怪を語らず、彼の異端^{いたん}を杜^{ふさ}ぎて此の自然を守る。長寿とて伝へらる、亀鶴の類をば、人と全く異なるものとなし、死生をば、朝暮に比べて驚かざるなり。

それ心を苦^{くる}め自然の本性を束縛^{くわく}して、神僊を願ふは、全く無益の行にして、恰も氷を鏤^{ちりば}め朽木を雕^ほると同じく、必成の功なし。寧ろ一世を匡^{ただ}すほどの妙策を攄^のべ、現在の大福を招^しくに若かず。紫綬金章^{（貴位の勲章）}を重く身に紆^まひ、黒き駒を竜の如くに馳せ、徒歩せずして華^{はな}やかなる車に乗り、耒耜^{すき}を執らずして三公の権力を握るは、また美ならずや。然るに世俗、動もすれば毎^{つね}に詩人甫田^{ほでん}の刺^{そり}を思ひて（詩に甫田といふ詩あり、古の善政を述べて周の幽王の時政を諷す）現代を苦しきものとなし、又仲尼皆死するの証を深く惟^{おも}ひて（列の天瑞篇に、孔子の言なり）人生をあじきなく感ず。故に神仙の説に迷はされ、徒^{いたづ}らに形なきの風を握り、執へ難きの影を捕へ、得べからざるの物を索^{もと}め、必ず到るべからざるの路を行き、榮華を捨て、苦困に涉^{たやす}り、容易きことを捨て、難きことを攻^{おさ}む。之を譬ふるに桑とる者の遊女を逐^おふが如く（晋人その妻の里帰りを見送りし時、途に桑とる女子を見て之を悦び、懇ろに物語り）必ず両つながら失ふの悔あり（晋人は桑女を得ざるべからず、却へつてその妻を失ふは、神仙を好む）單張^{ぜんちやう}の偏見^{へんけん}を信ずるに似て（單約といふ者、隱居して名利を争はず、七十歳の寿を保ちしも、不幸にして餓虎に噛み殺さる。張毅といふ者、世利に熱中して敏捷に立ちまわりしも、四十歳の時熱病に中てられて死したること、莊の達生篇に見よ）内外の

禍を速まねかんとす（虎害は外にして、熱病は内。神仙家の精神）それ公輸班墨翟（班翟の二人は器械に巧なる人墨翟の公輸篇、及び列の湯問篇に見よ）も、瓦石を削りて鋭すどき針とする能はず、欧冶（鍛冶に巧な人、呉）も鉛錫などにて干将（名剣同上に見よ）を鍛きたふる能はず、故に為すこと能はざることは、鬼神も為すこと能はず、成すこと能はざることは、天地も成すこと能はざるなり。世間亦た何ぞ老者をして少壮に復し、死者をして再生せしむるの奇術あらんや。然るに吾子（貴君といひぐらし）は蟪蛄の短かき命を永からしめ、朝菌（朝生じて夕に枯るきのこ）の果敢はかなき榮を有たもたしめんとするは、亦た謬あやまらずや（蟪蛄朝菌のことは莊の逍遙遊に見よ）願くは深く考へて、早く迷をさまし、正しき道に復かへるべし。

抱朴子答へて曰く、

それ聴力なき者は、震雷も聞く能はず、視覚なき者は、三光（日月星）も見る能はず、豈に雷の鳴りはためく響ひびきは細ほそくして、天に麗かる光は微かすかならんや。然るに聾夫は之を声なしと謂ひ、聾者は之を物なしと謂ふ、されば管絃の和音を聴くも、何ぞその調和したる雅韻ヤウウンを賞するを得んや、衰童こんの美はしき衣裳を視るも、いかでそのまばゆき模様色彩までを嘆ずるを得んや。故に聾聾にとりては豊隆（雷神、淮の天文訓に見よ）も天象も、信まことの物と思はれず、況んや更に微細なる者をや。心神暗くらければ古代に周公孔子ありといふも、なほ之を信ぜず。況んや神仙の道を告ぐるをや。

それ存亡終始の並び存するは、誠に物類の大体なるも、その微細に至りては千差万別、変化限り

なし。されば物類同じきも、事状は異なり

（「夫れ聴力なき者」よりこゝまで、通）源本釣しきも、末流

相反する者あり、一言もて、まとめ難し。されば始あれば必ず終ありといふ者多きも、推しなべ

てかく論ずるは、通論といふべからず。夏日には必ず皆生長すといふも、荻麦は枯れ（淮の地形

訓に見よ）

冬期には凋落すといふも、竹柏は茂る、始あれば必ず終ありといふも、天地は窮りなし。生あ

らば必ず死ありといふも、亀鶴は長く存す。盛夏も涼日なきに非ず、極寒にも温暖のしばらく

来ることあり。百川は東海に注ぐも、黄河は北に流れて浩々たり

（詩の衛風碩人の詩に、河水洋洋、北流活とあり、浩或は活の誤か）

地道は至静なるも、時として大震起り山岳崩る。水性は純冷なり、而るに温谷と称する温泉

あり。（穆天子伝に見よ）

大火は熾烈なり、而るに蕭丘といふ寒焰あり（本書に見ゆ）重類は沈むべし、而

るに南海には浮びたる石の山あり。軽物は浮ぶべし、而るに特軻（地名）には羽を沈むるの流

あり。物類の千差万別なる、一概に断めがたきこと、正に此の如きこと久し。

就中最も靈妙なるものは、人に過ぐるものなし。かく貴き物ならんには、必ずすべての人、

皆均一斉同なるべし。然るに性質の賢愚邪正、容貌の好醜長短、心ばせの清濁貞淫、氣象の

緩急遲速、さては心の取捨するところ、耳目の欲するところ、すべて為業同じからざること、

天地の差違、氷炭の垂き違ふに似たり。何ぞ独り神仙のみ、凡人と類を異にして死せざるを

怪まんや。若し天地の氣を受けて生れたるもの、皆一定して変ずべからずと謂はゞ、雉はお

ほ蜃となり

（淮南子の時

問訓に見ゆ）

雀は蛤となり

（同上）

土壤より這ひ出づる虫は翼をつけ、川に住む蛙は

鳥の如くひらくと飛び（淮南子の齊俗訓に見ゆ）水螭は蛇となり（出典不明淮南子の説林訓に）苻菜は蛆（此の出典不明）田鼠は鴛（淮南の時則訓に見ゆ）腐草は螢となり（呂の六月紀に見ゆ）鼯は虎となり（此の出典不明）蛇は竜となる是れ皆變化に非るか。若し人は正性を稟うけたる者なれば、以上の物類と同じからずと謂はんか、凡べて皇天の、万類に性命を賦与ふよするに、決して彼此の区別なし、故に牛哀は虎となり（淮の俶真訓に見ゆ）楚国の老婦は竜おほすつぼんとなり（太の九三引証の統漢書に「江夏の黄氏の母」とあり江夏は楚地なれば之をいふか）枝離は柳しりとなり（滑介叔といふ人の左肘に柳を生じたること莊の至樂篇に見ゆれば枝離は此誤りならん）秦女は石となる（太の五一引証の蜀本紀に見ゆ）死して更に生ずるあり、男女形を易るあり、老子彭祖の如き長寿あるかと思へば、夭死わがしにするもあり、この故は何ぞや。すでにかく不同なれば、その他なほ相異なること限りなかるべし。もしそれ僊人は、葉物を以て身を養ひ、術数じゆつすうを以て命を延ばし、内は疾をして生ぜしめず、外は患をして入らしめず、久視して死せざるも、旧身は改まらず、苟しくもその道あらば之に至ること難しとすなからん。

而るに浅識せんしきの徒、俗見かゝはに拘り常理を守り、咸みな曰く、世間に僊人を見ずと。便すなはち云ふ、天下に必ずこの事なけんと。それ目の及ぶところ限りあり、何ぞ見と不見とを言ふべけんや。天地の間は広大にして、何物も漏すことなし、そのあやしきこと、奇しきこと、豈に限りあらんや。人は老年に及ぶまで、天を戴きながら、その上を知るものなく、身を終るまで、地を履ふみながら、その下を識るものなし、形体からだは我が所有ながら、その心臓又は肺臓はたらきの作用を知

るものなく、寿命は我身に随ふものながら、その長短を知るものなし。況んやわづかばかりの耳目の力に依りて、神僊の遠き理、すぢみち滋徳の奥ぶかきことなどを論断せんとするは、豈に悲しからずや。

設し哲人大才あるも、その人は世をのが遯れて用ゐられず、景を翳し藻を掩ひ、偽を廢て欲を去り、至醇の中に明智を抱きて、璞の如く光り輝かず、流俗の外に超然として、末務を遺るときには、世人なほ能く之を甄別するもの尠く、その世に知られざる志行を旌表し、その陋しき形体の中に包まるゝ精神の美を認むる者なけん。況んや仙人は趣を殊にし路を異にし、富貴を以て不幸となし、栄華を以て穢汚となし、珍宝を塵壤の如く軽んじ、声誉を朝露の如く危ぶむ、炎々たる焰の風を踏むも灼けず、真黒く澄み渡りたる波の上に軽るき歩みをはこび、靈鳥に乗りてその翮を鼓し、雨師に命じて道路の塵を清めしむ、風を馬となし雲を車となして、上は仰いで紫雲たなびく北極の高きを凌ぎ、下は俯して崑崙山の頂に棲むことなれば、行戸の人（道を知らざる人の、世に生息するは、尸骸の行くが如し）何ぞ之を見ることを得んや。仮りに神仙をして、一時俗界に身を寓せしむるも、彼にして真を匿し、異を隠し、外は凡庸と同じからんには、肩を比べ武を接するばかりに輩出すとも、孰か能く之を覚るものあらんや。若し彼神仙をして、何れも郊間（陸士衡文集の登遐頌に見よ）の如く方形の目あり、又は功疏（列仙伝）の如く頭の上まで見はるゝ耳あり（列には、偃佺に方目あり）馬皇の如く竜に乗りて行き、子晋の如く白鶴に御し（馬皇子晋は列に見ゆ）或は

鱗身蛇首の容貌あり、或は金車羽服の儀容あらしめば、乃ち知ることを得べきのみ。然らざれば、洞視せざれば、何んぞ其形を觀ん、徹聽せざれば、何んぞその声を聞かんや。世人既に信ぜず、又妄りに多く疵毀る、故に真人(仙神)之を疾みて、遂に益す潜れ遁る。

且つ常人の愛するところは、乃ち上士の憎むところ、庸俗の貴むところは、乃ち至人の賤むところなり。浩然の氣を養ふ英れたる儒者、又偉才は、知見淺薄にして俗塵に奔走する人を見ることを悦ばず、況んや彼の神仙は、自ら汲々として、芻狗の倫(芻狗は草で造つた狗、祭の時神に供へ、終れば道路に棄てらるる、よりて一時勢を得、權を握る人に喩ふ)をして、自己あるを知らしめんや、彼等の神仙を索めて、遂に之を知らざるを怪まんや。目は百歩の中すら、了々とて明かに見る能はず、然らば見る所を有となし、見ざる所を無となさば、無きもの天下に多からん。所謂指を以て海を測り、指没するとき海窮るといふに同じ、蜉蝣の短命もて巨鼈を校り、白芨(葉草の名)の一年草にして、大椿(古木の名にして、莊子の逍遙遊に見よ)を料る、豈に能く及ぶところならんや。魏の文帝は窮覽洽聞、自らあらゆる事物を知らざるなしと謂ふ。思へらく、天下に玉を切るの刀、火浣の布(火に焼けば益々清潔になる布)なしと。典論を著すに及びて、また之に論及す。然るに期年ならずして、この二物畢く至る。帝乃ち嘆息して、遽かに典論を破棄す。何事にまれ、先人を固守し、我見を必ずべからざるは、此の如きことあればなり、陳思王(文帝の弟にし、て曹植をいふ)釈疑論を著していふ、初め謂ふ、道術は直だ愚民を呼び集め。詐偽をなすのみ、その空言たること疑なしと。後に武皇帝が(父曹操)左慈(仙人の名後の方術伝に見ゆ)

を幽閉し、穀食を断ぜしめたるを實見したるに、其間一月近くにして顔色減ぜず、氣力自若たり。左慈かつて云ふ、五十年間、食せざるも可なりと。陳思王また何ぞ疑はんや。又た甘始（後漢書の方術に見よ）をして藥を生魚に含ましめて、之を沸きたる脂あぶらの中に煮しむ、その藥なきものは熟して食するを得べきも、藥を啣くわむものは水中に遊泳するが如し、又た藥粉にひたしたる桑にて、蠶を飼ひしに、十月に至るもなほ老せず。又住年じゅうねんやく藥（年をとめる藥）を鷄ひなの雛及び新生の犬子に食はしめしに、皆な何時までも生長せず。又還白せんはくの藥（還は旋轉にして白色を転化するの意）もて、白犬に食はせしめしに、百日にして其毛全く黒し、乃ち天下の事盡とく知るべからず、その有無を臆断おくだんに任すべからざるを知る。但だ声色を絶ち心を専らにして、長生の道を学ぶこと能はざると恨むのみ。彼の二曹（文帝と陳思王）は、学は書として覽みざるなく、才は一代の英なり。然れども初めは皆神仙なしと謂ひて、晩年乃ち神仙ありとなす。理を窮め性を盡つくすの人にして、その嘆息此の如し。学才この種の人に逮およばざる者の、神仙を信ぜざるは、怪むに足らざるなり。

劉向（前漢の末の人）は、其の博学は微妙を究め、深遠に入る。その理を思ふことは、真偽を清せい澄ちようし、有無を研けん覈かくす。嘗つて列僊伝を選びて、七十餘人を記す。誠にその事なくんば、何故にかく妄造するか。往古の事何ぞ親したしく見るべけんや、皆な記録に頼り伝聞に出づることなれば、列仙伝の事実たる必ず疑なし、然るにその書は、周公の門より出でず、孔子の手を經へざるため、今に至るまで、世人より信ぜられず。然れども古史の記すところにして、現在に之

れなき者、何ぞたゞ神仙のみならんや。俗人は榮を貪り道を好み、名利に汲々たり。己が心を以て遠く昔人を付度りて、神仙あるを信ぜず、古に帝王の禪位を逃れ、卿相の貴任を薄んずるあり、巢父許由の輩、老萊子、莊周の徒是れなり。俗人以爲へらく、此の如きことあらずと。況んや神仙の知り難きこと、之より甚し、亦た何ぞ今世の信を求むべけんや。故に劉向は聖人に非ず、其選録する列仙伝のみにては、抛りところなしとなすは、尤も嘆かはしきことの限にこそあれ。抑も魯国の歴史は、天地と徳を合する能はざるも、孔子は之に本づきて春秋を著す。司馬遷は日月と明を竝ぶること能はざるも、楊雄はその著史記を称して、実録となすに非るか、劉向は漢世の名儒たり、その記述するところ、何ぞ棄つべけんや。

凡そ仙術の学ぶべきを信ぜず、寿命の延ぶべきを許さざる所以は、正しく秦の始皇、漢の武帝、之を求めて獲ず、少君、欒大（漢代の二方士）之を為し験なきが為なり。然れども黔婁（高を）原憲（史の仲尼弟子）の貧あるを以て、古に陶牛犢頓の富なしといふべからず。無塩（列女伝巻六に見よ）宿瘤（同上）の醜あるを以て、古に南威（戦の魏策に見よ）西施（莊の天運篇に見よ）の美なしと謂ふべからず。進み趨るも、目的地に達せざるものあり。稼穡するも、收穫せざるものあり。商販にも不利の時あり。戦争にも無功の事あり。況んや仙術は、難事なれば、之を学ぶ者、何ぞ皆成就することを必せんや。彼の二君（秦皇漢武）両臣（少君欒大）の成功せざるは、是れ求むれども得ず、或は始めは勤めしも、卒りは怠り、或は明師に遭はざりし為なるべし。又何ぞこれによりて、天下

に神仙なきことを、定むるに足らんや。

夫れ長生を求め至道を修むるの秘訣は、志に在りて富貴に在らず。苟くもその人に非れば、高位厚貨も、たゞ仙術の重き係累とならんのみ。何となれば、仙を学ぶの法は、恬愉澹泊、嗜欲を滌あらひ除き、内視反聴、尸居しきよして無心なるを欲す。然るに帝王は天下の重責に任じ、政務にわうしやう軼掌わうしやうし、思を万機に勞し、神を宇宙に馳す。一夫も所を失はゞ、王道虧け、百姓に過あらば、予身の不徳なりと詫わぶ。醇醪はその和氣を汨みし、艷容はその根荂を伐るき（「百姓云々」よりこ）精力を剪り志慮を損し、和平を妨げ純粹を削るもの、曲に挙げ論じがたし。それ蚊、膚を噛かめば、坐、安きを得ず、虱、群り攻むれば、臥、寧きを得ず、四海の事、何ぞ祇ただ是の若きのみならんや。帝王たるもの、何ぞ聰明を掩おほひ翳し、喘息を閉じ藏め、精進潔斎、久しきに亘りて、親から爐火に仙藥を煉り、夙に興き夜に寐いねて八石はつせき（仙藥の名、参同契に見よ）を飛ばすを得んや。漢の武帝が国を享うくること、最も寿考とせらるは、已に性を養ふの小益を得たるものなり。但だ升合の助は鍾石しゆうせき（鍾は八石、一石は一斛）の費に足ること能はず、田間の小溝より、如何に水を注ぐも、尾閭びりよ（海底の大穴にして海水の漏れ出づるところ、列の天瑞篇に見よ）の漏洩を補ふこと能はざるのみ。

仙法は静寂無為にして、その形骸を忘るゝを欲す。而るに人君は千石の鐘を撞つき、雷霆の鼓を伐ちて、かまびすしき響は魂を驚かし、心を蕩うごかす。凡百の遊芸は交こも来りて、精を喪うしなひ耳を塞が**ん**ばかりなり。或は輕車を飛ばし或は駿馬を驅り、深き溪に釣し高き空に射る。仙法

は、蠢^{うづめ}き這^{むしけら}ふ虫蠧^{むしけら}にまで仁愛を及ぼし、生^いとし生^いけるものを害せざるを欲す。而るに人君は
 赫^{かく}として怒れば三族を誅^{たひ}し夷^{たひ}らげ、一たび黄^{ふろ}錢^{ふろ}を揮^ふひ、暫^{しばら}く齊^{せい}斧^ふ（天子、天下を征服するに用^ふふ）を
 授^{かく}くるときは、兵禍乃ち起^{ふくし}りて伏^{ふくし}尸^{ふくし}千里、流血^{ぼうだ}滂^{ぼう}沱^たたり。しからずとも斬断の刑罰は、絶ゆる
 ことなし。仙法は、腥^{なまぐさ}き魚^{なまぐさ}肉^{なまぐさ}など避^{なまぐさ}け、米穀^やを休^やめて腹^や胃^やを清^やくせん^やと欲す。而るに人君は
 肥^{なまぐさ}肉^{なまぐさ}を割^{なまぐさ}烹^{なまぐさ}し、生^{なまぐさ}類^{なまぐさ}を屠^{なまぐさ}割^{なまぐさ}す。八珍^{なまぐさ}は食^{なまぐさ}前^{なまぐさ}の方^{なまぐさ}丈^{なまぐさ}に処^{なまぐさ}せまきまで陳^{なまぐさ}べ、臭^{かたか}高^{かたか}き油^{かたか}に煎^いりつ^いけ
 たるものは、飽^{なまぐさ}くまで食^{なまぐさ}ふ。仙法は、博^{ひろ}く八荒^{ひろ}（上下^{上下}左右^{左右}）を愛^{ひろ}し、人^{おのれ}を視^{おのれ}ること己^{おのれ}の如^{おのれ}くなる
 を欲^{おのれ}す。而るに人君は、弱^{おのれ}国^{おのれ}を兼^{おのれ}併^{おのれ}せ、無^{おのれ}道^{おのれ}を攻^{おのれ}め奪^{おのれ}ひ、乱^{おのれ}る、邦^{おのれ}を取^{おのれ}り、亡^{おのれ}びんとするも
 のを倒^{おのれ}し、地^{おのれ}を闢^{おのれ}き境^{おのれ}を拓^{おのれ}き、人^{おのれ}の社^{おのれ}稷^{おのれ}を泯^{おのれ}ぼす。生^{おのれ}民^{おのれ}を驅^{おのれ}りあつめて之^{おのれ}を死^{おのれ}地^{おのれ}に投^{おのれ}じ、孤^{おのれ}魂^{おのれ}
 は絶^{おのれ}域^{おのれ}にさまよふて、尸^{おのれ}骸^{おのれ}は曠^{おのれ}野^{おのれ}に暴^{おのれ}さる。五^{おのれ}嶺^{おのれ}（南方^{南方}の地名^{地名}）には刃^{やいば}に血^{やいば}ぬるの師^{いくさ}あり、北^{おのれ}闕^{おのれ}
 は大^{たい}宛^{えん}（北方^{北方}の蛮^蛮族^族）の首^首を懸^懸く。生^{おのれ}を坑^{あな}にして逃^逃れたるものを殺^殺すこと、十^{おのれ}万^万の上^上に出^出づること
 あり。凱^{がい}旋^{せん}を祝^祝するため、敵^敵の尸^{おのれ}骸^{おのれ}を高^高く積^つみ重^重ねたる見^み世^せ物^{もの}は、空^空を仰^仰がん計^{はか}りにして、
 その尸^{おのれ}骸^{おのれ}は葬^{くさむら}の如^如く、山^山に弥^{わた}り谷^谷を填^{うづ}む。故^故に秦^秦の始^始皇^皇は、十^十室^室の中^中をして乱^乱を思^思ふもの九
 あらしめ、漢^漢の武^武帝^帝は、天^天下^下をして囂^囂然^然たらしめ、遂^遂に戸^戸口^口の半^半を減^減ずるに至^至れり。巫^巫祝^祝に
 命^命じ、人^人君^君の寿^寿を益^益さしめんこと祝^祝するも、国民^{国民}は多^多く之^之を損^損ぜんことを詛^よふ（晏^晏の内^内篇^篇諫^諫上^上）
 草^草を結^結びて徳^徳を知^知ることあらば（下^下文^文の輔^輔氏^氏）又^又戦^戦死^死者^者の祭^祭祝^祝を忽^忽そかにして、亡^亡霊^霊の怨^怨を招^招く
 ことも多^多からん。衆^衆煩^煩はその膏^{かう}盲^{くわう}を攻^攻めて、人^人鬼^鬼は其^其毒^毒恨^恨を斉^斉しくす（「巫^巫祝^祝に命^命じ」より）彼^か二^二

君は、徒だ仙を好むの名あるも、修道の実なし。知る所の浅事すら悉く行ふ能はず、又要妙深秘を聞くを得ず、又た有道の士を得て、仙薬を合成せしむる能はず、その長生を得ざるも、怪むを要せざるなり。

之に反して、我等匹夫は百事空乏なり、家は長卿の如く、四方壁ばかりにて一物もなし（長卿馬相如、史の本伝を見よ）腹は桑下（やど）に舍れる餓人の如く、糧を絶つこと久し（左の宣公二年を見よ）冬は戎夷（人）の如く後門に凍死するの憂を抱き（呂の長利篇を見よ）夏は儒行（礼記の一篇）の所謂環堵（板屏の小邸宅）の中（おのれ）にありて炎日に照らさる。遠きに行かんとするも、舟車の用に乏しく、何事を営むにも、己に代りて労役をなすものなし。内に入るも綺納（きくわん）の衣服を襲ぬるの娛なく、外に出づるも遊觀の耳目を歛（おさ）ばすものなし。口に甘旨を味はず、目に玄黄の色彩を視ず、鼻に芬芳を嗅がず、耳に八音を聞かず。百憂はその心曲を攻め、衆難はその門庭に萃（あつ）まる。世に居ること此（かく）の如く、恋ふべきもの一つも之れなし。然るに或は要道の秘訣を得、又は世にも稀なる師に値（あ）ふも、猶ほ老妻弱子の恩愛にひかされ、狐兔の棲むいぶせき邸（やしき）を慕ひ、遅々（ち）として衰老を覚え、一生を終はる。長生の得べきを知りて、そを修むる能はず、臭鼠にも均しき流俗の汚れを患へて、そを委（す）つる能はず。何となれば愛習の情、卒（には）かに遣り難くして、絶俗の志、果たし易（やす）からざればなり。況んや彼二帝は、四海の主にして、その耽（たのし）み玩（もてあそ）ぶもの、一條に非ず、その親幸さるもの、甚だ少からざるをや。之をして旬日の間、閑居潔斎、道を求めしめんとするも、なほ

能はざるべし。況んや内は美はしき少女（たをやめ）の寵を棄て、外は赫々たる尊き位（す）を捐て、口には甘肴（た）を断ち、心には欲望を絶ち、榮華に背（そむ）きて独り往き、神仙の幽漠を求むるに至りては、豈に（すくな）慙からずや。是を以て在昔仙道を得し者を歴覽するに、多くは貧賤の士にして、勢位の人に非るなり。

又（ちんだい）樂大は知識実に浅薄なり、榮貴に飢渴し貨賄（おか）を冒し求め、虚妄を銜（てら）ひて、一時をとりつくるひ、禍患を忘れて、為すなきのみ。此の区々たる小人の奸偽を以て、直ちに天下の仙なきを証すべけんや。昔は句踐怒蛙（しよく）に式せしかば、兵士争うて火中に飛びこみ（越王句踐、車に乗りて途を過ぐ、一蛙あり腹を張りを避けず、その状怒るもの、如し、句踐其勇を賞して、軾によりて敬意を表す、兵士之を聞いて皆勇氣の尚むべきを知り、水火をも避けざるに至りしこと、韓の内儲説上に見ゆ）楚の靈王は、細腰の美を愛せしかば、国人皆瘦（やせ）んことを欲して餓死するもの多し（荀の君道篇に見よ）齊の桓公は、異味を嗜みしかば、易牙（えきが）はその子を蒸して之を進め（管の小称篇に見ゆ）宋君は、親喪をつとめて身体瘦せ衰へたる者を賞ししかば、やつれはてて死するもの戸ごとに**出づ**。人主の欲するところ、至らざるものあるなし（「田間の小溝」よりこ）故に漢武方士を招求して、寵待厚きに過ぎたれば、自ら（お）樂大の如き小人をして、敢て虚誕を為さしめたるのみ。樂大若し果して有道の者ならんには、何ぞ之を殺すを得べけんや。それ有道の者は、爵位を視ること人を煮殺す湯鑊（ゆかま）の如く、印綬を見ること縗絰（さいてつ）（喪服のしるし）の如く、金玉を視ること糞土の如く、華堂を覩ること牢獄の如し。豈に樂大の如く、腕を扼（やく）して空言し、以て榮華を僥倖し、丹ぬりの楹（はしら）の室に居り、誓（はか）られざる

ほどの賜たまものを受け、五利將軍の印を帶び、公主ひめみやの貴きに配し、勢利ふけに耽しづり淪しづみて、止足を知らざることあらんや、その実に道を得ざるは、断じて知るべし。

按ずるに董仲舒とうちゆうじよが選えらびし李少君家録に云ふ、少君不死の法あるも、家貧にしてその薬を市ふ能はず、故に漢に出でて途を仮り、その財を求め、道成りて去ると。又按ずるに、漢の禁中起居注に云ふ、少君の将まさに去らんとするや、武帝夢に之と共に嵩山そうざんに登る、半道にして使者あり、竜に乗り節しるしを持して雲中より下りていふ、上帝、少君を請ふと。帝覺さめて左右に語りて曰く、我夢わがの如くんば、少君将に我を捨すて、去らんとすと。数日にして少君病みて死すと称す。久しくして、帝、人をしてその棺ひらを発かしめ尸を視しに、唯だ衣冠のみ残のこれりとぞ。按ずるに仙經に云ふ、上士は形を挙げて虚そらに昇る、之を天仙といひ、中士は名山に遊ぶ、之を地仙といひ、下士は先づ死して後に蛻ぬけとなる、之を尸解仙といふと。少君は必ず尸解せるならん。近世には壺公ていこうが費長房ひちやうぼうを將ひきる、又郾県けん（地名）の道士李意期りいきも兩弟を將る去る、その家人棺うがを鑿うがちて之を視しに、三棺ともに丹き色もて文字を記したる一本の竹杖あるのみ。これ皆な尸解せるものなり。昔は王莽わうまうは、聖人の典籍を引いてその邪を飾る、之によりて儒者皆な篡盜をなすといふべからず。司馬相如は琴を鼓して卓文君（女子の名）を挑いどむ、之によりて雅楽は淫佚を主とすといふべからず。食は噎むせびて死する者ありとて、神農の穀種まを播まきしを譏そしるべからず（神農は始めて農業を國民に教へし人）火に焼けて死する者ありとて、燧人すいじん氏の火を鑽きるを怒るべから

ず（燧人氏、始めて火打石の作用を国民に教へし人）船を覆し水に溺れたりとて、帝軒（帝黄）の船を造りしを怒るべからず、酒乱の者ありとて、杜康（杜康）、儀狄（儀狄）が酒を為りしを非るべからず、然らば樂大の邪偽を以て仙道なしといふべけんや。（「然らば」より、こ）是れ猶ほ趙高（趙高）董卓の如き好臣あるを見て、古に伊尹周公霍光の如き忠臣なしと謂ひ、商臣（春秋時代に於ける楚國の人）冒頓（匈奴の君なり史の匈奴伝を見よ）の如き逆子あるを見て、古に伯奇（伯奇は周の尹吉甫の子、琴操上に見ゆ）孝己（孝己は殷の高宗の子、莊の外物篇に見ゆ）の如き孝子なしといふが如し、豈にそれ然らんや。

又神仙集の中に、神を召し鬼を弾劾するの法あり。又人をして鬼を見しむるの術あり。俗人之を聞いて、皆虚言と謂ひ、或は鬼なしといひ、或は鬼ありといひ、或は鬼神を効召すべからずといふ。或は男子にして鬼を見るものを覲と為し、女子には巫といひ、何れも自然に会得する術にして、学ぶことを得べきものに非ずといふ。按ずるに漢書（名書）双び太史公の史記によると武帝、斉人少翁を文成將軍となす、武帝の寵幸せし李夫人病みて死す。少翁よくその魂魄を召き（まね）、武帝をして之と見しめたるに、恰も生人の状の如し。又ある時は竈神（かまどのかみ）をも見しむ。これ史籍の明文なり。それ方術は鬼をしてその形を見はさしめ、又た凡人をして之を見しむ。この理を推すときは、他の術も之なしといはんや。鬼神（じはく）数し民間の為に、光怪変異を作すことは、是れまた經典の載する所にして、信拠すべきこと多し。俗人尚ほ之を信ぜず、況んや仙人は高きに居り遠きに処り、俗人と清濁の流とを異にし、遙かに塵外に往きて

返らず、道を得る者に非ずんば、何ぞ能く之を見聞せん。されば儒者も墨家ぼくかも、この術をば俗人に訓ふべからざるを知りて、故に之を言はず、その信ぜられざるは亦た宜ならずや。惟だ真を識るものありて、衆くの方術を比較れん練修して、その徵驗しるしを得、その必有を審つまびらかにして、独り之を知るべきのみ。決して短日月の間に、強ふべからざるなり。故に鬼神を見ず仙人を見ずして、世間に仙人なしと謂ふべからざるなり。

人は賢愚を問はず、皆な己が身に魂魄あるを知る。魂魄わか分れ去れば又病み、盡く去れば死す。故に分去には術家に拘録（靈魂鬼神などを、自由に使役すること）の法あり、靈去には礼典（たてまつりごと）に招呼の儀あり。魂魄ほ

ど身に近きものなし、然るに身を終るまで之を見聞したるものなし、豈聞見せざる故を以て、之

れなしといふべけんや。若しそれ輔氏報施の鬼（左の宣公十五年にいふ、晋の魏顆の父死に臨みし時、遺言し

後顆秦軍の勇士杜回と輔氏「地名」に戦ふに及び、老人見れ草を結びて、秦將杜回を遮ぎり、之を躓つかせたれば、難なく之を捕ふことを得たり、其夜の夢に其老人來たり告ぐらく、我は嬖妾の父なりと）成湯斉を怒る

の靈（成湯は殷の湯王なり論の二）申生は言を狐子に交へ（晋の太子申生の靈魂が、狐偃と物）杜伯は恨み

を周宣に報じ（杜伯罪なくして周の宣王に殺さる、その靈魂見）彭生は形を立豕に託し（齊の襄公、己が罪を

す、その後襄公出獵の際、突然として一大家見れ、人の如く立ちて啼く、襄公以為へらく彭生の再生なりと、大に恐れたること左の莊公八年に見ゆ、原文に立豕を玄家（くわんふ）に作る、兪説によりて改む）如意は体を蒼狗に

仮り（呂后如意を殺す、後呂后、幻のうちに一蒼犬己れを傷）灌夫は田蚡（でんぶん）を守り（田蚡灌夫を讒殺す、久さしからず

を謝す、巫曰く是れ灌夫が靈見はれて（はれて簡王を車上にたふせしこと、墨の明鬼篇を見よ）

蓐收（じよくしうしん）に降る（国の晋語二に云ふ、蓐収と称する神號国の廟門に見はる。左の莊公卅二年に）欒侯民家に止り

（この出典不明、或は欒巴が没後、民間に祝られたることか）素姜しんじ識緯を説き（この出典不明、素姜は素女の誤か、素女が黄帝に天文兵法）孝孫、文章を著し（この出典不明、真靈位業図に、劉慶孫と賈誼齊名とあれ）神君、上臨に言ひ（漢の武帝本紀に見はるに見はること見ゆ、然らば臨は林の誤か）羅陽、吳朝に仕ふ（三の吳志卷二大元元年に曰く、羅陽王の印綬を授く）是れすべて鬼神の事、竹帛に著はれて昭々たること此の如きもの、勝あかて数ふべからず。然るに愚者なほ之れなしと謂おもふ。況んや長生の事は、世に稀まれに聞く所をや、その必信を望むは、蚊虻をして山を負はしめ、井蛙と海を論ずるなり。俗人未だ嘗つて竜麟鸞鳳を見ずして、乃ち思へらく天下に此物なし、古代虚しく瑞応ずいおうを設け、人主をして自ら勉めて息やすまず、以て斯の靈鳥瑞獸を致さしめんとするに過ぎずと。況んや人をして神仙あることを信ぜしめんとするをや。

世人は劉向が黄金を鑄しも、成らざりしを以て、乃ち謂へらく、隱を索め怪を行ひ、好んで虚無を伝ふ、其の著列仙伝も皆な妄作なりと。悲しいかな。此れ所謂分寸の瑕きずを以て、盈尺の夜光の珠を棄て、蟻ありの鼻端程の缺かけあるため、価あたひ知れざる淳鈞じゆんきん（名劍の名、越）を捐すつるに同じ。皆な荊和（荊楚の卞和、玉を見たてるに巧な人、韓の和氏に見ゆ）の遠識、風胡（劍を相する人の名、越絶書に見ゆ）の賞真に非ずして、又朱公（陶朱公を謂ふが、淮の汜論訓に、玉の真偽を区別することにつきて猶頓不失其情とあり）が鬱鬱うっうつとして憂へ、薛燭せつよく（劍を相する人の名、越絶書に見ゆ）永く嘆息する所以なり。抑も黄金を鑄ることは、皆な神仙集の中にあり。淮南王、そを抄ぬきた出して鴻宝枕中記を作る。然れどもその要点秘訣に至りては、必ず口伝を須まつて始めて之を知るべし。その用藥また多く本名を改むれば、唯だ文字をたよりにして用ふべからず。劉向が父の徳とくが、淮南王の獄

を治めしときに、得たる書は、正しき師説あるに非るなり（淮南王反して誅せらる、徳、当時獄官たり、因りて仙書を得たること、漢の劉向伝に見よ）
 向もと道術を知らず、偶まこの書を見て、仙術の真意は盡とく此書中に在りと思ひ、之に抛りて黄金を鑄しかば成らざりしのみ。然れども列仙伝を選ぶに至りては、自ら秦の大夫阮倉の書を刪り述べ、或は面あたり見し所を記したることなれば、決して妄言に非るなり。狂夫の言、草うつ童の謡すら、聖人に拓ばる。賤しき樵夫の言も遺つべからず、詩人も「葑を採り菲を採る、下体を以てするなかれ」。（葑菲即『かぶらな』の莖美なるときは、其下部の根あしくとも差支なし、詩の谷風に見よ）豈に百慮の一失を以て、經典用ふべからずとし、日月の薄蝕を以て天象の大明を疑ふを得んや。外国の水精椀を作るは、実は五種の灰を合して製作したる者なり、交広の地方（南方の地名）には、今にてもこの法もて、之を鑄作る者多し。今之を俗人に語るも、殊に首肯はずしていふ、水精は自然の産物にして玉石と同類なりと。況んや、世間にはすでに自然の金あれば、人力もて之を鑄るべしといふも、俗人などか其理を信ずべき。愚人は黄丹及び胡粉は、鉛より化成せらるゝことを信ぜず、騾馬及び駢驢（竝びに馬の種類）は驢馬の生むところを信ぜずして、何物にも、それぐ一定の種ありと思ふ。況んや知り難きことをや。それ見ること少なければ、怪むこと随つて多きは、世の常なりと、信なるかなこの言。それ覆へりたる釜の下に処らんには、日月の明も、之を仰ぐこと能はざる如く、見聞狭ければ、何ぞ仙術の至言を識ることを得んや。

抱朴子内篇卷三

対俗たいぞく
(俗論に
対ふ)或る人難なんじて曰く、

人中に老彭の如き長寿家あるは、猶ほ木中に後凋の松柏あるが如し、稟賦ひんぷの自然なれば、何ぞ、学ぶを得べけんや。

抱朴子曰く、

それ造化を陶冶するは、人より靈なるものなし。故にその浅きに達する者も、能く万物を役用し、その深きを得る者に至りては、能く長生久視す。上薬の年を延ばすを知る、故にその薬を服して仙を求め、亀鶴の永寿を知る、故にその導引だういん（大氣を体内に導びき入るゝ法にして、今の所謂深呼吸に類す）に效なごうて年を増す。且かつそれ松柏の枝葉は、衆木と別にして、亀鶴の体貌は、衆虫と殊なり。故に天性なりと謂はんも、一理あらん。然れども老彭に至りては、他の人類と異なるものに非ず、而るに寿独り長きは、道を得るに由る、自然なりといふべからず。衆木は松柏に法のりとる能はず。諸虫は亀鶴を学ぶ能はず、是を以て短折わかしにするのみ、人もし明哲にして能く老彭の道を修むるあらば、之と功を同じくするを得べし。

若し世に仙人なしと謂はんか。前哲の記すところ千人に垂なんなんとす、皆な姓字あり、及び行為の本末あれば、虚語に非るなり。若し彼等は、皆な特に異氣を稟くと謂はんか。その相伝

には皆な師授の服食あれば、生知に非るなり。若し道術を学び得べからずと謂はんか。その形貌を交易へんえきし刀を呑み火を吐き、坐すれば見はれ、立てば隠る。雪を興し霧を起し、虫蛇を招致し、魚鼈を合聚し、三十六石立どころに化して水となり（列に、淮南王劉安は、丹經及び三）玉を消して飴あめとなし、金を潰ひたして漿こんづとなす。淵に入りて没せず、刃に就きて傷きずつかず、幻化げんくわの事、すべて九百有餘條、法を按じて之を行ふに、皆な効あらずといふことなし。何ぞ独り肯あへて仙術の学び得べきを信ぜざらんや。

但だ仙道は其の成就すること遅おそく、禁忌きんぎ（仙術に忌みきらふこと）また多し。超世の志、強力の才なきよりは、之を守る能はず。或は之を好むも疑信相半して、中道に廢し、直ちに仙道長生を得べからずとなすのみ。仙經に曰く、丹（仙藥）を服し一（元氣なり）を守り、天と寿を畢おほる、還精（精氣を恢復すること）胎息（導引をいふ）寿を延ばすこと極りなしと。これ皆な至道要言なり。民間の君子すら猶ほ内は心に負そむかず、外は影に愧ぢず、上は天を欺かず、下は言を食はまず、豈に古の真人にして、虚むなしく空文を造り、不可能の事を以て、将来の人を誑たぶらかし誤まり、何いづの所にか斯の神仙を索もとむるかを疑はしむることあらんや。苟くもその命なければ、終に肯へて信ぜず。余亦た何ぞ彼等に其の信を強ふべけんや。

或る人難じて曰く、

龜鶴の長寿は、蓋し世間の空言のみ。誰かこの二物と終始相隨うて、之を知ることを得

んや。

抱朴子曰く、

苟くもその要を得ば、八極(方八)の外も之を掌に指さすが如く、百代の久しきも、同時の若きとあり。必ずしも庭宇の左右に在りて、瞻視(せんし)の及ぶを俟ちて、然る後に之を知るに非るなり。玉策記に曰く、千歳の亀には五色具(そな)はる、その額上の両骨は起りて角に似たり。蓮葉の上に浮び、或は著(めどき)の叢(くさむら)の下に在り。その上には白雲及び蛇の蟠(わだかま)るあり。千歳の鶴は、時に随つて鳴き、能く木に登る。千載ならざるものは、樹上に巢くはず。色純白にして脳は盡(ことごと)く丹(あか)しと。此の如くんば何人も之を見て、直ちにその異物たるを知るべし。然るに物の老いたる者は、多智なれば、大概は皆な深く蔵(かく)れ遠く処(お)る。故に人之を見ること自ら少(まれ)なり。

玉策記、及び昌宇記を按ずるに、但にこの二物のみに非ず。更に云ふ、千歳の松樹は、四辺の枝こんもりと生へ茂りて、横にひろがり、杪(こすえ)の先は長からず、之を視れば蓋(かさ)を偃(ふ)せたる如し。その中に物あり、或は青牛の如く、或は青羊の如く、或は青犬の如し。かゝる松の寿は、皆な千歳なりと。又云ふ、蛇の寿は窮りなし、獼猴(さる)は八百歳にして変じて猿(えん)となる、猿は五百歳にして獲(くわく)に変じ、獲は更に千歳の寿を保つ。蟾蜍(ひきがえる)は三千歳、麒麟は二百歳、騰黄(とうくわう)の馬(神馬なり、太平御覽卷八九六の符瑞図に見ゆ)は三千歳なり。又千歳鳥、万歳禽(ばんざいきん)あり、人面鳥身にして、寿はその名の如し。虎及び鹿兎は千歳、もし五百歳に満つれば、その毛色白し。熊五百歳なれば、能く

變化す。狐狸豺狼、皆八百歳、もし五百歳に満つれば、巧みに人に變ず、鼠は三百歳、もし百歳に満つれば色白く、善く人に憑きて一年中の吉凶を卜し、又千里の遠き事をも知る、之を名づけて仲といふ。此の如き類、一々載すべからず、但だ博識の者、物に觸れて能く名づけ、洽聞の者、理に明かにして疑はざるのみ。何ぞ必しも亀鶴と与に周旋して、その寿を知らんや。苟くも物を識らざれば、園中の草木、田池の禽獸も、猶ほ知らざる者多し、況んや稀有の者に於てをや。

史記龜策伝に云ふ、江淮(二川の名)の間の居人、児たりし時、亀以て臥床の下敷となす、その人の死後に至りて、家人臥床を移ししに、亀の生命は故の如しと。これ亦た五六十歳に減ぜず、然るに飲まず食はざること、此の如く久しくして死せず、その凡物と同じからざること亦た遠し、復た何ぞ千歳の寿を保つを疑はんや。仙家の導引に、亀息を象るは、豈に理あらずや。故に大丘(名地)の長官潁川の陳仲弓は篤論の士なるが、異聞記を選びて云ふ。その郡人張広定といふ者、乱に遭うて常に居を移す。一女あり、四歳にして歩渉する能はず、さりとして負ふべくもあらず。之を棄つれば、固より当に餓死すべし、されど骸骨の露るゝを好ましく思はず。村の入口に古き大塚あり、この巔には一つの深き穴ありたれば、女子を器に盛り、之をその中に鎚し下げ、数月間の乾飯、及び水漿を与ふて去り、しばらく世の平定を俟つ。三年の後、康定は郷里に還ることを得たれば、女子の遺骨を収めて、之を改葬せんと欲し、塚中

をのぞきしに、女子はなほ生存し、その父母を見しりて甚だ喜ぶ。父母初めはその幽霊なるを恐れしも、之に近づきて、漸くその死せざるを知り、如何にして食を得、寿を保ちたるかを問ふ。女子曰く、糧初めて盡きし時は甚だ饑う。ふと塚の隅を見しに一物あり、頸を伸べ氣を吞む、試みに之に效ひしに、やがて饑えず、日々かくなして今に至る。父母去る時留めし所の衣被は、塚中に在り、歩行運動もせざれば、自ら敗れず故に寒凍せずと。広定乃ち女子の謂ふ所の一物を索めしに、そは一大亀のみ。女子塚を出でたる後、穀食せしに、初めは小腹痛みて、嘔きむかつく氣味ありしが、やがて之に熟れたりとぞ。これ又亀に不死の法ありて、道を為むる者、之に效ふ時は、亀と寿を同くするの驗となすに足る。史遷（史記の著者）と仲弓とは、皆妄説の人に非るなり。天下の虫鳥は多し、而して古人独り斯の亀鶴を挙ぐる者は、その独り衆に異なるを、明かにせんが為なり。一隅を觀れば、その三隅を悟るべし。

或る人難じて曰く、

亀は能く土に蟄り、鶴は能く天に飛ぶ、人をして須臾の間、此の如くせしめんとするも、なほ能はざるべし。然らば延命、亦た何んぞ学ぶべけんや。

抱朴子答へて曰く、

虫の能く蟄するもの多く、鳥の能く飛ぶ者多し。而して独り亀鶴を挙ぐるは何ぞや。その死せざる所以は、蟄と飛とに由らざればなり。是を以て真人は亀に倣ひて、その道引を学び、

年を延べ、鶴に視てその食氣に法とり、穀を絶つのみ。土に螫すると、天に飛ぶとを学ばざるなり。それ道を得るものは、上は能く身を雲霄に竦かし、下は能く形を川海に潜む。是を以て簫史は鳳凰に偕なうて虚を凌ぎ、琴高は朱鯉に乗りて深淵を出づ（簫史琴高の事は、列に見よ）これその験なり、何ぞたゞに須臾の螫と飛とのみならんや。竜蛇、蛟、螭、狙、狙、鼃、蠃など皆な能く食はずして、冬を竟るも、なほ其の食する時より肥ゆ。世人その法を知るものなし。

且それ主として一事一物を致めて、その神技に達する者に至りては、人に勝る者多し、独り亀鶴のみに非るなり。故に太昊（伏羲）は蜘蛛を師として、網を結び、金天（昊少）は九種の鴈（鳩に似た鳥）によりて、時節を正し（左の昭公十）帝軒（黃）は鳳鳴を候うて音律を調べ、（史の三皇本）帝堯は萱莢を觀て、月の晦朔を知り（白虎通卷）終歸は往を知り（終歸は神獸の名、太の九〇）乾鵲は来を知り（淮の汜論）魚伯は水旱の氣を知り（魚伯は水神なり、其の名、古今註に見ゆ）浮螭は泉水の湧き出づる地を曉（訓に見ゆ）白狼は殷家の興るを知り（尚書中候）鸞鷟（鳳凰に似た神鳥）は周朝の盛なるを見（國の）さ（典不明）り（この出）白狼は殷家の興るを知り（尚書中候）鸞鷟（鳳凰に似た神鳥）は周朝の盛なるを見（國の）されば亀鶴が偏に導引養生を解するも、また怪むに足らざるなり。且仙經に於ては、長命の道、数百事あり。但だ遅速煩簡の別あるのみ、必しも皆亀鶴に法とらざるなり。上士の思は遐く遡にして、自然玄暢なり、愚俗の近情を以て、神仙の遠旨を推し測りがたし。

或る人曰く、

我等すでに長生の理を知らず。古人何ぞ独り之を知らんや。

抱朴子曰く、

これ蓋し愚暗の管見にして、達人の用心に非るなり。それ天象を占ひ、七政（日月と木火土の金星の五星）の盈縮を推歩し、既往の凌犯を論じ（卷八繹滞篇に「四七の凌犯と」あり、四七は二十八宿なり）将来の隆替を審かにし、仰いで雲物の微祥（しるし）を望み、俯して封兆（うらかた）の吉凶を定む。三棋（は）を運びて以て行軍の興亡を定め（圍碁は兵法の意を寓す然れども此出典不明）九符を推して禍福の分野を知る（九符は六符の誤か、六符は天文に關することにして泰階六符經などあり）一算を乗除して鬼神の情状を究め、六情を錯綜して未だ兆さざるの善惡に処す、これその根元考ふべく、形理求むべければなり。而るに庸才淺識、なほ蘊奥を開いて、自然の樸素を治むる能はず、徒らに思を古人の糟粕に鋭くして、その精微を測る能はざるなり。それ鎚鑿（つちのみ）を以て車輪を削り作るは、一の淺術のみ、然るも輪扁（りんへん、車輪を作する人の名）なほ不伝の妙ありとなし（莊の天道篇を見よ）蜩（せみ）を捕ふるは、一の薄技のみ、然るも偃偃（せむし）には入神の巧あり（莊の達生篇を見よ）とするは、皆至精を極めたるに由るなり。況んや神仙の道に於ては、旨意深遠にして、その根莖（まじこ）を求むること、良に易からざるをや。赤松子、王喬の徒はその効を得たるも、未だ必しもその理を測り知らず、況んや凡人をや。その事、学ぶべきを以て、古人之を記して、後世の識者に伝ふるのみ。若し心解し意得ば、信じて之を修むべし。之に反して猜疑胸（さいぎきゅう）にあるときは、未だ運命至らざるものと思ひあきらむべし。決して古人何を以て独り之を曉（さと）り、我何を以て独り之を知らざるやなどと、疑ひ詰（な）すべからず。

吾今にして仙の得べきを知る、又た吾よく糧を休めて食はざるなり。又吾仙術によりて、流珠（仙薬なり）の飛ばすべく、黄金白銀の求めて得べきを保するも、若しその原理を責め問ふ者あらば、之に答ふる能はざるなり。思慮の及ぶ所を有となし、及ばざる所を無となさば、天下に於て、無なるもの頗る多し。故に老子曰く、狸頭を以て鼠漏を治め（淮の説山訓に曰く狸頭は瘡を已やすと、瘡は瘰癧の誤）啄木を以て齩齒を愈やす（同上に見よ）と。是等は類を以て求むべきも（狸と鼠とは相敵す、啄木を以て齩齒を愈やすと、齩齒は齩齒の誤）利あるをいふ（蟹の漆を変化し、（淮の説山訓に見よ）麻の酒を壊るが如きは（此出典不明）理を以て推すべからざるなり。万殊紛然たり、何ぞ意を以て極むべけんや。設令危篤の疾に羅りながら、良薬あるも之を服せずして、たゞ神農岐伯のなせる製薬の原理を求むる者あらば、愚人たるを免れざるなり。

或る人曰く、

生死命あり、長短素より定まる（もと）。彼薬物の、よく損益する所に非るなり。それ既に斬られたる指は、之を連ぬる能はず、口中より吐き出したる血は、之を吞むも益する能はず。何ぞ異類の松柏を服して、短促（たんそく）の命を延ばすを得んや、決してこの理なきなり。

抱朴子曰く、

若しこの論の如く、同類にして、始めて益ありとなさば、既に斬られたる指も、そのまゝに続くことを得べし、已に吐かれたる血も、其まゝに吞みて益あるべし。然るに続くこと能はず、

又益するなし。寧ろ蛇衡膏（蛇から製した膏藥の名ならん）を以て、斬指を継ぎ合はせ、桑虫を以て、鶏鴨の足を易む（不詳、桑虫は桑蠹虫か、此物は金瘡をいやす故にかくいふか）に非ずや。異物の益あること、誣ふべからざるなり。子が言の如く、他物を待まずんば、擣きたる肉、治したる骨を以て、金瘡の薬となすべく、煎られたる皮、又は髪を以て、禿頭の疾を治すべきか。それ水土は百草と体を同くせざれども、百草は之を仰いで植ゑられ、五穀は生人の類に非れども、生人は之を須ちて以て命となす。脂は火種に非ず、水は魚属に非ず、然れども脂竭くれば火滅し、水竭くれば魚死す。木を伐れば寄生木は枯れ、草を芟れば菟糸萎む。川蟹帰らずして蛭敗れ（蛭は蟹の寄生貝なり郭璞の江賦に見ゆ）桑樹断たれて蠹は殄ゆ。類に觸れ物を推して之を考ふれば、この理を悟るべし。金玉、九竅（耳目鼻口等）に在れば、死人之が為に朽ちず、鹽齒、肌髓を沾ほせば、脯腊之が為に爛れば。況んや身に宜しく命を益する物を以て、之を我身に納るゝに於てをや、何ぞ人をして長生せしむるを怪まんや。

或る人難じて曰く、

神仙方術の書は、是に似て非なり。必ず好事家の妄りに作る所にして、黄老の手より出で、松喬（赤松子、王喬竝に神仙の名）の目を経たる者に非ざるべし。

抱朴子曰く、

若し子が高論の如くんば、方術すべて験あらざるべし。然るに今その小なる者を試みるも、

なほ効あらずといふことなし。余数々方諸（大蛤なり）を以て月より水を求め、陽燧を以て日より火を引き（方諸陽燧のことは淮の天文訓に見ゆ）或は形を隠し貌を易へ、或は巾を結びて之を地に投じ、そをして兎の如く走らしめ、或は丹帶（あかおび）を縫ひて、蛇の如く行かしめ、須臾（しばらく）の間に、瓜をして実を結ばしめ、竜魚をして盤盂（さらばん）のうちに出没せしむるを實見したり、（或は形を隠す以下の諸句は、皆神仙の奇術をいふ）漢書を案ずるに、欒大初め武帝に見えしとき、試みに基盤（まみ）をして自から相觸れしむ。又魏尚がその姿を乍ち見はし乍ち隠し、こと、張楷が能く雲を興し霧を起すことを載す。これ皆な良史の記する所にして信徴あり。而してこの術は、皆な神仙の書に在れば、その妄作に非ることを知るべし。此の如き小事すら験あれば、長生の道、何ぞ独り信あらざらんや。

或る人曰く、

神仙果して学んで致すべきこと明かならば、人々皆翻然として霄を凌ぎ、俗に背き世を棄て、秋嘗（あきのまつり）冬烝（ふゆのまつり）も之を修むるなく、祖先の神靈も餓ゑざることをなからずや。

抱朴子曰く、

蓋し聞く、身体を傷らざるを終孝といふと。況んや仙道を得て、長生久視、天地とともに畢（をは）るはその全きを受けて完きを帰すに勝ること（父母の遺体を完全にして死すること）また遠からずや。果して仙術を得ば、能く虚に登り景を躡（ふ）み、雲の輿（こし）、霓（にじ）の蓋（かさ）、旭日の霞たなびく大氣を餐（くら）ひ、天地の至醇なる元精を吸ひ、飲は玉醴金漿、食は翠芝朱英（皆仙人の飲食物）居は瑤堂瑰室、行は太空の

限なき限りなり。祖先の神靈にして知るあらば、寧ろ己が誇りとなすべし。或は以て五帝を
 翼亮くべく、或は以て百神を監督制御すべく、位は求めずして自ら致すべく（疑ふらくはこの
 膳には華瑯の美はしき物を咀茹ふべし、勢は羅酆（道教の冥土）を總べ摂むべく、威は梁柱を叱
 陀すべし。（梁柱の意不明、但だ按ずるに、礼記の檀弓に、孔子が死に臨みて、梁木たふれたるを夢むとあり。死神を威服するの意か）誠にこの道の如きは、何人もそ
 の妙を識るものなく、又之を餓ゑしむる者もなし。それ道を得たるものの最も絶れたるは、伯
 陽に（老子）に過ぐる者なし。伯陽には子あり、宗と名づく。魏に仕へて將軍となり、功あり
 て段干（名地）に封ぜらる（史の老子）然らば今の仙を学ぶものも、亦た自ら子弟ありて、祭祀を
 承くべし。何に縁りて、便ち絶えんや。

或る人曰く、

道を得るの士は、既に呼吸の術を備へ、服食の要を該ぬ。耳を掩うて千里を聞き、目を閉
 ぢて将来を見る。或は俗人の華やかなる車馬を棄て、蛟竜に轡をつけ、神州（中国を）を棄て
 て蓬萊瀛州の仙島に宅るものあり。又或は流俗に徘徊して人間に逍遙し、跡を絶ち形を隠し
 て玄虚に造らざるものあり。その尚ぶ所は同じくして、その行止、或は異なるは何ぞや。

抱朴子 答へて曰く、

之を先師に聞くに、仙人にも諸種あり、或は天に昇り、或は地に住む。其の要は長生にし
 て、此世に止まるも行くも、各々其好む所に従ふのみ。又仙丹金液を服するの法あり、若し

暫らく世間に留まらんとせば、そ分半劑さいを服して、その半ばを録す。若し昇天を求むるときは、盡く之を服す。不死の事、已に定まるときは、復た俗人の如く、奄忽死するの患なし、正に地上に遊び、或は名山に入るも、何の憂ふる所あらんや。

彭祖云ふ。天上に尊官大神多し、新仙は位卑いひしくして、奉事する所の者、一に非ず、但だ更に勞苦するのみ。故に汲々として力を天に登るに勞するを要せず、故らに人間に止まること、八百餘年なりと（彭祖は八百歳の寿を保つ）又云ふ。古の仙を得る者、或は身に羽翼を生じて變化飛行し、人の本体を失うて更に異形を受くること、雀の蛤となり、雉の蜃となるに似たるものあり。そは人道に非ず、人道は当に甘旨まじを食し、輕煖を服し、陰陽を通じ（男女の性交をいふ）官祿をに処

り、百目聰明、骨節堅強、顔色悅懌えつえき、老いて衰へず、延年久視、出処意に任じ、寒温風湿も傷る能はず、鬼神衆精も犯す能はず、五兵（五種の武器にして弓矢）百毒も中つる能はず、憂喜毀誉も累を為す能はずして、始めて貴となすべきのみ。若し妻子を委棄し、山沢に独処し、邈はく然として人理を繼絶し、塊然として木石と隣をなすは、多とするに足らざるなり。昔は安期生、童眉寧公、修羊公、陰長生（安期生、修羊公は列に、陰長生は神に見ゆ、又た童眉は、駢字類編引証の列伝に見ゆ、寧は衍か、或は列仙伝の寧封をいふか）は皆な金液半劑を服し、世間に止まること、或は千年に近かくして、然る後に去りたりと。

今之が徹底的批評を加へんに、長生を求むる者は、永く此土に留りて、今日の歡樂欲望に耽ふけらんと欲する者ならんも、若し不死の仙術を得ること明かならば、何ぞこの土に住するの

理あらんや。彭祖の説は、一時の人情に順ふのみ（「今之が徹底的批評を」よりこゝまで原文意義明かならず大意を訳するのみ）

或る人、問うて曰く、

遣おさを為なむる者は、当まさに先づ功德を立つべしと、審まじこに然るや否や。

抱朴子答へて曰く、

然り。玉鈐きん經の中篇に云ふ。功を立つるを上となし、過を除くこと之に次ぐ。道を為おさむる者は人の危きを救ひて禍を免れしめ、人の疾病を護りて、枉死せざらしむるを上功となす。仙を求むる者は、当に忠孝和順仁信を以て、本要となすべし。德行修まらずして、但だ方術を務むるも、皆な長生を得ざるなり。悪事の大なる者は紀を奪ひ、小過は算さんを奪ふ（紀は三百日、算は三日）（なほ本書の六を見よ）其他輕重に従うて多少あり。凡べて人の寿命は自ら本数あり、数もと多き者は、紀算盡しがたくして遅く死す、もと少なき者は、紀算速かに盡きて早く死すと。

又云ふ。地仙たらんと欲せば、当まさに三百の善事を立つべし、天仙たらんと欲せば、千二百善を立つべし。若し千百九十九の善ありとも、中途にして一悪を行はゞ、盡く前善を失ふことなれば、復び更に善数を起すべし。故に善は必しも大なるを要せず、悪また小なるを恃むべからず。悪事を作さなずと雖も、口及び行ふ所の事にして、若し返報を責求するときは、その善事は無効となる。但しこの場合にて、盡く前善を失はざるなりと。

又云ふ。積善満たざるときは、仙薬も亦た益なし、若し仙薬を服せずとも、常に善行ある

ときは、仙たらずとも、卒にはかに死するの禍なけんと。

以上の所論によりて、吾更らに彭祖の輩の天に昇る能はざるは、適まさにその善行の未だ足らざるに由よるなきかと疑ふものなり。

（本篇通行本錯簡頗る多し孫星術本によりて之を訂正す）

抱朴子内篇卷四

金丹

(不死の秘薬たる
仙液金丹を論ず)

抱朴子曰く、

余、養生の書を考覽し、久視の方を鳩集す。曾て披き読みし所の篇数は、千を以て計ふるに至る。皆な還丹金液を以て、大要と為さざるものなし。然らばこの二事は、蓋し仙道の極みなり。若し之を服して仙たらざれば、古来より、仙といふものなけん。往昔中原喪乱し、人人奔竄四出せざるなし。余、徐、豫、荆、襄、江、広(六州の名)の間に周旋し、流俗(原文には、流俗の間に移字あり、誤か)の道士を閲見すること、数百人に及ぶ。或は素よりその名誉高くして、青雲白日も、なほ及ばざる者あるも、大概相似たること、一の如く、その知見の深淺有無また同じ。各々数十巻の書あるも、悉く之を解する能はず、為に写して之を蓄ふるのみ。時に氣を行らして胎息し、或は穀を断じて、諸々の本草的薬方を服するも、所有の方書は、略ぼ同文にして、皆な道機經(たうぎけい)(名書)ならざるなし。彼等は此を以て秘書となして云ふ。これは尹喜(関令尹喜にして老子の弟子、史の老子伝に見よ)の選する所なりと。余之に告げて曰く。こは魏の軍督(ぐんとく)(名官)王図(わうと)の選にして、尹喜に非ず。王図は了(つひ)に上薬を知らず、唯だ氣を行らし室に入り仙を求めんと欲して、この道機經を作り、謂へらく、仙道の極致なりと。これ人を誤らしむるの甚しき者なり。余かつて往々諸道士に、神丹金液の事及び三皇文(道教の呪文)天神地祇を召すの法を問ふも、了(つひ)に一人も之を知るものなし。

然るにその大半は、誇誕こたん自ら誉め人を欺くや、曰く、已すでに長寿と。又曰く、曾かつて仙人と遊ぶと。之を事実じじつに徴するに、信ずべき者甚だ尠すくなし。或は金丹の説を聞くも、今日之を得る者あるをいはずして、以為へらく、上古の仙人のみ之を曉りしならんと。或は唯だ異端いたんげ外道どうを知りて、真經を得ざるものあり。或はくだくき煉丹の方法を得て、以て丹法の極致となすものあり。昔、左元放さげんほう（左慈の字）天柱山の中に於て精思せしとき、神人之に金丹の仙經を授く。漢末の乱に會ひて、金丹を合作するに違あらず、名山に隠れて、斯道を修めんと欲す。余が從祖葛仙公、元放より之を受く、太清丹經三卷、九鼎丹經一卷、金液丹經一卷即是なり。余が師鄭君は、葛仙公の弟子にして、又本經を受く。然れども家貧にして、藥を買ふの力なし。余之に親事し、為ために洒掃の勞を執ること積年。乃ち馬迹山の中に於て、壇きづを築き盟をなして、本經を受け、竝ならせて諸の口訣をも授かる。故に江東地方には本經なく、又他の道士も之を知るものなし、唯だ余あるのみ。余之を伝ふること二十餘年、唯だ家に擔石ひとかつきの資なく、その藥を買ふこと能はず、長く嘆ずるばかりなり。金を積みて櫃ひつに盈ち、錢を娶むること山の如き人あるも、この不死の法あるを知らず、たとひ聞くも、決して之を信ずるものなし。

それ玉飴を飲まば漿苳（漿苳は誤倒か、本書の仙藥篇に、葱漿あり）の薄きを知り、崑崙山の高きを觀れば、丘蛭ありづかの卑ひくきを覺ゆ。既に金丹の道を覽れば、人をして小小の方書を視るを欲せざらしむ。然れども此等の上藥は、之を辨ずること容易ならず、故に暫らく下藥を服用して、一時を支持するに

止まるも、人をして長生を遂げしむること能はざるなり。故に老子の訣言に云ふ。還丹金液を得ずんば、虚しく自ら苦むのみと。夫れ五穀なほ能く人を活す。人之を得ば生き、之を絶たば死す、況んや上品の神薬に於てをや。その人に益あること、豈に五穀に万倍せざらんや。また丹の物たる、之を焼くこと愈よ久しくして、変化愈よ妙なり、黄金は火に入りて百鍊消せず、之を地中に埋むるも永遠に朽ちず、この二薬（丹と黄）を服して身体を鍊る、故によく人をして老せず死せざらしむ。これ仮りに外物を求めて自ら堅固にすること、恰かも脂の火をして消えざらしむるが如し。脚に銅青を塗りて水に入れば、その肉腐らず、これ銅の勁を借りて、肉の弱を扞ぐなり。金丹の人身に於ける、精を榮にして生を衛ること、銅青を、皮膚に塗り附くるの比に非るなり。世間の心なき者は、多く至道を信ぜず、万一好事の者あるも、この法を実見せず、名師に値はざれば、天下に、此の如き妙法あるを知るに由なし。余今金丹の大略を鈔録して、以て後の同志者に示す、其れ勤めて之を求むべし、浅近の法を守りて、以て世を度るべしと謂ふことなかれ。若し遂に名師に遇はずとも、唯だ意を息めて永遠の生命を得んことを務むべし。必ず自ら久しからずして、潢汚を出でて滄海に浮び、螢燭に背きて日月に向ひ、雷霆を聞いて布鼓の陋を覚え（布にて張りたる鼓は、大声を発すること能はず、漢書の王尊伝に見ゆ）巨鯨を見て寸鱗凡貝の細を知るに至らん。若しそれ嘸嘸（煩はし）として先づ悟ることなく、下葉の力を待みて、虚空に昇騰らんことを規るは、何ぞ足なえたる驢馬に策うちて、疾風を追ひ、籃

の舟に掉^ささして、大川を済^{わた}るに異ならんや。

又た諸々の小餌丹方は、甚だ多し。之を作るに浅深あり、故に力勢（効験といふが如し）同じからず、優劣ありといへども、その金丹に及ばざるは、猶ほ一宿の酒の、九醞（酒の製法にして、（西京雜記に見ゆ））に及ばざるが如し、然れどもこの少餌丹方すら、猶ほ草木より成る上薬に勝ること遠し、凡そ草木は、之を焼けば即ち燼^{はひ}となるも、丹砂は之に反して水銀となり、又た積変して複^また丹砂となる、その草木を去ること遠し。故に能く人をして長生せしむ。神仙独りこの理を見る、その俗人を去ること亦何ぞ緬邈^{はるか}なるや。世人は見聞少なきを以て、怪むこと多し、故に或は水銀の、丹砂より出づることを知らず。之に告ぐるも、終^{つい}に肯^あへて信ぜずして云ふ。丹砂は本と赤物なり、何によりてこの白物を成すことを得んと。又云ふ。丹砂はこれ石のみ、今諸の石を焼けば皆灰となる、丹砂、何ぞ独り水銀となるを得んやと。此の浅近平易の事すら猶ほ曉^{さと}る能はず、その仙道を聞いて、大に之を笑ふは亦た宜^{うべ}ならずや。上古の真人、将来の教ふべき者を惑^{あは}れ念ひて、為に詳細なる方法を作り、之をして死亡の禍を脱せしめんと欲す、実に至言と謂ふべし。然るに俗人終に肯^あへて信ぜず、以て空文となす。若し空文ならば、九転九変など、凡べて日数の成る所、皆な方の如くなるを得んや。真人の之を知る所以は、誠に庸近の心を以て、思求すべからざるなり。余少^{わか}くして方術を好み、重きを負ひ遠きに歩して請問し、異聞を得るごとに自ら喜び、毀笑せらるれども戚^{うれ}となさざるなり。後生畏るべし、何

ぞ来者の今に如かざるを知らんや。故に之を著して、以て識者に示す。豈に苟くも奇怪を尚び空言を崇飾し、之をして世に行はれしめて、流俗に信ぜらるゝことを求めんや。陽春の盛氣も、枯朽を榮えしむる能はず、上知も下愚を移す能はず、書は曉る者に伝はり、事は識者に貴ばる。形くぬりたる弓は美なるも、農夫は之を得て鳥を射とり、衰竜の衣は貴とくとも、南蛮は之を衣て薪を負ふは、皆な無知の業にして、今さら致しかたもなし。世人は飽食日を送り、その行ふ所は、儒墨の学にもあらず、治むる所は進徳の勤にもあらず、唯だ逍遙遨遊して、以て年月を盡くす。その営む所は榮譽に非れば、利益のみ。或は蒼鷹を飛ばし黄犬を走らして、禽獸を原中に狩獵し、或は盃觴を留連して、羹を沸し、或は美女とともに、糸竹管弦に荒み溺れ、或は綺紈錦繡に身をやつし、或は弓を引いて筋力を弊らし、或博奕して業務に勤勉ならず。至道の言を開くも、酔ふが如くにして知るなく、大道の論を觀るも欠伸して昼睡る。その身を修めず、動もすれば死地に之きて、肯へて養生の法を求問せず、自ら之を割き削り、之を煎り熬り、之を憔悴しめ、之を漉し涸れしむ。而して有道の士は、自らその知る所を宝秘して、人に求むるなし、亦何ぞ肯へて之を彼等俗輩に語することを強めんや。世人常に云ふ。若し果して長生を得べくんば、古人の富貴なるもの、已に当に之を得べし。而るに之を得る者なきは、この道なきが故なりと。これ古の富貴なる者も、亦た今の富貴なる者と同じく、信ぜず求めざるを知らざるなり。彼等は皆な目前の欲する所を急となす、亦

何ぞ能く之を得んや。仮令意を決して、命の延ばすべく仙の得べきを信ずる能はずとも、亦何ぞ之を試みるを惜むべけんや。之を試みて小効あり、二三百歳の寿を得たるすら、猶ほ凡人の少夭わかじにするに愈まさらずや。天下の事、万端にして、道術の明かにしがたきこと、他事より甚し、何ぞ凡才の心を以て世間に必ず長生の道なしと断言するを得んや。若し世人の信ぜざるを以て、之れなしと謂はゞ、世上の智者又何ぞ太はなはだ多きや。今若し道意を識りて、之を修求する者あらば、必ず至愚にして、世人に及ばざる者と為すべきか、否な、決して然らざるなり。又或は長生を求むるに苦慮するも、儻もし之を得ざるときは、世人より理に暗く迷に惑ふ者として、譏笑せらるゝを恐れ、故らに之を為さざる者あるべし。然れどもかゝる求道者の思慮の中にも、一失なしとは断言すべらず。若し之を求めて、天下実に不死の道あるを知らば、すでに之を得たる者の笑ふ所とならざるか。日月も周あまねく照らす能はず、人心何ぞ孤ひとり信ずべけんや。

抱朴子曰く、

黄帝の九鼎神丹經を按ずるに曰く、黄帝之を服して遂に昇仙すと。又云ふ。呼吸道引し、又草木の藥を服すれば、延年を得べきも、死に至りては、之を免るる能はず。神丹を服するとき、人寿をして天地とともに無窮ならしめ、雲に乗り竜に駕し、太空中に上下することを得べしと。黄帝之を玄げんし子に伝へ、且つ戒めて曰く。この道は至つて重し、必ず賢者を択んで、之を授

けよ。苟くもその人に非れば、玉を積むこと山の如しと雖も、之を告ぐるなかれ、之を受くる者は、金人金魚を東流の水中に投じ、血を暖りて誓盟をなすべし。神仙の骨相なき者は、この道を見ることを得べからざるなり。神丹を合するには、あは当に名山の中、無人の地に於てすべし。同伴者あるも、三人を過ぐすべからず。先づものいみ齋すること百日、五香（一株五根、一莖五枝、一枝五葉）に沐浴し、心身を精潔にして、穢汚けがれに近づくなかれ。又た俗人と往来するなかれ。又た不信者をして之を知らしむるなかれ。又神薬を誘るときは成らず。かくして若し成らば家を挙げて、皆な仙たるを得べし、但に一身のみならざるなり。世人神丹を信ぜずして、反りて草木の薬を信ず、それ草木の薬は、之を埋うづむれば即ち腐り、之を煮れば即ち爛たぐれ、之を焼けば即ち焦こがる。自ら生くる能はず、何ぞ能く人を生かさんや。九丹は長生の要にして、凡人の見聞を得べきに非らず、億兆の人々、徒らに蠹しゆんしゆん蠹として富貴を貧るを知るのみ、豈に行尸走肉と謂はざるべけんや。又た神丹を合するときは、まさ当に祭るべし、その祭には、ゆうわう鬲（本、九）雄黄水（本、九）、はんせき磐石水（本、十）、ひしはち一鉢（本、九）以て汞（水銀よりなる薬）、えん戎塩（本、十）、ろえん鹵塩（上）、よせき礬石（本、十）、はんせき牡蠣（本、四十）、あか赤石脂（本、九）、か滑石（上）、きん胡粉（本、八）、きん各々数十觔（同）、ふじを和し、六一泥を以て之を封じ、火くこと三十六日なり。成りて之を服すれば、七日にして仙人となる。又た玄膏を以てこの丹を丸め、猛火の上に置くときは、しばうく須臾にして黄金となる。又た二百四十鉢を以て水銀百斤に和

し、之を火けば亦た黄金となる。此の如きは藥成るの証なり。然らざれば、実に藥を封じて之を火くこと、前の日数の如きときは、成らざるなきなり。

第二の丹をば、神丹と名づけ又た神符ともいふ。之を服すること百日にして仙たるを得。この丹を足下に塗れば、自由に水火の上を行くことを得。之を服すること三刀圭さじなれば、三尸さんし（人身の中に隠れて、その罪惡を天帝に上申する三疋の虫本書の六を見よ）九虫も其の詳は不明（三尸虫の類ならん）皆な即時に消死して、百病たち立どころに癒ゆ。

第三の丹をば、神丹と名づく。之を服すること一刀圭さじにして、百日を経るときは仙となる。六畜も之を吞まば、亦た終に死せず。又よく五種の武器しりぞを却く。服すること百日なるときは、仙人玉女鬼神皆な来り侍る。之を見るに人の形の如し。

第四の丹をば、還丹せんたんと名づく。服すること一刀圭さじにして、百日を経れば仙たるを得。朱鳥鳳凰其上に翔かけり飛び、玉女来り傍そばふ。一刀圭を以て水銀一斤に合し、之を火やけば、立たちどころに黄金となる。此の丹を塗りたる金錢を使用するときは、即日また本主に還へる。この丹を目に書するときは、百鬼之を見て皆走り避く。

第五の丹をば、餌丹じと名づく。之を服すること三十日にして仙たるを得。鬼神来り侍し、玉女前に至る。

第六の丹をば、鍊丹れんと名づく。之を服すること十日にして、仙たるを得。又汞と和して、之を火けば黄金となる。

第七の丹をば、柔丹と名づく。服すること一刀圭にして、百日を経るときは仙となる。缺けつ盆ぼん汁と和して、（缺盆は覆盆子なり本、十八、草）之を服するときは、九十歳の老翁も亦よく子を生む、鉛なまりと合して、之を火やけば黄金となる。

第八の丹をば、伏丹と名づく。之を服すれば、即日なつめに仙となる。棗たねの核ほど、この丹を持つるときは、百鬼恐れ避く。又た丹を以て門戸に書するときは、あらゆる悪魔敢すへて前ままず、又盜賊虎狼を避くことを得。

第九の丹をば、寒丹と名づく。之を服すること一刀圭さじにして、百日を経れば仙となる。仙童仙女来侍し、飛行輕挙するに、羽翼を用ゐず。

凡べてこの九丹の中、唯だ其の好む所に任せて、一丹を得れば、仙となるを得、必しも悉く之を作るを要せず。凡べて九丹を服する時は、この土を去りて、天に昇あらんとするも、又た且しばらく人間に止とどまんとするも、其の人の任意なり。皆な少すこしの空隙くうけきもなき所すら、自由に出入するを得て、何物と雖も、之を害するを得ざるなり。

抱朴子曰く、

復またた太清の神丹あり。その法は元君より出づ、元君は老子の師なり。太清觀天經に九篇あり、その上三篇は教受すべからず、その中三篇は世に伝ふべき人なし、常に之を三泉の下に沈む、下三篇は正にこれ丹經上中下凡べて三卷なり。元君は大神仙なり、能く陰陽を和し、鬼

神風雨を役使し、九竜と十二の白虎に驂駕^{さんか}し、天下の衆仙は、皆な之に隸屬^{れいぞく}す。猶ほ自ら言ふ、これ皆な道を学び丹を服するに本づく、自然に非るなりと。況んや凡人をや。

その經に曰く、

上士にして道を得たる者は、昇りて天官となり、中士にして道を得たる者は、崑崙山^{こんろん}に棲集し、下士にして道を得たる者は、世間に長生す。民愚にして信ぜず、虚言なりと思ひ、朝より暮に至るまで、唯だ死を求むるの事を作して、了^{つひ}に生を求めず。然らば天豈に強ひて之を生かさんや。凡人は唯だ美食好衣声色富貴を知るのみ、心を恣^{ほし}にし欲^ほを盡^{つく}し、奄忽終没^{たちまち}す。慎んで神丹の事を、この輩に告げ、彼等をして道を笑ひ真を謗らしむるなかれ。丹經を伝ふるに、若しその人を得ざれば、身必ず不吉なり。若し篤信する者あらば、之を分与すること可なるも、その方に至りては、軽^{かろ}るしく伝^{つた}ふるなかれ。この道を知らば、王侯の貴位も何かあらん。神丹既に成るときは、但に長生するのみならず、又た黄金を作るべし。金成るときは、先づ大祭を設くべし。其祭には別法一卷ありて、九鼎の祭とは同じからざるなり。祭には、左の如く別々に金を称^{はか}りて、各々その名称を検署せよ。

天に礼するときは二十斤。

日月には五斤。

北斗星には八斤。

大乙星には八斤。

井神には五斤。

竈神には五斤。

河伯には十二斤。

社（土地の神）には五斤。

門、戸、閭、鬼神、清君（清君は不明）には各五斤。

凡べて、八十八斤にして、餘の十二斤をば、好きよ章なめしがはの囊ふくろに盛り、吉日を選び、郡市の繁華なる時に於て、沈黙して、之を衆人の中に棄て去り、徑ただちに去りて、復またた顧かへりみるなかれ。この百斤の外の餘金は、その任意に使用することを得るも、前述の如く、先づ金を以て神を祀らざるときは、必ず殃咎わざはひを被る。

又曰く、長生の道は祭祀をなし、鬼神に事ふるに在らず。道引と、屈伸とに在らず。昇仙の要は、神丹に在り。之を知ること易やすからず、之を為すこと実に難し。若よく之を作なさば、長存すべし、近代漢末に於て、新野の陰君（陰長生をいふ）この太清丹を合して、仙となる。その人は儒生にして才思あり、善く詩及び丹經（さんきん）の贊さんを著し、又た道を学び師に隨ふの本末を序述す。又たその知人の仙となる者四十餘人を列記して、甚だ分明なり。この太清丹を作るは、九鼎丹を合成するよりも難し。然れどもこれ白日昇天の上法なり。之を成すには、当に先づ華池くわち、赤塩せきえん、艮雪こんせつ、玄白飛符、三五神水を作りて、火を起すべし。

一転の丹、之を服すること三年にして仙となる。

二転の丹、之を服すること二年にして仙となる。

三転の丹、之を服すること一年にして仙となる。

四転の丹、之を服すること半年にして仙となる。

五転の丹、之を服すること百日にして仙となる。

六転の丹、之を服すること四十日にして仙となる。

七転の丹、之を服すること三十日にして仙となる。

八転の丹、之を服すること十日にして仙となる。

九転の丹、之を服すること三日にして仙となる。

若し九転の丹を取りて、神鼎の中に内れ、夏至かしの後に、之を爆さくし、朱兒しゅじ一斤を蓋ふたの下に内れ、伏して之を伺ひ、日光に照らすこと須臾しゅらなれば（「朱兒」以下こ、翕然きふぜんとして俱ともに起り、五色の

神光きらめきわたりて、還丹せんとなる。之を服すること一刀圭さじなれば、即日天に昇る。又土釜つちがま

の中に九転の丹を封じこめ、糠火ぬかびもて之を火く。その方法は、文火ぬるきひより、漸々武火つよきひに変ずべし。その一転より九転に至るまで、遅速各々日数の多少あり、その転数すく少なければ、薬力足

らず、故に服薬の日も自ら多くして、随つて仙となること遅きも、転数多き者は、之に反す。

又九光丹といふ者あり。九転と成法を異にするも、大略相似たり。之を作るの法は、当まさに諸薬を合し、之を火いて五石を転ずべし、五石とは丹砂（本、九）雄黄（上）白礬（本、十）曾

青（本、十）慈石（上）なり。一石ごとに五転すれば、各々五色をなす、故に凡べて二十五色と

なる。その重さ一両ごとに、之を分ち盛る。死後まだ三日に満たざる人を起おこさんとせば、青

丹一^{さじ}刀圭を取りて水に和し、以て死人を浴せしめ、又一刀圭をその口に注ぎ内るときは、立^{たち}どころに生く。行厨^{べんどう}を致さんとせば、黒丹を取りて水に和し、以て左手に塗れば、その求むる所の食品の何たるを問はず、口づから命ずるが如く、自^おら至る。形を隠^{かく}し、未然の事を先知し、又は永年不老を欲せば、黄丹一^{さじ}刀圭を服すべし。坐^あながらにして千里の外を見、吉凶を知り、その他、人生の宿命、盛衰寿夭、富貴貧賤を知ることを得。その法は具^{つぶ}さに、太清經の中卷にあり。

その次に、五靈丹經一卷ありて、五法を載す。丹砂、雄黄、雌黄^(以上三品、本、九、石)、石硫黄^(本、十)、曾青^(本、十)、礬石^(本、十)、慈石^(本、十)、戎塩^(本、十)、大乙禹餘糧^(本、十)を用ふ。之もまた六一泥、及び神室の祭醯^(醯は神に供へたる酒)を用ひて之を合する三十六日にして成る。又五帝符を用ひ、五色を以て之を書すれば、人をして死せざらしむ。但だ太清、及び九鼎の丹藥に及ばざるのみ。

又た岷山^{みん}の丹法あり。道士張蓋踰^{ちやうがいふ}といふもの、思を岷山の石室に精^{くは}しくして、この方を得たり。その法は黄銅を鼓冶^{こや}して以て方諸を作り、月中の水を承け取り、水銀にて覆^{おほひ}、日精もて之を火く、長く服するときは死せず。又たこの丹を取りて、雄黄銅燧の中に置き^(此の一句の文意不明)、覆ふに汞を以てし、之を曝すこと二十日の後、発^{ひら}きて之を治^とかすに井華水^{せいけわ}を以てす^(水本、五)。小豆許りの分量を服すること百日なれば、盲者も視ることを得、百病自ら愈え、白髪も黒く

なり。落齒も復び生ず。

又た務成子の丹法あり。巴沙汞を八寸の銅盤の中に置き、土炉どろを以て炭を三方に盛り、塹ざんを以て盤さんを支へ（塹は枝盤の文意不明或は塹は本七、土に見ゆる土塹に似たり）硫黄水を灌そぎて常に泥の如くならしむ。服すると百日なれば、死せず。

又た羨門子せんの丹法あり。三升の酒を以て、一斤の丹と和し、之を曝さらすこと四十日、之を服すること一日なれば、三虫百病立たちどころに下る。服すること三年なれば、仙道乃ち成る。必ず玉女二人来り侍す、之を使役して、行厨を致さしむべし。この丹は、百鬼及び四方の死人の殃まじなを厭きらふべし。蛙きくひむし（原文蛙に作るは誤か）居宅を害することあり、或は妨害となる土功ふしんなどに出会ふときは、その方角に向つて、この丹を懸かくれば患なし。

又た立成丹あり、九首即九転あること、九鼎に似たれども、その効は之に及ばず。その要は、雌黄雄黄を焼き、銅鑄の器に盛りて、之を覆ひて三歳の後、苦酒に漬つくこと百日なるときは、器中に長さ数分の赤乳或は五色の琅玕ろうかんをも生ず。取り理おさめて之を服すれば、人をして長生せしむ。又菟糸ねなしかづらと調合すべし。菟糸（上、本、十八）初生の根の兔うに似たるものを取り、その血をしぼりて、之に和し以て服するときは、変化自在なり。又和するに朱草を以てす。一たび服するときは、能く虚に乗りて雲に歩す。朱草の状は小棗に似て、長さ三四尺、枝葉皆な赤く、莖は珊瑚の如し。多く名山の巖石の下に生ず。之を刻きめば汁流しるれて、血の如し。玉

及び八石金銀をその中に投ずれば、立どころに泥の如く固まり、久しくすれば水となる。金を投ずれば金漿となり、玉を投ずれば玉醴となる。之を服すれば、皆な長生す。

又た伏丹の法あり。天下の諸水には、名丹あり、南陽の丹水の如き、これなり。その中に丹魚を生ず。夏至に先だつこと十日の夜、之を伺ふときは、丹魚(本、四十)必ず水側に浮ぶ、赤光上照して赫然火の如し。網すれば得べきも、多きを貧るなかれ、その血を足に塗れば、水上を歩行し、淵中に長く居るを得べし。

又た赤松子の丹法あり。千歳の藁汁(不明なるも、本、十八上に蓬蘽あれば其の汁なるべし)及び礬桃汁を以て丹を淹け、津液なき器中に置き、綿密なる、縑帛もてその口を蓋ひ、之を地に埋むること三尺にして、その間百日なり。その後柠木(楮に同じ、本三十六、本)の赤実を絞り其の汁を和して、之を服すれば、面目鬢髪をして赤色をなし、長生せしむ。昔し中黄の仙人に赤鬚子といふ者あり。豈に之を服したるに非るか。

又た白石先生の丹法あり。未だ毛羽生長せざる鳥(本、四十)の雛を取りて、牛肉を和したる真丹を吞ましむ。長ずるに及びて、その毛羽皆な赤し。乃ち之を殺して陰乾にすること百日の後、毛羽とともに、之を搗く。一刀圭を服すること百日にして、五百歳の寿を得。

又た康風子の丹法あり。羊、鳥、鶴卵、雀血と少室山の天雄汁(本、十七)とを調合して、之を鵠卵の中に内れ、漆もて之を塗りて、雲母水の中に内る、こと百日なれば、化して赤水と

なる。その一合を服すれば、輒ち百歳の寿を増す。歳ごとに一升を服すれば、千歳に至る。
 又た崔文子の丹法あり。丹を鶯^{あひる}の腹中に内^いれて之を蒸^むす。服すれば人をして年を延ばさしめ、長く服すれば死せず。

又た劉元の丹法あり。丹砂を玄水液の中に内るゝこと百日なれば、紫色となる、之を握るも手汚^{けが}さず。又た雲母水^(玉本八)に和して、漆管の中に入れ、之を井中に投ずること百日なれば、化して赤水となる。一合を服すれば、百歳を得。久しく服すれば長生す。

又た樂子長の丹法あり。曾青^(石本十)青鉛丹^(青は衍か、本八金)と、汞及び丹砂とを調合して、銅筒の中に居^おき、瓦滑石を用ひ之を白砂の中に封じ、蒸すこと八十日なり。その小豆許りの分量を服すれば、三年にして仙となる。

又李文の丹法あり。白素を以て丹を裏^うみ、竹汁もて之を煮る、之を紅泉といふ。再び沸湯の上に、之を蒸し、合するに玄水を以てす。その一合を服すれば、一年にして仙となる。

又た尹子の丹法あり。雲母水を以て丹に和し、密封して、金華池の中に置くこと、一年の後、日日一刀圭を服して、一斤を盡すに至れば、五百歳の寿を得。

又太乙の招魂魄丹法あり。六一泥を以て、五石を封ずること、九丹に似たり。頓死して三日を経ざるものを蘇生せしむるに利あり。その法は、この丸薬と硫黄丸とを合して、水とともに死者の口中に注ぎこむ。蘇生者は皆な言ふ、使者節を持して、之を召すを見たりと。

又た采女の丹法あり。兎血に和したる丹をば、蜜もて蒸したるものにして、之を梧桐の実ほどの丸薬となし、一日に三回づつ、百日間之を服すれば、神女二人来り侍りて、其の使命に供す。

又た稷丘子の丹法あり。六一泥を以て清酒、鹿油、百華醴（本、廿一、草、華は草の誤ならん）竜膏を和したる丹を封じ、糠火を以て之を煨あたたむること十日にして成る。小豆ほどの単丸を服して、一劑を盡すときは、五百歳の寿を得。

又た墨子の丹法あり。汞及び五石液とともに、丹を銅器の中に入れ、火にて之を熬いりつけ、鍬てつさじじもて攪かきまはすこと十日なるときは、再び丹となる。之を服すること一刀圭なれば、万病身を去り、長く服すれば死せず。

又た張子和の丹法あり。鉛汞（本、八金）曾青水（本、十石）を合して之を封じ、赤黍米の中に蒸すこと、八十日にして成る。更に棗膏を以て之を和し、丸薬となす。大豆ばかりの分量を服すること百日なれば、五百歳の寿を得。

又た綺里きの丹法あり。五石の玉塵と丹砂汞とを合して、之を大銅器の中に入れ、之を煮ること百日なれば五色となる。之を服すれば死せず。更に鉛百斤と藥百刀圭さじとを合して、之を火けば白銀となる。又た雄黄水を調合して、之を火くこと百日なれば、黄金となる。その剛こはき時には、猪膏もて煮、柔かき時には、白梅（本、廿九、果）もて之を煮る。

又た玉柱の丹法あり。華池の汞水を丹に和し、曾青(本、十)硫黄(一、本、十)の粉末を以て之を覆ひ、之を筒中の砂中に置き、蒸すこと五十日の後、服すること百日なれば、玉女、六甲六丁の神女来り侍る。之を使役せば、天下の事を知るべし。

又た肘後の丹法あり。金華を以て丹を和し、乾瓦もて之を封じ、蒸すこと八十日の後、取り出して盤上に置き、日光に照すときは、その光相通ず。小豆ほどを服すれば、長生すべし。又た之を陽銅(本、八)の中に投ずれば、金に変化する。

又た李公の丹法あり。真丹及び五石の水各一升を和して、泥の如くならしめ、釜中に之を火くこと三十六日の後、取り出して石硫黄液(一、本、十)と和したる者を服すれば、十年にして、その寿、天地と同じ。

又た劉生の丹法あり。白菊花汁(五、本、十)地楮汁、樗汁(五、本、卅)を以て丹に和し、之を蒸すこと三十日の後、葉研にかきまわしたる者を服すれば、一年にして五百歳の寿を増す。老人之を服すれば少年となり、少年之を服すれば、決して老いず。

又た王君の丹法あり。丹砂と巴砂とを、漆もて塗りたる雞卵の中に入れ、雞をして之を孵ふ化せしむ。王相の日(五、行の關係より定められたる吉日にし)その三個を服すれば、成人は老いざるも、小兒は生長せざるなり。新生の雞犬鳥獸も、亦た此の如し。

又た陳生の丹法あり。白蜜を以て丹を和して、銅器の中に内いれ、之を密封して井中に沈む

ること一年の後、服するときは、年を経るも饑ゑず、一斤を盡くすときは百歳に至る。

又た韓終の丹法あり。深蜜を以て丹に和し、之を煎す、服するときは年を延ばすべく、又た日中に立つもその影を見ず。

その他数十法あるも、具さに論ずべからざるなり、

抱朴子曰く、

金液は、大乙が服して、仙となりし者なり。その功は、九丹に減ぜず。之を合するには、古秤の分量にて、黄金一斤と元明、竜膏、大乙、旬首、中石、氷石、紫遊女、玄水液、金化石、丹砂とを調合して、之を封ずること百日なれば水となる。その経に曰く、金液口に入らばその身金色となると。老子は、之を元君より授けらる。元君曰く、この道は至重なり、百世に一たび出すべきのみ、常に之を名山に蔵すべし。合薬の時は、皆斉戒百日、俗人と往来するを禁ず。名山の側、東流の水上に精室を立て、之を製すれば百日にして成る。其の一兩を服すれば仙となる、若し上天を欲せずして、地仙たらんとするときは、半兩を服すべし。長生不死にして、万害百毒も害する能はず、妻子を畜ひ、官職に居りて、万事意に任せざるなり。若し復た昇天を欲せば、斉戒して、更に一兩を服すべし。

又た金液を以て、威喜(不)巨勝(胡麻の異名本、廿二穀)を為つくるの法は、金液及び水銀一味を合して、之を煮ること三十日の後、更に之を黄土の甌かみに盛り、六一泥もて封ず、かくして猛火の中に炊

くこと六十時なれば、皆化して丹となる。其の小豆ほどを服すれば、即ち仙となる。又粉末の水銀一斤と和すれば、銀となる。又たこの丹一斤を火上に置き、之を煇あふげば、液体の赤金となる。之を丹金といふ。以て刀剣に塗れば、敵の武器を、万里の外に遠くすることを得。又たこの丹金を以て、盤はん碗わんを為つくり飲食の用に供すれば、人をして長生せしむ。又た日月の光を承くるときは、水を吸ひ取ること、方諸の如し、この水を飲めば、死せず。又た之を黄土に和し、六一泥の甌かめの中に内れ、猛火もて炊けば、盡く黄金となりて、使用するを得。又た火を以てこの黄金を炊けば、皆な化して丹とする。小豆ほど服すれば、名山大川に入りて、地仙となるを得べし。この丹一刀圭を、水銀の粉末一斤と和すれば銀とする。この銀一両を鉛一斤に和すれば、又た皆な銀となる。この金液經きんぎやうけいを授さづからんとするには、金銀八両を東流の水中に投じ、血を飲みて誓をなして、その口訣を受くべし。若しこの法を用ゐず、或は之を盗用するも、その効なし。凡そ至信ある人には、薬を与ふべきも、輕かるくその書を伝ふべからず。然らざれば師弟ともに、殃を受けん、天神の監照は甚だ近きも、凡人は知らざるなり。抱朴子曰く、

九丹は、誠に仙薬の上法たり。然れどもその材料たる薬品、甚だ多し。天下太平、四方交通の時には、悉く之を市かふことを得べきも、九域（支那の九州）分隔の際には、容易に得べからず。加之に製薬の時には、数十昼夜、よくその火力を伺候して、適宜を失はざらしむるの必要あれ

ば、勤苦もまた至難なり。故に金液を合するの易きに及ばず。金液を合するには、その得がたき者は金のみ。古秤の金一斤は、今の秤はかりの二斤にして、其価は大抵三十万錢に過ぎず。その他の藥品も、大略備へ易く、加之に火を用ふるの勞なし。但だ之を華池の中に置き、定期の日数を満たせば成る。都すべて四十万錢ほどの費用を投ずれば、一劑となり、八人をして仙人とならしむるを得。その分量少なき者は、その成らざること、恰も酒を釀かもして成らず、醢すとなるが如し。
（此一二句は神
 沟経による）

抱朴子曰く、

その次に、小餌黄金の法あり。金液に及ばざるも、他薬に比すれば、遙かに勝まされり。或は豕負しふ、革肪かくぼう（竝並びに不明）及び酒を以て之を煉り、或は樗皮を以て之を治とがし、或は荊酒、慈石を以て之を消とがす。或は布巾の如く平たき形の薬となし、或は水液となすことを得て、之を服す。往々禁忌あれば、金液に及ばざるなり。或は雄黄、雌黄を合して、之をひきのばせば皮の如くするを得。是れは地仙の法のみ。又た銀及び蚌中の大珠をば、皆な化して水とならしめ、之を服すること可なるも、長日月に互わたらざるべからず、故に皆な金液に及ばざるなり。

抱朴子曰く、

この金液九丹を製するには、錢を要し、又名山に入りて、人事を絶たざるべからず、故に能く之を為す者少なし、此経を得る者は、千万人の中、一人あるのみ。故に道書を作る者も、

金丹を説く者なし。第一の禁は、不信の俗人をして、之を謗らしむるなかれ。之に反すれば必ず成らず。鄭君云ふ。其の理由は、この上薬を製するには、先づ大乙元君、老君、玄女を祭り、その降監かうかんを願ふべし。薬を作る者、若し幽僻の地に隠れずして、俗間の愚人をして、之を経過聞見せしむれば、諸神、乃ちこの経戒に遵はずして、悪人をして之を謗らしむるを責め、復た之を助けず、邪氣進み侵して、薬成らざるなり。

必ず名山に入り齊戒百日、五辛及び生魚を食はず、俗人と相見ずして、始めてこの上薬を作るを得べし。薬成らば、斉を解くべし。鄭君云ふ。左君の言によるに、諸方の小山には、この薬を作るべからず、凡べて小山の主には皆な正神なし、多くはこれ木石の精、千歳の老物、血食の鬼なり。この輩は邪氣ありて、人の幸福を念はず。但だ能く禍をなして、巧みに道士を試む、道士たる者は、須らく術を以て身を辟くべし。又た弟子も、時によりて薬を壊る者あり。今の医家、好薬好膏を製するには、皆雞犬小兒婦人をして、之を見せしむるを欲せず。若し之を犯せば用ふるも効なし。それ綵色を染むる者は、悪目の人の見るを嫌ふ、何となれば之に感じてその美色を失はんが為めなり。況んや神仙の上薬をや。是を以て古の道士、神薬を合作するには、必ず名山に入りて、凡山に止らざるなり。

又た仙經を按ずるに、仙薬を精思して、之を合作するに適するの地には、華山、泰山、霍くわく山、恒山、嵩山すう、少室山、呉山、太白山、終南山、女几山き、地肺山、王尾山、抱犢山ほうとく、安丘山、

潜山、青城山、蛾眉山、綏山、雲台山、羅浮山、陽駕山、黄金山、鼈祖山、大小の天台山、四望山、蓋竹山、括蒼山あり。此等の山には、皆正神若くは地仙あり、山上には皆な芝草を生じて、大兵大難を避くべし、但に藥を合するに適するのみならざるなり。若し有道者、之に登れば、山神必ず之を助けて福を与へ、藥も亦必ず成らん。若しこの諸山に登るを得ざれば、海中の大島嶼、若くは会稽の東翁海、宣州、紆嶼、及び徐州の羊莒州、秦光洲、鬱洲は皆なその次なり。今は中国の名山に至るを得ず（當時江北一帯亂）江東の名山には、晋安の霍山あり、東陽の長山太白山あり、会稽の四望山、大小の天台山、蓋竹山、括蒼山ありて、竝びに住することを得べし。

抱朴子曰く、

余は大臣の子孫を忝けなくす、才は国を経め物を理むるに足らずと雖も、世上を見れば、儔類の好も少なく、時勢に進み趣くの才能も、余に及ばざること遠き者にして、猶ほ夜は翮を雲漢に揮ひ、昼は景を晨霄に耀かし、一世に時めくもの多し、然るに余が郷党の慶事を絶ち、当世の榮華を棄つるものは、必ず遠く名山に登り、著はす所の子書を成さんと欲すればなり。次は、神藥を合し、長生を規るが為なり。俗人皆な余が桑梓を委て、清明の時代に背き、躬づから林藪に耕し、手足の胼胝をも顧みざるを怪しみ、余を目するに、狂惑の疾ありとなさざる者なし。然れども仙道と俗事とは、竝び行はれず、若し人間の務を廢てずんば、何ぞこ

の志を修むるを得んや。この道を見るに、了然として、信ずべく、之を執るに、必ず動かすべからざる事あらば、亦た毀誉を憚り。他の勧めと沮すまたげによりて、心を移さんや。聊かその心を書して、将来の同好者に示すといふ。若し断金の同志者あらば、その富貴榮華を捐棄するに於て、余と異ならざるのみ。

小神丹の方は、真丹三斤、白密六斤を攪かきまぜ、之を日光に暴さらして、更に煎いり丸薬となす、毎朝、麻の実ほどのもの十九を服すれば、一年ならずして髪自きものは黒く、齒落つる者は生じ、身体潤つる沢し。長く之を服すれば老いず、老翁も少年となりて死せず。

小餌丹の方は、先づ一斤の丹を擣つきて、之を篩ふるいにかけ、苦酒三升漆二升の中に漬つけて、よく之を調和し、微火もて煎り、丸薬を成す。麻実ほどの者三個を一日二回に分服す、三十日の後、腹中の百病癒えて、三戸去る。之を服すること百日なれば、肌骨強堅なり。千日なれば、司命の神も、死籍しせきよりその姓名を削りて、天地と寿を同じくし、日月と相望み、形容變化し、日中にも影なくして、別に一種の光を生ずるを見る。

小餌黄金の法は、鍊金を清酒の中に内いること、大約二百回なれば、その酒即ち沸騰ふつとうす、之を握るに、指間より泥の如く漏れ出づ。若し沸わかず、或は泥の如くならざれば、之を銷いかして、何回となく清酒の中に入るゝときは成る。其の弾丸一箇又た二箇ほどを服すべし。又た分ちて小丸となし、三十日間服用すれば、寒温を意に介せず、神人玉女来り侍る。銀も亦た

餌となすべきことは、金と同じ、この二物を服して、能く名山石室の中に居ること一年ならば、軽く天に上り、若し人間に止らば地仙とならん。妄りにこの法を伝ふるなかれ。

兩儀子の小餌黄金法は、猪負革脂三斤を苦酒一升の中に漬け、黄金五兩を器中に置き、之を土炉に煎じ、金を脂中に置き、百たび入れて百たび出す、苦酒も亦た爾しかり。その一斤を食はゞ、寿命天地に同じく、半斤を食はゞ、二千年、五兩ならば千二百年なり。金を服するには分量の多少を問はず、当に王相日まさを以て之を作り、之を服すれば神良なり。其人に非ざるものに伝ふるなかれ、しかるときは薬をして、成らざらしむ。走りて天に上ばらんとせば、丹砂を服すべし。

（按ずるに「小神丹の法」以下こゝまで五十九頁其の次に「小餌黄金の法あり」の節の次にあるべき者ならんか）

抱朴子内篇卷五 至理（道家の至極の真理）

抱朴子曰く、

微妙は識り難く、疑惑する者は多し。吾が總明豈に能く人に過ぎんや。適たまたま一局の知識あるは、猶ほ鶴の夜半を知り（淮の説山訓）燕の戊己を知る（説文に見ゆ）の類にして未だ必しも他事に達せざるなり。校驗を以て長生を得べく、何人も仙人たるを得べきことを知るに止まるのみ。それ道の妙は盡く書すべからず、その浅近なるものは、又特に説くに足らざるなり。昔し康桑子は手足に胼胝たこを生じ、文子は顔を釐りし（此二子の出典明かならず、又釐は聲の誤か）勤苦いよ弥々久しくして、始めて秘訣を受けしは諒まことに以ゆえあるかな。

それ円首含氣の人類は、孰しづれか生を樂み死を畏れざらんや。然るに世間の榮華勢利、其の意を誘ひ、美人の素顔玉膚は、其の目を惑はし、音楽の清商流徵ちは、その耳を乱みだし、愛惡を利害は、其神を攪みだし、功名声誉は、その体を束つかぬ。これ皆な召さずして自ら来り、学ばむとして已に知る者なり。故に苟くも神仙たるべき命運を受け、理を究め独り見、常俗の外に立ちて、変化を識り、明智の清き鑒かがみを幽玄妙漠の域に運めぐらし、親したむべく重んずべきは身にして、疎んずべく軽んずべきは、虚名なるを悟り、電光の寸隙げきを過ぐるに勝る歲月の迅速を悼いたむ者に非れば、豈に能く目前の近き者を棄て、餘はるかなる道を修め、嗜好を抑へ遣わすれ、成し難きの

効を貪る者あらんや。

それ有は無より生じ、形は神を須^まちて立つ。有は無の宮にして、形は神の宅なり。故に之を堤に譬ふるに、堤壞^{やぶ}れば水留らず。之を燭^{くわ}に方^{くわ}れば燭糜^つくれば水居らず。身勞すれば神散じ、氣竭くれば命終る。根すでに竭くれば、枝繁れども、青色は木を去り、氣疲るれば、欲勝つも、精靈は身を離る。夫れ逝く者、反る期^{とき}なければ、朽ちたるもの、生くるの理なし。是れ達士^{まじし}の良に悲む所なり、その尺璧を軽んじて、寸陰を重んずるは、豈に以^{もつ}あらずや。故に山林養生の家、俗を遣^{わす}れて意を得るの徒は、崇高^{たか}き富貴を贅^{こぶ}疣^うに比し、万物を蟬翼の軽きに方^{くら}ぶ。豈に苟しくも大言を為して、強ひて世事を薄んぜんや。誠に其の所見^み了^{あきら}なる故に、之を棄つること忘るゝが如きのみ。是を以て遐^{とほ}く棲^{ひそ}み幽^{ひそ}かに遁^{ひそ}れ、鱗^{うろこ}を韜^{たう}み藻^もを掩^{おほ}ひ、視んと欲するの目を遏^{とど}めて、明を損ずるの色彩^{しき}を遣^やり、言を思ふの耳を杜^{ふさ}ぎて、聴を乱すの声調^{こゝろ}を遠^{とほ}ざく。慾情を滌^{あら}ひ除きて、幽玄を洞覽^{とうらん}し、雄強を棄て、雌弱を守り、多慾を遣^{わす}れて純一を抱き、神氣を専らにして柔弱を致^{きた}む。恬淡^{てんだん}素樸^{そこく}を以て心を鎮^{しづ}め喜歓^{きかん}哀戚^{あいせき}の邪情^{じやけい}を遣^{けん}去し、得失の榮辱^{えいじよく}を外にして、厚生^{こうせい}の深毒^{しんどく}を割き、禍福^{くわふく}の枢機^{すうき}たる多言^{たごん}を戒め、反聴^{はんてい}して聞く所盡^{しん}く徹^{てつ}し、内視^{ないし}して朕兆^{しんせう}なきを見る。精靈の根本を造化^{めいさん}の冥鈞^{めいこん}に養ひ、外界の誘慕^{ゆうぼ}を接物^{せつぶつ}に除く。俗務を削り斥^はけて身を御^{おさ}むるに愉悞^{たのしみ}を以てし、無為^{むゐ}を為して以て天理^{てんり}を全くす。此の如くにして宝華^そを咀吸^そし、神を太清^{たいせい}に浴し、外は五曜^{ごよう}を除き、内は九精^{くじよう}を守る、玉鑰^{やく}を命門^{めいもん}に堅くし、北極

を黄庭に結び、三景を明堂に引き、元始を飛ばして以て形を鍊り、雲液を金梁に采り、長く白を驅りて青を留め、澄泉を丹田に凝らし、流珠を五城に引き、俯して瑤鼎を炊き、仰いで藻禽の鳴くをきく、瑰華は穎を擢で、天鹿は瓊を吐く。重規を絳宮に懷き、九光を洞冥に潜す。雲倉は籒として天に連り、長谷は湛へて經に交る。乾兌を履みて六丁を招き、坐ながら紫房に臥して金英を咀吸す、曄曄たる秋芝、朱華、翠莖と、晶々たる珍膏とは溶溢して霄より零ち、飢を治し渴を止め、百病萌さず、戊己に逍遙し、燕飲和平、鬼神魂魄を拘制す。骨填ちて体輕し、故に能く風雲に策ちて虚に騰り、混輿と並びて永く生く（以上数十句は主として參同契黃庭經より来る）然れども梁塵の尺に盈つるは、之を漏刻（漏は傾の誤ならん）に求むべきに非ず。山霤の岩石を洞徹するは、之を造次に致すべきに非るなり。（積年辛苦せざれば仙道に入りがたき喻）唯だ之を聞く者は信ぜず、之を信ずる者は為さず、之を為す者は終へざるを患ふるのみ。それ之を得る者は、甚だ稀にして、而かも身を隱し、成らざる者は、至つて多くして而かも世に顯はる。世人はその隱れたる者を知らずして、顯はれたる者を見る、故に天下に仙道なしと謂ふなり。

抱朴子曰く、

堤防堅ければ、水に漏洩の費なく、脂多ければ火に曜を寝むるの患なし。竜泉の名劍は妄りに断割せざるを以て、常に銳利なり、斧は日々用ゐらるゝを以て、速かに鈍し。隱れたる雪は暖氣を違る、故に夏を經、藏めたる氷は深く居る、故に暑を過ぐす。帛にて裏まれたる鏡

は、日光を吸引して物を灼くこと能はず、偏あまねく被覆おほひを為れば、凡草も冬を越す。泥壤どろつちは消け易きも、陶して瓦となせば、天地とその久しきを齊ひとしくす。柞櫓はそなは速に朽る者なるも、之を燔やいて炭となせば、億年を経るも敗れず。轅ながえの下に跼促すくむ豚は、優やさしく蓄やしなはるを以て晩おそく卒はり、良馬は峻阪のぼに陟のぼるを以て、早く斃る。寒虫も己れに適すれば、その害に耐たへて寿を倍し、南林も南方の炎熱にめげずして長茂す。秋冬の殺氣に接して、凝霜一たび降れば、百草涸やれ瘁やせ、春夏の陽和に値あへば、万木鬱うつあひ藹あひとして條枝えだ秀ひいづ。物類は一なり、而して榮枯の功を異にすること、此の如し。豈に秋収の常限、冬藏の定例あらんや。而して人の命を受くるや、その死は草木の寒天に於けるに若かず、その危きこと、更らに太甚し。而して延養の理、補救たすの方は、徒たに温暖の草木に浅益あるの比に非ずして、数層の利あり。久視の効、何ぞ益なきことあらんや。而しかるに世人は近きを守り隘せまきに習なれ、仙道を虚誕となし、黄老を妄言となすは、亦た惜しからずや。それ世上には、湯藥鍼艾しんがすら信ぜざる者あり、況んやこれより深きものをや。彼等は曰く、俞跗ゆうふ、扁鵲へんじやく、秦緩、倉公（四人の名医）の流は、必ず能く病を治む、何ぞ人をして死なからしめざるか。又曰く、富貴の家は、豈に医術に乏しからんや、而るに寿ならざるは、これ命には自然あればなりと。此の如き人を責めて、神仙を信ぜしめんとするは、これ牛をして木に登らしめ、馬をして鳥を逐はしむるものなり。

抱朴子曰く、

招魂の小丹、三使の丸、及び五英、八石などは、下薬のみ。然るに或は堅氷を消かし、或は水に入るも自ら浮び、能く鬼神を断絶し、虎豹を禳ひ却け、臟腑に積聚せる邪氣を破り、膏肓に潜む二豎を追ひ、頓死者の尸を起たしめ、又長逝したる者の魂を返す。凡薬の効、すでに此の如し、上薬ならば、何ぞ生者をして、不死を得ざらしむる疑あらんや、越人(扁鵲)は既に死したる虢国の太子を救ひ、(史の扁鵲伝を見よ)胡国の巫は蘇武の氣絶を活かし、(巫は医の誤、漢の本伝に見よ)淳干は能く臚を解きて腦を理め、華佗は能く腹を剖きて腸を滌ひ、文摯は期を衍ばして危困を瘳やし(呂の至忠篇を見よ)仲景は胸を穿ちて赤餅を内る。(此の典故不明、但し仲景は張中景ならん故にその外科的手術をいひし者なるべし)これ医家の薄技なるも、猶ほ此の如し、況んや神仙の道をや、何事か成らざらん。

それ人の死する所以は、諸慾に損せられ老年となり、百病に害せられ、毒惡に中てられ、邪氣に傷られ、風冷に犯さるゝ故なり。今道引して氣を行ひ、精を還らし腦を補ひ、食飲変あり、起居節あり、藥物を將ち服し、神を思ひ一を守り、禁戒を柱天し(柱天の語不明、按ずるに柱は在符印を帶び、生を傷ふの徒は、一切之を遠ざく、此の如くならばこの六害(前文の諸慾より、風を免るべし。今の医家、腎氣を通明するの丸薬には、五絡の散を補ひ、(史の扁鵲伝注に十五絡とあり身体の血脈動脈の類)骨には枸杞(本、三十)の煎薬と黄耆(本、十二)建中湯(上)を填む。之を服せんとするときは、皆な肥丁(肥丁は不明)を致す。漆葉、青黏は凡草なるも、樊阿は之を服して二百歳に達し、耳目聰明、猶ほよく鍼を持ちて病を治す、これ近代の實事にして、良史の記註する所なり(樊阿の事は三國志に見ゆ)

又た呉普くわふといふ者あり、華陀くわだに従つて五禽の戲を受け（五禽は今の柔軟体操の類なり三の華陀伝に見ゆ）道引に代へ、猶ほ百餘歳に至る。薬術の至浅なる者すら、此の如し、況んやその妙を用ひるをや。今俗人に語りて『理中、四順（本、十二上、草、理中は治中に同じ）は霍乱くわくらんを救ふべく、欸冬紫苑くわんとしえん（竝に本、十六、草）は欸逆せきを治すべく、萑爐（萑は萑の誤か、本、廿八、菜）貫衆（本、十、草）は九虫を殺し、当帰、芍薬（竝に本、十四、草）は絞痛を止め、秦膠、独活（本、十、草）は八風を除き、菖蒲（本、十、草）乾薑（本、廿、菜）痺湿を止め、菟糸（本、十八、草）従容（上、本、十二）は虚乏を補ひ、甘遂、葶藶（竝に本、十七、草）は疾癖たんぺきを逐ひ、括楼くわつろう（本、十八、草）黄蓮（本、十、草）は消渴を癒やし、薺萑甘草（竝に十二、上、草）は百毒を解し、蘆如（本、十、草）益熱（明不）は衆創を護り、麻黄、大青（竝に本、十五、草）は傷寒を主つかさどる」と曰はんか。之を信ぜざる者あり、寧ろ犠牲を供して神に幸福を請ひ、著めじきによりて崇たたりを問ひ、良医の病を攻むるを信ぜずして、反りて巫史の紛々たる空言を用ふ。況んや之に告ぐるに、金丹以て世を度わたるべく、芝英以て年を延ばすべきを以てせば、その信ぜざること知るべきなり。

昔は留侯張良は、奇策を吐き出して、一代比する者なく、智慮の及ぶ所は、浅近の人と異なり。而るに猶ほ不死を得べしと為す。曰く『吾れ将まさに人間の事を棄て、赤松子に従游せんとす』と。遂に道引を修めて、穀を絶つこと一年の後、輕拳の道はかを規はかる。呂后之に逼りて、太子を安んずるの計を問ふに及び、已やむを得ずして四皓の策はかを画はかる、果してその言の如し。是に於て呂后之を徳として、強ひて飲食せしめしかば、その道遂に成らざりしなり。孔安国の

秘記を案ずるに『張良は、黄石公より不死の法を得たり、唯だ兵法のみに非ず』と。又云ふ『良の本師の四皓、即ち角里先生綺里季の徒は、皆仙人なり。良悉くその神方を受く、呂后に強ひられて飲食したるも、尋いで復び仙道を修行し、密かに世を度る、世人之を知らず、故に死すと云ふ』と。孔安国の言の如くんば、張良の仙たりしこと疑なし。又漢の丞相張蒼、偶ま小術を得て、婦人の乳汁を吸い、百八十歳に至る。これ等は蓋し道術の浅薄なる者なるも、猶ほ中寿の三倍を得たり、況んや諸種の秘法を備へ行はゞ、何ぞ長生を得ざらんや、この事は漢書に見ゆれば、空言に非るなり。

抱朴子曰く、

服薬は長生の本たりと雖も、若し氣を行ふことを兼ね行はゞ、其益更に甚だ速かなり。若し薬を得る能はずんば、但だ氣を行ひその理を盡くすも、また数百歳の寿を得ん。然れども、又た宜しく房中の術を知るべし。何となれば陰陽の術を知らずして、屢ば精力を勞損するときは、氣を行ふも、力を得難きなり。それ人は氣中に在り、氣は人中に在り。天地より万物に至るまで、氣を須ちて生ぜざるものなし。善く氣を行ふ者は、内は身を養ひ外は惡を却く、百姓日に用ゐて知らざるなり。呉越に禁咒の法あり、甚だ明瞭あるは、是れ炁多きためなり。之を知るものは大疫の中に入りて、病人と床を同じくするも、己れ独り染まざるのみならず、数十人の從者をも畏る所なからしむ。これ炁の、天災を禳ふに足るの証なり、或は邪魅山精、

人家を侵犯し、瓦石を人に擲ち、人の屋舎を焼き、或は形を見て往来し、或はその声言言語を聞くことあり、炁を以て之を禁ずれば、皆な即時に絶つ、これ炁の、鬼神を禁ずるに足るの証なり。山林に入るに、溪毒、蝮蛇の地多し。凡人暫く経過するも、中傷せざるなし、而るに炁を以て之を禁ずれば、能く数十里四方を闢き、己れのみならず、同行者をして害を受くるなからしむ。又た能く虎豹及び蛇虺を伏せしめて、起つこと能はざらしむ。又た炁を以て金瘡を禁ずれば、血は即時に止む。又た能く骨を續ぎ筋を連ぬることを得、白刃を踏むも傷つかず、刺すも肉に入らず。若し蛇虺にあてらるゝ時には、炁を以て禁ずれば、立どころに癒ゆ。近世の左慈、趙明等、炁を以て水を禁じ、之をして迸ばしらしむること一二丈なり。又た茅屋の上に火を燃やして食を煮るに、食熟して茅屋焦けず。又た大釘を柱に七八寸も打ちこめ、炁を以て之を吹けば、その釘皆な射るが如く抜け出づ。又百錢を沸湯の中に投じ、人をして之を探り取らしむるも、その手少しも灼け爛れず。又大寒の時、水を庭中に露すも氷らず。又た一里四方の炊ぐ者をして、盡く熟するを得ざらしむ。又た犬をして吠えざらしむ。昔呉君、賀將軍をして、山賊を討たしむ、時に賊中に禁を善くするものあり。交戦の時、官軍の刀劍皆抜くことを得ず、射る矢も自ら還へりて、身づから傷つくのみ、賀將軍は長智にして才思あり。乃ち曰く。吾れ聞く『金に刃ある者は禁ずべく、虫に毒ある者は禁ずべし、若し刃なく毒なければ禁ずべからず』と。然らば彼も亦刃なき物を禁ずる能はざらんと。

乃ち多く勁木つよきもて棒を作り、大力ある精卒五千人を選びて、先登となし、力を盡くして、彼の山賊を倒し捉とらふ、賊の禁術果して行はれず。是に於て官軍大に之を破り、打ち殺す者万を以て計ふるに至る。夫れ炁は形より出づるも、その用効此に至る、何ぞ穀を絶ち病を治し、年を延べ性を養ふべからざることあらんや。

仲長公理は才達の士なり

（仲長公理は即長統にし
て後漢書に其の伝見ゆ）

昌言を著し、書中に、氣を行れば飢ゑず病ま

ずといふことを評すらく、「吾れ始めは之を信ぜざりしも、実行を見れば果して然り、養生の法、此の如く至約にして、吾の能くせざる所以は、心を世務に馳せ、思を人事に鋭くするの故ならずや。他人の能くせざるも、又た必ず吾と、この缺点を同じくする者あらん。昔し不死の道を知る者あり。燕君、人をして之を学ばしむ、逮およばずして師死す。君その使者を怒りて、將まさに誅を加へんとす。諫むる者曰く、『それ憂は死より過ぐるはなく、重きは生より急なるはなし、彼れ自らその生を喪うしなふ、何ぞ吾君をして死せざらしむるを得んや』と。（この事、韓の
説林上に見よ）

君乃ち誅せず。その諫辞は良説たり、然れども至当の論に非ず、或はその師といふ者、不死の法を知るも、世事を棄て、之を為すこと能はざりしが為ならん。又た云ふ海南の密県に卜成といふ者あり、道を学びて久しきを経、乃ち家人と辞し去る。その行歩稍や高きを見しが、遂に雲中に入りて、復た見えぬ。これ所謂形を挙げて軽く飛び、白日昇天の上仙なり。陳元方、韓元長は皆な潁川の高士にして、密県と相近し、この二君が天下に仙あるを信ずる所以

は、蓋し各々その父祖が、上成（原文、上をトとなす、孫校によりて改む、後の方術伝）の昇天を實見したるによるなり。これ又た神仙あるの一証なり。

抱朴子内篇卷六 微旨（道家の微妙なる旨意）

抱朴子曰く、

余聞く、帰する所同じく、契相合ふものは、言はずして自ら信ぜられ、途を殊にし務を別にする者は、忠告すと雖も疑はると。それ尋常（尋常も咫尺と）咫尺の間より知らるゝ理、又た人世取捨の細事につき、その明白なること、金属と羽毛との沈浮を見るよりも明かに、自粉と墨泥との黑白を分つよりもたやすき事すら、惑を抱く者は、猶ほ之を辨ぜざる者多し。況んや之に説くに、世道の外を以てし、之に示すに至微の旨を以てす、その大笑せらるること、今に始まらざるなり。それ明の及ぶ所は、玄陰幽夜の地、豪釐芒髮の微も見がたととなさず。苟くも速ばざらんか、天に麗る日月の焔灼、雲を干す嵩岱（二つの高山）の峻峭も、猶ほ察する能はず。黄老二子は玄聖にして深識独見、秘文を名山に開き、仙經を神人に受く。俗間の埃塵を蹴りて係累を遺れ、遐なる室を凌いで高く躋る、金石も堅きを斉しくする能はず、亀鶴も寿を等しくする能はず。将来の仙術に志ある者を念ふて、信者の文籍なきを愁む。故にその方法を垂示して、炳然として著明なり。少しく修むれば少しく利あり、大に為むれば大に驗あり。然るに浅見の徒、守る所に区々として、荼蓼の苦きを甘んずるも飴の密を知らず、醢醢に酔ふも醇醪を賞せず、生を好むを知るも養生の道あるを知らず、死を畏るゝを知るもの不

死の法あるを信ぜず、飽食過度の疾病を速くを知るも、肥甘を其の口に節する能はず、情を極め欲を恣にせば、精力の枯損を致すを知るも、恋々としてその思ひを割くこと能はざるなり。余今神仙の得べきを言ふも、何ぞ能く此種の人をして、信ぜしむるを得んや。

或る人難じて曰く、

子の体には参午理に達し、奇毛骨に通するの相なし。安期生、彰祖の如き年寿あるに非ず。神仙に接せず、異友を聞かす、何を以て長生の得べく、養性の徴あるを知るか。若しそれ玄妙の理を心得して、逸れたる独特の知識ある故に、仙術を得たりと云はんか、これまた許しがたし。それ膚を蔽ふの衣なく、夕を謀るの儲なくして、陶朱の術を高談し、自ら猗頓の策に同じとせば、必ず人に譏らるゝは理の当然なり。痼疾に罹りて、秦和扁鵲の医術に精しいひ、屢々敗北して、孫呉の兵法を究むといふも、之を信ずる者なきは、効なければなり。

余答へて曰く、

それ寸蛭すんえん（井中の小虫）は足跡にたまる程の浅き水に汎濫びて、天下には四海の広きことなしと謂ひ、芒蜎は果の核の内に宛転りて、八極の界は、此に盡きたりと謂ふ。彼等に告ぐるに、大海の浩汗として限りなきこと、宇宙の広大空闊を以てすとも、必ず空言となして信ぜざるべし。若し吾眼をして、神仙と同じく方瞳長耳の異相あらしめば、将に飛竜に乗りて慶雲に駕し、流電を凌いで倒景（最上の天界にして日月下より之を照すところをいふ）に造らんとす、子また何ぞ吾を詰ることを得

んや。設令^{もし}吾を見ば、將に呼んで天神地祇、異類の人となさんとす、豈に我が学んで、之を致したりとも謂^{おも}はんや。吾が此に論ずる所以は、姑らく先覺の地位に立ちて、同志を挽^ひ引くのみ、豈に強ひて吾子の徒をして、皆な之を信ぜしむるを要せんや。若し家々戸々に、仙人ありて顔を竝^{なら}べ肩を比^{なら}べしめば、吾子の蔽^{まよひ}迷と雖も、亦た將に疑はざるべし。但だ彼の道を成したる者は、青霄に入りて紫極に遊ぶ、故に通靈の力なき限りは、之を見聞するものなし。故に世人は、以て無しとなすのみ。世人は其の臆斷を信じ、その短見に仗^より、自ら其の度る所の事には差錯^{あやまり}なしとなし、眼前の事に習れて、稀有の状を怪む。故に耳を提^{ひき}げ掌に指して、之を教ふるも終に悟らざるは、その由来尚^{ひさ}し、豈に独り今日のみならんや。

或る人曰く、

屢々高説を聴いて、神仙の疑ふべからざるを知るに足る。但だ之を為す能はざるの恐れあり。敢て問ふ、直ちに之を行ふの要道あるか。

抱朴子曰く、

凡べて道を学ぶには、浅きを階にして深きに涉り、易きよりし以て難きに及ぶべし。志誠に堅固ならば済^ならざるなし。凡べて疑はゞ功なきこと、この一事のみに非るなり。夫れ根莖^{がい}未だ地中に固らずして枝條^{えだ}の雲を干^{わか}すを求め淵源まだ広深ならずして、万里の湯々^{しやう}たる流れを求むる者は、未だ之れ有らざるなり。是故に積善陰徳に非れば、以て神明を感ずるに足ら

ず。誠心款契かんけいに非れば、以て師友に結ぶに足らず、功勞あるに非れば、以て大官に試みらるべからざると同じく、明師に遇はざれば、要道を求めんとするも、之を得べからざるなり。九丹金液は、最も仙藥の主要なる者なるも、其の事大にして費多し、卒にはかに辨ずべからざるなり。されば精を宝として炁をを愛むこと、最も其の急務なり。併はせて小藥を持ち服して年命を延べ、方術を學びて、以て邪惡を辟きくれば、乃ち漸やく精微いたに階いたるべし。

或る人曰く、

方術繁多にして、誠に一々備へ難し、暫らく金丹を措おきて、その他、何者を修むべきか。

抱朴子曰く、

若し未だその至要の大なる者を得ざるも、その小なる者をば、広く知らざるべからず。蓋し衆術は、共に長生を成すの力あればなり。大事を以て喩たとへば、猶ほ君主の国を始むるが如し、文武礼律、一として缺くべからざる如し。小事を以て喩へば、猶ほ工匠の車を為つくるが如し、輶ながえ、輶軸わのあみぢく、輶くさひを虧くべからざるが如し、仙術は内は形神を修めて、年を延べ疾を慰いやし、外は邪惡を禳はらひて禍害おをして干おさざらしむ。之を琴瑟しつに比するに、一絃を以て五音を求むべからず、之を甲冑くわに方くらぶるに、一札を以て鋒刃を防ぐべからざるなり。何となれば五音合用して、闕くべからず、鋒刃の集まりて、薄くすべからざればなり。

凡そ生を養ふ者は、多く聞いて要を貴び、博く見て善を択ぶべし。一偏を修むるは、必ず

頼むに足らざるなり。又た好生の徒に患ふる所は、各々その長ずる所に仗りて、他を知らざることなり。故に玄素げんその術を知る者は曰く、唯だ房中の術あれば、以て世を度るべしと。吐納の道に明かなる者は曰く、唯だ氣を行れば、年を延ばすべしと。屈伸の法を知る者は曰く、唯だ道行すれば、老いがたしと。草木の藥方を知る者は曰く、唯だ藥餌あれば、以て病なかるべしと。道を學んで成らざるは、此の如きの偏見に由るなり。浅智の者、偶々たま一事を知れば、已に足れりとなし、又た眞を識らざる者は、すでに善方を得るも、之を實行するの意定らず、更に他方を求めて、徒らに工夫を費やして、日月を送る。これ皆な兩つながら失ふ所あるなり。或は本性贗鈍おろかにして、その知る所、尚ほ浅近なるも、強ひて名山に入り、毒螫どくせきを冒し、屢々中傷を被むるも、郷に還るときは、人に笑はるゝを恥ぢ、或は虎狼に食はれ、或は、魍魎まうりやうに殺され、或は絶穀の法なくして飢ゑ、或は自ら温あたむるの方なくて寒え、崖谷に死するは、亦た愚ならずや。

それ學を務むるは、師を択ぶに如かず。然れども師の聞く所は、素より狭し。又師も情を盡くして、弟子に教へず。因りて告げて曰く、道を為おさむるは多きに在らず、金丹の要道あり、他は用ゐざるも可なりと。然れども金丹の事は、之を知る者、甚だ稀まれなり、豈に知ること能はざるの大事を、何のあてもなく待ちて、衆多の利益ある小術を修めずして可ならんや。譬ふるに家を作るに他物を要せずと云ふが如し。かく云ふ意は、苟くも金銀珠玉あれば、累世の

費に供するに足る、故に他物を須たずと。然れども既にその金銀珠玉なき時は、広く百穀を播き、多く果蔬を儲ふるの必要なしといふべからず。是を以て米穀を断じ、兵器を避け、鬼魅を厭効し、百毒を禁禦し、衆疾を救治し、山に入らば猛獸をして犯さざらしめ、水を涉らば蛟竜をして害せざらしめ、瘟疫を経るも畏れず、急難に遇はゞ形を隠すなどの小技小事も、亦皆な知らざるべからず、況んや此に勝る方術をや。

或る人曰く、

敢て問ふ、長生の道を修むるには、何をか禁忌すべきか。

抱朴子曰く、

禁忌の急とすべきは、傷らず損せざるにあるのみ。易内戒、及び赤松子経、及び河図記命符を按ずるに、皆云ふ。天地に過を司どるの神あり、人の犯す所の軽重に随つて、以て其の算を奪ふ、算減ずれば貧耗疾病ありて、屢々憂患に逢ふ、算盡くれば死す、而して算を奪ふべき者数百事あれば、具さに論ずべからずと。又た言ふ。身中に三戸あり、三戸の物たる、皆な鬼神の属にして、形なきも実に魂霊あり、人をして早く死せしめんと欲す。この鬼は、常に自由に遊行して、人の祭酹を亨く、庚申の日に到ることは、輒ち天に上ぼりて、寿命を司どるの神に、人の過失を告白す。又た月晦の夜には、竈神も亦天に上ぼりて、人の罪状を白す。大なれば紀を奪ふ、紀とは三百日なり、小なれば算を奪ふ、算とは三日なり（原註に或は一日といふ）と。吾も

亦たこの事の有無を、審かにする能はず。然れども天道は邈遠にして、鬼神は明かにし難し。趙簡子、秦穆公の二人が皆な金策を上帝より親授せしことは、土地の明徴あり（史記の趙世家を見よ）山川草木、井竈沔池には皆な精氣あり、人身の中にも精氣あり、況んや天地は物の至大なるもの、理に於て当に精神あるべし。精神あらば善を賞し惡を罰すべし、但だその体は大にして、網は疎なり、必しも機の弩より発し、響の声に應ずるが如く、直ちに見はれざるのみ。

然れども諸の道戒を通覽するに、長生を求むる者は、必ず積善立功、物に對して慈心あり、忠恕人に及び、仁愛昆虫に逮び、人の吉を樂みて人の苦を愍み、人の急を憫はし人の窮を救ひ、手は生類を傷らず口は禍を勧めず、人の得失を見ること、己の得失の如く、自ら貴譽せず、嫉妬せず、佞諂せず、此の如くんば乃ち有徳なり、福を天に受け、作す所必ず成り、仙を求めて得べし。若し善を憎み殺を好み、口是にして心非、背向前辭を異にし、正直に反し戻り、その下を虐害し、その上を欺罔し、その事ふる所に叛き、恩を受くるも感ぜず、法を弄して賂を受け、曲を縦し直を枉げ、公を廢て私の為にし、刑を無罪に加へ、人の家を破り人の宝を収め、人の身を害し人の位を取る、賢者を侵克し降伏を誅戮し、仙聖を謗訕し有道を傷殘し、飛鳥を彈傷し、胎を刮き卵を破り、春夏には原野を焚きて狎をなし、神靈を罵詈訾し、人に惡を教へ人の善を蔽ひ、人を危ぶめて自ら安んじ、人を佻んじて自ら功ありとなし、人の佳事を壞り、人の愛する所を奪ひ、人の骨肉を離間し、人を辱めて勝つことを求め、人の長錢を取

り短陌を人に還し（當時民間で、一縑九十文を百文に通用す。之を短陌といふ、陌は百なり、長錢は之に反して法定價格あるもの隋書の食貨志に見ゆ）水を決し火を放ち、術を以て人を害し（かよわき）羸弱を脅迫し、惡を以て好に易へ、強ひて求め強ひて取り、慳掠（かす）めて富を致し、不公不平、淫佚傾邪（みなしこ）、孤を凌ぎ寡を暴し（やもめ）、遺（お）ちたるを拾ひ施し（ほじこ）を奪ひ、欺（あざむ）き誑詐（たぶらか）し、好んで人の秘密を討（あば）き人の優劣を論じ、妄りに天神地祇（ひ）を援いて呪咀（のろひ）をなし、借りたる者をば還さず、交換するも償はず、貪欲（や）已むなく、忠信を憎み拒き、上命に順はず、師を敬せず、人の善を作（な）すを笑ひ、人の苗稼を敗り、人の器物を損じ以て人を困窮せしめ、不潔のものを女人に飲ましめ、秤（はかり）を輕くし斗（ます）を小さくし、幅（はば）を狭くし度を短かくし、偽を真に雜（まじ）へ姦利を採取し、人を誘うて物を取らしめ、井を越え竈（またが）に跨（つ）る（井竈の二神に不敬なること）晦（つこもり）に歌（うた）ひ朔（ついたち）に哭くなど、凡べてこの一事あれば、輒ちこれ一罪なり。その輕重に隨うて、司命の神は、其の算紀（さんぎ）を奪ふ、算紀盡くれば死す。但し惡心あるも惡迹なき者は、算を奪ふ、若し人を損するの惡事には紀を奪ふ。若し算紀まだ盡きずして、自ら死する時は殃子孫に及ぶ。人の財物を奪ふ者には、その妻子眷屬を死喪せしめて、之を償はしむ。但し即時に行はざるのみ。惡行未だ此の如く太甚しからざる者も、長日月の間には、終に大水劫盜に遭ひ、又は器物を遺失し、或は県官の疾病に遭ひて、自ら医薬を営み、牲を烹て祭祀するなどの費用頗る多く、為に其のかつて取りし所を、盡く出すに至るものなり。故に道家は言ふ。人を枉殺する者は、これ兵刃を以て殺すに同じ。その非義の財を取りて、怨恨を避けざるは、讐へば、猶ほ腐敗したる脯（ほしく）を以て

飢を救ひ、鳩毒ちんの酒を以て渴を止むるが如し。暫く飽かざるに非るも、久しからずして死せん。その曾つて諸々の悪事を行ふも、後に自ら改悔する者あらんか。即ち枉殺まがころには応に死すべき人を救済して、以て之を償ふべし、財物の妄取には、貧困に施与して、以て之を償ふべし、罪を人に加へたる者は、賢人を薦達せんたつして、以て之を償ふべし。かくの如く、皆なその所為に一倍せば、吉利を受くるを得べし。是れ禍を転じて福と為すの道なり。盡く之を犯さざれば、必ず年を延べ寿を増し、道を學びて速かに成らん。

それ天は高くして卑きに聴き、万事を照監する者なれば、善を行ひて怠らざれば、必ず吉報を得ん。羊公は徳を積みて布施す。故に白首に至りて、天より金を下して之に授く（不）蔡順は至孝なり、神感之に応ず（後の六九、周盤伝を見よ）郭巨は親の為に子を殺さんとす、而して鉄券の重き賜たまものを得たり（搜神記の十一）然れども善事は作し難く、悪事は為し易し。加之に愚人は又た項託たぐ伯牛（淮の説林訓に項託七歳にして孔子の師たること見ゆ但し早天す。伯牛は孔門の一人なるが悪病にかかる）の事により、天神地祇にて善悪を辨ずる力なしと謂ふ。然れども世間には、虚名高くして内行之に叶はず。陽誉あるのみて陰罪を救ふ能はざることあるを知らざるなり。若し薺麦せいばくの生死を以て陰陽の大順を疑はゞ（本書の暢玄篇に見ゆ）是れまた遠きを致むるに足らざるなり。蓋し上士の密勿つしめて僅かに免るゝ所にして、凡庸の達せざる所なるか。（「罪を人に加へたる者は」よりこゝまで通行本になし）

或る人曰く、

道德未だ成らず、又た迹を名山に絶つを得ず、而して世は古に同じからずして、盜賊甚だ多し。何を以て朝夕の患を却けて、無妄の災（必得の災なり、戦の楚策に見ゆ）を防がんとするか。

抱朴子曰く

常に執日（日の吉凶の名ならんも不明）六癸上（方角の名ならんも不明）の土を取り、以て薰草百葉に和し、門戸に塗るこ
と方一尺なれば、盜賊来らず。又た市の南門の土、及び歲破（太歲即木星の神の居る方
向と反対の方向に居る神）の土と月
建（毎月建する所の十二辰の方角）の土とを取り和して人形（つ）を為り、朱鳥（方南）の地に置くときは、盜を圧する
を得べし。急あれば生地（命のたすかる場所）に入りて止まれば患なし。天下に生地あり、一州に生地
あり、一郡一県一郷一里一宅一房に皆生地あらざるなし。

或る人曰く、

一房に生地ありとは、あまりに逼らずや。

抱朴子曰く、

經に云ふ。ただ危急の時には、車の軾（よこ）に隠ると。この如くんば、一車の中にも亦た生地あり。死地あるなり、況んや一房をや。

或る人曰く、

竊（ひそ）に聞く、生を求むるの道は、当（まさ）に二山を知るべしと。この山の所在（あり）を審にせず、願くは
告悟（わが）を垂れて、吾惑（ひら）を祛け。

抱朴子曰く、

之れあり。之は華山靈山に非らず、嵩山岱山にも非らず、それ大元の山は知り難くして求め易し、（易は難の誤か）天にあらず地にあらず、沈まず浮まず、絶險綿邈めんぱく、崔嵬崎嶇さいくわいきくなり、和氣網緼いんうんにして神仙竝なみだび遊ぶ、玉井泓邃わうすうにして、灌げども休まず、百二十人の官曹相由り、坎離かんりによりて位列す、玄芝万株、絳樹特生、その実は皆珠なり、金玉嵯峨さがとして醴泉隅に出づ、還年せんの士はその清流を把くむ、子能く之を修めば、王喬赤松子と寿と均しくすべし、此れ一山なり、他を長谷の山といふ。杳杳巍巍やうやうゑゐたり、玄氣飄々として金液霏々たり、金池紫房その隈くまにあり、惡人妄りに往けば皆死して歸る。有道の士之に登れば年衰へず、黄精（本草）を採り服して、以て天に飛ぶを得、此の二山は皆古聖の秘する所なれば、子之を精思せよ。

或る人曰く、

願くは、真人の、身を守り形を鍊る術を聞かん。

抱朴子曰く、

深遠なる質問なるかな。夫れ始青の下には月と日と兩半同じく昇りて合して一となり、彼の玉池を出でて金室に入る、大さ弾丸の如く、黄なること橘たちばなの如し。中に嘉味あり、その甘きこと蜜の如し。子能く之を得む、謹んで失ふなかれ、既往は追ふべからず、身將に滅びんとする時は、至微なる、純白の氣、密に幽閑に昇り、三たび曲折す、中丹煌々として命門に

独立す、淵乎として妙なり、致はめ詰りがたし。これ先師の口訣なり。之を知る者は、万鬼五兵を畏れざるなり。

或る人曰く、

聞く所によるに、房中の道をつくす者は、簡単に神となり、并せて災を移し罪を解き、禍を転じて福となし、官に居れば高く遷り、商賈すれば倍利ありと。果して信なるか。

抱朴子曰く、

これ皆な巫書の妖妄にして、過差の言なり。好事者増加潤色して、実を失はしむるに至る。或は亦た姦偽の人、虚妄を造作して世人を欺き、端緒を隠して、奉事を求め、弟手を招集して、世利を規るのみ。それ陰陽の術の高き者は、小疾を治むべく、次は虚耗を免るべきのみ。その理自ら極りあり、何ぞ能く神仙を招き、禍を転じて福となすを得んや。人には陰陽の交なかるべからず、然れども情を縦にし欲を恣にして、適度に之を宣べざれば、年命を伐る、その術を善くする者は、能く走馬を却けて（不_明）、以て脳を補ひ、陰丹を朱腸に還し、玉液を金池に采り、三五を華梁に引き、人をして老ゆるまで美色ありて、其の天年を終へしむ。而して俗人は黄帝が千二百人の女子と、天に昇るを聞き、黄帝は唯だ房中の術を以て、長生を致したりとなして、その荊山の下、鼎湖の上に九丹を成就し、竜に乗りて天に登りたるを知らざるなり。されば黄帝の修むる所を行ふて、始めて二百女あるを得べし、唯だ房中の術の結

果に非るなり。

凡べて千種の薬を服し、三種の美味を以て自ら養ふも、房中の術を知らざれば何等の益なし。是を以て古人、人の情性を軽恣するを恐れて、故らに美はしく之を説きたる者なれば、盡く信すべからざるなり。玄素（玄女素女の二仙女にして黄帝に此術を教へしもの）は之を水火に喩ふ、水火の人を殺し、又た人を生かすは、能く用ふると用ひざるとに由るのみ。大都すべてその要法を知れば、女を御すること多々益々善し。如し其の道を知らずして之を用ふれば、一二人を御して、すでに死を速くまねに足るのみ。是れ彭祖の法の最要なる者なり。その他の経は、多く煩勞にして行ひ難し、その益も亦書にいふ如くならず、能く之を為す者少なし、而して其の口訣数千言あり、之を知らざれば、百薬を服するも、長生を得る能はざるなり。

抱朴子内篇卷七

塞難（仙術を非難する者を塞ぐ）

或る人曰く、

皇穹は（天）至神なり、賦命は宜しく均しかるべし。何ぞ王喬、赤松子の如き凡人をして、不死の寿を受け、周孔の如き大聖をして、久視の祚さいはひなからしむるか。

抱朴子曰く、

命の長短は、実に値あふ所に由り、氣を受け胎を結ぶには、各々星宿あり。天道は無為、物に任じて自然なり、親もなく疎もなく、彼もなく此もなきなり。命もし生星に属すれば、其人必ず仙道を好む、仙道を好む者、之を求むれば亦必ず得ん。命もし死星に属すれば、その人必ず仙道を信ぜず、仙道を信ぜざれば亦た自ら其事を修めざるなり。樂む所の善惡は、稟うくる所に判れ、禍福の移易、寿命の予奪は、天の能くする所に非ず、譬へば猶ほ金石の炉冶ろやに消とかされ、瓦器の陶竈たうさうに甄すゑらるるが如し。之に由りて形を成すも、銅鋹の利鈍、甕罌かめの正歪わいは、適たまま遭ふ所の時によりて、相異なり、復た炉と竈との与る所に非るが如し。

或る人、難じて曰く、

良工の作る所は、皆なその手に由る、天の神明なる、何物か為されざらん。然るに人生の運命は、その匠たくみ成すに非ずといふ、余甚だ惑ふ、故に未だ信ずる能はざるなり。

抱朴子、答へて曰く、

天地の初は、渾々茫々たり。陰陽清濁すでに判れ、或は昇りて動く者あり、或は降りて静かなる者あり、彼の天地すら、その然る所以を知らず。万物氣に感じて、自然に生ずるは、彼の天地と択ぶなし、但だ成に先後あり、礼に大小あるのみ。天地の大あり故に万物の小を覚え、万物の小あり故に天地の大を覚ゆる。且つそれ腹背は五臓を包み囲むも、五臓は腹背の作る所に非ず、肌膚は血氣を纏ひ裏むも、血氣は肌膚の造る所に非ず、天地は万物を含み容るも、万物は天地の爲る所に非ず。譬へば猶ほ草木は山林に因りて以て萌秀するも、山林はその事に与るに非ず、魚鼈は水沢に託して以て産育するも、水沢は特に力を盡くすに非るが如し、俗人は天地の大を見て、之を万物の小と相對せしめ、因りて曰く、天地は万物の父母にして、万物は天地の子孫なりと。それ虱は我が体に生ずるも、豈に我の作る所ならんや、虱は我に非れば生ぜざるも、我は虱の父母に非ず、虱は我の子孫に非ず。蟣蠓は醯醕に育せられ、芝栢は木石に産じ、蛄蝓は糞土に滋り、翠羅は松林に秀づるも、これまた四物の創匠する所に非ず。万物の天地に於ける豈に斯と異なるあらんや。天に日月寒暑あり、人に瞻視呼吸あり。遠きを以て近きに況へ、此を以て彼を推すに、人自ら何の故にその体の老少痛痒あるかを知る能はざれば、彼の天も亦自ら何の故に日月の盈縮、又は災祥あるかを知る能はず。人は耳目をして常に聰明ならしめ、榮養衛生、以てその精力を蓄へ固めざらしむる能は

ざれば、彼の天も亦た日月をして薄蝕せず、四時をして序を失はざらしむる能はず。茲に由りて之を論ずれば、天寿の事は天地に在らずして、仙と不仙とは、値ふ所の運にあること明かなり。

それ我を生む者は父なり、我を娠む者は母なり。猶ほ我をして体格必ず中適、姿音必ず姘麗、性理必ず平和、智慧必ず高遠、我が氣力を致し、我が年命を延びしむる能はずして、或は矬陋して疋弱、或は黒く且つ醜く、或は聾盲、或は頑嚚、或は枝離、或は劬蹇となる。得る所は欲する所に非ず、欲する所は得る所に非るなり。況んや天地の遼濶なるに於てをや。然れども父母は猶ほ遠し。更に之を近く況とふれば、我れ我身をして、永く壯にして老いず、常に健にして疾まず、喜怒宜きを失はず、謀慮に悔吝なからしむる能はず。故に氣を授け形を流す者は父母なり、受けて之を有する者は我身なり。その他何物と雖も、此れより多く親密なる者なし、これより多く制御の力を有する者なし。二者すでに我に損益する能はざること此の如し、天地また安んぞ之に与かり知るを得んや。若し人物は皆な天地の作る所ならば、宜しく凡べて好くして悪なく、悉く成りて敗るゝなく、衆生遂げざるの類なく、傾楊には春凋の悲みながら（一本には傾を頃に作る何れにても意味通ぜず、兪説は自叙篇に本づき項楊の誤となす）然して天は孔孟をして世を渡るの祚あらしむる能はざるを以て、益す命を稟くること自然あり、天地の分つ所に非るを知るに足る。聖は徳の至れるものなり、天若しこの至徳を与へながら、之をして欲する所、

全く遂げしめず、功業建たず、霸王たらしめず、寿も百に盈たざらしむれば、これ天の与ふる者に非るの明驗なり。聖人の死は、天の殺す所に非ずば、聖人の生も、亦た天の挺ぬきんづる所に非るなり。聖必しも寿ならず、惡必しも天ならず、善あるも福に近づくなく、惡あるも禍を蒙るなく、生に定年なく、死に当分なし。顏淵の如き盛德哲人は、秀みでて実みならず（論語に見ゆる孔子の語による）寶公の如き庸夫は二百年に及び（漢の芸文志の顔注を見よ）伯牛は癘疾にかゝりて（史の仲尼の子の列伝を見よ）子夏は明を失ふ（同上）盜跖（せき）は凶を窮めて白首に至るまで死せず、莊躋（けう）は惡を極めて黄髮なほ壮なり。（莊躋の事、漢の西南夷伝に見ゆ）天の爲すことなきは、此に於て明かなり。

或る人曰く、

仲尼称す、古より皆死ありと（論語に見ゆ）然るに老子曰く、神仙は学ぶべしと。それ聖人の言は信にして徵しるしあるも、道家の所説は誕いつはりにして、明かにし難し。

抱朴子曰く、

仲尼は儒者の聖にして、老子は道学の聖なり。儒教は近くして見やすし、故に之を宗たつとむ者衆く、道意は遠くして識り難し、故に之に達する者寡すくなし。道は万殊の源にして、儒は大淳（大道といふ如し）の流れなり。三皇以上の太古は皆な道の政治にして、帝王以来の今代は、儒教なり。談者は咸みな万世の醇朴（たつと）を上げ、季世の澆散（うす）を薄うすんずるを知りながら、独り仲尼を重んじて、老子を軽んずるは何ぞや。是れ枝葉を玩びて、その本根を識らざる者といふべし。何ぞ明珠を貴び

て、淵潭しんを賤いやみ、和璧を愛して、荊山を惡むに異ならんや。淵潭は明珠の出づる所にして、荊山は和璧の生ずる所に非るか。

且つそれ性を養ふは道の餘にして、礼樂は儒の末なり。儒に貴ぶ所は、その風を移し俗を易なるに在りて、唯に相讓盤旋おしまたりまはりなどの礼儀のみに非るなり。道に尊ぶ所は、その言はずして化行はるるに在りて、唯に養生の一事のみに非るなり。若し儒と道と、果して優劣ありとするも、専ら仲尼を信ずべからざると与に、弧ひとり老氏のみを用ふべからざるなり。仲尼既に敬つゝんで、道を老子に問ひ、老彭に比するを願ふ（論語に見ゆ）又自ら魚鳥を知るも、竜を知らざるを以て、老氏に喩たとふ（史の老子伝を見よ）蓋し心服の辞にして、空言に非るなり。之を例するに、顔回が仲尼を贊嘆して、之を矐みれば前にをり、忽焉として後に在り、之を鑢きれば弥々堅く、之を仰あげば弥々高しといひしことと、異なるなし。（論語を見よ）

或る人曰く、

仲尼は親したしく老子を見て、従学せざりしは何故ぞや。

抱朴子曰く、

此を以て之を觀れば、益うす稟くる所に、自然の命あり、尚たつとぶ所に不易の性あるを知る。仲尼は老子の玄妙貴異を知るも、清浮虚無の本源を挹く酌み、無形の外に出でて、至道の内に入る能はず。その諮受する所は、人間の事に止まるのみ。何ぞ仙法を請求せんや。仲尼の用心

を付^{はか}るに、専ら教化に汲汲として、方術に存するに非るなり。仲尼は世事に聖なるも、沈黙玄聖にして、自ら無為を守る者に非ず。故に老子之を戒めて曰く。良賈^こは深く藏^{かく}して虚^{むな}しきが如く、君子は盛徳ありて愚なるが如し、子の驕氣多慾と態色淫志とを去れ、是れ皆な子の身に益なしと。以て仲尼の俗情を免れずして、仙を学ぶの人に非るを知るに足る。それ栖々遑々として、務めて時勢を匡^{ただ}さんとす、仰いで鳳鳴を悲み、俯して匏瓜^{ほうくわ}を嘆ず、之を沽^うらんとするも售^うれず、忼慨して執鞭を思ふ（鳳鳴以下の故事は皆な論語に見ゆ。）亦何ぞ經世の功業を捨て、養生の迂澗を修めんや。

或る人曰く、

儒道の二業何れか難くして、何れか易きか。

抱朴子曰く、

儒は易中の難にして、道は難中の易なり。それ交遊を棄^すて妻子を棄て、栄名を謝し、禄仕を損し、燦爛たる美色をも視ず、鏗鏘^{かうきやう}たる音楽をも聴かず、恬愉^{てんゆ}静退、独り己れを守り、謗^{そしり}来るも戚^{うれ}へず、誉^{ほまれ}至るも喜ばず、貴を觀^みて欲せず、賤に居りて恥ぢざるは、これ道家の難きことなり。出づるに慶弔の望なく、入るに矚視^{せんし}の責なし、神を七経に勞せず、思を律歴に運^{めぐ}らさず、意は推歩に苦しめられず、心は芸文に役せられず、衆累すでに損じ、和氣日に益す、為^はすなく慮^{はか}りなく、怵^{おそ}れず惕^{おそ}れざるは、これ道家の易きところなり。難中の易とは、之を謂ふ。

それ儒者の修むる所は、皆成法に憲章し、出処則あり、語默時に隨ふ。師を求むれば、何れの家にもその人あり、書を質せば注解によりて疑を解くべし。これ儒者の易きところなり。深きを釣り遠きを致し、典墳（古書）を錯綜し、河図洛書（古書）の古籍を該かねて、百家の云々を博ひろめんとす、衡巷の賤しきに居るも德行を積み、廟堂の高きに在れば、貞を君に盡くす。仰いで神を天象に馳せ、俯して思を風雲に運めぐらす。一事知らざれば為す所通ぜず、片言正しからざれば褒貶分たれず。趾あしを挙ぐれば、世人の則のりとる所となり、脣を動かせば、天下の伝ふる所となる。これ儒家の難きところなり。易中の難とは、之を謂ふ。二者を徹底的に批評するに、儒業は繁雜にして難く、道家は簡約にして易し。吾すでにその難きを患ふ。故に之を捨て、その易きに從はんとす。世の吾を譏る者、頗る多きも、未だ志を同じくする者を見ず。若し将来に於て、この人あらば、吾も亦た孤立する者に非るなり。

或る人曰く、

余、知名の高人、洽聞の碩儒を閲見するに、理を窮め性を盡し、有無を研覈きさむる者頗る多きも、未だ年を延ばし仙を得べしと、言ふ者あらざるなり。先生の明は日月と並ぶ能はず、思は万人に勝る能はず。而るに長生の道に拠らんとす。故に余また之を信ぜざるなり。

抱朴子曰く、

吾は庸人浅才にして、浅見寡聞なり、豈に敢へて拔群独識を以て、自ら許さんや。唯だ顧

ふに、曾つて顯はれたる理より、陰かくれたることを推し、易き事より難きことに及ぼし、その小事に効驗あるを以て、大事にも亦其の然るを知り、既往に本づいて、将来を明かにするに過ぎざるのみ。且つ夫れ天地に神仙あるを信ぜざる者は、未だ深く規はからざるなり。大率おおむね俗務を經理するの才、当世に馳驅するの技あり、世教を助くる篇籍を涉覽して、日日の實際的事実を料り、わづかに凡庸の惑ふ所を辨ず。以為へらく衆の疑ふ所をば、我能く之を独断し、未だ見はれざる兆きざしをも、我能く之を先覺し、万物の情に於て盡くさざるなし。幽翳かくれたることも、冥昧くらきことも、知らざるなし、されば我れ仙なしと謂はゞ、必ず仙なしと。その固く自ら執るや、久さし。吾れ毎に俗儒を見るに、其の碌々として株を守りて、至理を信ぜざる者は、皆な聰明に拘繫とらへられ、小智に累わづらはされて、肯あへて規り為さず。純もつぱら極暗の中に在りて、了つひに菽麦を辨ぜざる者なり。

それ管見を以て、耳目の及ばざる所を塞ふさぐは、何ぞ一尋ひろの綆つるべを以て、百仞じんの深きに汲み、綆の短きを覺さらずして、井に水なしといふに異ならんや。俗に猛風烈火の声を聞いて、天の冬雷となし、遊雲の西行を見て月の東馳と謂おもふ者あり。人之に告ぐるも、終にその誤あやまりを悟らざるは、これ自ら信ずればなり。夫れ声を聴き形を視る者は、皆な吾が耳目を信ぜざるなし、而るに見聞の事實は人によりて異なる者あり、然らば我が耳目果して信ずるに足らざるか。況んや心の度はかる所は、形なく声なし、其の察しがたきこと、視聴より甚し。而るに己おのが心を信

じて、世間至遠の事を推測し、神仙を虚言なりとなすは、豈に迷にまよひあらずや。

抱朴子曰く、

美醜は自ら定まる、而れども憎愛の情異なれば、兩人の見る所同じからず。雅楽がと鄭声がくの淫哇みだりがはしきとは、自ら別あるも、好惡同じからざれば、兩人の聞く所同じからず。真偽自ら異なるも、趨舍去就に至りては、相違ふ、是れ兩人の心同じからざればなり。この三者の相乖そむき相異なること炳然として見るべきは、此の如く易きも、彼此を一にすること能はず。又た況んや神仙の微妙なるに於てをや。人人をして之を信ぜしめんとするも、豈に得べけんや。若し又た凡人をして、悉く之を知らしむれば、又た何ぞ達人賢士を貴ばんや。若し俗人の妄言を息やむるを待たば、百年の河清を俟つが如し。吾が黙して止む能はず、此道を論ずる所以は、彼の滔々たる中庸の人々を引致して、その道に入らしめんとする微志あればなり、下愚にして終に悟らざる者の如きは、古人も之を如何ともすることなし。

抱朴子曰く、

至理の明かにし易からざること、神仙の信ぜられざることとは、その来ること久さし、豈に独ただ今日のみならんや。太上の智ある者は、自然に之を知る。その次は、告げられて後に悟る。若しそれ聞いて大笑する者は、滔々たる世間の心なき愚人なり。今の吾が所論も、定めし多く失敗に歸し、失言の咎を蒙らん、然れども何ぞ之を憂へん。盛陽の春も枯朽の木を榮えし

むる能はず、神明も、沈溺の性を変ぜしむる能はず（「豈に掲」よりこ、）子貢も馬を録る野人を
 悦ばず（呂の必己）古公も土地を欲するの戎狄を和ぐる能はざるなり（孟子に見ゆ）実理も通ぜざる
 所あり、善言も行はれざる所あり。章甫の冠は、越国に售れず、赤色の二枚裏の履は、跣足の
 夷に用ゐられず、何ぞ強ふべけんや。夫れ玉を見て之を石といふは、玉の真ならざるに非
 ず、和氏を待ちて、始めて之を識ればなり。竜を見て之を蛇といふは、竜の神ならざるに非
 ず、蔡墨（左伝の昭公）を須ちて、後に之を辨ずればなり。道に貴ぶ所以は、その之に加ふるも
 益すべからず、之を損するも減すべからざるを以てなり。徳の貴ぶ所以は、其の毀らるゝも
 惨まず、誉めらるゝも悦ばざるを以てなり。彼は神仙なしとなし、我は之れありとなす、之
 と争ふこと弥々久しければ、彼の固執益す甚し、虚しく紛紜を長じて、その解決に益なし、然
 らば連環の義に従ふべきか（淮の説林訓に「連環不_レ解、其解不_レ以_レ解」とあり即ち自然に任すをいふ）

抱朴子内篇卷八

釈滞（俗見の拘滞）
（を釈き開く）

或る人問うて曰く、

人道は多端にして、仙術は至難なり、世事を廃せずんば仙術を兼ねな済すを得ず。然れども芸文の業、憂楽の務、君臣の道、何ぞ替すつべけんや。

抱朴子答へて曰く、

要道は煩はしからず、その為す所鮮すくなきのみ。但だ志立たず、信篤からざるを患ふ、何ぞ人道の廃せらるゝを憂へんや。優才の者之を兼修するに、何の難きことあらん。内は養生の道を宝として、外は光を世俗に和し、身を治めて身修まり、国を治めて国太平なり。六経を以て俗士に訓へ、方術を以て知音に授く、少く留まらんとせば、且く止まりて時を佐たすけ、虚空に昇らんとすれば、霄そらを凌ぎて軽く挙る、之を上士といふ。自ら才力あるも、竝みび行ふ能はざれば、俗事を棄てゝ、仙道を修むるもの、亦たその次なり。昔は黄帝、四海の任を荷になひて、鼎湖の上天を妨げず。彭祖は大夫となりて八百年の寿あり、後に西のかた流沙に適く。老子は柱史となり、寧封は陶正となり、方回は閭士となり、呂望は太師となり、仇生は殷に仕へ、馬丹は晋に官たり、范蠡はんれいは越を覇たらしめて海に泛うかび、琴高は笏こつを宋の朝廷に執る、康常生は志を執鞭の賤役に降し、莊公は器を小吏に藏かくす（黄帝以下琴高まで列に見ゆ、但し康常生は列の平常生の誤ならん、また莊公は下文に莊伯あり、或は莊子が漆園の吏たることをいふか）

古人多く朝廷に居りながら、隱者の志操こころざしもて世を匡ただすは、蓋し餘力あるが故なり、何ぞ必しも山林に入りて、盡く生民の事を廢して、後に成れりと謂はんや。亦た心は靜嘿に安んじ、性は誼譚かまひすしきを惡み、放浪縱逸を飲びて、榮官任職を戚うれふる者あり。或は索なはを帶おびとなし檻樓ぼろを纏まとひ、草を茹くひ稻すきを操とり、その三樂さんらくを玩あそび（榮啓期の故事にして列の人天瑞篇に見ゆ）常を守り終りを待つ者あり。或は苟生を嘗あじまず、速死を憚おそらず、千金の聘を辭して、卿相の貴きを忽ゆるがせにする者あり。これ等の徒は特に修為する所なきも、猶ほ常に此の如し。況んや之に加ふるに神仙の道を知らしむれば、必ず身を世に役せざらん。蓋し各々その志に従ふ者にして、一概に言ふべからざるなり。

抱朴子曰く、

世人の所謂一言の善は千金より貴しとは、其の軍国の得失に関し、己れを処するの善惡に及べばなり。長生の訣、不死の方に至りては、その關係する所、この種の善言の比に非るなり。設もし困病して死に垂なんんとしたる者を、救愈する者あらば、之を宏恩重施と謂はざるものなからん。今若し仙經を按じて、九丹、水金玉を飛ばし鍊らば、天下をして皆な死せざらしめん、但に一人を活いかすの功のみに非るなり。黄老の徳は、固まじに無量なり、之を克よく識らずして、妄言となすは歎ずべし。

抱朴子曰く、

神仙を求めんには、当まさにその至要を得べし。至要は精力を宝とし、元氣を行やり、上藥を服

すれば足る、亦多きを用ゐざるなり。然れどもこの三事に浅深あり、明師に値^あはず、勤苦を経ざれば、倉卒^{にわか}に盡く知るべからざるなり。例すれば氣を行るにも数法あり、房中の術にも殆んど百餘事あり、服薬にも千條の方略あり。初め人に告ぐるに、その浅きものよりし、勤勞怠らざるを見て、始めてその要を告ぐるに至る。故に氣を行れば或は百病を治すべく、或は瘡^{うんえき}疫の中に来往すべく、或は蛇虎を禁すべく、或は瘡血を止むべく、或は水中に居り、水上を行くべく、或は飢渴を避くべく、或は年命を延ばすべし。而してその大要は、胎息のみ。胎息を得る者は、呼吸するに、鼻口の力を仮らざることを、胞胎の中に在るが如くにして始めて成る。初め氣を学ぶ者は、鼻中に氣を引いて、之を陰に閉ぢ、心のうちに一二三と数を唱へて、一百二十に至る時、微く口を開いて之を吐く、氣を引く時も、その出入の声を、己^{おの}が耳に感ぜしめざる程、細少なるを要す。常に多く入れて、少しく出すべし。鴻毛を鼻の上に著^つけ、その動揺如何を候ひて、息の強弱を試みるべし。此の如くにして一百二十より、漸々習^なるに従ひて之を増して千に至る。然る時には、老人も日にまして、少く見ゆ。夫れ行氣には、生氣の時を以てして、死氣を以てするなかれ。仙人、六氣を服すとは、此を謂ふなり。生氣、死氣とは何ぞや。一日一夜に十二時あり、其の半夜より日中に至るまで六時間を、生期となし、それより夜半に至るまで六時間を死期となす。死氣の時に行ふも、益なきなり。善く氣を用ゐる者は、水を嘘^ふけば逆流し、火を嘘^ふけば滅し、虎狼を嘘^ふけば伏して動かず、蛇虺を嘘^ふけ

ば蟠りて去らず、兵刃に傷つけらるゝ者を嘘けば血即時に止む。毒虫に中てらるゝ者あらば、その人見^{けん}に在らずとも、男子ならば我が左手、女子ならば我が右手を嘘けば、即時に皆な愈ゆ。又た悪疾急病に、三九の氣を吞めば、即ち差^いゆ。但だ人性は多く輕躁にして、安靜以てこの道を修むる者少なきは恨むべし。又行氣の太要は、多食し、又生菜肥鮮の物を食するを禁ず、何となれば氣を強め、之を閉ぢ養ふに困難ならしむればなり。又忿怒を禁ず、怒れば氣乱れて充実するを得ず、或は效^{せき}を発せしむ。此の如くにして、能く成る者は少なし。予が従祖の仙公は、大酔の時、又は夏天の盛熱には、輒ち深淵の底に入り、一日許^{ばか}りにして、出づる者は、正によく氣を閉ぢ胎息するを以てなり。

房中の法に、十餘家あり。或は傷損を補救し、或は衆病を攻治し、或は陰を采りて陽を益し、或は年寿を延ばす。而してその太要は、精を還し腦を補ふの一事にあるのみ。この法は、眞人口口相伝へて、本来之を書に載せざるなり。名藥を服するも、此要を知らざれば、長生を得ざるなり。人はすべて陰陽の交を絶つべからず、久しければ、元氣を塞^{ふさ}闕ぐの病を致さん、故に幽閉の怨女、流浪の曠夫は、多病にして寿あらざるなり。然れども情に任^{まか}せ意を肆^{はし}にすれば、又た年命を損ず、唯だそれ節を得て、之を宣^のばさば可なり。若し口訣の秘術を得ずして、妄りに之を待まば、一人として傷殺せられざる者なし、玄素^{（玄女素女の二仙女）}子都^{（神の巫炎）}容成公^{（列）}彭祖^{（列竝に神）}の属は、唯だ僅にその麤略を書に載するのみ、苟くも不死に志ある者は、

勤行して之を求むべし。余は鄭君の言を師とす。故に記して将来の信者に示す、臆断の言に非るなり。而して余と雖も、実にまた其秘訣を盡くさず、偏見の道士は、往々交接の術を守りて、以て神仙たらんことを規り、金丹の上薬を作らざるは、これ愚の甚しきなり。

抱朴子曰く、

黄老の始めし道書は小許なり、大概其の多くは後世の好事者、各々知見するを以て、之を滋し長くし、遂に篇卷をして、山の如く積ましめたるのみ。古人は質朴にして、又多く文才なし、その論ずる所の物理を、周く悉さず、その証按する所も、又た著明ならず、皆な要点を秘して解し難し。又た、之を解する者、深遠ならざれば、古人の微妙なる言説を演べあかして、憤悲の志を開示し、有志に勧進して、初学を警戒し、玄妙の塗徑、禍福の源流を知らしむる能はず、故に之を誦読すること万遍なるも、道を得べきやうなし。故に博覧せんと思はば、宜しく詳かにその善者を択びて、意をこゝに留むべし。末流の道書に至りては、尋繹ぬるに足らざるなり。未学者、往々作者の深淺を別たず、苟くも道家の名ある者をば、皆な写し取りて、箱を累ね筐に盈たし、心を盡して思を潜むるも、是れ燕巢を探りて鳳卵を求め、井底を搜りて鰾魚を捕ふるが如し。勤勞を極むるも、その所在に非るなり。故なく月日を消費し、空しく疲困の勞ありて、鏤朱の益なきなり。進みては当世の務を失ひ、退いては長生の効なし。然るに世人この缺点を指摘せずして曰く、彼人は道を修むること此の如く勤むるも、

世を度^{わた}るを得ず、これ天下に不死なきこと必せりと。知らずや、かの仙を求むる者は、網罟^{あみ}なくして、徒らに河に臨み魚を羨^{うらや}む者の如きを。又た五千文は、老子より出づと雖も、そは皆な大略に止まりて、敢へて首尾本末を十分に論じて、後人の承按に便することあらず。但だこの経を暗誦するのみにて、要道を得ざれば、直^{ただ}だ徒勞のみ、況んや之に及ばざる者をや、文子、莊子、関尹令喜の徒に至りては、其の文筆を属するは、黄老を祖述し、玄虚に憲章^{のつと}と雖も、但だその大旨を演^のべて、終に至言なし。或は死生を齊^{ひと}しくして、存活^いくことを徭役^{ふしん}の苦勞と為し、殂没^しぬることを休息の安樂と為す者あるは、其の神仙を去ること已^{すで}に千億里なり、豈に耽り樂むに足んや。其の宗言譬喩に至りては、采りて以て小用に充^あて、一時の急厄を救ふべきものあるも、猶ほ末世の利口好佞と、不品行の惡人とに口を藉^しかしめて、その窟藪^{あなやぶ}となさしむるは、亦た惜^をしからずや。

或る人曰く、

聖人明君の世を御^{おさ}むるや、唯だ賢者を宝とす。而るに学仙の人、肯へて官途に進まず、人々皆な道を修めば、誰か復^{また}た政事を佐^{たす}けんや。

抱朴子曰く、

聖主に背^{そむ}いて山に栖^{すむ}むは、許由、巢父の高士と称せらるゝ所以にして、有道に遭^あひて世を遁^はるるは、莊伯^か（莊子）の貴^かばるゝ所以なり。黄帝軒轅氏の天下に君臨するや、至治といふべ

し、而して廣成子は与^{あづ}からず。帝堯陶唐氏の四海を有もつや、太平といふべし、而して鑣^{あぐせん}佗^{あぐせん}は（列^{れい}に）佐^さけず。而れども二帝の徳化は之によりて損せず、朝廷の才士も之によりて乏^ひしからず、天乙^{（王湯）}は命^{めい}を革^{あらた}めて桀^{けつ}を亡^なげせしも、務光^{むくわう}は石を負ひて河に投じ、周武は人に応じて殷^きを剪^きり滅^めぼせしも、伯夷叔齊は西山に餓死す。斉の桓公の興るや、小臣の稷^{しやく}は枕^{うらがや}を陋巷^{ろうがう}に高くし（韓非子の難^難一^一を見よ）魏の文候の隆^{さかん}なるや、段干木^{たんかんぼく}は冠^{かん}を脱^{だつ}して西河に嘯^{うそ}ぶく（史記の魏世^{史記の魏世}）四皓^{四皓}は鳳翼を高山に戢^{おさ}むるも、大漢の濟々たる多士に妨^さなく、周黨^{周黨}は麟趾^{りんし}を山林に止むるも、孝文の刑措^{けいそ}に損^{しん}なし（周黨云云の句は原文に脱^{誤あり今考ふるに由なし}）それ寵貴は其の心を動かす能はず、極富は其好^{このみ}を移す能はず、纓^{かんむりのひも}を滄浪^{さうろう}の清水に濯^{あら}ひて、志を降し、身を辱めず、芳しき山林を台榭^{うてな}となし、峻^{けは}しき岫^{ほらあな}を大廈^かとなし、翠蘭を衾^{しとね}となし、緑葉を幃幕^{ひかつ}となし被褐^{こん}を衰童^ての衣に代へ、薇藿^{わらびまめ}を嘉肴^{すすめもの}の膳^{すすめもの}に當て、躬^みづから耕やすに非れば飢を充たしめず、妻の手織^{ており}に非れば身を蔽はざるものは、千載の中に時として之れあるべし。又た之に加ふるに、六親を親族^{まか}に委せ、室家を捐て、顧みず、榮華を棄て、欲望を絶ち、峻坂^{しん}を凌^{しの}ぎて独り往き、名山と伴侶^{とも}たり、無形の域を内視して、至寂の中に反聴す。此の如き人は、八極の内に果して幾人あるか。而るに子は世人皆仙を修めて、君に臣たる者なきを思ふるは、亦た多憂ならずや。

或る人曰く、

学仙の士は、独りその身を潔くして、人道の大輪の乱るを忘る。世主に背いて、不臣^{おごり}の慢

あり。余は長生の成功なくして、反つて罪罟つみに罹からんとするを恐る。

抱朴子曰く、

それ非人、石戸、善卷、子州

(此の四子は皆莊の讓王篇に見ゆ)

は皆大才なり、而して沈遁放逸、其の浩氣を養

ふも政事の昇隆に缺損なく、王者の大化を缺かざるなり。況んや学仙の士は、必しも経国の才、立朝の用あらず、此人を得るも塵ほどの益にもならず、又失ふとも毛すぢ程の損なきをや。方今は九州一家の如くにして、幽僻荒遠の士も皆な来り仕へ、堯舜時代に於ける八元八愷の如き良臣甚だ多くして、之を用ふるに所なし。故に士は、速く用ゐられんとするも、自ら順番を俟たざるべからずして、官には、一時なりとも、空位の職なし。勤労久しき者も、自ら進叙の遲きを嘆じて、勲功高き者も、門閥などの資格に拘かはり、たやすく拔擢せられざるあり。濟々たる人才の盛なること、之より美なるなくして、一人の缺乏をも感ぜざるなり。昔は周の太子晋は視膳の役を舍すて(太子は父たる君主の食膳を監督すべきこと礼記の文王世子に見よ)儲貳よつぎの重きを棄て、仙となる、而して父の靈王は之を責むるに不孝を以てせず(列仙伝に見ゆ)尹生は襟帶きんたいの職を委すて、式遏しきあつの任を違さるも、有周は之を罪するに不忠を以てせず。(尹生は関令尹喜ならん、襟帶は山河の要害、式遏は来侵を防ぎ止むること、尹喜は函谷関の長官なればかくいふ)何となれば、此二君は、二子の世を輕んじ主を薄んずるに非ずして、直ただ其の好む所、匹夫の志と異なる者あり、之を移し易ふべからざるを諒とすればなり。夫れ有道の人主は、恥を忍びて善よく恕し、人心の同じくすべからず、その性質によつて、出処進退、各々異なるを知る。故

に逼らず禁ぜず、以て光大を崇ぶ。故に上には嫌恨の偏心なく、下には適意の至歡あり、名譽は輝きわたりて極りなく、貧夫もその風を聞いて、自ら忸怩るに至る。

吾れ聞く、陽春の景風一たび吹けば、重裘火鑪自ら息み、世道夷なれば奇士退ぞくと、今喪乱既に平らぎ、馬を放ち牛を休め、燧燧は影を滅して、干戈は戟ち戢まり、繫弱の名弓も韜まれて、韓盧宋鵠の名犬も烹られんとす（乱世に必要な謀臣も、太平の世には、無用なるを）張良も玄帷を出でて閭巷に反り、韓信彭越も甲冑を釈いて、魚釣の業を修む。況んや学仙の士は、甚だ少なし、国家之を吝むも、何の益かあらんや。然して其事は思を少なくし欲を寡くし、その業は身を全くし寿を久しくするに在りて、畜貴權力を争ひ競ふの醜態あるに非ず、風俗を傷り人心を乱すの憂なければ、また何の罪あらんや。且つ華岳霍山は、飛塵の来り積もるを俟たざるとともに、一つかみの土壤をとるも、その高きを減ずる能はず。滄海の限りなき深き流れは、行潦の注ぎこむを仰がざるとともに、一勺の水を汲みとるも、その広さを減ずる能はざる如く、一世に数人の学仙者ありとて、いかで人物減少の憂あらんや。

或る人曰く、

仙道果して求めて得べくんば、五経何の故に之を記せず、周孔何の故に之を言はず、聖人何の故に世に承らへず、上智何の故に長く生きざるか。若し周孔にして知らざれば、聖となすべからず、若し知るも学ばざれば、仙道なきなり。

抱朴子、答へて曰く、

人生の星宿には、各々値^あふ所あるは、既に之を別篇に詳かにせり。子は盆を戴きながら、大空を仰望して、七曜の炳^{きらめ}燦^めくを賭^みず。頸^{くび}を延ばして大川の岸上に立ちながら、その重淵に奇怪の潜伏するを知らざる者なり。それ五經の載せざるところ限りなく、周孔の言はざる所少なからず、特に吾子の為に、略ぼその万一を説かん、大に笑はれんも止むべからず、管見遽^{には}かに開きがたし、故に唯だ子をして、その較^{あらまし}略を聞かしめん。

それ天地は、物の至大なるものなり。九聖の共に著はせる易經は、十分に陰陽の理を弥^{まじ}綸^めて、復た加ふべからざるなり。今この易經に精通する者に問はん。周天の度数、四海の広狹、宇宙の距離、すべて幾里なるか。上は何れに極まり、下は何れに抛るか。その転動は、誰の推引するところか。日月の遅速、九道^{（月の軌道に九つあり）}の乗る所、昏明長短、七星^{（星宿の名）}の迭正、五緯^{（木火土金の水の五星）}の盈縮、冠珥^{（日蝕又は雲氣の状況にして周礼祇禋氏に見ゆ）}の薄蝕、四七の凌犯^{（四七は二十）}、彗^{（ほうきぼし）}字^{（し）}の出づる所、氣矢の異^{（下文に尤矢とあり、皆不明、漢の天文志に枉矢とあり、その類ならん）}、慶星、老人星の吉祥、北辰の動かざること、土星の独り東すること^{（土星の東行は淮の修務訓に見ゆ）}、義和は外景^{（ほかかげ）}ありて熱すること、望舒^{（つぎ）}は内鑒^{（て）}らして寒きこと^{（日月のことは淮の天文訓を見よ）}、天漢は上に在りながら、水と同じく潤下の性あり、海潮の往来には、大小の変あり、五言六属は喜怒の情を占し^{（漢の翼奉の伝を見よ）}、雲の動き又た氣の起りは、吉凶^{（しうし）}の候^{（し）}を含み、攙^{（さん）}槍^{（史の天官書）}、尤矢^{（明の天官書）}、旬始^{（史記の天官書）}、天鋒、格沢、四鎮五殘、天狗、帰邪^{（以上六星は晋天文志）}などの諸星

は、事の成敗を示すは、何の故ぞや。すべてこれ等の事は、易に明かなる人も知る能はざるなり。更に之を春秋四部（魏の荀勗が、あらゆる書物を、甲乙丙丁の四部に分類したること、隋書の経籍志に見ゆ）詩書三礼の大家に問ふも、皆な又た之に対ふる者なし。皆な曰く、此れ悉く正經の載せざる所にして、唯だ巫咸（殷の天文家、晋の天文志に見ゆ）甘公（漢代の天文家、同上に見ゆ）石申（魏の天文家、晋の天文志に見ゆ）海中（明）郗萌（漢の天文家にして晋書天文志に見ゆ）七曜記に詳記するのみと。余れ將に之に問はんとす、この六家の書は（六家は巫咸以下のことなり）是れ經典の教たるか。彼れ將に非なりと曰はん。余れ又た曰く、甘石の従は、聖人たるか。彼も亦た非なりと曰はん。然らば人は老より死に至るまで天地の間に生息し、その理を五經に求むるも之れなく、周孔に索むるも得ず、夫れ天地は至大にして目を拏ぐれば、何人も之を見ることを得、然るに猶ほ之を明かす能はず、況んや玄の玄、妙の妙なる者に於てをや。

復た俗人に問ふて曰く、それ乗雲輦産の国（不）肝心の二臓朽ちざるの民（博）巢居穴処。独目（山の八）三首（山の十一）鳥爪（一本「馬」に作る）狗蹄（以上二国の）長臂（山の六）交股（同上）黄池（同上の七）無男（同上に見ゆ）穿胸（同上の六）旁口（同上の七）などの諸国。又廩君は石を起して土船を汎べ（後の南夷）沙壺は木に觸れて群竜を生じ（同上）女媧は地より出で（淮の覽冥訓に女媧が五色の石を鍊りて天を補ひしことと風俗通に女媧が泥土をかためて人を為りしことと見ゆるも、女媧が地より出でたることの出典は不明）杜宇は天より墮ち（太の八八八の蜀王本紀によるに蜀王の祖）璧は飛び、犬は言ひ、山は徒り、社は移る（皆妖怪変）周の穆王の時、南征の際、三軍の衆、一朝盡く化し、君子は猿となり、鶴となり、小人は虫となり砂となり（太の六九）女丑は枯に倚り（山の七）貳負は桎を抱く（同上の十一）

寄居の虫は甲かを委すて肉を歩ましむ（本の四十六） 両頭の蛇は弦ゆみの変化すたり（本の四十） 焼あつけざる木、熱あつからざる火、昌蜀の禽（山の一に、鹿蜀の獸） 無目の獸、無身の頭、無首の体（太の七九七に） 精衛の鳥は海を填うづめ（山の三） 交譲の木は通たがひに生じ（太の九六） 火浣の布（前に出づ） 切玉の刀（拾遺記に見ゆ） 炎味ひかりを吐ひかりき、磨泥水を漉こす、枯灌こくわん（山海經の三に見よ） 形を化し、山夔前に跟ひきまつき（明） 石修の九首（明） 畢方の人面、少千の伯率を効すること（搜神記の一に魯少千の名あるも此の事實不明） 聖卿の肅霜を役すること（太の八八三引証の幽明録を見よ） 西羌は唐景を以て興り（後漢の一一七下羌無弋） 鮮卑は乘鼈べつ以て強し（後漢の東夷伝を見よ） 林邑は神録を以て王たり（晋の九七を見よ） 庸蜀は流戸を以て帝たり（太の八八八の蜀王本紀に鼈鼈といふ者の尸体流れて蜀に至り蘇生して王となりしこと見ゆ） 塩神は嬰かり来りて虫飛び（後漢の南蠻西夷伝を見よ） 縦目の世変は荊岫しゅうに於てす（縦目は屈原の大招、華陽国志卷三及明） 五丁は蛇を引いて峻山を傾け（太の五二） 肉甚是翅を三海に振ふ（明） 金簡玉字は禹井の側（拾遺記卷二に見ゆ） 正機平衡は合石の中に割かる（本書の第十二を見よ） 凡べてこれ等の奇事は、千を以て数かずふ、皆な五經の載せざる所、周孔の説かざる所なれば、この物なしといふを得べきか。南人よく全身を柱に入れて単にその耳を出し（明） 烈禦冠は肘ひじに盃水を置きて、弦ゆみを控ひくも覆こぼれず（列の黄帝篇に見ゆ） 伯昏は億仞の深きに臨みて踵かかとを企つまて、驚かず（上） 呂梁の激流に遊ぶこと魚鼈に勝る者あり（同） 宋人の彫刻したる楮葉は殆んど真に迫り（列の説符に見よ） 公輸は木製の鳶を空に飛ばし、離朱は毫芒の微を百歩の外に見る、孟賁もうほん、烏獲うわくは臂力ちからを以て万鈞きんを動かし、越人（扁鵲の字）は鍼はりにて病を揣はかり、死人を蘇生せしめ、豎亥は一步すれば、千人の足跡を超過し、（山の九に見ゆ）

匠石は、郢人の鼻端に薄く塗られたる粘土を削りて、之を傷つけず（莊の徐無鬼に見ゆ）仲都は裸体を以て、寒天に耐ふ（神に見ゆ）此れ皆周孔の為さざる所なるも、この事実なしとすべきか。蓋し聖人と雖も能はざる所あれば、仙たらざるを怪むを要せず、又た仙たらずとも其の聖人たるを妨げざるなり。聖人と雖も偶々（たまく）聞（原文「問」に作る疑らくは誤）かざることは、何ぞ攻撃非難をなすに足らんや。聖人の道は、去留を同じくして、自然に任じ、其の身を私せず、その生を営まず、存亡を天に委せ、長短を命に委す（まか）、故に仙を学ばざるも亦た何ぞ怪まんや、

抱朴子内篇卷九 道意（仙道の意義）

抱朴子曰く、

道は乾を涵ひたし坤を括くくり、その本は名づくべからず。若し無と謂はゞ、影響の微も其の有を証するに足り、若し有と謂はゞ、万物の多きも、その無を示すべし。隸首れいしゅの如き算数の大家も、その多少を計る能はず、離朱の如き明目の、人も其の髣髴を察する能はず。窈冥の中にあれば、呉の季札、晋の師曠の如き聴力の鋭き人も、其の音声を尋ぬる能はず、宇宙の外に見はるれば、獬豸けいし猪いのしし（疾足のぶたるのし、と）の疾走も、その兆きざしを跡あとつくる能はず。秋毫けさうほどの細こまかきところにも、水も漏らさず周あまねく行きわたれば、至りて近しいふべく、太虚を弥綸まじめて、なほ餘地あれば、遠しいふべし。あらゆる声響の中の、唯一の声響にして、凡べての形影の中の、唯一の形影なり。方円も之によりて、動静の状を示し、昇降も之をまつて、俯仰の容かたちを見はす。之を名づけて道といふは、既にその真相を失ふ、況んや復た千百に分ち、億万に析わかちて、こざくしき名称を与ふるをや。その道を距ること益す遼遠ならずや。俗人は太初の本を識る能はずして、みだれたる末流を修むるは、愚の至りなり。それ淡默恬愉たんもくけんゆ、染はらまず移らず、その心を養ふに無欲を以てし、その神を頤やしなふに粹素を以てし、外界の誘惑を掃はらひ滌はらうて、之を正しきに歸し、求め難き者を求めずして、真を害やふの累つづらひを遠ざけ、喜怒の邪

を薄んじて、愛惡の端を減ずれば、福を請はざるも福来り、禍を禳はざるも禍去らん。何となれば命運は中にありて、外に繫らず、道はこゝに存して、彼に俟つなければなり。患ふべきことは、凡夫、真を守る能はず、一身を撿括りて、欲望を杜ぎ遏めず、嗜好に心を揺かざるを愛み、名利に馳せ、流遁昏迷して反るを知らず、情は物に感じて外に起り、智は事に接して旁に溢る、欲望に牽かれて、天理自ら滅し、見聞に惑うて、純一また移る。心は制御を奢侈玩好に受け、神は欲海の波蕩に濁乱す。是に於て傾覆の災あり、振はれざるの禍あり。而るに徒らに肥えたる脂を烹宰し、醪醴を湯水の如く沃ぎ飲み、鐘を鳴し鼓を敲き、謳歌踴躍す。此の如くにして鬼神に拝伏し、明師に稽顙き、閑室に坐して一時の静慮を守り、必ず福を得んことを冀へ、死に至るまで、悟らざるは、亦た哀しからずや。

若し精霊は、煩擾に困しめられ、身体を營衛すべき精力は、日々の雑役に消費せられ、形氣を煎り熬り、天賦の和氣を刻削る。労働逸楽、並びに過度に流れながら、首を地に叩いて、寿命の永からんことを請ひ、病すずに膏肓に入りながら、祭禱してその痊えんことを求め、風を冒し湿地に臥しながら、罪を靈祇に謝し、飲食節を失ひながら、禍を鬼魅に委ぬ、蕞爾たるこの小体にして、自ら茲の憂を胎す。天地神明も何ぞよく済はん、犠牲をつくして之を祭るとも、何の補かあらんや。それ福は足恭（恭敬を盡して媚ぶること。論語に見ゆ。）によりて求められず、禋祀によりて禳はれず。若し命は鄭重なる祈禱によりて、之を延ばすべく、疾は豊富なる祭祀により

て、之を除くを得べくんば、富家は皆な長久なるべく、貴人は悉く疾病なかるべし。

それ神は同族に非る者の祭を歆うけず、鬼は淫祀うを享うけず、卑隸めいつかひの巷はには、金根きんこんの車馬車に（天子の
興服志に見ゆ）を飾る能はず、布衣の門には、六轡ひの車駕を動かす能はず。同じく人類たるも、尊

卑の懸絶すること此の如し、況んや天神に於ては、人類と全く異なること、緬邈はるかにして、其の清淨高貴なること、この上もなし。鼠の臭に似たる酒、凡民の屈身低頭などにて、容易たやすく

感動せられ、天降あまたるべきに非るは明かなり。それ不忠不孝は、罪の大惡にして、之を犯す者

は、千金の賂、太牢の饌せんを積み、令名よきなを明主に求め、愆責とがめを邦家に釈とかんとするも得べからず。人を以て人を釈ゆるさんとするも、其の行おこなはれざること此の如し、況んや年寿は令名より獲

がたく、篤疾は愆責とがめより除きがたし。鬼神は人と倫を異にして、正直を愛する者なれば、其の曲げて天祐を冀もちふも、豈に行はることあらんや。

それ慙德さんとくの主、詬はぢを忍ぶの臣も、猶を能く貨財まを須またずして善を賞し、私情に任せずして惡を罰し、必ずや繩墨きぎを守り、不偏不党の政を執るべし。鬼神の心は之に過ぐるること遠し、巧言賄賂

を以て求むべからざること、断じで知るべし。されば楚の靈王は自ら巫靡みとなりて犠牲を授くるも（一本に受とあり）呉国の征討を免るゝ能はず（靈王の鬼神を好みたること不明但し左の昭公十一年に隱
授受古字通用）太子を殺して岡山の神を祭ることあり或は之をいうか）

漢の広陵王は、敬んで李須りしゆ（名）を待ち府庫の財を傾つくけ竭つくすも、叛逆の誅を救う能はず（漢の武五子
伝を見よ）

孝武は尤も鬼神を信じて、祭祀は礼典に洩れたる神社までに、普あまねく及びたれども、五柞宮さくの

崩殂を免るゝ能はず（同上の孝武本紀を見よ）孫主は華嚮を優待するに、王爵を以てせしも命を延ばす能はざるなり。玉帛の豊多ならざるに非ず、之を敬信すること、款まじしにして重からざるに非ず、而るに丘山の損ありて、毫釐の益なきは、豈に之を近きに失うて、之を遠きに求めたるに非ずや。第五公は妖道を誅除して寿にして且つ貴く（後の第五倫伝を見よ）宋廬江は山祭を罷めて福祿永く続き（後の宋均伝を見よ）文翁は水霊の廟を破りて身吉に民安く（前の循吏伝を見よ）魏の武帝は淫祀の俗を禁じて大慶来り（三の文帝本紀に淫祀を禁ずること見ゆ然らば武は文の誤か）返る（前の妄ならざるは、将來の鑒なり。）（三の文帝本紀に淫祀を禁ずること見ゆ然らば武は文の誤か）

馨かんばしき明德ありて、憂なきものは寿し。心身を齧をみ重んずれば、夭死せずとも、妄りに用ふれば早く老す、これ自然の理にして、外物何をか為さん。若し之を養うて和を失ひ、之を伐りて解ゆるめず、百病隙に縁りて結び、榮養竭きて悟らざれば、太牢の牲も、何ぞ能く之を済すくはんや。俗人の説く所は、皆妖偽転々して、人を誑たからかし、久しくして弥々甚し。既に病を療するの術を修むる能はず、又その迷心を醒さす能はず、藥石の救を務めずして、唯だ祝祭あやまりの謬を專にし、祈祷やむなく、トに問うて倦まず、是に於て巫祝の小人は、妄りに禍崇すうを説き、苟くも疾病危急あるを聞けば、百方祈祷を勧めて、損費はか訾はられず。富室はその財儲たくはを竭つくし、貧人は高利を貸り田宅を割さきて、盡るに訖いたり、財貨の筐櫃はこびつを倒さかさまになすも、なほ足らざるなり。或は偶然に自ら差おゆることあれば、神の賜たまを受くといひ、若し死亡すれば、赦されずといふ。幸に万一活くとも、財産は窮罄つきて、遂に饑寒凍餓に死す。或は起つて劫剽おひはきをなし、或

は穿窬おしこみして不義の富を貧むさばり、身を鋒鏑ほこさきの端に喪はしい、己れを醜惡の刑に陥るゝは、皆な之に由るなり。或は家財穀帛、盡く祭祀の費用に盡き、又は貧濁の巫みこに絞しほられ、死する時には、棺槨あがなを購あたいふの値もなく、死者に衣きする衣衾ふすまもなく、尸朽しかちて虫流るゝに至る、良に悼まことむべきなり。愚民の迷、こゝに至るかな。

淫祀妖邪は、礼律の禁ずる所なり。然るに凡夫は、終に悟さとすべからず。惟だ王者は、宜しく法制を峻きびしくし、苟くも犯す者は輕重となく、之を死罪に処し、巫祝を止めざる者をば、懸賞もて搜さがし捕へ、之を刑して赦すなく、その尸を市路に肆さらすときは、暫くにして必ず息やむべし。是れ百姓凍飢の源を杜ふせぎ、盜賊の萌もやしを塞ぐ所以にして、決して小惠と謂ふべからず。曩なには張角、柳根、王歆きん、李申の徒あり、或は千歳の寿を得たりと称して、小術に仮托し、己が一身を自由に隱見せしめ、さまざまの姿にかへて、百姓を惑はし、愚人を糾合す、その目的は、延年益寿を務むるにも非らず、又た、消災治病を業となすにも非らず。遂に姦党を招集し、逆乱を称合し、久しからずして、その罪に伏せしも、その禍は良民を残滅ほろぼし、百姓を欺誘あそびき、以て財利を規はかり、錢帛山積して、富は王候に踰こえ、奢侈放縱、金衣玉食す。妓妾は堂に盈みちて、管弦は列をなし、刺客死士も、之が為に力を致し、威は邦君を傾けて、勢は有司を凌ぎ、亡命逋逃の惡人は、之を唯一の巢窟となすに至る。これ皆な官の糾治せざるため、この患に臻いたりし者なり。その原因を原もとぬれば、転た歎息すべし。吾徒匹夫なれば、この理を

知るも、その位に非れば、また之を如何ともする能はず。官長はその神慮なるを疑う、故に之を禁ずれば、禍祟あるを恐る。たとひその志ある者も、明かにその奸惡を察知する能はず。且つ又た糾治の事は、在職の要務にもあらず、又た功績の上下に関する事にもあらず、之に加うるに、愚妻頑子の篤信するところにして、左右の小人も、皆な之を阻むべからずといふ。本とくその人に確固たる決心なくして、之に加ふるに、諫め怖す者異口同音なれば、自ら疑惑も起りて、竟に之を実行する者なく、人をして腕を扼し憤を發せしむるに過ぎざるなり。余が親しく識る所の数人は、生涯遂に神明に奉祭せざりしも、身は長寿を亨け、名位巍巍として高く、子孫繁昌して富貴なり。余と雖もまた之を事とするなく、唯だ四時に先祖を祀るのみ。曾つて遊歴せし所は、水陸万里にして、道側の神廟も百を以て計ふ、而るに往還經過の際、一回も之に立寄ることあらず。然れども車馬には傾覆の変なく、水には風波の異なし、屢々疫癘にあひしも、常に藥物の力を得、頻りに矢石を冒し、も、幸に傷刺の患なし。故に益す鬼神の能く為すなきを知る。又諸の妖道百餘種あり、皆な生を殺して血食す。独り李家道といふ者あり、その所為は少しく異なり、生を屠り肉を宰せざるも、毎に無數の福食を鬼神に供して、精鮮の物を買はざるを得ず、その使役も亦た数十人なれば、厨の費用も随つて多し、故に清淨簡易といふ能はず、これまた同じく禁絶すべきものなり。

或る人、問うて曰く、

李氏の道は、何の時に起りしか。

余答へて曰く、

呉の大帝孫権の時、蜀に李阿りあといふ者あり、穴居して食はざること、世々の人に普く知られ、八百歳公と号す、往々事を問ふ者あるも、阿は之に答へず、人は唯だ阿の顔色によりて、之を占断するのみ。阿の顔色欣然たる時は、皆な吉にして、惨み威うれふるときは、皆な凶なり、笑を含まば大慶あり、微すこしく歎ずれば深憂あり、未だ曾つて一失なし。後俄かに去りて、所在ありかを知らず（神に李阿李八百二人の伝あり）李寛といふ者あり、呉に到りて蜀の言語を使用す、能く祝の水にて病を治するに、頗る成績あり。こゝに於て遠近翕然きふとして寛をば李阿と思ひこみ、之を呼びて李八百となすも、実は誤れり。公卿より以下、その門に雲集せざるなし。後や、驕り貴ぶたかりて、常に人に遇はず、賓客は但だその外門に拝して退くのみ、その怪異此の如し。こゝに於て賦役を避くるの吏民等大凡そ千餘人、皆な寛の弟子となる。而してその蒞奥きを極めたる高足先進の弟子も、その術は、唯だ祝水及び三部の護符、道引、日月行炁きの法に過ぎずして、了つひに治身の要、神藥の服食、延年不死の法なきなり。氣を吞み穀を断ずること、百日間なるを得るも、久しきに堪へず、これその術の浅きこと知るべし。余親しく寛に面会したる者の言を聞くに、皆な云ふ。衰老し、起止せきごとに咳せきをなし噫ためいきを吐き、目は瞑くらくし耳は聾しひ、齒は墮おち髪は白し、漸次昏耗ぼんやりして、その子孫すら忘るゝことあり、凡人と異なるなきなりと。然る

に世之を以て寛の故にかゝる真似して、世人を欺く者なりと思ふ者あるは、豈にさることあらんや。呉に曾て大疫あり、死者半ばに過ぐ、寛また之に罹る、乃ち口を齋戒に借りて、修道の廬に入り遂に死す、而るに弟子等は、猶ほ之を以て形を化し尸解（身体をもぬけること）したる者となす。それ神仙の法の俗人と同じからずして、その貴き所以は、正に不老不死あるを以てのみ。今寛は年積れば老い、時到れば死す、その道を得ざること、居然として知るべし、又何ぞ疑はんや。若し仙法を得て、尸解すべき者とせば、何ぞ一二百歳なるも老いず衰へずして、この人間を去らざりしか。天下仙道なきに非らず、寛は唯だその人に非るのみ。余がこゝに委曲之を論ずる所以は、寛の弟子千餘人、転々相教授して、江表に布き、皆な法術の浅薄にして、遵守するに足らざるを知らず、之によりて世を度るを翼ふ者あり。故に人をしてその偽を覺りて、滯迷を悟らしめんが為なり。

それは是に似て非なる者、天下実に多し。故に今之が故事を略説して、後人の悟らざる者に示さん、昔し汝南の人、田中に繩冑（なな）を設けて鼈を補へ、之を無人の沢中に置く。偶々商人あり、その地を通過して之を見、代ふるに一鮑魚（しほづを）を以てす。本主帰り来り、鼈の変じて鮑魚となりしに驚き、之を怪みて神となして、持ち帰らず。村里之を聞いて、因りて為に共に廟屋を建立し、号して鮑君となす。転た之を奉ずる者多く丹楹（あかきはしら）、喪（かざりたるつかはしら）、祝いかめしく、鐘鼓の響絶えず、病を祈りて偶ま愈ゆれば、之を神助に帰す、故に其地を経過する者、皆祀らざるなし。

七八年の後、鮑魚の主人、廟下を過ぎて、その故を問ふ。人具さに之が為に説く。主人乃ち曰く、こは是れ我が鮑魚のみ、何の神かあらんと。こゝに於て止む（この話は風俗通の怪神篇に見ゆ）又た南頓の張助といふ者、田を耕して偶々一李を得たり、之を鋤き除くを惜みて、持ち帰らんと欲し、乃ち掘り出して、湿土もてその根を封じ、之を枯桑の叢の中に置きしも、遂に之を忘れたり。助は後ち遠国の官吏に任ぜられしが、やがて里中の人、桑中より忽ち李を生じたるを見て、驚いて之を神と思ふ。眼病に罹りし者あり、桑下に蔭息し、祈りて曰く、李君、若し我目を愈えしめば、謝するに一豚を以てせんと。その目偶然に愈えしかば、豚を殺して之を祭る。伝者転々相差まりて言ふ。この樹は能く盲者をして見ることを得しむと。こゝに於て遠近翕然として来り福を請ひ、車馬は道塗に填ち、酒肉は樹下に滂沱たり。数年の後、張助職を罷めて来り還り、之を見て曰く、こは是れ我が昔し置きし所の李のみ、何の神あらんと。乃ち斫り去りしかば、その事止みたり（この話もまた同上に見ゆ）又た汝南の彭氏の墓は、大道に近し。墓口に一石人あり。田家の老母、市に到り、数片の餅を買ひて帰る。炎天なれば、彭氏の墓口の樹下に蔭はれ、買ひし所の餅を石人の頭上に置く、不図之を取ることを忘れて、そのまゝ過ぎ去りたり。然るに行路の人は、石人の頭上に餅あるを怪みて、之を問ふ。或る人曰く、この石人に神あり、能く病を治す。故に平癒する者は、餅を以て来り謝すること此の如しと。更に転々相告げて曰く、頭痛をやむ者は、石人の頭を摩で、腹痛に罹る者は、石人の腹を摩べしと。人々此の

如くせしに、愈えざるものなし、遂に千里の遠きより来りて、治を願ふ者あり。初め雞豚を祭に供せしも、後には牛羊を用ひ、帷帳を立て、管弦絶えず、此の如きこと数年なり。餅を忘れたる老母、之を聞いてその来由を説きしかば、復た往き祭る者なし（この話もまた同上に見ゆ）又た洛西に古人の墓あり、穿壞して水を生ず。墓中に石灰多し、石灰汁は由来瘡を治するに効あり。夏日瘡を病みたる病人、発熱して苦しかりしかば、この墓中の水の清好なるを見て、之に洗浴せしに、果せるかな瘡乃ち愈ゆ。是に於て他の病者之を聞いて、悉く往き洗ふ、又た之を飲みて、腹疾を治したる者あり。墓辺の居人、乃ちこゝに廟舎を立て、この水売る。之を買ふ者は必ず酒肉を廟に供す。来り買ふ者益す多かりしかば、この水全く盡く。水売る者、夜に乘じ他水を窃みて之を増す。遠道の人も皆行使を雇ひ、或は信に容器を添へて、之を購ふ者あり、是に於て水を売る者大に富む。人或はその神なきを言ふ者あり、官また中ごろ禁止して、遂に之を塞ぎしかば止みぬ。又た興古の太守馬氏といふ者あり。その在官中、親友来り投じて恤を求む。馬氏乃ち之をして先づ外に住ましめて乃ち云ふ、此人は神人道士にして、病を治すれば立どころに愈えざるなしと。又た辨士をして、之が為に虚名を四方に吹聴して云ふ。能く盲者をして登ちに視、瞽者をして即ち行かしむと。是に於て四方雲集し、之に趨くこと市の如くにして、錢帛固より山積す。又た治療を求むる人々に勅めて云う、たとひ愈えずとも、人には愈ゆと告ぐべし、此の如くすれば必ず愈えん、然らざれば終に愈えざ

るなり、道法此の如し、信ぜざるべからずと。是に於て後人もし前人に問へば、輒ち皆な愈ゆといひて、未だ愈えずといふものなし。かくして旬日の間にして、巨富を致せりと。凡人は小才あるも大愚なれば、延年長生の法を聞いて、皆な之を虚誕となすも、却つて妖邪鬼怪を信ず、之に舞を奏し祈祀を捧ぐ、而してその所謂神といふ者は、皆な馬氏が人を誑すの類なり。聊か数事を記して、以て未だ覺らざる者の戒となす。

或る人、問ふて曰く、

道術方技を知ることなくして、而して平安寿考なるは何ぞや。

抱朴子曰く、

この如き者は、或は陰徳善行ありて、以て福祐を致し、或は命を受くること本と長きため、老いがたくして遅く死し、或は幸にして災傷に遇はざるなり。譬ふるに田獵の時にも、逃れ去る禽獸あり、大火の際にも燼えざる草木あるが如し。身を防ぎ害を却けんと欲せば、当に形を守るの防禁を修め、天文の符劔を帶ぶれば可なり、祭禱は益なきなり。当に我の侵すべからざるを恃むべくして、鬼神の我を侵さざるを恃むなかれ、然して玄を思ひ一を執り、景を含み身を環らせば、邪惡を避け不祥を度るべきも、未だ寿命を延ばして体疾を消する能はず。自然に任じて方術なき者として、其の天年を全くするを得ざるには非ず。然れども暴鬼の横逆、大疫の流行に値ふときは、之を却くるに由なし。それ甲冑を儲へ、簞笠を蓄ふる者は、兵と

雨との為なり。若し幸に攻戰なく、天候陰鬱ならざれば、之れあるも、之れなきも同じ。若し矢石霧の如くに合し、飛鋒烟の如くに交はれば、裸体の困みを知らん。大雨河を傾け、素雪天に弥らば、露れ立つものゝ劇しきを覺らん。薺麦の夏時に細碎せらるゝを以て、陰陽の大順を疑ひ、晩学の散人に誤られて、方術の無益を謂ふべからざるなり。

抱朴子内篇卷十

明本

(仙道の本来を明かす)

或る人、問ふて曰く、

儒教と道家の先後は如何。

抱朴子答へて曰く、

道は儒の本にして、儒は道の末なり。先儒司馬遷以為らく、陰陽の術は忌諱多きため、人をして畏れ拘はらしむ。儒者は其の知る所博きも要寡く、勞して功少なし、墨者は儉にして遵ひがたし、故に専ら修むべからず。法家は嚴にして思少なく、仁義を傷破す。唯だ道家の教は人の精神をして專一ならしめ、行動は自然に合して、形迹なく、儒墨の善を包み、名法の要を總ぶ、時とともに遷移り、物に應じて変化す、旨意簡約にして明らめやすく、務むる所少なくて功多し、大宗の朴を全くして、真正の源を守るを務むと。(史記の自序を見よ)而るに班固は、司馬遷を評して曰く。黄老を先となして、六経を後となすは謬れりと。(漢書の司馬遷伝贊を見よ)夫れ馬遷の洽聞なる、あまね旁く幽隱を綜べて、す事理の是非を沙汰し、古人の邪正を核実す。かくじつ其の評論は、実に自然に本づきて、その褒貶は至理に準的す、美を虚しくせず、惡を陰さず、俗人に雷同せず。故に名世の通儒たる劉向は、史記を評して実録となせり(同)されば班固の所論、未だ抛るべからざるなり。固は誠に純儒なるも、道意を究めず、その習ふ所に習れて、折中

を得がたし。

それ道は、豈に唯だ養生の事のみならんや。易に曰く、天の道を立つ、陰と曰ひ陽と曰ふ。地の道を立つ柔と曰ひ剛と曰ふ。人の道を立つ、仁と曰ひ義と曰ふと。又た曰く、易に聖人の道よ四あり。苟くもその人に非れば、道虚しく行はれずと。又た治世明時には、有道といひ、危国乱主には、無道といふ。又た坐して道を論ずる者を三公といひ（書經の周官に見ゆ）国に道あるとき、貧賤なるは恥なりといふ。（論語に見ゆ）すべてこれ等の語句に於て、道といふ者の内容を見れば、上は陰陽より、下は万物に逮およぶまで、之に由らざるなし。但だ黄老は其の本を執り、儒墨はその末を治むるのみ。今世有道に挙げらるゝ者は、博く古今に通じ、仰いで天文を察し、俯して地理を察し、変を経て微に涉り、興亡の運に達し、治乱の体を明かにす。心惑ふところなく、問へば答へざるなし、何ぞ必しも長生の法を修めて、赤松子王喬の武あを慕はんや。然るに管見の諸生、臆断贅説して、山林の間に居り、老子の業を宗とする者あると聞けば、毀そり笑ひて曰く。彼は小道のみ、算かふるに足らずと。嗟あ乎所謂螢燭を板塍の狭きうちに守る者は、天日の燦爛を見ず、足跡にたまる水の中に在りて魴鰕はえびに伴ふ者は、四海の浩汗ひろきを識らず。江海の深さを重んずるも、崑崙山の之を吐くことを知らず、黍稷の収を珍とするも、豊壤の之を秀はなかしむるを覚さらず、今苟も儒術を推崇するも、道ありて始めて之を成すことを知らず。道は百家を陶冶とうやし、陰陽を範鑄し、万類を胞胎し、彝倫いを醞釀うんじやうする者なり。世間にて浅近な

る者多くして、深遠なる者少なし、少は衆に勝りたること、今日に始まらず、故に馬遷は長なるも誉められず、班固は短なるも弾られず。然れども何物にあれ、少は貴く多は賤し、人事に於て豈に独り然らざらんや。故に藜藿は原に弥るも、芝英の仙草は世に稀なり、枳棘は野に被るも、尋木は間々秀づ、沙礫は無量なるも、珠璧は甚だ尠し、鴻隼は群り飛ぶも、鸞鳳は罕れに出で、虺蜴は藪に盈つるも、虬竜は覲ること稀なり。班固に党する者多きは、固より宜なるかな。

それ道は、内は身を治め、外は国を為む。能く七政をして度に遵ひ、二氣をして和を告げ、四時をして寒温の節を失はず、風雨をして物を暴すの災を為さず。天の玉燭は昇平の徴を表はし、(四時の氣象調和するをいふ、爾雅に見ゆ)地の澄醴は君徳治く布かるゝの符を彰はし(礼記の礼運を見よ)焚輪(暴風の異名、爾雅の釈天に見ゆ、商羊は大水の前兆なること、魯語に見ゆ)はその翼を戢め、景曜(虹霓はその妖を痕め、顔雲商羊)高く照して、嘉木畢く遂げ、疫療流れず、禍乱作らず、壘壘設けず、干戈用ゐられず、議せずして当り、約せずして信あり、結ばずして固く、謀らずして成り、賞せずして励み、罰せずして肅み、求めずして得、禁ぜずして止む。上に処りて人以て重しとなさず、前に居りて人以て患となさず、未だ号令を發せずして風移り、未だ法命を施かずして俗易る。此れ蓋し道を以て世を治むればなり。故に道の興るや、三皇五帝、衣裳を垂れ手を拱いて餘りあり、道の衰ふるや、叔代(遼季の時代)馳驚して足らず。それ唯だ餘りあり、故に無為にして化美なり、それ

唯だ足らず、故に刑嚴にして姦繁^{しげ}し。黎庶^{たみ}下に怨みて、皇靈^{あまつかみ}上に怒り、或は大水横流し、或は亢陽^{ひでり}赤地となり、或は山谷体を易へ、或は冬雷夏雪あり。或は血槽^{たて}を漂^{たゞよ}はし、積尸^{みせもの}京觀を築く。或は降人を坑殺すること万を以て計り、糧食つくれば骸骨を析^さき、子を易^かへて食ひ、城愈よ高くして、衝車^{（城をつき破る車）}愈よ巧みに、池愈よ深くして雲梯愈々高し、法令明かにして盜賊多く、盟約^{しほ}数々にして叛乱甚し。猶ほ風波驚いて魚鼈淵^{べつふち}に擾^{みだ}れ、織羅密^{あみ}にして羽禽沢に躁^{さわ}ぎ、豺狼多くして走獸林に劇^{せは}しく、炊火猛くして小鮮鼎^{こせんかな}に糜^{たゞ}るが如きなり。君臣位を易ふるものあり、父子刃を推す者あり、然る後に忠義の名は危国に制せられ、孝子の誉は敗家に出づ。疾疫起りて巫医貴く、道德喪^{うしな}はれて儒墨重し。此に由りてそを觀れば、儒道の先後定むるを得べし。

或る人、問うて曰く、

昔し、赤松子、王喬、琴高、老氏、彭祖、務成、鬱華^{（神によるに、務成鬱華竝びに老子の変身なり）}等は皆真人にして悉く世に仕へ、敢^{とほ}へて遐^{とほ}く遁れず、而るに中世以来、道を為^{おさ}むるの士は、瓢然として跡を絶ち、幽隱せざるなきは何ぞや。

抱朴子答へて曰く、

上古は純朴にして、巧偽未だ萌^{きん}さず、道を信ずる者は勤めて之を学び、信ぜざる者は嘿然たるのみ。謗毀の言を吐かず、中傷の心を存せざるなり。是を以て真人は人間に徐々として、

登遐に促々たらざるのみ。末俗は偷薄にして、雕偽弥々深く、玄淡の化廢れて、邪俗の党繁し。既に道を信ぜず、訕毀を好み、真正を妖訛となし、神仙を誕妄となして、或は衆を惑はすといひ、或は俗を乱るといふ。是を以て上士はその中に居るを恥づるに至る。昔の達人は漸を杜ぎ微を防ぎ、変りたる顔色を見れば、直ちに起ちて（論語の山梁、雌雉を見よ）夜も旦を待たず。幾を觀て作り、その日の終るを俟たず。故に趙国、鳴犢を害して仲尼は軫を旋し（史の孔子世家を見よ）醴酒設けられずして、穆生は星の如く疾く行く（漢の元王、伝を見よ）彼衆にして我寡なれば、華元之を去る（左の宣公二年を見よ）況んや明哲の業尚は本と異なり、何ぞその間に恋々たらんや。それ淵濁き池漉れば蚊竜游ばず、巢傾き卵拾つれば鳳凰集らず、居ながら室に言ひて翔鷗下らず（列の黄帝篇に見ゆ）春、凡草を翦れば芝萱の靈草も秀でず。世俗正を醜として、慢辱將に臻らんとす、彼の有道者、何んぞ超然として翅を嵐雲の表に振ひ、軌を玄漠の際に藏さざるを得んや。

山林の中は、有道に非らず、而れども道士の必ず此に入る者は、誠に彼の腥膻を遠ざけて、この清浄に即かんとすればなり。それ九室に入りて、（精神をしづめることの譬）思を精くし真を存じ、専ら神を招く者は既に誼諱と汗穢とを喜ばず、而して金丹の大薬を合し、八石の飛英を練るには、尤も利口の悪人と、凡俗の聞見とを忌む。神靈之が為に降らず、仙薬之が為に成らず、決して小禁に非るなり。人間に止まれば、或は浅見の有司ありて、之に罪禍を加へ、或は親旧の往来慶弔に牽かる、されば一切より幽陰れて、此の如き紛々たる俗臭を免るゝに若くはな

し。彼の邈然^{ばく}として独り往き、巖窟に得意なるは、豈に故あらずや。或は云ふ、三軍の誼譚^{かまびす}しきに在りて、道を得る者は上士なり、都市の繁華に在りて、道を得る者は、中士なり、山林の静地にありて、道を得る者は下士なりと。然れども仙藥既に成りて、未だ昇天を欲せざる者は、三軍に在りとも、鋒刃傷^{きず}つくる能はず、都市に在りとも、凶禍加ふる能はざるなり。而るに下士は、未だ之に至る能はず、故に山林に止まるのみ。上士中士の二品は、初学の時より、三軍都市の中に在るも可なりと謂はざるなり。然らば黄老の如き上士たる者は、今なほ三軍都市の中を去らざるべし。

或る人、問うて曰く、

道は源本にして、儒は末流なること、既に命を聞^{おしへ}けり。かく同一の者ながら、今此二者に於て、小異あるは何ぞや。

抱朴子に曰く、

それ升降俯仰の礼教、盤旋三千の儀式、守攻進退の戦術、輕身重義の節操、歆憂礼楽の人事、經世濟俗の方略は、儒者の務むるところなり。物を外にし智を棄て、機変を滌^{あら}ひ去り、富を忘れ貴きを逸し、賞によりて勧められ罰によりて沮^{とゞ}せめらるゝを遏^{とゞ}め、窮達毀誉により喜憂せざるは、道家の業なり、儒者は祭祀して福を祈り、道は正を履みて邪を禳^{はら}ふ。儒者の愛する者は勢利にして、道家の宝とする者は無欲なり。儒者は名利に汲々として、道家は一を抱き以て

独り身を善くす。儒者の講ずる者は相研の簿領にして（相研は相斫の誤ならん、左氏伝を相斫書といふこと三の王朗伝註に見ゆ、簿領は記録なり）道家の習ふ者は、情欲を遣るの教戒なり。それ道者は、その為は、善く自ら修めてその務を成し、その居るや、善く人の争はざるところを取る、その治むるや、善く禍を未だ起らざるに絶ち、その施すや、善く物を済ひて徳とせず、その動くや、善く民心を觀て心を用ひ、その静なるや、善く真に居りて悶ゆるなし。これ百家の君長、仁義の祖宗たる所以なり。両家の小異ほぼ此の如し、何れか首にして隆く、何れか尾にして汚きかは変ずることなし。

或る人、問うて曰く、

儒者は周孔にして、その典籍は六經なり。蓋し世を治め正を存するの原因にして、立身行動の準繩なり。その用遠くして業貴く、その事大にして辞美はし。国を有ち、家を有つにつきては、易ふべからず。道士は礼教を営まず、大倫を顧みず、草沢の中に狐貉を侶とし、林麓の間に猿獠と偶ぶ、土塊の如く世を遁れて、木石と隣をなす、これ亦た東走の迷にして葵の甘を忘れたる者なり（東走之迷は不明なるも、淮の説山訓に、狂者東走、逐者亦東走、東走則同、所以東走則異に本づきて、徒らに世人が道士の真似をなし、迷ひて知らざるを評せし者か、忘葵之甘は楚辭の所謂蓼虫不徒乎葵て、苦き蓼食ふ虫もすきくにてその本性を變じがたし、よりて道家の説に耽り、儒教の貴きを知らざるをいふ）

抱朴子答へて曰く、

自ら好んで、華詞を摘べ、艷辞を騁するは、質直の尚ばざる所にして、人の蒙を攻め惑を救ふは、既に充分なれば、今更ら子と物理の是非を較べ、得失を口舌に争ふを欲せず。然れ

ども赤子の井に墜つるを觀るは、仁者の意に非ず、盲人の柱に觸るるを視るは、兼愛の謂に非ず。即ち又た梗概を陳べて、一隅を抗げん。それ道を体して以て物を匠り、徳を宝として以て生を長くするは、黄老是れなり。黄帝は能く世を治め、太平を致して昇仙すれば、堯舜よりも劣れりと謂ふべからず。老子は能く礼教を兼ね綜べて長生久視すれば、周孔よりも減ぜりといふべからず。故に仲尼は「竊かに老彭に比す」の嘆ありて、未だ之を疵毀るの辞あるを聞かず。而るに末世の庸人、その門を得ず、儒墨を修めて道家を毀る、何ぞ子孫の祖考を罵るに異ならんや。これその自りて来る所を知らざるも、亦た已に甚し。

それ株儒（一寸法（師の類））の手は、嵩華の高岳を傾くるに足らず、焦僥（列の湯問（篇に見よ））の脛は、滄海の深きを測るに足らず。凡俗守株の儒を見るごとに、習ふ所に營々として、博く理に達せず、告ぐることに頑に、令すること囂なり、悪言を崇飾して、道家を誣詰す。古人の糟粕を瞥見するや（糟粕は書物なり（莊の天道篇に見ゆ））恰も駿馬の隙を過ぐるを觀るが如し（一寸書物を看たる喩）精神の淵を涉れば、淪み溺れて自ら失すること、斥鷃の短き翹を振ひて、陽候（波神の名にして（淮の説山訓に見ゆ））の大波を凌ぎ、蒼蠅の驚質を力めて、猿も眴するほどの峻き阪を渉るが如し。その堪ふる所に非ずして、祇だ困みを速くに足るのみ。然るに嚶々（煩はし（きさま））として局隘を守りて、聰は師曠に及はず、明は離朱に如かず、蹠を企て、三光を包み、鼓腹の響を以て雷神の声と相争はんとす、亦た迷ならずや。蓋し眇邈たる天上の璇宮璇殿を上れば、井谷の至卑を知り、日月の天に麗るを觀れば、

鰯金の陋いやしきを知る。（鰯金は不明、或は焦金の誤か金の焦熱してびかくしたる色をいふ）吾生れながらにして、之を知るに非ず、又少わかきより之を信じたるにも非ず、始めは濛々として暗きこと子の如きのみ。既にして奥秘の弘く修まれるを觀て、俗界の困みを離るゝの早からざるを恨む。夫れ五經の注説は、炳然として露あらわれ知らるゝも、初学の徒、猶ほ解けざることあり。況んや金簡玉札は、神仙の經にして、至要の言なり、又た多くは之を書に載せず、壇に登り血を飲すすりて、後ち之を口伝するのみ。苟くもその人に非れば、地を裂き城を連ね、金壁堂に満つと雖も、妄りに之を示さず。その旨深く本遠し、その書を得るも師受せざれば、猶ほ仰いで首を見ず、俯して跟かゝを知らず、豈に吾子の詳悉する所ならんや。

それ仙を得る者は、或は太清に昇り、或は紫霄に翔かり、或は玄州に至り、或は梧桐（原文に梧桐又た板桐に作る誤なり）に棲み、鈞天の音楽を聴いて、九芝の饌うを享く。出でては赤松子、羨門子を倒景の表に携へ、入りては常陽（常陽は不明、嫦娥の誤か、或は嫦娥陽鳥即ち日月の神をいふか）に瑤房の中に宴す。然るに世人動もすれば、神山必ず山林に入り狐貉を伴ともとし、猿狖さるに偶ならふといふは、此れ所謂知らずして作りたる妄言なり、それ道は虹霓に逍遙し、丹霄に翱翔し、六虚に鴻崖す、唯だ意の造いたる所なれば、塊然として世間を遁るも、戚うれひとなさざるなり。かの群むらがれる犠牲を見ずや、錦繡を被るも、麒麟の群を離れて独り住き、吉光（神馬の名）の偶ともと柝わかれて福多きに比すれば、その樂み果して孰まされか優れるか。

抱朴子内篇卷十一

仙藥

(仙藥の製法を論ず)

抱朴子曰く、

神農四經に曰く、上藥は、人として身安く命延び、昇りて天神となり、上下に遨遊し、万神を役し、体に羽毛を生じ、立どころに行厨を致さしめて、坐ながら飲食するを得べし。又た曰く、五芝、丹砂、玉札、曾青、雄宝、雌黄、雲母、大乙禹餘糧を服するのみにても、飛行長生を得べし。又た曰く、中藥は性を養ひ、下藥は病を除く、能く毒虫をして侵さしめず、猛獸をして犯さしめず、悪氣をして行かしめず、衆妖をして竝び辟けしむ。又た神經援契に曰く、椒と薑とは湿を禦ぎ、菖蒲は聰を益し、巨勝は年と延べ、威嬭は武器を辟くと。これ皆な上聖の至言、方術の実録にして明文炳然たり。而るに世人、終に信ぜざるは、歎息すべき事なり。仙藥の上なる者は、丹砂(本、石)にして、黄金、白銀(竝に本、金)諸芝、五玉(本、玉)雲母(同)明珠、雄黄(本、石)、大乙禹餘糧(本、石)石中黄子(同)石桂(明、不)石英(太平御覽卷九八、七に諸種あり)石腦(本、石)石硫黄(本、石)、石飴(明、不)曾青(本、石)松柏脂(本、卅、木)茯苓(七、木)地黄(本、草、十)麦門冬木(本、十六、草)巨勝(本、二、穀)重楼(明、不)黄蓮(本、三、草、十)石韋(本、草、廿)楮實(本、木、卅)象柴(托廬、一名)等、次第により相下る。或は仙人杖、西王母杖、天精、却老、地骨、枸杞(以上の六は本、卅六、木によるに皆枸杞の別名なり、但し仙人杖は二十七、菜、卅七、木にも出づ)天門冬(本、十八、草、皮、び爾、雅、山海經に見ゆ)地門冬(本には天門冬の別名かとあり)

庭門冬、顛棘、（此二種）淫羊食（食は霍の誤か）管松（明）など、名づくる者あり。すべて高地に生じて、根短く味甜く気香ばしき者は善し。水側下地に生じて、葉細くして蒔の如く、稍や黄色を帯び、根長くして味苦く、氣臭き者も服食すべし、人をして氣を下さしむるの効驗あるも、其の藥力の見はるゝは尤も遅し。之を服すること百日なれば身体の強壯なること、朮（本、十二下草及び爾雅、山海經に見ゆ）及び黄精（本、十二上、草）を服するに倍す。又た山に入れば、蒸し若しくは煮て之を啖ひ、以て穀を断じ筋力を増すべし。之を丸藥また散藥となせば、尤も佳なり。又たその汁を絞りて、酒を作ることを得。楚人は天門冬を百部と叫ぶも、別に百部草あり。その根百許りありて、相似たること一の如きも、苗に多少の相異あり。眞の百部草の苗は楔の如し、咳を治し、虱を殺すに効あり。服食に中らざる者と混同するなかれ。黄精の如きは、一に白芨ともいふ、而れども糊を作るの白芨に非ず。本草を按ずるに、藥と他草と同名なる者、甚だ多し。唯だ精博の人にして能く之を區別す、人々詳かにせざるべからず。

黄精は、一名菟竹、一名救窮、一名垂珠といふ。根よりも実、実よりも花を善しとす。但だ多く得難し。生花十斛を乾せば、纔かに五六斗を得べきのみ。之を服すること、日に三合ばかり、辨じ得べき事に非るなり。之を服すること十年なれば、大に寿を益すことを得べし。但し断穀よりいふときは、朮に及ばず、朮を餌すれば、人をして肥健ならしめ、重きを負うて険を渉らしむべし。但だ黄精の甘美にして、食し易きに及ばざるなり。凶年には老小に与

へて、糧に代らしむべし、故に之を米脯ともいふ。

五芝は、石芝、木芝、草芝、肉芝、菌芝にして、何れも百餘種あり。石芝は海隅の山石、及び島嶼の涯に生ず。

肉芝は、その状肉の如くにして、頭尾四足あり、甚だ生物に類す。大石に附着し、高岫峻の地に在り。赤きものは珊瑚の如く、白き者は截りたる肪の如く、黒きものは沢漆の如く、青き者は翠羽の如く、黄なる者は紫金の如し。皆な光明洞徹にして、堅氷に似たり、晦夜には之を去ること三百歩なるも、その光を望見す。大なる者は十餘斤、小なる者は三四斤の重さあり。久しく斉戒したる者、又は老子の入山靈宝五符を佩びたる者に非れば、此の光を見るを得べからず。凡べて諸芝を見るには、先づ開山却害符をその上に置くべし、然るときは隱蔽し、又たは変化し去るを得ず。後徐ろに王相の日を択びて、醮祭を設け、酒脯を奉げ、日下より禹歩し、氣を閉ぢて往き、之を取る。若し石芝を得ば、之を擣くこと三万六十杵、方寸の匕ほどの分量にて、一日に三回之を服し、一斤を盡くすときは千歳を得、十斤なれば万歳を得るなり。又た人に分与することを得。

玉脂芝は、玉ある山に生じて、常に懸崖危険の処にあり。玉膏流出して万年以上を経れば、凝りて玉脂芝となる。鳥獸の形に似たる者あり。色は一定せざるも、多くは山玄、水蒼玉に似たり。又た鮮明にして、水精に似たる者あり。之を粉末となし無心草の汁を和すれば、須臾

にして水となる。一升を服すれば一千歳を得。

七明九光も亦石芝なり、水に臨むの高山に生じ、状は盤碗の如く、其の直径は一尺内外なり、莖帯ありて之を連綴し、三四寸ほど地上に出づ。七孔ある者を七明といひ、九孔あるものを九光と称す。その光皆な星の如し、夜分、百歩以内より、之を望見すれば、その光各々別なり。常に秋分の日を以て採取して之を擣く。方寸の匕を服すれば、翕然として自熱し、五味盡く甘美なり、一斤を盡くせば千歳を得、人身をして光あらしめ、暗地に居るも、四方を照らすこと日の如く、書を視ることを得べし。

石密芝は、少室山の石戸の中に生ず。戸中に深谷あり、石を之に投入すれば、半日猶ほ其の声を聞く。戸外を去ること十餘丈にして、石柱あり。柱上に、蓋を偃せたる形の石ありて、直径一丈ばかりなり。傍觀するに、密芝が石戸の上より墮ちて、此の偃蓋の中に入ることあり、良久しくして雨水の屋上より滴るが如きを聞く。而して密芝の墮つること、息まざるも、偃蓋また溢れざるなり。戸上に科斗文字（太古の字形）もて刻して曰く「石密芝一斗を服すれば、万歳の寿を得」と。故に諸道士、皆なその生処を思惟すれども、往くを得べからず、或は碗器を勁き竹木の端に著けて、密芝の墮つるを掬ひとるの法あるも、未だ之を實行したる者あらざるなり。戸上の刻文を以て、之を按ずるに、前世には、必ず之を得たる者あらん。

石桂英芝は、名山の石穴に生ず、其の形、桂樹の如く高さ尺許り。径尺にして枝條あり。光

明にして味辛^{から}し。之を擣^ついて、一斤を服すれば、千歳を得。

中黄子は、至る所に之もあるも、泌水山を以て尤も多しとなす、大石の中に生じ、赤黄溶々として、雞卵の殻^{から}に在るが如し、其の石常に潤色あり、之を打つこと数十回にして、始めて之を得。若し之を得ば、直ちに飲むべし、然らざれば堅く凝りて、復び石となる。一石を破るに、多きものは一升、少なきものは数合あり、三升を服すれば、千歳の寿を得。

石腦芝は、滑石の中に生ずること、石中黄子の如し。但し凡あらゆる滑石に生ずるものに非ず、千許りの滑石を打破して、漸く一箇を得べし。之を破れば、五色の光明ありて自ら動く、一升を服すれば千歳を得。

石硫黄芝は、五岳の何れにも在り、而して箕山を多しとなす。その伝説に云ふ、許由之を服して長生す、故に富貴を以て、意を累^{わづら}はさず、堯帝の禪位を受けずと。

石硫丹は、石の赤精にして、石硫黄の類なり。崖岸の間に浸溢す。其の濕ふ者は丸藥となすべく、堅き者は砕いて散藥となすべし。

その他百二十種の石芝あり。大乙玉策、及び昌宇内記に之を載するも、今具^{つぎ}に称すべからざるなり。

木芝の由来を言はんか。松柏の脂、地にしみこむこと千歳にして、化して茯苓となる。茯苓万歳の後、其の上に小木を生ず、状は蓮花に似たり、木威喜芝といふ。夜^{よる}之を視るに光あり、

之を持するに甚だ滑なめらか、之を焼くに燃えず、之を帶ぶれば武器を辟く。雞をして之を帶ばしめ、他の十二雞と与に、之を籠に入れ、去ること十二歩にして、射ること十二箭なれば、威喜芝を帶びたる者の外、他雞皆な傷つく。生門上（方角の名）より之を採り、陰乾すること百日の後、粉末となして、方寸の匕さじを服すること、一日に三回、かくして一箇を盡くす時は、三千歳を得。射干の草、千歳を経れば、その下根は坐したる人の如し、長さ七寸許りあり。之を刻めば血出づ、之を足に塗れば、水上を歩行すべく、鼻に塗りて、水中に入れば、水為に開きて、永く淵底に止まるを得べし。又之を身に塗れば身を隠くし、拭へば身見はる。腹中の病を治する時は、一刀圭さじを削りて之を服し、腫物などには、之を塗り摩なづれば皆直ちに愈ゆ。又た左足疾あれば、その根の左足を削れば愈ゆ、他は之に準ず。又た之に雜ふるに巨勝を以てすれば、夜偏あまねく地を照てす。若し地中に金玉の数、埋没すれば、青色の光となりて下に向ふ、鍤すきもて之を掘れば必ず得ん。此の粉末十斤を盡せば、千歳の寿を得。

又た三千歳を経たる松枝皮中に、竜の形をなしたる脂の固形体あり、名づけて日飛節芝といふ、大なる者は十斤あり、粉末として、盡く之を服すれば、五百歳を得。

又た樊桃芝といふ者あり。その木は昇竜の如く、花葉は丹あかき羅つつたの如く、実は翠鳥の如し。高さ五尺に過ぎず。名山の陰かげ、東流する泉水の土に生ず。立夏の時之を採り、其の一株を服すれば五千歳を得。

參成芝は、赤色にして光あり。その枝葉を叩けば、金石の音の如し。折るゝも之を続けば、復た故の如し。

木渠芝は、大木の上に寄生す。蓮花の如し、九莖を以て、一叢をなす。其の味は甘くして辛し。建木芝は実^{から}に都広^{（都広は地名なり）}に生ず。その皮は纓蛇^{（山の纓黄蛇か）}の如く、その実は鸞鳥の如し。この三芝を服すれば、白日昇天を得。

黄廬子、尋木華、元液華の三芝は、泰山の要郷、及び奉高に生ず、之を服すれば、人をして千年の寿を保たしむ。

黄蘗壇桓芝は、もと千歳を経たる黄蘗の下根なり。其の形は三斛の器の如し、本株の黄蘗を去ること、一二丈のところに生じて、縷の如き細根と相連なる、一箇を取り粉末となして、之を服すれば、地仙となりて死せざるなり。この属には百二十種ありて、一々その図あり。

草芝の中に独遙芝あり、風なきも自ら動く。その茎は手指の如くにして赤く、葉は素くして莧に似たり、その根に大いなる魁ありて、恰も北斗星の魁の如し。卵の如き小なるもの、之を繞るは十二辰に似たり。個々の間、相去ること一丈許にして、白髪^{（白髪）}の如き細根にて連なる。高山深谷に生じて、而かもその生ずる所の附近には他草を見ず。其の大魁の粉末を服すれば、千歳を得、小なる者も、百歳を得。之を他人に分与するも可なり。大魁を懷けば形を隠す、若し見さんとすれば、左転して之を出す。

牛角芝は、虎寿山及び呉坂の上に生ず。状は葱に似て、特生すること牛角の如し、長さ三四尺にして青色なり。粉末として、方寸の匕^{さし}ほど服すること、日に三回、百日に至れば、千歳を得。

童仙芝は、状^{かたち}昇竜の相負^おふが如し、葉は鱗^{うろこ}の如く、根は蟠^{わだかま}る竜の如し。一箇を服すれば、千歳を得。

麻母芝は、麻に似て、茎赤く花紫なり。

紫珠花は、花黄にして葉赤く、実は李の如くにして紫色あり。二十四枝相連なりて垂る、恰も貫珠の如し。

白符芝は、高さ四五尺にして、梅に似たり。常に大雪の時に花開き、季冬に実^{みの}る。

朱草芝は、九曲す、一曲ごとに三葉あり、一葉ごとに三実あり。

五徳芝は、状^{かたち}楼殿に似たり。茎は方形にして、葉は五色を具へて雑^{まじ}らず、上は蓋^{かさ}を偃^ふせたる如く、中には常に甘露あり。紫氣ありて、数尺の上に起^たちのぼる。

童銜芝は、常に仲春を以て対生す。三節十二枝にして、下根は坐したる人の如し。凡べてこの草芝に属するもの百二十種あり。陰乾^{かげぼし}の後、之を服すれば、人寿をして天地と同じく、少なくとも千年二千年ならしむ。

肉芝は、万歳を経たる蟾蜍^{せんじよ}を謂^いふ。その頭上に角あり、頤^{あご}の下には丹色^{あか}にて『八』の字を

重ね書したる模様見ゆ。五月五日の中時に、之を採り、陰乾かげぼし百日、その左足もて地に画すれば、即ち流水見はれ、左手を身に帶ぶれば、あらゆる武器を辟はらき（按ずるに肉芝の形は人に似たり、故に左足左手といふ）敵の射たる弩矢の数は、自ら反対して敵に向ふに至る。千歳の蝙蝠は、色白きこと雪の如し、集とつまるときは倒さかさまに懸る。是れその脳の重き故なり。この二物を陰乾にし、粉末となして服すれば、万歳を得。

千歳の靈龜は五色を具そなふ。其の雄の額には角の如き両骨お起き上る、人言を解し、蓮葉の上に浮ぶ。羊血をあびせて、其の甲を剔けずり取り、火に炙いて粉末となし、方寸の匕さじを服すると、日に三回なれば、千歳の寿を得。山中を行くに、長七八寸許りの小児の車馬に乗るを見ん、これ即ち肉芝なり、之を捉ふれば仙となる。

風母獸は貂てんに似たり、青色にして大さ狸の如し、南海の大林中に生ず。網あみを張りて之を取り、積薪の中に之を焼くも、依然として焼けば焦こげず、擊刺するも入らず。之を打てば皮囊の如し、鉄鎚てつちもて、その頭を打つこと数十回にして死す。然れども一たび口を開いて、風に向はしむれば、須臾しゅゑんにして起き走る。この時、石菖蒲もて、その鼻を塞げば即ち死す。其の脳を取りて、菊花に和し、十斤の分量を服すれば、五百歳を得。

又た千歳の燕あり。その巢は北に向ひ、多く白色にして曲尾あり。陰乾の後、粉末として之を服すれば五百歳を得。凡べて之に属する者、百二十種あり、皆な肉芝なり。

菌芝は或は深山の中に生じ、或は大水の下に生じ、或は泉水の側に生ず。その状は宮室の如きものあり、車馬の如きものあり、竜、虎、人形、又は飛鳥の如きものあり。色彩また一定せず。この類百二十種あり、図之に属す。皆な禹歩して、之を採るべし。骨刀を以て之を刻ざみ、陰乾の後、粉末となして、方寸の匕さじを服すれば、上は人をして昇仙せしめ、中は数千歳、下も千歳の寿に至らしむ。

芝草を求むる為に、名山に入るには、必ず三月と九月とを以てす。これ山開いて神薬を出すの月なり、山俚（山俚）の日（不明）を以てするなかれ、必ず天輔の時（天輔）を以てすべし。而して三奇会尤も佳なり、三奇吉門を出で山に到るときは、六陰の日、明堂の時を須まち、靈宝符を帶び、白犬を牽ひき、白雞を抱き、白塩一斗、及び開山の符檄を、大石の上に着つけ、呉唐草一把を執りて、山に入らば、山神喜びて、必ず芝を与へん。

又た芝を採り及び芝を服するには、王相專和の日、支干上下相生の時を佳となす。名山にて諸芝多しと雖も、凡庸の道士、心專精ならず、行穢けがれ徳薄く、又た入山の術を曉さとらず、その図を得るもその状を知らず、故に終に得る能はざるなり。山には大小となく、皆鬼神ありて、人に芝を与へざれば、之を踐むも知らざるなり。

又た雲母に五種あるも、世人多く之を分別する能はず。その法は当に日に向ひて、その色そなはを詳看すべし、陰地かげには、その雜色を見る能はず。五色竝そなはび具りて、特に青色多きものを雲

英と名づく、春を以て之を服すべし。特に赤色多きものを雲珠といふ、夏に宜し。特に白色多き者を雲液といふ、秋に宜し。特に黒色多きものを雲母といふ、冬に宜し。但し単に青黄二色ある者を雲沙といふ、季夏に宜し。純白透明するものを磷石と名づく、四時に宜しきなり。五雲を服するの法は、或は桂葱、水玉を以て之を化して水となし、或は露とともに之を鉄器に入れ、玄水もて熬^いりて水となし、或は硝石とともに筒中に入れ、之を埋めて水となし、或は蜜と和して酪となし、或は松露にて漬くこと百日、革囊^{かはぶくろ}の中に揉み碎きて粉末となし、或は無顛草^{五、草}（^{本十}）樗^き血と和す。之を服すること一年なれば、百病除き、三年なれば、老人変じて童子となり、五年缺かざれば、鬼神を役使し、火に入りて焼けず、水に入りて濡^ぬれず、棘^{いばら}を踐みて傷^{きつ}つかず、仙人と相見^{あひま}ることを得。

以上の五雲母は、如何に永く土中に埋むるも腐れず、火中に置くも焼けず、決して他物と同じからず。故に能く人をして長生せしむ。又た之を服すること十年なれば、雲氣常にその上を覆ふとぞ。その母たる雲母を服すれば、その子ともいふべき雲氣を招くは自然の理なり。又た日に向ひて之を看るに、晦^くくして純黒の色あるものは、服藥に中^{あた}らず、人をして淋を發し瘡を發せしむ。之を服せんとせば、先づ茅屋^{あまみづ}の雷水、若くは東流の水、また露水もて漬^つくこと百日の後、その土石の部分を淘汰して、之を用ふべし。中山の衛叔郷は、之を服して久しきを積み、能く雲に乗りて行く。その秘方を玉匣^{たまのはこ}に封ず。仙去の後、その子もまた世に

名あり。漢の使者梁伯、之を得てその製方により、服藥して仙去す。

雄黄は武都山より出づる者を以て、藥とすべし。純にして雜なく、其の赤きこと雞冠の如く、光明曄々たる者を用ふべし。但だ純黄なること、雄黄に似たるも、赤光なき者は、仙藥と作すべからず。唯だ普通の療治に使用すべきのみ。餌服の法は、或は之を蒸し、或は酒と和し、或は硝石と和して水となし、之をかため、或は元脬腸を以て裏み、赤土の中に蒸し、或は松脂に和す。或は以上の三物を以て之を煉りて、水の如く白からしめ、布の如く引きのばす。之を服すれば、人をして長生せしめ、百病を除き、三尸虫を下し、癰痕を滅し、白髪を黒くして墮齒を生ぜしむ。千日なれば、玉女来り侍りて、役使に供し、行厨を致さしむべし。

又た玉女は、常に黄玉を以て誌となす。其の大き黍米の如くして鼻上に在り。是れなきものは、鬼の変化なり。玉も亦た仙藥なり、但だ得がたきのみ。玉經に曰く。金を服する者は、寿金の如く、玉を服する者は、寿玉の如しと。又た曰く。玄真を服する者は、其の命極らずと。玄真は玉の別名なり。人身をして輕擧せしむ、但に地仙となるのみに非るなり。然れどもその効は遅く、一二百斤を服して、始めて知るべきのみ。玉は烏珠酒、及び地榆酒を以て、之を化して水となすべし。又た葱漿に消かして、飴となすべし。丸藥、散藥、何れにても一年以上、之を服すれば、水火も之を害する能はず、刀刃百毒も、之を犯す能はざるなり。既成の玉は、害ありて益なし、璞玉を以て、用に充つべし。于闐国の白玉は、その最も善なる者にし

て、其の次には、南陽の徐善亭、及び日南の盧容水に産する者あり。赤松子は、玄虫の血もて、玉を漬^つけて水となし、之を服す、故に能く烟に乗りて上下す、玉屑を服するときは、水を用ふ。亦た人をして死せざらしむ。其の金に及ばざる所以は、数々熱を発して、寒食散を服する如きことあればなり。若し、玉屑（本、八）を服せんには、十日（本、九）ごとに雄黄丹砂（竝びに本、九、石）各々一刀圭（さじ）を服し、散策して寒水に沐浴し、風に逆ひて行かば、発熱せざるなり。董君異、かつて玉醴を盲人に与へて服せしめしに、旬日にして愈ゆ。呉延稚といふ者、玉を服せんと欲し、玉経を得たるも、その方明かならざれば、節度禁忌を知らず、乃ち始め珪璋環壁及び装劔（本、卅八に服器あり、怪むなけれ）を合して、之を製せんとす。後に余の説を聞いて、その用に中らざるを知り、嘆息して曰く。事は精しくせざるべからず、然らざれば但に益なきのみならず、幾んど禍に罹（か）らんと。

又た銀は、金玉に及ばざるも、地仙たるを得べし。之を服するの法は麦漿（本、卅）を以て之を化すべく、又た朱草酒を以て餌となすべし、又た竜膏を以て之を煉るべし。かくして一日三回づつ、彈九ほどの分量を服す。その費用多ければ、清貧なる道士の及ぶ所に非るなり。又た真珠（本、四十）の径一寸以上あるものは、服薬に適す。酪漿もて之を漬くれば、化して水銀の如し。浮石水、蜂窠（本、卅）蠶化、包形、蛇黄（本、十、石）と合して、之を三四尺の長さに引き延ばし、殻を絶ちて服薬するときは、長生を得るなり。

淳漆(本、卅五本)の沾うるははざるものを服すれば、人をして神に通じて、長生せしむ。之を餌するには、無腸公子(蟹の異名)十枚をその中に投ず、或は雲母水、又は玉水と和して之を服すれば、九虫悉く下り悪血鼻より去る。一年にして、六甲の鬼神、及び行厨至る。

桂(本、卅四本、木)は、葱涕(明不)と蒸して水となすべし。竹瀝(本、卅七本、木)又た先知君(亀の異名)の脳と和したるものを服すること七年ならば、能く水上に歩して長生不死なり。

巨勝(本、廿二穀)は、一に胡麻といふ。之を服すれば老いず、風湿に耐へて、衰老を補ふ。

桃膠(本、卅九果)は、桑灰汁を以て漬け、之を服すれば、百病皆癒え、久しく之を服すれば、身軽くして光明あり、晦夜に在るも月明の如し。多く之を服すれば、穀を斷ずべし。

柠(或は楮、本卅六本、木)木実の赤き者を服すること一年なれば、老者をして少なからしめ、人をして透視して鬼を見しむ。昔、梁須(或は頓)七十歳の時、之を服して少年となり、百四十歳に至るも、夜は字を書し、その速力は奔馬に及ぶ、後、青竜山に入り去る。

槐子(本、卅五本、木)は、新しき糞かめの中に泥と合し、之を封ずること二十餘日、其の表は皆爛ただる。乃ち之を洗へば大豆の如し、日々之を服す、腦を補ふに主治あり。久しく之を服すれば、毛髪白からずして長生す。

玄中蔓、方楚、飛廉(本、十五草)沢瀉(本、十九草)地黄(本、十六草)黃蓮(本、十三草)の属すべて三百餘種あり、皆なよく年を延ばして単服すべし。靈飛散、未央丸、制命丸、羊血丸は皆な齡を進ま

しめず、老を却かしむ。

南陽の酈^{れき}県山中に、甘谷水あり。谷水の甘き所以は、谷上の兩岸に生じたる菊花、その中に墮^おちて、世を歴ること弥々久く、遂にその水味を變ずるに因る。谷中の居民、皆な井を穿らずして、悉くこの水を飲む。その高齢者は、百四五十歳にして、少なきも八九十歳を失はず、夭^{わかしに}年の人なきは、この菊水の力を得たればなり。故に司空王暢、太尉劉寛、太傅袁隗^{くわい}皆な南陽の太守となりしが、官に到ることに、常に酈^{れき}県をして、毎日甘谷水四十斛^{こく}を送らしめて、以て飲食となす。此の諸公は、多く平素風痺及び眩冒^{めまひ}を患へしが、皆な平愈するを得たり。但し小少より甘谷に居住せし人民の如く、大なる益を得て、高寿に達すること能はざるなり。又た菊花と薏苡^{よぐ}とは相似たり、直^ただ甘苦を以て、之を分つのみ、菊は甘して、薏は苦し。諺にも『苦きこと薏^{よぐ}の如し』と。今、真菊は所在に生ずるも、其の量少なきのみ。牽^{おほむ}ね水側に生ずるも、就中緱^{こう}氏山と酈^{れき}県とに於て最も多し。仙方の所謂日精、更生、陰成、周盈は、皆な一つの菊にして、根莖花実によりて、その名を異にするのみ。その説甚だ美なるも、近來之を服する者、大概効驗なきは、正に真菊を得ざるに由るなり。それ甘谷水は、菊の氣味を得たるに過ぎざるも、居民の延年猶ほ此の如し、況んや妙藥を服すれば、何ぞ益なきを得んや。

余が亡祖鴻臚、少き時嘗つて臨^{りん}沆^{かう}の県令となる。其の言によるに、此の県に廖^{れう}氏といふ者あ

り世々寿老にして、或は百歳乃至八九十歳を出づ。後ち他処に徙るに及びて、子孫転た夭逝す。他人その故宅に居れば、復た旧の如く累世寿老なりと。これに由りて夭寿は、此宅の所為なるを覺りしも、何の故たるを知らず。乃ち井水の殊に赤きを疑ひ、試みに井の附近を掘りしに、古人の埋めたる丹砂数十斛を得たり。この丹砂汁は泉脉に因りて、井水に入る。故に此の水を飲む者は皆な長寿を得ることを明にせり。況んや丹砂を餌煉して、之を服するをや。

余又た聞く、上党に趙瞿といふ者あり、癰を病むこと歴年にして愈えず、死に垂んとす。家人、活きながら、之を山穴の中に棄つ（原文二三句読むべからず）。瞿、穴中に在りて自ら不幸を怨み、昼夜悲嘆し、涕泣月を過ぐす。会たまたま仙人あり、過ぎて之を哀み、具つさに之を問訊もんしんす、瞿その異人たるを知り、叩頭して自ら陳のべ哀を乞ふ。是に於て仙人、一囊薬を以て之に賜ひ、其の服法を教ふ。瞿之を服すること百餘日にして、瘡都すべて愈え、顔色豊悦、肌膚玉沢あり。仙人又た過ぎて之を視る。瞿再生の恩を受けたるを謝し、且つその方を乞ふ。仙人之に告げて曰く。此れは松脂のみ、此の山中に頗る多し、汝之を鍊り服すれば、長生不死を得べしと。瞿乃ち歸る。家人始め之を鬼と謂おもひ、甚だ驚愕せり。瞿遂に長く松脂を服して、身体転た軽く、氣力百倍、危に乗り險を越ゆるも、終日疲れず、百七十歳に至りて、齒墮おちず髪白からず。或る夜、忽ち屋間に、鏡の如く光るものを発見せしかば、之を左右に問ひしも、皆な見ずといふ。久しくして、その物漸々大きく、遂に一室を照して昼の如し。又た夜其の面上に綵女二

人見はる、長二三寸にしてし面体皆具はる。常に口鼻の間に遊戲す。此の如くする一年にして、綵女皆な漸く成長するに及び、出でてその側に侍る。又た常に琴瑟の音を聞いて、欣然として独り笑ふ。人間に在ること三百餘年、色は小童の如し、乃ち抱犢山に入る。必ず地仙となりしならん。瞿の説を聞きし者、皆な競ひて松脂を服し、その有力者は、車にて運び、驢馬にて負はせ、広き室に盈ち溢る、程に、多く貯へ集め、一月ほど、之を服せしも、何等の益なきを覚ゆるや、皆な之を中止したり。仙道に志ある者の、得がたきことは是の如し。若し瞿の如く、永く服したらんには、効驗ありし者を。

又た漢の成帝の時、獵者あり、終南山の中に、衣服を纏はざる、全身黒毛の一人を発見せり。獵人、之を捕へんとす。その山谷を踰ゆること、飛馬の如くにして、逮ぶべからず。是に於て密かに其の所在を伺ひて、合圍して、之を得たり、乃ち一婦人なり。その言によるに、我は本と秦の宮人なり。関東の賊至りて、秦王出で降り、宮室焼けたるを聞き、驚き走りて山に入る。飢うるも食なく死に垂んとする時、一老翁ありて、我に松葉松実を食ふことを教ふ。当時その味苦渋なりしも、次第に之に慣れ、遂に我をして飢渴せしめず、寒熱に耐へしめたりと。然らばこの女は、定めてこれ秦王子嬰の宮人ならん。成帝の時に至るまで、すでに二百餘年を経たる者なり。乃ちこの女を伴ひ歸りて、之に穀食せしむ、初めは穀の臭を聞くごとに嘔吐せしが、後、始めて之を食するを得たり。是の如きこと二年餘にして、身毛皆

な脱落し、漸次老人となりて死したり。向に獵者に捕へられざりしならば、定めし仙人となりしならん。

南陽の文氏の説に、その先祖は、漢末大乱の時、山中に逃れ去る、飢困して死せんとす。一人ありて朮を食ふことを教ふ。かくして飢ゑざることを、数十年にして郷里に還る、顔色更に少く、氣力も故に勝る。自らいふ、山中に在る時、身軽くして跳らんとす、高きに登り嶮を履ふむこと、歴日なるも疲れず、氷雪の中を行くも、了に寒を知らず。嘗て一高岩の下に、数人対坐して博戯する者あり、読書する者あるを見たり。彼等は文氏を俯瞰して、其人相を閱べ、相互に言へらく、『この人は、此に呼び上すに中るや否や』と。その一人曰く『未だ可ならざるなり』と夫れ朮は山薊、また山精ともいふ。故に神藥經に曰く、必ず長生を欲せば、常に山精を服すべしと。昔仙人八公各々一物を服して地仙となり、其寿各々数百年なり。後更に神丹金液を合して、太清に昇る。八物を合して、之を鍊服するも、その力を得ざることあるは、これその藥力、互に相勝畏乗除して、効驗なきに至るが故なり。

韓終は、菖蒲を服すること、十三年にして、身に毛を生ず。日々万言の書を視て、悉く之を暗誦し、冬は袒ぎて寒からず。それ菖蒲は、石上に生じたる者にして、一寸九節以上あり、紫花を開く者を、尤も善しとなす。

趙他子は、桂を服すること二十年にして、足下に毛を生ず。日々行くこと五百里にして、其

の力は千斤を挙ぐ。

移門子は、五味子を服すること十六年にして、色は玉女の如し、水に入りて汚れず、火に入りて灼けざるなり。

楚文子は、地黄を服すること八年にして、夜其身体を視るに光りあり。連弩を挙ぐるの力あり。林子明は、朮を服すること十一年にして、耳の長さ五寸あり。身軽くして飛ぶが如く、能く広き二丈ばかりの淵谷を超ゆ。

杜子徹は、天門冬を服し、十八妾を御して、百三十人の子あり。日々行くこと三百里なり。

任子季は、茯苓を服すること十八年にして、仙人玉女、往きて之に従ふ。能く隠れ能く彰あらはれ、復た穀を食せず。灸癥きつ皆な滅して、面体に玉光あり。

陵陽子仲は、遠志を（本、十
二下草）服すること二十年にして、三十七人の子あり。曾つて視し所の書は、之を忘れず、坐すれば姿を見はし、立てば隠る。

仙經に曰く、草木の葉を服すること数百歳なるも、神丹を怠るときは、終に仙となる能はずと。然らば草木は年を延ばすのみ、長生の藥に非ること知るべし。然れども未だ丹を作るを得ざれば、且しからく草木を服して以て自ら支ふべきのみ。

或る人問うて曰く、

すべて服藥の時間には、各々前後の宜しきことあるか。

抱朴子答へて曰く、

中黃子の服食節度を按ずるに曰く、病を治するの薬は、食前を以てし、性を養ふの薬は、食後を以てすと。吾、鄭君に其の理由を咨ふ。鄭君云ふ。これ知り易きのみ。薬を以て病を攻めんとせば、その未だ食せずして、内虚なるに乘じ、之を服すれば、薬力をして行はれ易からしむ。食後に之を服すれば、但だ穀を攻めて薬力すでに盡きん。若し性を養はんとして、食前に服薬するときは、薬力未だ行はれざるに、穀に騙られて下り去りて、体内に止まるを得ず、故に益なきなり。

或る人問うて曰く、

薬を服して性を養ふに、宜しき所ありといふ、果して然るか。

抱朴子曰く。

玉策記及び開明経を按ずるに、皆な五音六属を以て、年命の所在を知る。子午は庚に属し、卯酉は己に属し、寅申は戊、丑未は亥、辰戌は丙、己亥は丁に属す。一言之を得る者は宮と土なり。三言は徴と火なり、五言は羽と水、七言は商と金、九言は角と木なり。若し本命土に属すれば、青色の薬を服すべからず、金に属すれば赤色を服すべからず、木に属すれば白色、水は黄色、火は黒色を服すべからず。薬は五行の義を用ふ、木は土に剋^かち、土は水に剋ち、水は火に剋ち、火は金に剋ち、金は木に剋つが故なり。金丹大薬の如きは、復た宜と不

宜とを論ずるの要なし。

一言宮 庚子庚午 辛未辛丑 丙辰丙戌

丁亥丁巳 戊寅戊申 己卯己酉

三言徵 甲辰甲戌 乙亥乙巳 丙寅丙申

丁酉丁卯 戊午戊子 己未己丑

五言羽 甲寅甲申 乙卯乙酉 丙子丙午

丁未丁丑 壬辰壬戌 癸巳癸亥

七言商 甲子甲午 乙丑乙未 庚辰庚戌

辛巳辛亥 壬申壬寅 癸卯癸酉

九言角 戊辰戊戌 己巳己亥 庚寅庚申

辛卯辛酉 壬午壬子 癸丑癸未

禹歩法 前拳左 右過左 左就右

次拳右 左過右 右就左

次拳左 右過左 左就右

此の如くにして三步すれば、二丈一尺とするべし、すべて九跡あり。

小神丹方は、真丹三斤、白蜜一斤を和合して、日に曝さらし之を煎いりて丸藥となし、毎旦麻実

ほどのもの十丸を服すれば、一年ならずして、白髪は黒く、墮齒^だは生じ、身体潤沢なり。長く服すれば、老人も少年となりて死せず。

小餌黄金方は、火にて黄金を銷かし、清酒の中に入らせしむること二百回なれば、酒即ち沸く。やがて之を握れば、泥の如く指の間より漏れ出づ。更に再び之を銷かして、酒中に入らせしむること無数なれば、弾丸の如きものとなる。之を分服すること三十日なれば、寒温を感じず、神人玉女来り侍す。

銀も、また金と同じく之を服すべし、此二物を服して、名山石室の中に入ること一年なれば、即ち輕拳せん。若し人間に在らば之を地仙と称す、妄りに人に伝ふるなかれ。

両儀子の餌銷黄金方は、猪負、革肪三斤、醇苦酒一斗の中に、黄金五兩を置きて、之を煎じ、金を以て肪中に入らせしむること百回、苦酒も亦此の如くす。一斤の金を食へば、寿は天地に同じ、半斤を食へば二千歳、五兩ならば千二百歳を得。王相の日を以て、之を作れば、神良なり。人に伝ふる勿れ、若し伝ふれば、薬成るも神ならざるなり。

三戸を去るの薬を食はんとせば、当に丹砂^{まき}を服すべし、其の法は丹砂一斤を擣きて、篩にかけ、和するに醇苦酒三升、淳漆一斤を以てし、微火にて之を煎じて、丸薬となす。麻実ほどの分量三丸を、一日二回服すれば、腹中の百病愈えて、三戸去る。百日の後には、肌骨堅強、千日の後には、司命の神は、死籍よりその人の名を削り去りて、天地日月と寿を同じくす。

形を改め容を易へて、変化常なく、日中と雖も影なくして、別に光あり
(本篇の末段は通行本と稍や異なり)

抱朴子内篇卷十二

辨問

(仙術信ずるに足らずといふを駁す)

或るひと問うて曰く、

若し仙なるもの必ず得べくんば、聖人は已に之を修めたりしならん。しかるに周公・孔子の之を為さざりしは、これこの道無きこと知るべき也と。

抱朴子答へて曰く、

夫れ聖人は必ずしも仙ならず。仙人は必ずしも聖ならず。聖人は天命をば受けたれども、長生の道には値はずして、たゞ自ら残を除き、賊を去り、険を夷げ、暴を平げ、礼を制し、樂を作り、法を著し、教を垂れ、不正の風を移し、流随の俗を易へ、将に危からんとするの主を匡し、亡びんとして微なるの国を扶けんことを欲して、詩と書とを刊し、河図洛書を撰し、經話を著し、雅と頌とを和し、董蒙を訓へ、諸国に応聘し、煙突に烟を凝すことなく、座席も煖なるに暇あらず。その事は則ち鞅掌して極りなく、年を窮めて已むことなし。亦た焉ぞ能く、聰を閉ぢ、明を掩ひ、内視し、反聴し、呼吸し、導引し、長く斉し、久しく潔くし、水に入りて金を淘り、山に登りて藥を採り、息を数へ、神を思ひ、穀を断ち、腸を清くせんや。仙に至りては、唯だ、すべからく志を篤くし、至信にして、勤めて怠らざるべし。能く恬に能く静にして、すなはち之を得べし。多才なるを待たざるなり。俗に入るの高真(真の字疑ふらくは具に作るべし)

なること有るは、乃ち道者の重き累たり。一の大業を調合することを得て、一を守り神を養ふの要を知れば則ち長生久視す。豈に聖人の修め為す所の者の云云の無限なるが如くならんや。且つ夫れ俗にいはゆる聖人は、皆、世を治むるの聖人にして、道を得るの聖人に非ず。道を得るの聖人は則ち黄帝老子これなり。世を治むるの聖人は則ち周公孔子これなり。黄帝は先づ世を治めて、しかる後に登仙す。此はこれ偶ま能く兼ねるの才ある者なり。古の帝王の泰山に刻したりしものゝ中に、省みて読むべきものは七十二家あり。その餘の磨滅したるものは、勝^あげて数ふべからず。しかるに独り黄帝の仙を記したるを以て見れば、その審^{つまびらか}に然ること知るべきなり。

世人は、人の尤も長ずる所にして衆の及ばざる所の者を以て、すなはち之を聖と謂^いへり。故に圉^{いご}碁を善くする事の無比なる者をば則ち之を碁聖と謂ふ。故に嚴子卿^{（太の七五三）}と馬綏明とは今において碁聖の名有り。史書を善くすることの時に絶^{すく}れたる者をば、則ち之を書聖と謂ふ。故に皇象と胡昭とは今において書聖の名あり。図画を善くする事の人に勝れたる者をば、之を画聖といふ。故に衛協と張墨とは今において画聖の名有り。刻削を善くすることの尤も巧なる者をば則ち之を木聖と謂ふ。故に張衡と馬鈞とは今において木聖の名有り。故に孟子は謂へらく、伯夷は清の聖なる者なり、柳下惠は和の聖なる者なり、伊尹は任の聖なる者なりと。吾れ試みに推演して之を論ぜんに、則ち聖は一事にあらず。夫れ公輸班^{こうしゅはん}と墨翟^{ぼくてき}と偁^すと

は機械の聖なり、兪跗ゆふと扁鵲へんじやくと秦和と秦綏すとは疾を治むるの聖なり、子葦と甘均とは占候の聖なり、史蘇しそと辛廖しんれうとは卜筮の聖なり、夏育と杜回とは筋力の聖なり、荊軻けいかと聶政ぜふせいとは勇敢の聖なり、飛廉とこほと夸父こほとは輕速の聖なり、子野（晋の師曠）と延州（延陵の季子）とは音を知るの聖なり、孫武と呉起と韓信と白起とは兵を用ふるの聖なり。聖は人事の極号なり。独り文学に於てするのみにあらず。莊周が云ふ、盜に聖人の道五つあり、妄意して人の藏を知る者は明めいなり、先づ入りて疑はざる者は勇なり、後に出でて懼れざる者は義なり、可否の宜しきを知る者は知ちなり、財を分つこと均同なるは仁なり、この道を得ずして天下の大盜となる者は未だこれ有らざるなりと。

或る人の曰く、

聖人の道は枝分葉散するを得ず、必ず總すべて之を兼ねて然る後に聖と為すと。

余之に答へて曰く、

孔子の門徒の中、達する者は七十二人にして、各、聖人の一体を得たりとは、これ聖事にも剖判すること有るなり。又云ふ、顔淵は体を具へてしかも微なりとは、これ聖事にも厚薄あるなり。又、易えきに曰く、聖人の道四つ有り、以て言ふ者はその辞を尚たつとび、以て動く者はその変たつとを尚たつとび、以て器を制する者はその象しやうを尚たつとび、以て卜筮する者はその占せんを尚たつとぶとは、これ則ち聖道わ分わかつべきの明証なり。何すれぞ、道德に善くして以て神仙を致す者をば、独り之を

以て道を得るの聖と為すといふべからざらんや。苟も道を得るの聖有らずんば、則ち周公孔子も世を治むるの聖となすことを得じ。聖は既に一に非ず。何を以て当に相兼ねしむることを責むべきか。

按ずるに、仙經に以為へらく、諸の仙を得たる者は、皆その命を受くるや、偶たま、神仙の氣に値へり。自然の稟くる所、故に胞胎の中に已に道を信ずるの性を含めり。その識ること有るに及びては、則ち心にその事を好み、必ず明師に遭ひて其の法を得。然らずんば、則ち信ぜず求めず。求むとも亦た得ざるなり

玉鈴經に云ふ、主命は原と人の吉凶に由り、長短は胎を結び氣を受くるの日に於てし、皆、かみ上にして列宿の精を得。その聖宿に値ふときは則ち聖なり。賢宿に値ふときは則ち賢なり。文宿に値ふときは則ち文なり。武宿に値ふときは則ち武なり。貴宿に値ふときは則ち貴なり。富宿に値ふときは則ち富なり。賤宿に値ふときは則ち賤なり。貧宿に値ふときは則ち貧なり。寿宿に値ふときは則ち寿なり。仙宿に値ふときは則ち仙なり。又た神仙聖人の宿あり。治世聖人の宿あり。二聖を兼ねるの宿あり。貴くして富まざるの宿あり。富みて貴からざるの宿あり。富と貴とを兼ねるの宿あり。先に富みて後に貧しきの宿あり。先に貴くして後に賤しきの宿あり。貧と賤とを兼ねるの宿あり。富貴終へざるの宿あり。忠孝の宿あり。兇惡の宿あり。此の如きは具に載すべからず。その較略は此の如し。人生本と定命ありとするは、張

車子が説これなり。苟も神仙たるの命を受けずんば、則ち必ず仙を好むの心無し。未だ心に之を好まずしてその事を求むる者は有らざるなり。未だ求めずして之を得る者は有らざるなり。古へより今に至るまで、高才明達なれども仙の有ることを信ぜざるものあり。平平の許人にして学びて仙を得るものなり。甲は鑒識する所多けれども、或は仙に蔽はれ、乙は通ぜざる所多けれども、偏にその理に達せり。これその天命の然らしむる所にあらずや。

夫れ道家は仙術を宝として秘す。弟子の中にも尤も簡拙することを尚ぶ。至精いよいよ久しくして、然して後、之に告ぐるに要訣を以てす。況や世人に於ては幸に自ら信ぜず求めず。何すれぞ強ひて以て之に語るべけんや。既に化して之を信ぜしむること能はず、又將に嗤を招き謗を速かんとす。故に道を得たるの士は世人と路を異にして行き、処を異にして止まり、言もて之と交らんことを欲せず、身もて之と雑らんことを欲せず、千里を隔て、も猶ほ以て頬舌の攻を遠ざかるに足らざらんことを恐れ、軌迹を絶ちても猶ほ以て毀辱の醜を免るゝに足らざらんことを恐る。貴も以て之を誘ふに足らず、富も以て之を移すに足らず。何ぞ肯て当に自ら俗士に銜ひて我に仙法有りと言ふべけんや。これ蓋し周公孔子の仙道を知るに縁無かりし所以なり。

且つそれ周公孔子は蓋しこれ高才大学の深遠なる者のみ。小小の伎をだに猶ほ多く閑はず。之をして丸を跳らし、劔を弄し、鋒を踰え、鉄を投じ、綱を履み、幢に登り、盤を摘み、案

に縁り、跟は万仞の峻峭に挂りて、呂梁の不測に游泳し、手は千鈞を扛げ、足は驚颺を躡み、虎を暴にし、豹を檻にし、飛捷の矢を攬らしめんに、凡人は之を為して、周公孔子は能くせず。況んや之に過ぐる者をや。他人の念慮する所、蚤蝨の背向する所、牆を隔てたる朱紫、林の下、草芥、匣匱の書籍、地の中の宝蔵、豊林邃藪の鳥獸、重淵洪潭の魚鱉を指して、周公孔子をしてその彩色を委曲にし、その物名を分別し、その多少を経列し、その有無を審実せしめば、未だ必ずしも盡く知ること能はず。況んや此より遠き者をや。

聖人たりとも、食はざれば饑ゑ、飲まざれば渴き、之を灼けば熱し、之を氷らせば寒え、之を撻てば痛み、之を刃すれば傷つき、歳久しければ老い、損傷すれば痛み、氣絶ゆれば死す。これはこれ、その凡人と異なること無き者甚だ多し。而してその同じからざる所以のものは至つて少し。人に過絶する所以の者は、ただ才長く、思遠く、口給し、筆高く、徳全く、行潔く、強訓にして博聞なることに在るのみ。亦たいづくんぞよく事の兼ねざる無からんや。すでに典謨を著作し、上を安んじ民を治めたるに、また之をして仙道を知りて長生不死ならしめんと欲し、此を以て聖人を責むるは、何ぞそれ多きや。

吾聞く、至言は俗耳に逆ひ、真語は必ず衆儒に違ふと。士の卒に吾がこの書を覽る者は、必ず吾をもて聖人を非毀するものと謂はん。吾れ豈に然らんや。ただ物理を窮め盡すのみ。理盡し事窮まれば、則ち周公孔子を謗るに似たり。世人は謂へらく、聖人は天より降りたるも

のにて神靈の物なり、知らざることなく、能くせざることなしと。甚しいかな、その名に服
 し畏れて、敢てまた之を料るに事を以てせざるや。聖人の能くせざる所は人また之を能くす
 る者なしと為すなり。聖人の知らざる所は人また之を知る者なしと為すなり。亦た笑ふべき
 ことならずや。今具に迹事を以て之を校へ、想ひて以て悟るべきなり。完山の鳥の生を売り
 死を送るの声をば、孔子之を知らず、便ちまた顔回のみ只だ偏に之を解すべしと謂ふべけん
 や。太山の婦人の哭するを聞きて、之に問ひて乃ち虎のその家の三人を食ひたることを知り、
 又この婦人が何を以て徙り去らざるかの意を知らずして、答を須ちて乃ち悟る。雀を羅にす
 る者の絶ら黄口のみを得るを見て、その意を辯ぜずして、之を問ひて乃ち覺る。母を葬らんと
 欲するに及びて、父の墓の所在を知らずして、人の之を語るを須ち、既に定まりて墓崩れ
 て又之を知らず、弟子之を語りて乃ち泫然として涕を流す。また顔淵の盜食するかを疑ひて
 乃ち言を先人を祭らんと欲するに仮りて塵を憊ふの虚偽をトす。厩焚けてまた人馬を傷つく
 るや否やを知らず。顔淵後れたりしをば、すなはち之を已に死せりと謂ふ。また七十餘国に
 周流して、人の必ず之を用ひざることを逆め知るあたはず、栖栖遑遑として席の温まる暇
 もなし。また匡人之之を囲むに当りて、その道に由ることを知らず。老子に問ふに古の礼を
 以てしたるは、礼に解せざる所あるなり。郷子に問ふに鳥官を以てしたるは、官に識らざる
 所あるなり。行きて津を知らず、人をして之を問はしめ、また問ふ所の人の必ず之を譏りて

その路を告げざることを知らざりき。若し爾^{しか}を知るべくんば問はざりしならん。車を下りて風を歌ふ者を逐ひたれども、彼の住らざるを知らざりしなり。南子^{（衛国の君の夫人）}に見えたるはその益無きことを知らざりしなり。諸の此の如きの類をば具^{（つぎ）}に挙ぐべからず。ただ仙法を知らざるのみをば何ぞ怪むに足らんや。

また俗儒は、聖人の能くせざる所をば餘人は皆能くせずと云へり。然らば、宕人^{（たうじん）}は水居し、梁母^{（りやうぼ）}は火化し、子伯は至熱に耐へ、仲都は酷寒に堪へ、左慈は兵解せられて死せず、甘始は糧^{（や）}を休めて以て歳を経^{（へ）}（仲都以下の四人は神を見よ）范軼^{（はんいつ）}は斫^{（き）}られても入らず（明^{（不）}）鼈令^{（べつれい）}は尸^{（しかばね）}を流して更に生き（本書の第八）少千は百鬼を執^{（とら）}へ（上司）費長房は地脈を縮め（神を見よ）仲甫は形を晨冕^{（しんふ）}に仮^{（か）}り（神を見よ）張楷は吹嘘^{（すゐきよ）}して雲霧を起せり（後の張覇伝）未だ周公孔子の能くこの事を為すを聞かざるなり。

俗人或は曰く、周公孔子皆よくこれを為せども、ただ為さざるのみと。

吾之に答へて曰く、必ずしも之を明文に求めずして空を指して以て浮言せば、吾は便ち謂^{（い）}ふべし、周公孔子能く翮^{（かく）}を振ひて翻飛し、八極に翱翔して、雲を興し、雨を致し、山を移し、井を抜くべきも、ただ為さざるのみと。一に記籍の見事を以て拠^{（よ）}と為さざる者は復た何ぞ限らんや。必ず云ふ所のごとくんば、吾もまた以て次の如く言ふべし。周公孔子は皆已^{（すで）}に昇仙したれども、たゞこの法の以て世を訓ふべからざるによりて、恐らくは人皆不死の得べきを知らば、皆必ず悉く供養を委^{（す）}て、進官を廢^{（や）}めて、危きに登り深きに浮びて以てこの道を修め

んことを。これ家にまた子孫無く、国にまた臣吏無きなり。忠孝竝に喪^{ぼう}び、大倫必ず乱れな
 ん。故に周公孔子は密に自ら之を為して、しかも秘して人に告げず、外は終亡の形に託して、
 内は上仙の術有りと。この如く言はば、子もまた將に何を以て吾を難ぜんとするか。亦また
 未だ必ずしも然らずんばあらざるなり。

靈宝經に、正機^{せいき}、平衡^{へいかう}、飛龜^{ひき}、授秩^{じゆちつ}凡そ三篇ありて、皆仙術なり。呉王石を伐^きりて以て宮
 室を治めて、合石の中に於て紫文金簡の書を得しが、之を読む能はざりしかば、使者に之を
 持ちて仲尼^{ちゆうに}（子孔）に問はしめて、仲尼を欺きて曰く、「呉王の閑居せしとき、赤雀ありて書を
 銜^{ふく}みて殿上に置きたりしが、その義を知らざるが故に、遠く諮^とひて呈す」と。仲尼之を視て
 曰く、「此れは乃ち靈宝の方、長生の法にして禹の服する所なり。隠れて水邦に在りて、年は
 天地と齊^{ひと}しくして、紫庭に朝する者なり。禹の將^{まさ}に仙化せんとせしとき、之を名山の石函の
 中に封じたりき。乃ち今赤雀の之を銜めるは殆ど天の授けたるなり」と。此を以て之を論ず
 れば、夏の禹王は死せざるなり。而して仲尼もまた之を知れり。いづくんぞ仲尼の皆密^{ひそか}しそ
 の道を治めざりしを知らんや。

正にまた聖人をして此事を為さざらしむとも、未だその故無しとはいふべからざるなり。人
 の好み惡む所は各同じからず。之を喻ふるに面を以てするは、豈に信ならずや。誠にその意
 に合すれば、小と雖も必ず為すなり。その神に合せざれば、大と雖も学ばざるなり。苦^{にが}を好

み甘を憎むことは既に皆有り。利を嗜み義を棄つるもまた無数なり。聖人の大宝を位と曰ふ。
 何を以て人を聚むるか。曰く財と（易經の語）又た曰く富と貴とは是れ人の欲する所なりと（論語の文）
 しかるに、昔己に之に禪るに帝王の位を以てすれども用ひず、之に委ぬるに四海の富を以て
 すれども願はず、三公九卿の官を蔑にし、玉帛の聘に背き、山林の高潔を遂げ、魚釣の陋し
 き業を甘んずる者有り。蓋し勝げて数ふべからざるのみ。また曰く男女と飲食とは人の大欲
 の存する所と。（礼記の文）是を以て好色をば諫むべからず、甘旨は憂を忘るべし。しかるに、昔
 には穀を絶ち、美を棄て、妻妾を畜へず、超然として独在し、悟言して意を得、影を顧みて欲
 を含み、流に嗽ぎて味を忘るゝ者有り。又勝げて記し難きなり。人の情は紅顔艶姿輕体柔身
 を愛せざるることなし。しかるに黄帝は甚だしく醜なる媒母を悦び、陳侯は憎むべきの敦治を
 怜む。人の鼻は香を楽しむざることなし。故に、流黄、鬱金、蘭麝、蘇合、玄胆、素膠、江離、
 揭車、春蕙、秋蘭は伽瓊瑤に同じ。しかるに海上の女は酷臭き夫を逐ひ之に随ひて止まず。
 人の口は甘きを悦ばざることなし。しかるに周の文王は美ならざる菹を嗜みて、以て大牢の
 滋味に易へず。人の耳は樂を喜ばざることなし。しかるに魏の明帝は上手なる鑿の声を好み
 て、以て糸竹の和音に易へず。人おのゝ意あり。いづくんぞ此の以て彼に同じきを求むべ
 けんや。

周公孔子は自ら偶ま仙道を信ぜず。日月も照さざる所あり、聖人も知らざる所あり。それ

聖人の為さざる所なるを以て、すなはち天下に仙なしと云ふべけんや。これ三光の覆盆ふくぼんの内を照さざるを責むるなり。

抱朴子内篇卷十三 極言（仙道の理を極論す）

或る人問うて曰く、

古の仙人はみな学に由りて以て之を得たり。特に異氣を稟けたるによるものならんやと。

抱朴子答へて曰く、

是れ何の言ぞや。彼は笈を負ひて師に随ひ、その功勤を積み、霜を蒙り險を冒し、風に櫛り雨に沐ひ、而して躬親ら灑掃し、契潤にして芸に勞す。始めは之を見るに信行を以てし、終りは試みらるるに危困を以てす。性篤く行真にして心に怨貳あること無くして、乃ち堂に升りて以て室に入るを得たり。或は怠厭して中止するあり。或は怨恚して退くことを造すあり。或は榮利に誘はれて還りて流俗の事を修むるあり。或は邪説に敗られてその淡泊の志を失ふあり。或は朝に為して夕にその成るを欲し、或は坐して修めて立ちてその効を望む。若しそれ財色を靚て心戦かず、俗言を聞きて志沮まざる者は、万夫の中に一人あるもなほ多しと為す。故に為す者は牛毛の如くなれども獲る者は麟角の如きなり。それ弓弩を設く者は力を発箭に効し、大川を渉る者は全きを既済に保す。井の泉に達せざるはなほ掘らざるがごときなり。一步の未だ至らざるはなほ往かざるがごときなり。修き塗の累れるは晷を移すの臻る所にあらず。霄を凌ぐの高きは一つの簣の積むところにあらず。しかも峻しきに升るものは上るに

垂なんなんとして力の足らざるを患へ、道を為なむる者は方に成らんとして志の遂げざるを病む。千倉万箱は一耕の得る所にあらず。千尺の木は旬日にして長ぜず。不測の淵は汀てい濼えいに起り、陶朱の資は必ず百千を積む。若し乃ち人退きて己進むは陰長生（神を）（見よ）が至道を窮むる所以なり。卒をはりを敬すること始めのときは羨門（前に）（出づ）が雲竜を致す所以なり。我が志だに誠に堅くば、彼は何人ぞや。

抱朴子が曰く、俗民は既に生を生とする能はずして、生を煞ころす所以を務む。夫れ盡くることと有る物は、已やむこと無き耗へに給する能はず。江河の流も底無き器を盈みすこと能はざるなり。凡そ人の利入少くして費用多きものはなほ供せざるがごときなり。況んや錙銖ししゆの来ることなくして千百の往くことあるをや。人は少長となく、疾やまひあらざるなし。ただ輕重の差別あるのみ。而して氣を受くることは各多少あり。多き者はその盡くること遅く、少き者はその竭つくること速なり。その道を知る者の補ひて之を救ふには、必ず先づ故ふるを復して然る後方に量表の益を求むるなり。若し服食すること旬日なるときは肉飛び骨騰のぼり、導引すること塑を改むるときは羽翮うかくしん参差せば、世間には道を信ぜざるの民無からん。升勺の利未だ堅からざるに鍾石の費相尋ぎ、根荖こんがいの拋き未だ極らざるに氷霜の毒交攻むるを患へては、過あやまちの己に在るを知らずして反かえりて道の益なきを云ふ。故に丸散を捐すて、吐納たを罷やむ。故に曰く。長生の難きに非るなり、道を聞くことの難きなり。道を聞くことの難きにあらざるなり、行の難きなり。行の難

きにあらざるなり、終るの難きなりと。

良匠は人に規矩を与ふれども、人をして必ず巧ならしむる能はざるなり。明師は能く人に方書を授くれども、人をして必ず為さしむる能はざるなり。夫れ之を修むるはなほ穀を播くがごときなり。之を成すはなほ穀を収むるがごときなり。其田は沃なりといへども、水沢は美なりといへども、之を為すに天の時と耕鋤とを失はば、又登りたる稼の壟に被るには至らざらん。穫らず刈らずんば頃畝多しともなほ獲ることなきがごとし。凡夫はただ益の益たるを知らざるのみならず、又損の損たるを知らざるなり。夫れ損は知り易くして速かなれども益は知り難くして遅し。人は尚ほその易きをも悟らざるにいくんぞよくその難きを識らんや。夫れ之を損する者は燈火の脂を消するが如し。之を見ることなくして忽ちに盡く。之を益するものは苗木の播殖するがごとし。(以下数十行通行本に缺けたり)之を覺ることなくして忽ちに茂る。故に身を治め性を養ふものは務めてその細なるを謹む。小益を以て不平なりと為して修めずんばあるべからず。小損を以て傷無しと為して防がずんばあるべからず。凡そ小を聚むるは大を就す所以にして、一を積むは億に至る所以なり。若しよく之を微なるに愛み、之を著なるに成さば、則ち道を知るに幾からん。

或る人問うて曰く、

古へは豈に施し行ふ所なくして偶ま自ら長生したる者有りしかと。

抱朴子答へて曰く、

無し。或は名師に随ひて、功を積み勤を累ね、便ち賜ふに合成の薬を以てせらるるを得、或は秘方を受けて、自ら作事を行ひ治めて世に接せず、言は俗に累せられずして、而して記著する者は、ただ其の姓名を存するのみにして、その仙を得たりし所以の者をば具に知ること能はず。故に闕如するなり。昔し黄帝は生れながらにして能く言ひ、百霊を役使す。天授自然の体なる者と謂ひつべきなり。しかもなほまた端坐して道を得ること能はざるが故に、王屋山に陟りて丹經を授けられ、鼎湖に到りて流珠を飛ばし、空峒山に登りて広成子に問ひ、具茨に之きて大隗に事へ、東岱に適きて中黄に奉じ、金谷に入りて滑子に諮ひ、道養を論ずるときは則ち玄と素との二女に資り、推歩を精しくするときは則ち山嵇と力牧とを訪ひ、占候を講ずるときは則ち風后に詢ひ、休診を著はすときは則ち雷公と岐伯とに受け、攻戦を審にするときは則ち五音の策を納れ、神奸を窮むるときは則ち白沢の辞を記し、地理を相るときは則ち青鳥の説を書し、傷残を救ふときは則ち金冶の術を綴る。故に能く畢く秘要を該ね、道を窮め真を盡し、遂に竜に乗りて以て高く躋り、天地と与にして極りなきなり。然るに、神仙の經を按ずるに、皆云へり、黄帝及び老子は太乙元君に奉事して以て要訣を受くと。況んや彼の二君に速ばざる者は安ぞ自ら仙を得て世を度する（解脱す）者有らんや。未だ之を聞かざるなり。

或る人の曰く、

黄帝は仙を審つまひらにする者なるに、橋山の塚あるは又何の為ぞやと。

抱朴子答へて曰く、

按ずるに、荆山けいざん経及び竜首記に皆云ふ、黄帝が神丹を服したる後に、竜来りて之を迎へたりしが、群臣追慕して思を措おく所なく、或はその几杖を取りて廟を立て、之を祭り、或はその衣冠を取りて葬りて之を守れりと。列仙伝に云ふ、黄帝は自ら亡日を挾つかびて、七十日にして去り、七十日にして還り、喬山に葬りしに、山陵忽ち崩くづれて、墓空しくして尸しかばね無く、ただ劍つるぎと鳥くわとのみ在りきと。此の諸説は異なれども、要するに、仙と為りたるなり。黄帝の仙となりしことを云ふ者の道書及び百家の説に見えたるもの甚だ多し。しかるに、儒家は肯あへて奇怪を長じ、異塗を開かずして、礼教に務めたれば、神仙の事は以て俗を訓しふべからざるが故に、その死したるを云ひて以て民の心を杜ふぎたるのみ。朱邑（漢の循吏伝）、樂巴（神の五）、于定国（漢の本伝）は民に功惠ありしかば、百姓皆生きながら之が為に廟を立て、祠れり。又古への盛徳の人は、身まかりし後臣子たるもの其の勲績を不朽の器に刊かんしたり、而して今の世にも、君長の遷転するとき、吏民思ひ恋ひて徳頌の碑を樹たつる者、往々にして有り。これまた黄帝に廟墓有るの類なり。豈に以てその必死を証するに足らんや。

或る人間うて曰く、

彭祖^{ほうそ}は八百、安期は三千、これ寿の人に過ぎたるものなり。若し果して不死の道あらば、彼れ何ぞ遂に仙とならざりしか。豈に命を稟^うけ氣を受くること自ら長短有りて、彼れたまたまその多きを得たるによりて、理として延ばすべからざるが故に、彫隕^{てうあん}を免れざりしにあらずやと。

抱朴子答へて曰く、

按ずるに、彭祖^{ほうそ}経に云ふ、それは帝嚳^{ていこく}の時より始めて、堯^{げう}を佐^{たす}け、夏^かを歴^へて、殷^{いん}に至りて大夫と為る。殷王は紂女^{さうじょ}を遣して房中の術に従はしめ、之を行ひて効ありしかば、彭祖を殺してその道の伝を絶たんと欲す。彭祖は之を覺^{さと}りて逃れ去れり。去りし時は年七八百餘なり（以上数十行通行）死したるにあらずと。黃石公が記に、彭祖去りて後、七十餘年にして、門人流沙^{りうしゃ}の西にて之を見たりと云へば、死したるにあらざること明けし。また彭祖が弟子なる青衣鳥公、黒穴公、秀眉公、白兔公子、離婁公、太足君、高丘子、不肯來の七八人はみな數百歳を歴^へて、殷に在りて各仙し去れり。況んや彭祖たるもの何ぞ肯^{あへ}て死せんや。また劉向^{りうきやう}が記す所の列仙伝にも亦た言ふ、彭祖はこれ仙人なりと。また安期先生は薬を海辺に売れり。琅琊^{らうや}の人世を伝へて之を見たること、計^するに已に千年なり。秦の始皇^{しやう}請ひて与に語ること三日三夜なりしに、その言は高く、その旨^{むね}は遠く、博くして証ありしかば、始皇は之を異^{あや}みて乃ち之に金と璧^{へき}とを賜へり。その価數千萬に直^{あた}るべし。安期受けて之を阜郷亭^{ふきやうてう}に置き赤玉の鳥^く一量

を以て為に報じ、書を留めて曰く、また数千載にして我を蓬萊山に求めよと。かくの如くなれば、これ始皇に見えたる時には已に千歳となりしなり。死したるにはあらざるなり。また始皇は剛暴にして驚狼なれば、量るにこれ天下に於いて応に神仙を信ずることあるべからざる者なり。また理に合せざるの言を以て之に答対すべからざる者なり。しかるに安期に問ふに長生の事を以てするに至りては、安期の之に答ふること允に当り、始皇は慍悟して世間に必ず仙道あるを信じ、既に厚く恵み遣り、また甘心して不死の事を学ばんと欲したり。ただ明師無きによりて、盧敖、徐福が輩に欺弄せられたるが故に之を得ること能はざりしのみ。さきに安期生が言ひし所をして、抛なきものならしめば、三日三夜の中には以て窮し屈するに足れり。しからば、必ず將に始皇のために烹煮屠戮せられて鼎俎の禍を免れざらんとす。その厚恵をば安ぞ得べけんや。

或る人間うて曰く、

世に藥物を服食し、氣を行らし導引して、なほ死を免れざる者あるは何ぞや。

抱朴子答へて曰く、

金丹を得ずしてただ草木の藥のみを服するもの、及び小術を修むる者は、以て年を延べ死を遅くすべきのみ。仙たるを得ざるなり。或はたゞ草藥を服することのみを知りて、還年（せんねん）（房中に作る）の要術を知らざるときは、終に久生するの理なきなり。或は神符を帶び、禁戒を行ひ、

身神を思ひ真一を守ることを曉らざるときは、正に内に病をして起らざらしめ風湿をして犯さざらしむべきのみ。若し卒に惡鬼、強邪、山精、水毒ありて之を害せば、便ち死なん。或は山に入るの法を得ずして、山神をして之が為に禍を作さしめば、妖鬼は之を試み、猛獸は之を傷り、溪毒は之を繋け、蛇蝮は之を螫して、以て多く死することを致さん。事は一條にあらざるなり。或は道を修むること晩くして、先に自ら損傷すること已に深きときは、補ひ復すべきこと難し。補ひ復するの益未だ根柢を得ざるに、疾は随ひてまた作らん。これ等は皆剋伐する所以の事なれば、また何に縁りて長生するを得んや。

或は年老いて道を為して仙たるを得る者、或は年少なくして道を為して成らざる者は何ぞや。彼は年老いたれども氣を受くること本と多し。氣を受くること本と多ければ、傷へること淺し。傷へること淺ければ救ひ易し。救ひ易きが故に仙と成るを得るなり。此は年少けれども氣を受くること本と少し。氣を受くること本と少ければ、傷へること深し。傷へること深ければ救ひ難し。救ひ難きが故に仙と成らざるなり。夫れ木槿と楊柳とは斷りて之を殖うるも更に生じ、倒にしても生じ、横にしても生ず。生ずるの易きはこの木に過ぎたるものなし。然も之を埋むること既に淺ければ、また久しきことを得ず。乍ち刻し、乍ち剥し、或は揺し、或は抜かば、壅ぐに膏壤を以てし浸すに春沢を以てすとも、なほ枯瘁することを免れざるは、その根莖の固からざるを以て、その萌芽津液を吐くに暇あらずして、遂にその生氣

を結ぶことを得ざればなり。人生の体たるや、傷はれ易く養はれ難し、之を二木に方ぶれば、及ばざること遠し。しかるに之を攻毀する所以の者は、刻剥よりも過ぎ、揺拔よりも劇しく、之を済ふ者は鮮く、之を壞る者は衆し。死することはそれ宜なり。夫れ故きを吐きて新しきを入れるは氣に因りて以て氣を長ずるなり。しかるに氣の大に衰へたるものは長ぜしめ難し。藥物を服食する者は血に因りて血を益すなり。しかるに血の竭くるに垂んとするものは益さしめ難し。夫れ奔馳して喘逆し、或は欬し或は懣え、方を用ひて体を役し、汲々として短乏なる者は、氣の損ずる兆候なり。面に光色なく、皮膚枯腊し、唇焦き、脈白く、腠理の萎瘁する者は血の滅する証拠なり。二証既に外に衰ふれば、靈根もまた中に彫む。かくの如くなれば上藥を得ずんば救ふこと能はざるなり。凡そ道を為しても、生を営むことを成さずして死を得る者は、その人に氣血あらざるにはあらざれども、身中の氣たり血たる所以の者の、根源已に喪びて、ただその枝流を餘すのみなればなり。譬へば、水に入りたる燼は火滅えても烟息まず、既に断られたる木も柯葉なほ生くるがごとし。二つの者は烟の有らざるにもあらず、葉の有らざるにもあらざれども、その烟たり葉たる所以の者はすでに先づ亡びたり。世人は病を覺るの日を以て始めて己病めりと為し、氣の絶ゆる日を以て身の喪ぶるの候と為し、唯だ風冷と暑湿とを怨むのみにして、風冷暑湿が壮実の人を侵す能はざるを知らざるなり。ただ体の虚にして氣の少きことを患ふる者は之に堪ふる能はざるが故に中てらるゝのみ。何を

以て之に較べんか。設へば数人あらんに、年紀の老壮は既に同じく、服食の厚薄もまた等しきもの、俱に沙漠の地に造り、竝に嚴寒の夜を冒し、素雪は上より墮ち、玄氷は下に結び、寒風は條を摧きて宵駭き、欬唾は珠を唇吻に凝らすときは、その中將に独り冷に中るものありて、必ずしも盡くは病まざらんとするなり。冷氣の偏することあるにあらずして人体の耐へざるものあるのみ。故に俱に一物を食したるに、或は独り以て病を結ぶものは、この物の偏毒あるにあらざるなり。器を釣しくして斉しく飲みても或は醒め或は酔ふは酒の勢の彼此あるにあらざるなり。同じく炎暑を冒しても、或は独り以て暑さに中りて死するは、天熱の公私あるに非るなり。斉しく一葉を服しても、或は独り昏瞑して煩悶するは、毒烈の愛憎あるに非るなり。是を以て衝風の林に赴くときは、枯れたる柯先づ摧け、洪濤の崖を凌ぐときは、隙を抱くもの頽る。烈火の原を焼くときは燥ける卉前に焚け、竜槐の地に墜つるときは脆き者独り破る。これに由りて以て覩れば、道無きによりて体已に素より病めるを、風寒暑湿に因りて之を發したりしのみ。苟もよく正氣をして衰へしめず、形と神とをして相衛らしめば、よく傷ることなかるべし。凡そ道を為むる者は常に晩からんことを患へて、早からんことを患へざるなり。年紀の少壮にして体力の方に剛きを持つ者は、自ら役すること過差にして、百病兼ね結び、命は朝の露よりも危し。大葉を得ずしてたゞ草木のみを服するときは、以て常の人に差るべきも、その大限を延ばすこと能はざるなり。故に仙經に曰く、養生は傷

はざるを以て本とすと。これは要言なり。神農の曰く、百病愈えずんば、いづくんぞ、長生を得んやと。信なるかな、この言や。

或る人問うて曰く、

所謂之を傷ふとは、それ色欲の間にあらずや。

抱朴子が曰く、

また何ぞ独りこれのみならんや。然して長生の要は、年を還すの道（房中の術）にあり。上士は之を知りて以て年を延べ病を除くべし。その次は以て自ら伐らざる者なり。若し年尚ほ少壯にして年を還すことを知り、陰丹を服して以て腦を補ひ、玉液を長谷に采るものは、藥物を服せざるもまた三百歳を失はざるなり。たゞ仙たるを得ざるのみ。而してその術を得ざる者をば、古人は之を氷の盃に湯を盛り、羽の苞に火を蓄ふるに方べたり。且つ又た才の逮ばざる所にして困思するによりて傷ればなり。力の勝へざる所にして強ひて挙ぐるによりて傷ればなり。悲哀憔悴によりて傷ればなり。喜樂過差によりて傷ればなり。欲する所に汲汲たるによりて傷ればなり、久しく談りて言笑するによりて傷ればなり。寢息時を失ふによりて傷ればなり。弓を挽き弩を引くによりて傷ればなり。沈醉嘔吐するによりて傷ればなり。飽食して即ち臥す事によりて傷ればなり。跳り走りて喘乏するによりて傷ればなり。歛呼して哭泣するによりて傷ればなり。陰陽交らざる事によりて傷ればなり。傷ることを積みて盡くるに

至れば早く亡ぶ。早く亡ぶるは道にあらざるなり。是を以て養生の方は、唾はくことは遠きに及ばず、行くは疾歩せず、耳は聴くことを極めず、目は久しく視ず、坐することは久しきに至らず、臥すことは疲るゝに及ばず、寒に先だちて衣を着、熱に先だちて衣を解き、飢を極めては食はず、食ふときは過飽せず、渴を極めては飲まず、飲むときは過多ならず。凡そ食過ぐれば、積聚を結び、飲過ぐれば痰癖を成す。甚だ勞し甚だ逸せんことを欲せず。起ること晩からんを欲せず。汗の流れんことを欲せず。多く睡らんことを欲せず。車を奔らし馬を走らしめんことを欲せず。目を極めて遠く望まんことを欲せず。多く生にて冷かなるを食はんことを欲せず。酒を飲みて風に当らんことを欲せず。数々沐浴せんことを欲せず。志を広くし願を遠くせんことを欲せず。異巧なるものを規造せんことを欲せず。冬は寒を極めんことを欲せず。夏は涼を窮めんことを欲せず。星の下に露臥せず。眠の中に肩を見はさず。大寒大熱大風大霧をば皆之を冒さんことを欲せず。五味の口に入るときは偏に多からんを欲せず。故に酸多ければ脾を傷り、苦多ければ肺を傷り、辣多ければ肝を傷り、鹹多ければ心を傷り、甘多ければ腎を傷る。これ五行自然の理なり。凡そ傷るといふ者も、またすぐには覚えざるなり。久しければ寿命損ずといふのみ。是を以て善く損生するものは、臥すと起くるとに四時の早晚あり、興ると居るとに至和の常制あり、筋骨を調利するに偃仰の方あり、疾を杜ぎ邪を閑ぐに吞吐の術あり、榮衛を流行せしむるに補瀉の法あり、勞逸を節宣するに与奪の要

あり、怒を忍びて以て陰氣を全くし、喜を抑へて以て陽氣を養ひ、然る後先づ將に草木を服して以て虧け鈍れるを救ひ、後に金丹を服して以て無窮を定めんとす。長生の理は此に盡きたり。もし、意を決し懷に任じて、自ら達識にして命を知れりと謂ひ、情を極め力を肆にして、久生を営まざる者有りて、此の言を聞かば、風の耳を過ぎ電の目を経るといふとも喩ふるに足らざるなり。身は流連の中に枯れ、氣は納綺の間に絶ゆれども、甘心せん。またいづくんぞ之に告ぐるに養生を以てすべけんや。たゞに納れざるのみならずして、乃ち妖訛なりと謂はん。しかして彼の信ぜんことを望むは、所謂明なる鑑を以て矇瞽に給し、糸竹を以て聾夫を娛ましむるなり。

抱朴子内篇卷十四 勤求（勤めて良師を
求むべきこと）

抱朴子曰く、

天地の大徳を生せいといふ。生は物を好む者なり。是を以て道家の至秘しひとして重んずる所の者は長生の方に過ぎたるはなきなり。故に血を飲すすりて誓盟せいめいして乃ち伝ふ。伝ふること其の人にあらざんば、戒いまめは天罰にあり。古の師匠は以て輕かろしく行ひて人に授けず。人の之を求むること至勤しきんなる者を須まちて猶なほ当まさに至情の者を揀えらび選えらびて乃ち之に教ふべしとなせり。況んや好まず求めず之を求むるも篤あつからざる者には、安いづぞ自ら銜てらひ汚うりて以て之に告ぐべけんや。その天命を受くること、仙たるにかなはざる者は日日に群を成したる仙人の世に在るを見るといへども、なほ必ず謂いはん、彼は自ら異種の人にして天下に別にこの物ありと。或は之を呼びて鬼魑きみの変化と為し、或は偶たまま自然にして値あへり、それ肯あへて修為によりて得たるものといふことあらんやと云ふ。苟も信ぜざる所は、赤松子、王子喬をして之に語りてその耳を提ひげしむとも、亦たまさに指して以て妖詛えいくわと為すべし。然も時には頗る信ずることを識しるもの有るも、また勤めて明師を求むる能はざるを患うれとす。夫れ至要きとを曉さとり真道を得る者は誠まことに自ら甚だ稀なれば、倉卒そうそつにして値あふべきにあらざるなり。然も之を知るものは、たゞ少かるべきのみにして、未だ嘗て世に絶たえざるなり。容易に之と遭はざるは之を求むる者の広からず

篤^{あつ}からざるに由れり。仙たるべき命^{めい}ある者は、要するに自らまさに之と相値^{あひ}ふべきなり。然^{しか}も求めて得ざる者は有れども、未だ求めずして得る者は有らざるなり。世間^{おのづか}に自ら奸偽^{かんぎ}にして錢^{はか}を図るの子ありて道士の号を竊^{ぬす}む者は勝^あげて数ふべからざるなり。然^{しか}してこれ等のものもまた肯^{あへ}て挺^{てい}として知る所無しとは謂はざるなり。皆また粗頭角^{ほぼ}を開き、或は妄^{みだり}に名を汚^うり、之に加ふるに邪を伏^ふせ偽を飾るを以てす。而して好事の徒のその真偽を識^しらざる者は徒に之を多^たとして進み問ひ、自ら誑^{みづか}し惑^{たふ}さることを招く。而して之を拘制して、行きて広く奇士異人を尋ぬることを得しめずして、之に告げて、道は此^{これ}に盡きたりと曰ひて、以て志ある者を誤ること少からざるは、歎^{なげ}くべく悲^{いか}るべきなり。その或はまま五雲^{（前に）}を消し、八石を飛ばし、九丹を転じ、黄白水瓊^{（一に權）}（一に權）瑤花朱碧を治め、霜雪を神炉に凝^{こら}し、靈芝^{（靈芝）}を嵩岳^{（嵩岳）}に採ることを曉^{さと}る者あれば則ち多として之を毀^{そし}りて、この法は独り赤松子、王子喬のみ之を知れり、今の世の人にして之を知るといふものは皆虚妄のみと曰ふ。しかるときは浅見^{せんけん}の家はこの言の詐偽有りて作^なせるを覺^{さと}らずして便ち遠く求めんとするの意を息^やむ。悲しいかな。為^{ため}に慨歎すべきものなり。

凌暑颺^{りようきうへうひ}飛は暫く少くして忽ち老ゆ。迅速^{じんそく}の甚しきこと、之を喻ふるに物なし。百年の寿は三万餘日のみ。幼弱は未だ知る所あらず。衰邁^{すゐまい}は則ち歡樂^{（歡樂）}並び廃す。童蒙^{（童蒙）}と昏耄^{（昏耄）}と数十年を除きて險隘^{けんあい}憂病相尋^{（相尋）}ぎて代^かる代^がる有り。世に居るの年は略^{はぼ}その半を消す。計定して百年を得

たる者も喜笑平和は則ち五六十年に過ぎずして、咄嗟にして滅盡す。哀憂昏耄は六七十日のみ。顧眄の間に已に盡く。況んや百年を全くするの万に未だ一も有らざるに於てをや。諦にして之を念ふに、亦た以て彼の夏虫朝菌を笑ふこと無きなり。此の如きは蓋し道知らざる者の到る所なり。悲しいかな。俚語にこれ有り、人の世間に在りて、日に一日を失するは、牛羊を牽きて屠所に詣るがごとし、一步を進むるごとに死を去ること転近しと。この讐は醜なれども実理なり。

達人の死を愁へざる所以の者は、求むるを欲せざるにはあらざれども、また固に死を免る所以の術を知らずして空しく自ら焦愁するも、事に益なきが故に、天を樂み命を知ると云ひて憂へざるのみ。久しく生くることを欲せざるにはあらざるなり。姫公（周公のこと）は武王に代らんことを請ひ、仲尼は杖を曳きて悲しみ懷ふ。こゝに知る、聖人も亦た速に死するを樂まざることを。俗人は莊周に大夢の喩あるを見て、因りてまた競うて共に、死生を齊しくするの論を張る。蓋し詭道、強達、陽作、違抑の言は、みな仲尼が、之を、律を破りたるものなれば応に煞すべしとせしものなり。今、諸の此の談ある者を察するに、疾病を被るときは遽に針灸し、危険を冒すときは甚だ死を畏る。しかして、末俗の通弊は、真信を崇まらずで、典故に背きて子書を治め、若し理に反ける巧辨を吐かざる者は則ち之を朴野にして老莊の学に非ずと謂ふ。故に骨殖なくして俗に偶するの徒を取り、遂に然らざるの説に流漂して、自

ら返ること能はざるなり。老子は長生久視を以て業となし、莊周は尾を塗の中に揺かすことを貴びて、綱を被るの亀、綉を被るの牛と為らずして、餓ゑて粟を河侯に求む。此を以てその死生を齊しくする能はざるを知るなり。後世の学徒は虚実を考校すること能はずして、偏に一句のみに拠れり。また謬らずや。

且つ夫れ深く九泉の下に入りて、長夜極りなく、始めて螻蟻の糧と為りて、終に塵壤と体を合し、人をして怛然として心熱して、覚えず咄嗟せしむ。若し必ず生を求むるの志あらば、何ぞ不急の事を棄置して以て玄妙の業を修めざるべけんや。それ信ぜずんば則ち已む。その之を信ずる者もまた俗情の蕩盡せざるを患ふ。而して専ら養生を以て意となす能はずして世務を営むの餘暇にして之を為す。ゆゑに或は之を為すこと有る者も、恒に晩くして多く成らざるを病む。

凡そ人の汲々たる所のものは勢利嗜欲なり。苟も我が身の全からずんば、高官、重権、金玉は山を成し、妍艷は万をもて数ふといふとも、我が有にはあらざるなり。是を以て上士は先づ長生の事を営む。長生定まりて以て意に任ずべし。若し未だ玄に昇り世を去らずんば、且く人間に地仙たるべし。彭祖老子の如きは、人中に止まること数百歳にして、人理の權を失はず、然して後に、徐々に登遐す。また盛事なり。然して決して好師を須つ。師にして奉ずるに足らざれば、また成るに由なきなり。昔し、漢の太后は夏侯勝に従ひて尚書を受け、勝

に黄金百斤を賜ふ。他の物は勝げて数ふべからず。勝が死に及びて又た勝が家に錢二百万を賜ひ、勝が為に素服すること一百日なりき。成帝（漢前）の東宮にありし時、張禹（ちやうう）に従ひて論語を受けしが、尊位に即つくに及びて、禹に関内侯、食邑千戸を賜ひ、光禄大夫に拜し、黄金百斤を賜ひ、又た丞相（しやうじやう）に遷り、爵を安侯に進む。年老いて骸骨を乞ひしかば、安車駟馬黄金百斤、錢数万を賜ふ。禹の疾むに及びて、天子自ら臨みて之を省（せい）し、親（した）しく禹を牀下（しやうか）に拜せり。章帝（後漢）の東宮に在りし時、桓榮（くわんえい）に従ひて以て孝經を受けしが、帝の位に即くに及びて、榮を以て太常少卿と爲し、天子榮が第に幸し、榮をして東面に坐せしめ、几杖（きやうちやう）を設けて百官及び榮が門生姪（てい）数百人を会し、帝親しく自ら業を持して講説し、榮に爵関内侯食邑五千戸を賜ふ。榮が病むに及びて、天子その家に幸して、巷に入り、車より下り、榮を抱きて趨（はし）ること弟子の礼のごとし。榮が薨（き）ずるに及び、天子榮が為に素服せり。凡そこの諸君は、能く城を攻め野戦（しやうせん）し、衝（しやう）を折（くじ）き境を拓（ひら）き、旌（はた）を懸（か）け、節（いた）を効（いた）し、連方（くじ）を折（くじ）き、元功を転じ、銳（えい）を絶域に騁（は）するにあらざるなり。ただ一經の業を以て、章句を宣伝して尊重せられ、巍々たること此（かく）のごとし。これただ能く死人の餘言を説きしのみなるに、帝王の貴きも、なほ自ら卑く降りて以て之に敬事す。世間或は試みに長生の道を修めんと欲する者有りて、而して肯（あへ）て師に堪へたる者に謙下せずして、直爾（ちよくじ）として、蹴（ふ）み進（せま）り、従ひて至要を求むるもいづくんぞ得べけんや。夫れ学ぶ者の恭遜し驅走するは何ぞ師の分寸に益あらんや。然るに爾（しか）らざるは、則（こ）ち是れ

彼の心盡さざるなり。彼の心盡さるときは則ち人をして之に告ぐることを力めざらしむ。之に告ぐることを力めざれば則ち秘訣何ぞ悉く得べけんや。已むことを得ずんば、当に浮浅なることを以て之に示すべし。豈に以て不死の功を成すに足らんや。また人有りて、皮膚のみ好喜して、道を信ずるの誠は心神に根ざさず、索め取る所有るによりて陽りて曲恭を為すも、累日の間に怠慢已に出でんに、若し明智の師に値はば、しばらく詳に來る者の意態を觀んと欲して試みに以て淹久し、故に之に告げずして以てその志を測らん。則ちかくのごときの人情偽行く行く露はる。亦た終に得て之に教へず。之に教ふるもまた、言を盡し實を吐くを得ず。言盡さざれば、則ち之を為すも益なきなり。陳安世（神を
見よ）は年十三歳にして灌叔本が客子たるのみなるに、先づ仙道を得たりしかば、叔本は年七十にして首皓きも、朝夕に安世を拜して曰く、道尊く德貴し、先づ道を得る者は則ち師たり、吾れ敢て弟子の礼を執るに倦まざるなりと。これによりて安世は之に要方を告げしかば、遂に仙となりて去るを得たりき。夫れ人生先づ精神を天地より受け、後に氣血を父母より受く。然も明師を得て之に告ぐるに世を度るの道を以てせずんば、則ち死を免るゝに由なし。石を鑿ちて餘焰あるに、年命は已に彫頽す。これによりて之を論ずれば明師の恩は誠に天地よりも過ぎ、父母よりも重しとなすこと多し。之を崇ばざるべけんや。之を求めざるべけんや。

抱朴子が曰く、

古人は質直にして行を貴び言を賤む。故に政を為す者は文辨を尚ばず、道を修むる者は辞説を崇ばず。風俗衰薄にして、外飾弥繁し。方策既に儒門に山積して、内書また術家に鞅掌す。初学の徒は即ち未だ直に授くるに大要を以てすべからず。又また人情は本末殷富の者を以て快となす。故に後の道を知る者、干吉（三の呉志）容嵩（容は官の誤、か神を見よ）桂帛諸家各千数篇を著し、も、然も率ね教誡の言多くして、肯て人の為に大趨向の指帰を開顕せざるなり。その真を指すところの訣も或はたゞ口伝するのみ。或は尋尺の素の領帶の中に在るに過ぎず。師に随ひて久しきを経、勤を累ねて歴試する者にあらずんば得ること能はざるなり。猥離の弟子皆各その心を用ふるの疎密と苦を履むの久遠とに随ひて、その聰明の逮及する所、及び志力の能く辨ずる所を察して各授くる所あり。千百歳の中、時にその囊枕の中、肘腋の下、秘要の旨を盡すこと有るのみ。或はただ合成の薬を分ちて、以て之をして死せざらしむるに足るのみ。而して終年その方の文を以て之に伝へず。故に世の道士にして金丹の事を知る者は万に一もなきなり。而して管見の属は仙法はまさに紛若たる書と祭祀拝伏の間とに具在すべしと謂へるのみ。

夫れ長生の制は大葉に在るのみ。祠醮の得る所にあらざるなり。昔し秦漢の二代は大に祈祷を興し、祭る所の太乙、五神、陳宝、八仙の属には、動もすれば牛羊穀帛を用ひ、錢億万を費して、了に益する所なし。況や匹夫に於て、徳を備へず、体を養はずして、三牲、酒餼を以

て鬼神に祝願して以て延年を索めんと欲するは、惑へるもまた甚し。或は頗る好事の者有りて、誠に道を為さんと欲するも、勤めて名師を求めて異業を合作すること能はずして、ただ昼に夜に不要の数千百卷を誦講して、老に詣るまで益することなければ、便ち謂へらく天下には果して仙法なしと。或は門を挙げ頭を叩きて、以て空に向ひて坐し、犠牲を烹宰し、香を焼き、福を請ひて、しかも病者をば愈すこと能はず、死喪相襲ぎ、産を破り財を竭して、一もその効無けれども、終に悔悟せずして、自ら篤からずと謂へり。若しこの勤を以てして、方を知るの師を求め、この費を以てして買葉秘術の直に給せばまた必ず神仙を得て、長生して世を度らん。何ぞ老に詣るまで空しく石田を耕して千倉の収を望むに異ならんや。力を用ふること勤めたれども、その所を得ざるなり。これ所謂楚に適かんとして燕に道せば、馬は良くとも到らざるものにして、行くことの疾からぬにはあらざれども其の道を失へるがためなり。或は性信にして喜みて人を信ずるものあり、その聰明は以て真偽を校練し、深淺を揣測するに足らず、博渉する所素より狡くして物を賞する能はざればなり。後世の頑にして浅きもの、趣に一人の自ら譽むる子の我れ秘書を有すと云へるに遇へば、便ち守りて之に事ふ。而して庸人の小児は、多く外は有道の名に託すること有りて、名の実に過ぎたるは誇誑に由り、内は貧濁を抱きて、たゞ利のみを図り、請ふ所あれば、輒ち強ひて暗鳴し、俛仰し、抑揚して、宝祕の深くして得がたきがごとき状をなす。その請ふことあれば、その求むる所に従ひ

て、俛仰し含笑し、或は許すに頃後を以てす。故に学ぶ者をして、罷めんとするも能はざらしめ、自ら之に事ふること未だ勤めず、礼幣尚輕しと謂はしむ。ここに於て篤信の心尤も恭肅を加へ、賂ふに珠玩を以てし、之が為に奴僕の役を執り、重きものを負ひて遠きところに渉ることを辞せず、険しきところを経て、危きところを履むことを避けずして、積勞を以て自ら効さんと欲し、苦に服して哀を求め、異聞あらんことを庶ふ。而して虚しく歲月を引き、空しく二親の供養を委て、妻子を捐て、恤へず、霜を戴き氷を踏み、連年之に随ひて、資を妨け力を棄てても卒に成る所なし。彼れ初には誠に之を欺き、末には或は之を慙ぢて慚然たり。体中実は自ら空罄短乏にして能法の以て相教ふる無し。何れの法を將てか以て人を成さんや。余この輩を目見すること少からず。十餘人はあるべし。或は自ら号し高く名づけて久しく世に居れりとし、世の人或は之を已に三四百歳なりと謂ふ。ただ名字を易へて、聖人が人間に身を託するものと詐称す。而して多く之に承事する者あり。余ただその人の姓名を書することを喜まざるのみ。すこぶる俗間に游べば、凡夫は妍蚩を知らずして、為に共に称揚し、妖妄を増長して、彼の巧偽の人の為に虚しぐ華譽を生じ、歆習遂に広くして、能く甄別することなし。故に或は高人をして偶ま意を留めて澄察せざらしめ、ただ兩耳に任せしむ。学ぶ者を誤らしむることは常にこの輩に由れり。人をして歎息せしめざることなきなり。毎にこの曹の天下を欺誑し、以て勢利を規る者を見るに、遅かれ速かれ皆天罰を受くるは、天網

疎なりといへども終に漏らさざればなり。ただ有志の者を誤らしむることをば念とすべきのみ。世人は多く空しき声を逐ひて能く実を校ふること少し。甲乙の弟子多くして百許人に至れりと聞くとときは、必ず当に異有るべしとして、すなはち載馳競逐して赴き、相聚りて之を守ることを為して、徒に工夫を妨げ、以て彼の愚陋の人を崇重して、復た精しきを尋ねず。彼は門人の力を得て、或は以て富を致し、辨逐すること久しといへどもなほ成人の道なし。愚夫は、故にこの人の事ふべきに足らざるを知らず。何の能あるかをも都べて与り悟らず。自ら悲しむべきかな。夫れ一尋半尋の壘を搜りて天を干すの木を求め、牛の足跡の中を漉ひて吞舟の鱗を索むるは、日を用ふること久しくとも安ぞ能く得んや。嗟乎将来の学ぶ者はまさに師を求むるを以て務となすべきも、また以て詳に択ぶを急とせずんばあるべからざるなり。陋狭の夫、行浅く、徳薄く、功微にして、縁少く、成人の道に足らず、また功課の以て人の重恩を塞ぐことなし。深くその趣を思ひて徒勞せしむることなかれ。

抱朴子が曰く、

もろくの虚名の道士は既に善く誑詐を為して以て学者を欺き、又多く短を護り愚を匿し、知らざるを恥とし、陽りて博渉にして己に足れるがごとくし、終に肯て行きて己に勝れる者に請問せんことを求めず、蠱爾として窮を守り、牆に面して立つがごとくし、又た拱きて黙するのみならず、乃ちまた実に道ある者を増忌して之を謗毀し、彼が声名の己に過ぎんこと

を恐る。これ等は豈に長生の法に意有らんや。以て弟子を合せ致し、その財力を図りて以てその情欲を快くせんことを欲するがためのみ。而して天は高けれども卑きに聴きて、その後には必ずこの殃を降さんことを知らざるなり。夫れ貧者は妄に我れ富むとは云ふべからず。賤者は虚しく我れ貴しとは云ふべからず。況んや道德の事に於て、実に無くして宜しく門生子を養はんや。凡俗の人すらもなほ善を妬むの心を懷くべからず。況んや道士に於ては尤もまさに忠信快意を以て生を為すべきものなり。云何ぞ当にこの儼然たるものを以て胸臆の間に函るべけんや。人は自ら神明を聞見せざれども、神明の己を聞見することは甚だ易し。これ何ぞ紗の幌の外に在りて軒房の内を察すること能はずしてその倨慢を肆にし、人の己を見ずと謂ふに異ならんや。これまた鐘を竊みて物に振れ、鏗然として声有りしを、他人の之を聞かんことを惡みて、因りて自らその耳を掩ふ者の類なり。而して、聾瞶にして精神を存する者、たゞ専ら華名を擅にせんことを欲し、独り徒衆を聚め、外には声価を求め、内には財利を規り、己に勝るものを患へ惡むことは乃ち俗人の權勢を争ふよりも劇し。遂に唇吻を以て刀鋒となし、毀譽を以て朋党となし、口には親しめども心には疎く、貌は合へども行は離れ、陽には同志の言を敦くし、陰には蜂蠆の毒を挟む。これ乃ち天人の共に惡む所にして禍を招くの符檄なり。夫れ五經を読むもなほ宜しく下に問ふを恥ぢざるべし。以て徳に進み業を修めて日に緝く熙あり。射と御との麤伎、数と書との浅功、農桑の露事、規矩の小術に至

るまで、なほ師授を須^まちて以てその理を盡^{つく}す。況んや長生の法を営みて以て年を延べ世を度
らんと欲するをや。これ死事を救恤^{きうじゆつ}すると異なることなきなり。何ぞ務めて請受の名を惜み
て永く無知の困を受くべけんや。老に至れども改めず、死に臨めども悔いず。これまた天民
の甚だ暗き者なり。人をして之に代りて慙慄^{ざんしやう}せしめて、之を為す者は独り形影を顧みざるな
り。儒生たるもの、尚ほまさに兀然^{こつぜん}として朴を守り、外は質素に託し、知りても否^{しか}ざるが如
くし、有りても無きが如くし、庸児をしてその称を盡すことを得ざらしめて、問はざれば対
へず、対^{こた}ふれば必ず辞讓して後に言ふ。何ぞそれ道士たるの人、知らざるを強ひて知るとし、
有るなきを有りとし、虚しく自ら銜耀^{げんえう}して以て奸利を図^{はか}るや。迷ひて返るを知らざる者は愈^{いよいよ}
よ以て遂に往く。若し以て此^{これ}を行ふ者有らば、想ふに、恥じざるが故なり。吾れは苟も此の
言を為すにあらずして、誠に為すこと有りて興^{おこ}れり。いはゆる之を疾^{にく}みて默然たること能は
ざるによれるなり。徒に愚人^{あはれ}を愍^{あは}れ念ひて嬰兒の井に投ずるがごときを見るに忍びざるのみ。
若し之を覽て悟る者はまた仙薬の一草なり。吾れ何をか為さんや。口に苦^{にが}きを御せずんば其
の危きこと至らんは、脈診を俟^またずして知るべき者なり。

抱朴子が曰く、

設^もし死罪ありて人能く之を救ふものあらば、之が為に榮辱を吝みて卑辞を憚らずんば、必
ず生生の功を獲ん。今、雑猥なる道士の輩^{ともがら}金丹の大法を得るもの無ければ、その必ず長生を

得ざらんこと知るべきなり。病を治めて起死の効あり、穀を絶つこと年を積みて飢えず、鬼神を役使し、坐しては在り立ちては亡く、千里を瞻視して人の盛衰を知り、沈崇を幽翳に発し、禍福を未萌に知れども、なほ年命に益なきなり。尚ほ請求を行ふを羞ぢ、先達に事ふるを恥づ。これ一日の屈辱を惜みて極りなきの庸愚に甘んずるものにして、事の類を見ざる者なり。古人言へるあり曰く、生の我に於けるや、利も亦た大なりと。その貴賤を論ずれば、爵は帝王たりとも、この法を以て比するに足らず。その輕重を論ずれば、富は天下を有つといふとも、此の術を以て易ふるに足らず。故に死王は生鼠たるを樂むの喩有るなり。夫れ国を治めて国平かに、身を治めて身生くるは、自ら至るにあらずして、皆以て之を致すことあるなり。短乏の虚名を惜み、師授の暫く勞するを恥づるは、愚ならずといふとも、吾は信ぜざるなり。今、人をして必死を免れて戮刑に就かしめば、なほ欣然として、重きを去りて輕きに即くを喜ばん。炎爛を脱して視息を保せしめば、その苦痛を甘んずること更生よりも過ぎん。人はただ当に死すべきの日を知るなきが故に慙ち憂へざるのみ。若し誠に之を知らば、刑 劓の事だに、延期するを得べくんば必ず將に之を為さんとするに、況んやただ躬親ら灑掃して巾を執り、その力を己に勝る者の為に竭して以て不死の道を教へらるべくんば、また何ぞ苦と為すに足らんや。而して蔽はれたる者は之を憚れり。仮令、人ありて迅く走るを恥ぢて野火の燒熱するを待ち、風を逃るるを羞ぢて沈溺を重淵に致す者あらば世必ず之を呼びて事を曉

らざるものとせん、而して咸^{みな}その災厄^{さいやく}を避けざるを笑ふことを知りて、その禍に償^{たふ}るゝを畏れざることを怪まざるは何ぞや。

抱朴子が曰く、

昔に於て道書を著すこと多し。浮巧の言を広めて以て玄虚の旨を崇^{たか}くするを務めざるなし。未だ長生の階徑を究論し、道を為すの病痛を箴砭^{しんぺん}すること、吾が如く勤々たる者有らざるなり。實に迷者をして反^{かへ}ることを知らしめ、之を東隅に失するも之を桑榆^{（西方を）}に収めしめんことを欲す。井に墜ちて縋^{なは}を引くは遂に没するに愈^{まさ}れり。ただ美疾^{びちん}を惜みて惡石を距^{ふせ}ぐものをば如何^{いかん}ともすべからざるのみ。人は誰か過なからん。過ちて能く改むること日月の蝕のごとくならんは、顔氏^{（回）}の子を睺^{した}ふなり。また将来の生道を好む者をして託する所を審ならしめんと欲す。故にその忠告の良謀を竭して、淫麗の言を飾らず、言は発すること甚しくして指切^{むね}に、筆は覚えずして辞痛惜するは、長生して邪を折抑^{せつよく}するに在るのみ。何の索^{もと}むる所かあらんや。

抱朴子が曰く、

深く念ひて道芸を学び、生を養ふ者も、師に随ふことその人を得ざれば、竟^{つひ}に成る所なし。而して後の志有る者をして、彼が長生を得ざることを見しめて、因て天下には果して仙法なしと云はしむ。凡そ生を度^どせんと欲するも、必ず身を苦め己を約して以て玄妙を修むる能は

ざる者は、また徒^{いたづら}に、進んでは禄^{もく}を干^{もと}むるの業を失し、退きては老い難きの功無く、内は其の身を誤り、外は将来を沮^{はば}まん。仙の学びて致すべきは黍稷^{しよしよく}の播種^{はしゆ}して得べきが如く、甚だ炳然たるのみ。然^{しか}も未だ耕さずして嘉禾^{かくわ}を獲^うるは有らず、未だ勤めずして長生して世を度^どするを獲^うるは有らざるなり。

抱朴子内篇卷十五

雜応（仙術に關する
雜問に答ふ）

或る人曰く、

敢て問ふ、穀を断ちて以て長生すべきか。凡そ幾ばくの法ある。何者か最も善きや。

抱朴子答へて曰く、

穀を断つはただ穀糧の費を省くべきのみ。独り人をして長生せしむること能はざるなり。諸の曾かつ穀を断ちて久しきを積める者に問ふに、云ふ、差少の病痛は穀を食ひし時に勝れりと。その朮うけらを服し、及び黃精わうせいと禹餘糧むかじとを餌くらふもの、日に再び服すれば、久しくして人をして氣力多からしめ、負担して遠行するに堪へ、身軽くして極らざらしむ。その諸の石薬を服すること、一服して之を守ること十年五年なる者、及び氣を呑み、符を服し、神水を飲む輩は、ただ飢えずとなすのみ。体力は勞に堪へざるなり。又た道書に、長生を得んと欲せば腸中まさに清かるべく、不死を得んと欲せば腸中に滓かす無かるべしと云ひ、また草を食ふ者は善く走りて愚に、肉を食ふ者は力多くして悍たげく、穀を食する者は智にして寿ならず、氣を食する者は神明にして死せずと云ふと雖も、これは乃ち行氣の者の一家の偏説なるのみなれば、便ち孤用すなはすべからざるなり。若し金丹の大薬を服せんと欲せば、先づ食はざること百許日なるを快となす。若し能はずんば、正に爾しかく之を服せよ。ただ仙を得ること少しく遅からんのみなれば、

大なる妨なきなり。若し世の荒乱に遭ひて、山林に竄れんに、この断穀の法を知る者は則ち以て餓死せざるべし。然らずんば、則ち急に断つことなかれ。大に益すべきことなければなり。また人中に止まりて肉を断たんに、肥鮮の氣を嗅がば、皆之を欲すること有らざる能はず。中心若し未だ俗を絶ち家を委てずして、巖に栖み、岫に処る者は固より遂ぐることを成さず。五味を体しながら、之を致すことを得ずして自ら苦まんは、穀を断つことなくして饑飽を節量せんに如かず。近ごろ一百許の法有り。或は中を守るの石薬数十丸を服して、便ち四五十日を辟くるも饑えず。松柏及び、朮を練るもまた以て中を守るべし。ただ大薬に及ばずして、久しきも十年以還に過ぎず、或は一百二百日を辟く。或は日日に之を服して乃ち饑ゑざるは、先づ美食を作して極めて飽き、乃ち薬を服して以て食ふ所の物を養ひて、消化せざらしめて、三年を辟くべきもあり。かくて還た穀を食せんとせば、当に葵の子と猪の膏とを以て之を下すべし。則ち作す所の美食は皆下りて、壞れざることは故の如し。

洛陽に道士董威が輩あり。常に白社の中に止まりて、了に食はず。陳子叙は共に守りて之に事へ、従つて道を学ぶこと久しきを積みて、乃ちその方を得て云ふ、日に甘草、防風、穀実の属十許種を搗きて散となし、先づ方寸の匕を服し、乃ち石子の大き雀卵の如きもの十二枚を吞めば、百日を辟くるに足り、輒ち更に散を服せば、氣力顔色故の如し。還た穀を食はんと欲せば、当に葵子湯を服すべし。これによりて石子を下して、乃ち食ふべきのみ。又、赤

竜血、青竜膏をば、之を作るに丹砂と曾青水とを用ひ、石を以てその中に内る。また須臾にして石は柔になりて食ふべきなり。若し即すぐに取らずんば、便すなはち消爛して盡く。この石を食ふに口を以てして飽くまでにすれば、人をして丁壮ならしむ。また引石散あり。方寸匕を以て一斗の白石子の中に投じ、水を以て、之を合せ煮れば、また立たちに熟すること芋子いもの如くにして食ふべく、以て穀に当つるなり。張太玄が挙家及び弟子数十人は林慮山の中に隱居して、この法を以て石を食ふこと十餘年にして皆肥健なりき。ただ白石を得ることを要するが為に、赤竜血、青竜膏に如かず。石を取り得て便ち用ふべし。また当に之を煮るべきによりて薪火の煩わずらひあるのみ。

或は符を用ひ、或は水を用ひ、或は符と水と兼ね用ひ、或は乾棗ほしなつめ日に九枚と酒一二升とを用ふる者あり。或は十二時の氣を食ひ、夜半より始めて、九九より、八八、七七、六六、五五に至りて止む。或は春は東に向ひて歳星（星）の青氣を食ひて肝かんに入らしめ、夏は熒惑けいわく（星）の赤氣を服して心しんに入らしめ、四季の月は鎮星（星）の黄氣を食ひて脾ひに入らしめ、秋は太白（星）の白氣を食ひて肺に入らしめ、冬は辰星（星）の黒氣を服して腎じんに入らしむ。また中岳の道士なる鄰元節けきは六戊の精を食してまた大に効あり。假令もし甲子の旬に戊辰の精有れば、則ちその旬十日を竟ふるまで、常に辰たつの地に向ひて氣を呑み、後の甲に到りてまたその旬の戊に向ふなり。甘始が法に、六甲六丁の玉女を召すに、各名字おのおのあり。因りて以て水を祝して之

を飲むも、また牛馬をして皆飢ゑざらしむべきなり。或は脾中の神の名、黄裳子と名づぐるものを思ひ、ただ口を合せて内氣を食するはこれ皆真効あり。

余の数見^{しばしば}たる、穀を断つ人三年二年の者は、多く皆、身軽く、色好^{よく}く、風寒暑温に堪へたり。大都肥^{すべて}ゆる者無きのみ。未だ数十歳食はざるを見ざれども、しかも、人は穀を絶つこと十許日に過ぎずして皆死するに、これ等は已^{すで}に載^{おし}を積みても自若たれば、また何ぞ大に久しかるべからざるを疑はんや。若し諸の穀を絶つ者をして轄^{てんるい}羸極めて常ならしめば、之を慮るに、恐らくは久しくすべからざるのみ。しかるに諸の之を為す者に問へば、初時には氣力少くして後には稍^や丁健ならざることなし。月一月に勝り、歳一歳に勝る。正に爾^{しか}くして久しくすべきこと嫌^{うたがひ}なきなり。夫れ長生にして道を得る者は、皆薬を服し氣を吞みて之に達せざる者なきことは妄ならざるなり。夫れ薬を服して穀を絶つ者はほば先づ極まらざることなし。ただ符水を用ひ、及び単に氣を服する者は皆四十日の中に疲瘦し、これを過ぎて乃ち健なるのみ。鄭君^{てい}云ふ、本と性^{うまれつき}酒を飲むこと多からざりしが、昔し銅山の中に在りて穀を絶つこと二年許にして、酒数升を飲みたれども酔はざりき。これを以てこれを推すに、これ食はざるが為に、更に人をして毒に耐^たへしむ。毒に耐^たふるはこれ痛み難きの候なりと。余これに因りて山中いかにして酒を得たりやと問ひしに、鄭君言ふ、先づ好雲液^{かも}を釀^{かも}して圧漉^{あつろく}することなく、因りて桂^{けい}^(本、卅)附子^{ぶし}^(本、卅)甘草^{かんさう}^(本、十)五^ま六種を以て末し合せて之を丸にし、曝^{さう}し乾^{かわ}し一丸

の雞子たまごほどの大きなるを斗の水中に投ずれば、立に美酒と成ると。また宝帝雲液泉の法あり。麩米べつまい及び七八種の葉を以て之を合せて一升を取り、輒すなはち一水の中に内いるれば、千歳の苦酒の内水のごとく、盡くる時を知ることなくして、味は常に好よくして変ぜず、之を飲めば、大に人を益す。

又た符水と断穀とは先づ人をして羸るゐせしむといへども、しかも宜しく兼ねて知るべき者なり。倘もし卒にはかに荒年に遇ひて、藥物を合作するに及ばずんば、則ち符水を用ふるを上となす。

馮生ふうせいといふ者あり。ただ単に氣を呑み、穀を断つこと已に三年。その歩陟ちよくして山に登るを觀くわんるに一斛許こくの重きを担になひて終日倦まず、又時時に弓を引きてほば言語せず、言語するも又肯あへて大声せず。之を問へば、云ふ、穀を断ちたるとき、精を亡なげし氣を費すは最も大忌なりと。

余また屢々浅薄の道士輩を見たるに、為に奇怪を虚曜し不食の名を招かんことを欲して、実はその道を知らず。ただ虚しく羹飯かうはんを啖くらはずとするのみ。酒を飲むに至りては日中に斗餘。脯ほじし、腊はじし、飴あめ、糲あめ、糲なつめ、棄なつめ、栗なつめ、雞子たまごの属をばその日に絶たず。或は大に肉を食ひてその汁を咽のみ、その滓かすを吐きて、終日口を経る者数十斤なり。これは直にこれ更に美食を作すなり。凡そ酒食はただ酒を飲み脯を食ひて、穀を食はざれば、皆自おのづからら半歳一歳に堪へて蹙頓しよくとんせず。未だ穀を絶つと名づけざるのみ。

呉に道士石春せきしゅんあり。毎に氣を行めぐらして人の為に病を治ちし、病者の愈いゆるを待ち、或は百日

或は十日にして乃ち食ふ。呉の景帝之を聞きて曰く、これたゞ久しからずして必ず当に饑死すべきなりと。乃ち召し取りて鎖閉し人をして之を備へ守らしむ。春はただ三二升の水を求む。此のごときこと一年餘。春の顔色更に鮮悦にして氣力故のごとし。景帝之に問ふ、また幾ばく時に堪ふべきかと。春言ふ、限無きこと数十年なるべし、たゞ恐らくは老死せんのみ、饑を憂へざるなりと。乃ち罷めて之を遣る。按ずるに春が言の如くんば、これ穀を断つことをなして、年を延ぶる能はざること知るべし。今時また春が法を得る者あり。

或る人寒えざるの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

或は立冬の日を以て六丙六丁の符を服し、或は口を閉ぢて五火の氣を行ふこと千二百遍なれば則ち一二月の中に寒えざるなり。或は太陽酒を服し、或は紫石英、米漆散を服し、或は先づ雄丸一を服し、後に雌丸二を服するも、（別本には雌を先にし雄を後にす）また一日一夕に堪ふべくして寒えざるなり。雌丸は雌黄、曾青、礬石、磁石を用ひ、雄丸は雄黄、丹砂、石胆を用ふ。然れどもこは延年の事に益なきなり。

或る人熱せざるの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

或は立夏の日を以て六壬六癸の符を服し、或は六癸の氣を行らし、或は玄水（一に氷に作る）の丸を

服し、或は飛霜の散を服す。然してこれを簫丘せうきうの上の木皮及び五月五日の中時に北行する黒蛇の血を用ふるが故に、之を合することを得る者あること少し。ただ、幼伯子、王仲都、この二人は衣するに重裘ちゆうきうを以てして之を夏日の中に曝さらし、周すに十二炉の火を以てすれども、口に熱しと称せず、身に汗を流さず。蓋し、この方を用ふる者なり。

或る人五兵を辟さくるの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

吾れ聞く、呉の大皇帝孫権は曾て介先生に従ひて、要道を受く。云ふ、ただ北斗の字及び日月の字を書することを知りて、便すなはち白刃を畏れずと。帝以て左右数十人に試みるに、常に先登を為し、鋒は陣に陥おちりて皆終身傷きずつかざるなり。

鄭君云ふ、ただ五兵の名を誦するもまた驗げんあり。刀をば大房と名づけて、虚星之つかさを主る。弓をば曲張と名づけて、氐星之を主る。矢をば彷徨はうくわうと名づけて熒惑之を主る。戟げきをば大傷と名づけて、角星之を主る。弩どをば遠望と名づけて張星之を主る。戟げきをば大將軍と名づけて参星之を主る。戦に臨む時、常に細に之に祈いのり、或は五月五日を以て赤靈符を作りて心前むなまえに著つけ、或は丙午の日の日中の時に、燕君、竜、虎三囊の符を作り、歳符としとしは歳に之を易かへ、月符は月に之を易かへ、日符は日に之を易かふ。或は西王母の兵信の符を佩おび、或は榮惑朱雀の符を佩おび、或は南極鑠金しやくきんの符を佩おび、或は卻刃きやくじんの符、祝融しゆくゆうの符を戴いたき、或は玉札散を傳つけ、或は禁葱湯きんそうに

浴す。或は牡荊を取りて以て六陰神將の符を作り、符は人を敲くことを指す。或は月蝕の時刻に三千歳の蟾蜍ひきがえるの喉の下に八字ある者の血を以て、持つ所の刃劍に書し、或は武威符、螢火けいくわ丸を帶び、或は鋒刃の際に交り、魁に乗り剛を履ふみて四方の長を呼ぶもまた明なる効ありと。今世の人また五兵を禁じ辟さくるの道を得るあるもの往々これあり。

或る人隱倫いんりんの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

神道は五あり。坐すれば在り、立てば亡きはその数なり。然しかして年命の事に益なし。たゞ人間に在りて故なくして、此これを為せば、則ち詭怪きぐわいの声を致す。妄に行ふに足らざるなり。以て兵乱に備ふべし。危急のとき己むことを得ずして之を用ふれば以て難を免るべきなり。

鄭君云ふ、大隱符を服すること十日にして、隠れんと欲すれば左に転じ、見れんと欲すれば右に回るなり。或は玉粒丸ぎょくくわいを以て人の身中に塗り、或は蛇足散を以てし、或は離母の草を懷にし、或は青竜の草を折りて以て六丁の下に伏し、或は竹田の中に入りて天樞の壤つちを執り、或は河童石室を造りて雲蓋かきの陰に隠れ、或は清冷の淵に伏して以て幽闕の径こみちを過ぎ、或は天一の馬に乗りて以て紫房に遊び、或は天一の明堂に登り、或は玉女の金匱に入り、或は輔に背き官に向ひて三蓋の下に立ち、或は巾を投じ履を解き（缺文あり）胆煎及び而衣符子居蒙（一に象に作る）人、清液、桂梗、六甲、父母、僻側（以上諸句意味不明）の膠、馱馬、泥丸、木鬼の子、金商の艾（以上諸句意味不明）或は

小児となるべく、或は老翁となるべく、或は鳥となるべく、或は獸となるべく、或は草となるべく、或は木となるべく、或は六畜となるべし。或は木に依りて木と成り、或は石に依りて石と成り、水に依りて水と成り、火に依りて火と成る。これいはゆる形を移し、貌を易へて、多く隠るる能はざるものなり。

或る人問ふ、魏の武帝（曹操）曾て左元放（左慈）を収へて之を桎梏しつこくしたるに、自然の解脱を得たるは何の法を以てしたるか。

抱朴子が曰く、

吾れ正に左君が施用せし所の事を知る能はず。然も諸の方書を歴覽するに、月に三たび薏苡よぐいの子みを服し、三五陰丹を和し用ふるあり。或は偶牙陽胞を以てし、或は七月七日に東行する跳脱虫を以てし、或は五月五日の石上の童子の単衣を以てし、或は夏至げしの日の霹靂へきれき楔けつを以てし、或は天文二十一字の符を以てし、或は自ら解ける去父の血を以てし、或は玉子餘糧を以てし、或は山君目、河伯餘糧、浮雲滓を合して以て之に塗りて、皆自ら解く。然して左君の變化は如何なる方によれるか明かならざれば、未だ必ずしもこれ等に由りしとはいふべからず。自ら六甲を用ひて、その真形を變化すれば、得て執とらふべからざるなり。

或る人問うて曰く、道を為す者は以て病まざるべきかと。

抱朴子が曰く、

養生につきて理を盡す者は既に將に神藥を服し、又た氣を行らして懈らず、朝夕に導引して以て榮衛を宣動し、輟め閑むることなからしむ。之に加ふるに房中の術を以てし、飲食を節量し、風湿を犯さず、己の能くせざる所をば患へず。此の如くんば以て病まざるべし。ただ患ふるは、人間に居る者の、その志を專にすることを得ずして修むる所の恒なきことにし、また懈怠して勤めざるがために疹疾に罹るを免れざることを苦しむのみ。

若し徒に道を信ずるの心ありて、己を益するの業なく、年命は孤虚（占星術の用語）の下にありて、体に損傷の危きあれば、三尸（人身の中にありとする虫）はその衰月危日に因りて絶命病郷の時に入り、邪氣を招呼し、妄に鬼魅を延き、来りて殃害を作す。その六厄並び会し、三刑の方を同じくする者は、その災必ず大なり。その尚盛なる者は則ち諸の疾病を生じ、先に疹患ありし者は則ちまた発動せしむ。

是を以て古の初めて道を為す者は、兼て医術を修め以て近禍を救はざることなし。凡庸の道士は此の理を識らずして、その聞く所の者を持ち、大抵は病を治するの方に閑らず、また俗を絶ち幽居して専ら内事を行ひて以て病痛を却くこと能はず。病の以て攻療するなきに及びては、乃ち更に凡人の湯藥を專にする者の如くならず。所謂進みては邯鄲の歩を得ず、退きてはまた寿陵平の義を失ふものなり。

余、戴霸、華陀が集むる所の金匱、綠囊、崔中書、黃素方、及び百家の雜方五百許卷、甘胡、

呂付、周始、甘唐通、阮南河等の各の撰集せる暴卒備急方の、或は一百十、或は九十四、或は八十五、或は四十六を見るに、世人皆精悉にして加ふべからずと為すなり。余究めて之を觀るに、殊に多く諸の急病に備へざるは、その尚ほ未だ盡さざるなり。又渾漫雜錯にしてその條貫なく、尋按する所あるも即ち得べからず。而して卒暴の候を治するには皆貴藥を用ふること、動もすれば数十種なり。富室にして京都に居る者にあらざるよりは素より儲ふる能はずして卒に辨ずべからざるなり。また多く人をして針を以て病を治せしむ。その灸法はまた処所分寸を明にせずしてただ身中の孔穴榮衛の名を説く。旧医の備に明堂流注偃側の図を覽たる者にあらざるば、安ぞよく之を曉らんや。余が撰する所の百卷は、名づけて玉函方といふ。皆病名を分別し、類を以て相統して、相雜錯せず。その九十三卷は皆單行徑易にして、離陌の間、顧盼するに皆藥なり。衆急の病、畢く備はらざるなし。家にこの方あらば、医を用ひざるべし。医は多く世業を承襲し、名ありて実なく、虚声を養ひて以て財利を図る。寒白の退士の使ふことを得べからざる所なり。之を使ふ者は乃ち多く人を誤る。未だ自ら其の要を閑るに若かず。これ無智の医を迎ふるには勝れり。医は又卒に得べからず、得るも又肯て則ち人の為に使はれず。腠理の微疾をして膏肓の深禍と成らしめ、乃ち救はれざるに至る。且つ暴急の病に當りて遠く行きて医を尋ぬるときは、牽ね枉死すること多し。

或る人問ふ、将来の吉凶安危去就をば之を知ること前に審にすべきに道ありとするか。

抱朴子が曰く、

仰ぎて天文を觀^み、俯して地理を察し、風氣を占ひ、籌算を布き、三綦^きを推し、九宮を歩し、八卦を検し、飛伏の集まる所を考へ、託訛^{えうくわ}を物類に診^{しん}し、休咎を龜策^{きさく}に占ふは、皆下術常伎なれば、疲労して恃みがたし。若し乃ち帷幕を出でずして天下を見れば、乃ち神に入るとなす。或は三皇天文を以て司命司危を召し、五岳の君、阡陌の亭長、六丁の靈、皆人をして之を見しめて、対問するに諸事を以てすれば、則ち吉凶昭然として、諸^{これ}を掌^{たなごし}に存す。遠近幽深となく、咸^{ことごと}く先知すべきなり。或は六陰玉女を召す。その法は六十日にして成る。成れば則ち長く役使すべし。或は祭りて八史を致す。八史とは八卦の精なり。また以て豫^{あらかじ}め未^{あらか}だ形^われざるものを識るに足れり。或は葛花及び秋芒麻勃の刀圭方寸匕を服すれば、忽然として睡氣を催し、人ありて之に語るに其の知らざる所の事を以てするが如くにして、吉凶立どころに定まるなり。或は明鏡の九寸以上なるを用ひて自ら照し、思存する所あること七日七夕なれば、則ち神仙を見る。或は男、或は女、或は老、或は少、一たび示すの後には心中自ら千里の外と方^{まさ}に来るべき事とを知るなり。明鏡をば或は一を用ひ或は二を用ふ。之を日月鏡といふ。或は四を用ひて之を四規といふ。四規は之を照す時前後左右各一を施すなり。四規を用ふれば、見る所の来神、甚だ多し。或は目を縦^{たて}にし、或は竜に乗り、虎に駕し、冠服彩色世と同じからずして、皆經と図とあり。その道を修めんと欲せば、当^{まさ}に先づ当^{まさ}に致し見るべき

所の諸神の姓名位号を暗誦して、その衣冠を識るべし。爾らずんば、則ち卒に至りて其の神を忘れ、或は能く驚懼すれば、則ち人を害するなり。之を為すには、率ね静漠幽閑なる林麓の中を得んことを欲す。外形目を経ず、外声耳に入らずんば、其の道必ず成る。三童、九女、節寿君、九首、蛇軀、百二十官来ると雖も、熟視するを得ることなきなり。或は之に問ふ者あり、或は之を詞怒する者あるも、また答ふるなきなり。或は侍従暉暉として、力士甲卒竜に乗り虎に駕し、簫鼓嘈嘈たるあるも、目を挙げて与に言ふことなきなり。ただ諦に老君の真形を念ひて、老君の真形見えば趣に再拝せよ。

老君の真形をば、之を思ふには、姓は李、名は聃、字は伯陽、身の長九尺、黄色の身にして、嘴隆く、鼻秀で、眉の長さ五寸、耳の長さ七寸、額に三つの理あり、上下足に徹して八卦あり、神亀を以て牀と為し、金殿、玉堂、白銀を階となし、五色の雲を衣となし、重疊の冠、鋒鋌の劍、黄童百二十人を従へ、左に十二の青竜有り、右に二十六の白虎有り、前に二十四の朱雀有り、後に七十二の玄武有り、前道は十二の窮奇、後従は三十六の辟邪、雷電は上に在りて晃晃たりとせよ。この事は仙經の中に出でたり。老君を見るときは年命延長して、心は日月の如く、事として知らざることなし。

或る人齒を堅くするの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

能く養ふに華池を以てし、浸すに醴液を以てす。清晨に齒を建つること三百過すれば、永く揺動せず。その次は則ち地黃煎ちおうせんを含み、或は玄胆湯及び蛇脂丸、礬石丸、九棘散を含めば、則ち已に動く者更に牢く、虫有るは即ち愈ゆ。又た靈飛散を服する者は則ち既に服する者をして更に生ぜしむべし。

或る人耳を聴くするの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

能く竜のごとく導き、虎のごとく引き、熊のごとく経し（頸を屈めて氣を閉づること）、亀のごとく咽み、燕のごとく飛び、蛇のごとく屈し、鳥のごとく伸び、天より俛し、地より仰ぎ、赤黄の景をして洞房を去らざらしめ、猿のごとく抛り、兎のごとく驚くこと千二百至なれば則ち聰は損せざるなり。その既に聾せる者は玄龜を以て之を薰じ、或は棘頭、羊糞桂、毛雀桂（以上三者不明）を以て裏と成して之を塞ぎ、或は狼毒（本草）を以て葛を治め、或は附子（同上）葱涕を以て合して耳の中に内れ、或は蒸鯉魚の腦を以て之に灌げば皆愈ゆ。

或る人目を明にするの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

能く三焦の昇（一に外に作る）景を引き、大火を南離に召し、之を洗ふに明日を以てし、之を熨すに陽光を以てし、及び丙丁洞視の符を焼き、酒を以て和して、之を洗ふべし。古人曾て以て夜書

す。或は苦酒にて蕪菁子（かぶらのみ）を煮て熟せしめて曝（さら）し乾（かわ）し、末（まつ）して方寸匕を服すること日に三たびし、一斗を盡せば、能く夜視（み）て見ゆることあり。或は犬胆（本、五）を以て、青羊、斑鳩（いかるが）（本、四）石決明（あはび）（本、四）充蔚（やくもさう）（本、十）百花散（明）を煎（せん）じ、或は雞舌香（本、卅）（四本）黄連（本、十）（三草）乳汁を以て煎（せん）じて之を注げば、諸の百疾の目に在ること有る者は皆愈えて更に精明を加ふること常に倍す。

或る人峻に登り險を涉り遠く行きて極まらざるの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

ただ大薬を服食すれば、身は軽く、力は勁（つよ）く、勞して疲れず。若し初め山林に入りて、体未だ全実ならざる者は、宜しく雲珠粉（雲珠は雲母の異名）（本、八玉に見ゆ）白華醴（本、廿）（一草）玄子湯（明）を以て脚を洗ふべし。及び虎胆丸、朱明酒、天雄鶴脂丸、飛廉煎、秋芒車前沢瀉散、之を用ふること旬日なれば、ただ遠きに涉りて極まらざるのみならず、乃ち更に人をして行くこと疾（はや）くして常に三倍なるべからしむ。若し能く躋（あした）に乗ずる者は、以て天下に周流して山河に拘（か）はらざるべし。凡そ躋（あした）に乗る道に三法あり。一に曰く竜躋（きやく）、二に曰く虎躋（きやく）、三に曰く鹿盧躋（ろくろまやう）。或は符を服して精思す。若し千里に行かんと欲すれば、則ち一時を以て之を思ふ。若し昼夜十二時之を思はば、以て一日一夕に万二千里を行くべし。またこれに過ぐることを能はず。これに過ぎんとするときは更に之を思ふこと前の法のごとくすべし。或は棗心木を用ひて飛車となし、牛

革を以て環劍に結びて以てその機を引く。或は念を存して五蛇六竜三牛を作り、交剛こごうにして之に乗じて止ただ四十里に昇る。此の処をば名づけて太清と為す。太清の中、その氣甚だ剛にして、能く人に勝るなり。師言ふ、鳶の飛ぶこと転高うたきときは、則ち直に兩翅を舒ぶるのみにして、つひにまた之を扇揺せずして自ら進む者は、漸く剛氣に乗ずるが故なり。竜の初め階雲に昇るや、その上行四十里にして則ち自ら行くと。この言は仙人より出でて、世俗に留伝するのみ。実に凡人の知る所にあらざるなり。また蹻に乗らんとするには、すべからく長斉して、葦菜くんさいを絶ち、血食を断つべし。一年の後に乃ちこの三蹻に乗るべきのみ。また符を服すと雖も、五竜を思ふときは、蹻行最も遠し。その餘は千里に過ぎざるなり。その高下去留は皆自ら法ありて意に任すことを得るなきのみ。若しその禁を奉ぜずんば、妄みだりに蹻に乗るべからず。傾墜けいゐの禍あるなり。

或る人曰く、老子の篇中記及び亀文経に皆言ふ、葉丘の後、金木の年、必ず大疫ありて、万人に一を餘すと。敢て避くるの道を問ふ。

抱朴子抱朴子が曰く、

仙人が瘟疫うんえきに入る秘禁の法は、その身を思ひて五玉とするなり。五玉は四時の色に随ひ、春は色青く、夏は赤く、四季の月（春夏秋冬の終の月）は黄に、秋は白く、冬は黒し。また金巾を冠するを思ひ、心を思ふこと炎火の如く大さ斗の如くなれば、即ち畏るゝ所なきなり。また一法はそ

の髪を思ふ。散じて以て身に被らしめ、一髪の端に一大星有りて之を綴るとなす。又北斗七星を作らんことを思ふ。魁くわい（北斗の第一星よ）を以てその頭を覆おほひ、罡かう（北斗の第五星よ）を以て前を指す。また五臓の氣雨目より出でて周身雲霧の如くなるを思ふ。肝は青氣、肺は白氣、脾は黄氣、腎は黒氣、心は赤氣、五色紛錯すれば則ち疫病の者と牀を同じくすべきなり。

或は禹歩うほして日に直あたるの玉女を呼び、或は氣を閉ぢて、力士が千斤の鎚つちを操とり百二十人にして以て自ら衛まもるを思ふ。或は射鬼丸、赤車使者丸、冠軍丸、徐長卿（草の名ひめかゞみ）散、玉函精粉、青牛道士薰身丸、崔（一に雀に作る）文黄（一に星に作る）散、草玉酒、黄庭丸、皇符、老子領中符、赤鬚子、桃花符を用ふれば、皆良効ある者なり。

抱朴子内篇卷十六

黄白

(金銀を煉造する法)

抱朴子が曰く、

神仙經に、黄白の方二十五卷千有餘首あり。黄とは金なり。白とは銀なり。古人その道を秘重して指斥するを欲せず。故に之を隠すといへり。或は篇に題して庚辛と云へるもまた金の意なり。しかも率^{おほむ}ね深微なること多くして、知り難し。その解すべくして分明なる者は少許のみ。世人多くこの事を疑ひて虚誕となす。神仙を信ぜざる者と正に同じ。

余昔し鄭公に従ひて九丹及び金銀液經を受く。因りてまた黄白中經五卷を受く。鄭君言ふ、曾^{かつ}て左君と盧江の同山の中に於て試みに作りて皆成れりと。然^{しか}して、齊潔禁忌の辛苦は金丹神仙の薬と異なることなきなり。俗人多く余を譏りて異端^{をさ}を攻むるを好むとし、予を謂ひて、趣^{にはか}に天下の通ずべからざる者を通ぜんと欲すと為す。余また何ぞ然ることを為さんや。余かくの如く奇事を以て辞章を来世に騁^はせんと欲せば、則ち余が著はせる外篇及び雜文二百餘卷は以て意を後代に寄するに足れり。また黄金を作ることを説く^{もち}を須ひず。且つこの内篇は皆直語のみ。藻飾^{そうしよく}することなきなり。余もまたこれらの事を論ずるは、世人之を呼びて迂濶不急と為さざるなければ、未だ俗間切近の理を論ずることの衆心に合すべきに若^しかざるを知れり。然るに余がこの事に已む能はずして、その世人の聴^{きき}に入らざるを知りて、猶これを論著

する所以は、誠にその効驗を見たればなり。またわが承授する所の師は決して妄言する者にあらざればなり。而して余は貧苦にして財力なく、また多難の運に遭ひ、已むを得ざるの浪人となり、兼ねるに道路梗塞して藥物の得べからざるを以てし、竟に之を合作するに違あらず。余今人に告げて我は金銀を作るを曉れりと言ひながら、躬自ら饑寒せば、何ぞ自ら行くこと能はずして璧を治するの薬を売るに異ならんや。人の之を信ずるを求むるも誠に得べからず。然も理には意の如くならざる有れば、また一概を以て断ずべからざるなり。勤勤として之を翰墨に綴る所以の者は、将来の奇を好み真を賞するの士をして余が書を見て道を論ずるの意を見しめんと欲するのみ。

夫れ変化の術は何の為さざる所あらん。蓋し人身は本と見はれて、しかして之を隠すの法あり。鬼神は本と隠れて、之を見はすの怯あり。能く之を為す者は往々にして多し。水火は天に在り、之を取るに方諸（大蛤なり、之をよく磨きて拭ひて熱せしめ、月）陽燧（金杯の縁なきもの、之をよく磨きて熱せしめ、日の下に之を日向くれば、水を生ず）を以てす。鉛の性は白し。而して之を赤くして以て丹と為す。丹の性は赤し。而して之を白くして以て鉛と為す。雲雨霜雪みな天性の気なり。而して薬を以て之を作れば、真物と異なるこなし。飛走の属、蠕動の類に至りては、形を造化に稟けて既に定まることあり。その倏忽として旧体を易へ、改更して異物を為すに及びては、千端万品にして勝て論ずべからず。人は貴き性を具へて最も靈なるものにして、男女形を易へ、鶴となり、石となり、虎となり、

猿となり、砂となり、鼃となること又少なからず。高き山の淵ふちとなり、深き谷の陵をかとなるに至りてはこれまた大物の変化なり。変化は乃ち天地の自然なれば、何ぞ金銀のみを疑ひて、異物を以て作るべからずとなさんや。これを陽燧の得る所の火と、方諸の得る所の水と、常の水と火とに譬ふるに、その間に豈に別あらんや。蛇の竜となり、茅糝ぼうざんの膏あからとなるも、また自生の者に異なることなし。然しかもその根源の縁由する所は皆自然の感致にして、理を窮きはめ性を盡つくす者に非ずんば、その指帰むねを知ること能はず、始を原たうね終を見る者に非ずんば、その情状ありさまを得ること能はざるなり。狭觀近識のものは巢穴に桎梏しこくせられて、淵妙を不測に揣はかり、神化を虚誕きよたんに推をし、周公孔子の説かず、墳籍の載せざるを以て、一切に然らずと謂おもふは、また陋ならずや。又俗人は劉向が金を作りて成らざりしを以て便すなはち云いはく、天下に果してこの道なしと。これ田家の或は水旱に遭ひて收穫せざりしを見て、便すなはち五穀は播殖はしよくして得べからずと謂ふなり。

成都の内史の呉大文は博達多知にしてまた自ら説きて曰く、昔し道士の李根に事へて、根が鉛錫を煎ずるを見たるに、少許の薬の、大豆の如くなる者を以て、鼎中に投じ鉄の匙さじを以て之を攪かきまぜたりしが、冷えて即ち銀と成れり。大文その秘方を得たり。ただし自ら作らんと欲せば、百日齊もして便すなはち之を為すべし。然るに留連して官に在りしかば、竟つひに得る能はざりき。よりて恒つねに歎息して、人間は処をるに足らずと言へり。

また桓君山は言へらく、漢の黄門郎の程偉は黄白の術を好みしが、妻を娶りて方家（方術を行ふもの）の女を得たり。偉が駕に従ひて出づるに当りて、時衣なきによりて甚だ憂ふ。妻の曰く、請ふ両端の縑（かとり）を致さんと。縑すなはち故なくして前に至れり。偉また枕中の鴻宝を按じて金を作らんとして成らず。妻乃ち往きて偉を視る。偉まさに炭を扇（あふ）ぎて箆（とう）を焼く。箆中に水銀有り。妻の曰く、吾試みに一事を相視んと欲すと。乃ちその囊中の薬を出して少少之を投じ、食頃にして之を発（ひら）けば已（すで）に銀と成れり。偉、大に驚きて曰く、道は近く汝が処に在るに、早く我に告げざりしは何ぞやと。妻の曰く、之を得るは天命ある者なるべしと。是に於て、偉は日夜之を説誘し、田宅を売りにて以て美食衣服を供すれども、なほ肯て偉に告げず。偉乃ち伴と謀りて箆（むちう）ちて之を伏す。妻輒（すなは）ち偉に告げて言ふ、道を伝ふことは必ずまさにその人を得ざるべからず。その人を得るときは、道路にて相遭ふのみにても輒ち之に教へん。若しその人に非ずして、口には是として心に非とする者ならば、寸断せられ、又手足を斬り離さるとも、道をばなほ出さざるなりと。偉之に逼りて止まず。妻乃ち狂を發し、裸にて走り泥をもて自ら塗りて遂に死にたり。

近ごろにては、前の盧江の太守なる華令思は高才達学にして沿聞（かふぶん）の士なりき。而して事の不经なる者をば信ぜる所多かりき。後に道士ありて、黄白の方を説けり。乃ち試みに之を作らしめしに、云ふ、鉄器を以て鉛を銷し、散薬を以て中に投ずれば、即ち銀と成り、又銷し

て他藥を以て之に投ずれば乃ち黄金を作すと。又この道士に従ひて徹視の方を学び、之を行ふこと未だ百日ならざるに夜臥してすなはち天文及び四隣を見れば、了了として、また屋舎籬障あるを覚えざりき。又妾の瑤華と名づくる者已に死にたるに、乃ち形を見て之と言語すること平生の如くなり。又廟を祭りて廟神のその拝に答ふるを聞くに、牀動きて声あるに似たり。令思乃ち嘆じて曰く、世間には乃ち如何なる事にて有らざるはなし。五経に載せずとも、便ち意を以て断じて無しとすべからざるなりと。然れども、方伎を聞かざる者卒にこれを聞かば、またいづくんぞ能く驚き怪しまざらんや。

黄白の術も、また神丹を合するが如く、皆すべからず齊潔百日以上にして当に得べし。閑に方書を解して、意の合する者は乃ち之を為すべく、濁穢の人及び聰明ならざる人にして希に術数に渉る者の辨じ作す所にあらざるなり。その中には或は口訣を須つ者あれば、皆宜しく師より授かるべし。又よろしく深山の中、清潔の地に入るべく、凡俗愚人をして之を知らしめんことを欲せず。しかるに劉向は宮中に於て之を作し、宮人をしてその事に供給せしめたれば、必ず齊潔の者にあらず。又よく人事を断絶して来往せざらしむること能はざりしならん。此の如くにして安んぞ成すことを得べけんや。

桓譚が新論(書)に曰く、史子心といふもの署せられて丞相の史官となり、屋を架するに、吏卒及び官の奴婢を發して以て之に給せしが、金を作らんとして成らざりき。丞相は自ら力

の足らざりしことを思ひ、また傳太后に白したるに、また金に利あらざりしかど、金の成るならば、以て延年の藥と作すべしと聞くに及びて、また甘心し、乃ち之を除して郎と為し、之を北宮の中に舍せしめたり。使者の待遇としては、寧んぞこの神方を作さしめんとするに、宮中にて凡人を雜へて共に之を為さしむべきものならんや。俗間にて繒練を染むるにすら、なほ雜人に見しむるを欲せず。之を見しむれば即ち壞る。況んや黄白の変化をや。凡そ事は巨細となく皆宜しく要を得べし。若しその法を得ずして妄に作さば、酒漿醬醋羹臠すら、猶ほ成らず。況んや大事をやと。

余嘗て鄙君に諮ひて曰く、老君は云へらく、得難き宝をば貴ばすと（老子に）而して至治の世には金を山に投げ、玉を谷に捐つといへり。古人何ぞ金銀を以て貴しと為して、その方を遺したるか。これ不審なることなり。

鄭君余に答へて曰く、老君の云ふ所は、夫の沙を披き、石を剖き、山を傾け、淵を漉し、万里を遠しとせず、圧溺を慮らずして、以て珍玩を求め、以て民の時を妨げ、止まり足れりとするを知らずして、以て無用を飾り、反りて道を為さんと欲して、長生を求むるに志す者と、また商賈を兼ね、信讓を敦くせず、深きに浮び、險しきを越え、乾没して利を逐ひ、軀命を吝まず、寡欲を修せざる者とを謂へるのみ。真人の金を作るに至りては、自ら之を餌服して神仙を致さんと欲するものにして、以て富を致さんとはせざるなり。故に經に曰く、金

は作るべく、世は度すべしと。銀もまた餌服すべきも、たゞ金に及ばざるのみ。

余難^{なん}じて曰く、何ぞ世間にある金銀を餌とせずして、却て之を化作するや。之を作るは則ち真に非ず。真に非ざれば則ち詐偽なり。

鄭君余に答へて曰く、世間の金銀は皆善し。しかして道士は率^{おほむ}ね皆貧し。故に諺^{ことわざ}に云へらく、肥えたる仙人富める道士無しと。師徒或は十人或は五人なれば、また安^{やすく}んぞ金銀を得て以て之に供せんや。また遠く行きて採取すること能はず。故に宜しく作るべきなり。また化して作れる金は乃ち是れ諸藥の精にして、自然の者に勝れり。

仙經に云ふ、丹精は金を生ずと。これは是れ、丹を以て金と作^なすの説なり。故に山中に丹砂あれば、其下に多く金あり。且つ夫れ金を作りて成れば、則ち真物の中表にして、一百煉するも減ぜず。故に其の方に、以て釘と為すべしといへるは、その堅勁を明にするなり。これ則ち夫^かの自然の道を得たるなり。故に苟も之を能くせば、何ぞ之を詐と謂はんや。詐とは、曾青を以て鉄に塗れば、鉄は赤色にして銅の如く、雞子白を以て銀を化すれば、銀は黄にして金の如くなるを謂ふ。皆外^{ほか}変じて内^{うち}化せざるなり。夫れ芝^{しきん}菌は自然にして生ず。しかるに仙經に、五石五木を以て芝を種^{しやう}ゑ、芝生じて之を取るにまた自然の芝と異なるなく、俱に人をして長生せしむといふことあり。これまた金を作るの類なり。雉の化して蜃となり、雀の化して蛤となるは、自然の者と正に同じ。故に仙經に曰く、流珠九転、父は子に語らず、化し

て黄白となり、自然に相使ふと。また曰く、朱砂金と爲り、之を服して昇仙するものは上士なり、芝を茹^{くら}ひ導引し氣を咽^のみて長生する者は中士なり、草木を食^{くら}ひて千歳^{いっせん}以還なるものは下士なりと。また曰く、金銀自ら作るべきは、自然の性なり。長生は學びて得べき者なりと。王^{ぎやう}牒^{てく}記に云ふ、天下悠々^{いういう}たらば、皆長生すべし。猶豫^{いうよ}を患ふるが故に成らざるのみ。水銀を凝^{ぎやう}らして金となせば、釘に中^あつべしと。銅柱^{どうちう}經に曰く、丹砂は金と爲すべく、河車は銀と作すべし。立たば則ち成るべく、成らば則ち真^まと爲らん。子^しその道を得ば、以て仙身なるべしと。黄山子が曰く、天地に金あり。我れ能く之を作す。二黄一赤^{たちじやう}立^たに成りて疑はずと。龜甲文に曰く、我が命は我に在りて天に在らず、丹を還^{かへ}して金と成さば億万年ならんと。古人豈に我を欺かんや。

ただ患ふるは、この道を知る者の多く貧しく、薬には至つて賤しきものあれども、遠方に生じて、乱世の得べき所に非ざることなり。戎塩鹵鹹^{じゆえんかん}の如きは皆賤しきものにして、清平の時^{つひ}は了^あに錢に直^{あたひ}せざれども、今時は価値を限らずして之を買へども無きなり。羌里^{きやうり}の石胆は千万錢もて一斤を求むるもまた得べからず。徒^{いた}にその方を知るのみならば、知らざる者と正に同じ。長歎を爲すべき者なり。その法を有する者は則ち或は飢寒して以て之を合することなし。而して富貴なる者はまたその法を知らざるなり。たとひ之を知るも、また一も信ずる者なし。たとひ頗る之を信ずるも、また已^{すで}に自ら金錢多ければ、豈^{あえ}に肯て見財を費して以て

その藥物を市^かはんや。棄繋逐飛の悔あらんことを恐るる故に、肯^{あへ}て為すことなきなり。また藥を買ふの価を計りて以て得る所の物を成せば、尤も大利あり。而かも更にまさに斉戒して辛苦すべきが故に克^よく為すことなし。

且つ夫れ名師の口訣を得ずんば、誠に輕しく作すべからざるなり。夫れ医家の藥は淺露なること甚しくして、その常に用ひて効ある方は便^{すなは}ちまた之を秘す。故に方^{ほう}には、後宮遊女僻側の膠^{かう}、封君、泥丸、木鬼子、金商芝、飛君根、伏竜肝、白馬汗、浮雲滓、童子丹衣、夜光骨、百花醴^{れい}、冬鄒齊の属^{伏竜肝は本、七、草、百花醴は本廿一、草に見ゆ、他は不明}を用ふるあれども皆近物のみ。しかも口訣を得ずんば、なほ知るべからず。況んや黃白の術に於てをや。今能く之を為す者は、徒にその価の貴きを以て之を秘するに非ず。この道一たび成れば、則ち以て長生すべし。長生の道は道の至りなるが故に、古人之を重んず。凡そ方書に名づくる所の藥物は、又或は常の藥物と同じくして、実は非なる者あり。河上姁女の如きは婦人にあらざるなり^{姁女は水銀の異名、本、九}。陵陽子明は男子にあらざるなり^{列仙伝に陵陽子明といふ神仙あり、文意と合はず}。禹餘糧は米にあらざるなり^{本、十石}。堯漿^明は水にあらざるなり。而して俗人は方^{まさ}に竜胆^{本、十}、虎掌^{本、十}、雞頭^{本、十}、鴨蹠^{本、十}、馬蹄^{本、十}、犬血^明、鼠尾^{本、十}、牛膝^上を用ふるを見て、皆之を血氣の物と謂^{おも}ひ、缺盃^{本、十}、覆盆^上、釜鑑^明、大戟^{本、十}、鬼箭^{本、冊}、大鈎^明を用ふるを見ては、之を鉄瓦の器と謂^{おも}ひ、胡主使者^{本、十}、倚姑^明、新婦^明、野文人^{胡正使者の異名}、守田公^{本、十}、戴文

浴(明不)徐長卿(三本、草十)を用ふるを見ては人の姓名と謂おもへり。近易きんいの草だに或は知らざることあるに、玄秘の方をば孰たれか能く悉く解せん。劉向が金を作らんとして成らざりしは、怪むべきことなきなり。その要を得るに及びては、則ちまた聖賢大才を煩わづらはしてしかる後に作ることをせざるなり。凡人にても為すべきのみ。劉向は豈に凡人ならんや。ただ口訣を得ざりしに坐するのみ。今將にその約を載せて之を効いたさんとするものは、以て将来の同志に貽のこすなり。まさに先づ武都の雄黄の丹色鶏冠の如くにして、光明にして夾石なき者を取るべし。多少は任意なれども、五斤よりも減ぜしむべからざるなり。之を擣つきて粉の如くし、牛胆を以て之に和し、之を煮て燥かわかしめ、赤土釜の一斗を実つる者を以て、先づ戎塩石胆の末まつを以て釜の中に薦しき、厚さ三分ならしめ、乃ち雄黄の末まつを内いれて、厚さ五分ならしめ、また戎塩を上に加へ、此の如く相似しめて盡つくるに至り、また碎炭火の棗なつめの核たねの如きものを加へて二寸ならしめ、蚓いんろうと蟻もら土及び戎塩を以て泥でいと為して釜外に泥し、一釜を以て之を覆おほひ、皆泥厚さ三寸ならしめて泄もらすことなく、陰乾かげばしにすること一月にして、乃ち馬糞火を以て之を煨あたむること三日三夜にして塞ひやし、發出してその銅を鼓下す。銅流れて冶銅鉄の如し。乃ちこの銅を鑄しめて以て簞たとなし、簞成りて以て丹砂水を盛り(また馬尿火を以て之を煨むること三十日にして、炉を發して之を鼓し、その金を得て即ち以て簞を為し、また以て丹砂水を盛り)また馬通火を以て煨むること三十日にして、発し取りて之を擣とうち治し、その二分と、生丹砂一分とを取りて、汞こうに發すれば(汞とは水銀なり)立たちどに凝りて黄金と成る。光明美色にして釘に中あつべ

きなり。

丹砂水を作る法

丹砂一斤を治めて生竹箒の中に入れ、石胆消石各二両を加へ、上下を覆ひ薦きて、箒口を閉塞し、漆骨丸を以て之を封じ、乾くを須ちて以て醇苦酒の中に内れ、之を地中に埋むること、深さ三尺なれば、三十日にして水と成り、色赤く味苦し。金樓先生が青林子に従ひて受くる所の黄金を作る法は、先づ錫すすの方広六寸にして厚さ一寸二分あるを鍛して、赤塩を以て灰汁に和し泥の如くならしめて以て錫の上に塗り、通じての厚さ一分ならしめ、累ねて赤土釜中に置き、率ねおほむ錫十斤に赤塩四斤を用ひて合せてその際を封固し、馬通火を以て之を煨むること三十日にして火を発きて之を視れば、錫の中悉く灰の状の如くにして、中に累累として豆の如き者あるは、即ち黄金なり。之を土甌の中に内れて炭を以て之を鼓し、十たび之を煉りて竝びに成るなり。率ね十斤の錫にして金二十両を得。ただ長沙、桂陽、豫章、南海の土釜用ふべきのみ。彼の郷土の人、土釜を作りて以て食を炊ぐに自ら多し。

赤塩を治め作る法

寒塩一斤を用ひて寒水石一斤を作り、また寒羽理一斤を作り、また白礬一斤を作り、合せて鉄器の中に内れ、炭火を以て之を火けば、皆消けて色赤し。乃ち之を出して用ふべきなり。角里先生が稷丘子に従ひて授けられたる黄金を化する法は、先づ礬水石二分を以て鉄器の中

に内れ、炭火を加へて沸かしめて、乃ち汞を内れ、多少自在にして、攪して相得しめ、六七沸して地上に注げば即ち白銀と成る。乃ち丹砂水、曾青水各一分、雄黄水二分を取り、金壓中に於て、微火の上に加へて沸かしめ、数々之を攪して相得しめ、また炭火の上に加へて沸かしめ、この白銀を以てその中に内れ、多少自在にして六七沸すべし。地上に注ぎて凝れば、則ち上色の紫磨金と成るなり。

雄黄水を治め作る法

雄黄を治めて、生竹箒の中に内れ、一斤をば取りて硝石二両を加へ、上下に覆ひ薦き、封ずるに漆骨丸を以てして醇大醋（或に醇苦酒に作る）の中に内れて之を埋むること深さ三尺なれば、二十日にして即ち化して水と為るなり。曾青水を作す方、及び礬石水を作す方もまた法を同じくす。ただ各箒中を異にするのみ。

小児の黄金を作す法

大鉄箒を作りて、中一尺二寸高さ一尺二寸と成し、小鉄箒を作りて、中六寸と成し、空をば之を磨し、赤石脂一斤、硝石一斤、雲母一斤、代赭一斤、硫黄半斤、空青四両、凝水石一斤、皆合せ搗きて細に篩ひ、醯を以て和して之を塗る。小箒の中、厚さ二寸。汞（水銀）一片、丹砂半斤、良非半斤を分ち、（良非を取る法は、鉛十斤を用ひて鉄盆の中に内れて炉の上に居ゑ、露にして之を灼き、鉛銷けて、汞三両を内れ、早く出づる者をば、鉄の匙を以て之を鈔取し、

名づけて良非といふなり。攪かきませて相得しめ、汞の見えざるを以て候こうとなし、小箆の中に置き、雲母にてその上を覆ひ、鉄の蓋にて之を鎮し、箆を取りて炉上に居すゑ、銷とけたる鉛を大箆の中に注ぎ、小箆を中に没し、上を去ること半寸にして、銷鉛を取りて候こうと為し、猛火にて之を炊ぎ、三日三夜にして成る。名づけて紫粉といふ。鉛十斤を取りて鉄器の中にて之を銷とし、二十日上下し、更に銅器の中に内れ、鉛の銷とくるを須まちて、紫粉を内れ、方寸匕にて之を攪かうすれば、即ち黄金と成るなり。白銀を作らんと欲せば、汞を取りて鉄器の中に置き、紫粉を内るゝこと三寸以上（寸以上は方寸
匕に作るべし）にして、火をもて相得しめ、水中に注げば、即ち銀と成るなり。

務成子の法は、鉄箆を作りて、長九寸径五寸とし、雄黄三斤を擣つき、蚓螻いんろうじやう壤と等分に作り合せて以て泥でいと為し、箆中に塗りて、径三寸、匱口四寸ならしめ、丹砂水二合を加へ、馬通火の上に覆おほひ極めて乾かしめ、銅箆の中に内れ、塞ふさぐに銅の合蓋を以てし、堅むるに黄沙を以てして、上を築つき、覆ふに蚓壤を以てし、泥上に重ね、泄れしむること無くして、炉炭の中に置き、三寸の炭あらしむ。箆口赤くなりて寒ひやすべし。之を発ひらけば、雄黄は皆銅箆に入い著す。また出入すること前法の如くす。三斤の雄黄精皆下りて箆中の下に入著すれば、提取して黄沙と等分に合作して以て炉と為す。炉の大小は自在なり。之を用ひんと欲せば、炉を炭火の中に置き、炉赤くなりて水銀を内れ、銀動けば則ち鉛を内る。その中に黄きなるもの傍より起

りて中央に交れば、之を地に注ぎて即ち金を成す。凡そ一千五百斤を作れば、炉力即ち盡く。この金をば、牡荊、赤黍酒を取りて之を漬ひたすこと百日なれば、即ち柔になりて和すべきなり。小豆の如くにして一丸を服すること、日に三たび服して一斤を盡せば、三虫伏尸百病皆去りて、盲せるものは視、聾せるものは聞き、老者は即ち年を還して三十の時の如く、火に入りて灼やけず。百邪衆毒冷風暑湿も人を侵すこと能はず。三斤を盡すときは則ち水上を歩行し、山川百神皆来りて侍衛し、寿は天地と相畢をはる。杼ちよ（一に杼に作る）血朱草けつしゆそうを以て一丸を煮て以て目眇めじりを拭へば、即ち鬼及び地中の物を見て、能く夜書す。白羊の血を以て一丸に塗りて水中に投ずれば、魚竜立たちじつりうに出でて以て取るべきなり。青羊の血、丹雞の血を以て一丸に塗りて都門の上に懸くれば一里疫えきせず。以て牛羊六畜の額の上に塗れば皆疫病せず、虎豹も犯さざるなり。虎胆蛇肪を以て一丸に塗りて、月建（北斗の柄の毎月昏時に指す方向にして子月ならば子の方丑の月ならば丑の方）の上より敵人の軍に擲てば、軍はすなはち故なくして自ら乱れ、相傷殺して走る。牛の血を以て一丸に塗りて以て井中に投ずれば、井中即ち沸く。以て流水に投ずれば、流水は則ち逆流すること百歩なり。白犬の血を一丸に塗りて社廟の舎中に投ずれば、その鬼神即ち見あらはれて役使すべし。兔の血を以て一丸に塗りて、六陰の地に置けば、行厨の玉女立たちじつりうに至りて六七十人に供すべきなり。鯉魚の胆を以て一丸に塗りて、持ちて水に入れば、水は之が為に開くこと一丈にして、水中に氣息するを得べし。以て行けば、雨を冒うすも霑うるほはざるなり。紫莧を以て一丸を煮て、其の汁

を含み咽めば、百日飢ゑざるべし。慈石を以て一丸を煮て髻の中に内れて以て賊を撃てば、
 自刃流矢之に中らず。之を射る者あれば、矢は皆自らに向ふなり。六丁六壬の上の土を以て
 一丸に竝せて以て人中を蔽へば、則ち形を隠す。一丸を含みて北に向ひて火を噴けば、火則
 ち滅ゆ。庚辛の日の申酉の時を以て西の地に向ひて一丸を以て樹に擲てば、樹木は即日にし
 て便ち枯る。また一丸を以て禹歩して虎狼蛇蝮に擲てば皆即死す。一丸を研きて以て石に書
 すれば、即ち石に入り、金に書すれば即ち金に入り、木に書すれば木に入り、書する所皆そ
 の肌理に徹し、削り治むるも去るべからざるなり。卒に死して未だ宿を経ざるとき、月建の
 上の水を以て一丸を下して咽喉に入らしめ、竝に水を含みて死人の面に噴けば即ち活く。狐
 の血、鶴の血を以て一丸に塗りて、爪の中に内れて以て指せば、万物口に随ひて変化し、即
 ち山行き木徙る。人皆之を見て然りとすれども実は動かざるなり。凡て黄白を作るには、皆
 太乙玄女老子を立てて醮祭し、九丹を作るの法の如くにして、常に五香を焼きて、香絶えざ
 らしむべし。又金成れば、先づ三斤を以て深水中に投じ、一斤を市中に投じ、然る後まさに
 その意を恣にして之を用ふるを得るのみ。

抱朴子内篇卷十七 登涉（山に登る心得）

或る人山に登るの道を問ふ。

抱朴子が曰く、

凡そ道を為し、葉を合せ及び乱を避けて隠居する者は山に入らざるなし。然して山に入るの法を知らざる者は多く禍に遇ふ。故に諺にこれ有りて、太華の下に白骨狼籍たりと曰へるは、皆偏に一事のみを知りて博く備ふること能はざるものは、生を求むるの志ありとも反りて強死するを謂へるなり。山には大小となく皆神靈あり。山大なれば神大にして、山小なれば神小なり。山に入りて術無ければ、必ず患害あり。或は疾病を被り、及び傷刺し、及び驚怖して安んぜず。或は光影を見、或は異声を聞き、或は大木をして風ふかざるに自ら摧折せしめ、岩をして故無くして自ら墮落し打撃して人を煞さしむ。或は人をして迷惑して狂ひ走り、坑谷に墮落せしめ、或は人をして虎狼に遣はしめ毒虫をして人を犯さしむ。輕しく山に入るべからざるなり。

山に入るにはまさに三月と九月とを以てすべし。これはこれ山の開く月なり。又まさにその月の中の吉日佳時を択ぶべし。若し事久しくして徐徐にこの月を須つを得ずんば、ただ日時のみを選ぶべし。凡そ人、山に入るときは皆まさに先づ斉潔すること七日にして、汚穢を

経ず、山に昇るの符を帶び、門を出づるとき周身三五の法を作すべし。また五岳に殃を受くるの歳あり。九州の地の如きは更に衰盛あり、飛符煞氣を受くれば、その地の君長は作すべからざるなり。州公城名録を按ずるに、天下の分野に災の及ぶ所は、避くべくして禳ふべからず。居宅も亦た然り、山岳も皆爾り。また大忌とすべきは、甲乙寅卯の歳の正月二月を以て東岳に入るべからず、丙丁己午の歳の四月五月を以て南岳に入るべからず、庚辛申酉の歳の七月八月を以て西岳に入るべからず、戊己の歳の四季（三、六、九、十二）の月を以て中岳に入るべからず、壬癸亥子の歳の十月十一月を以て北岳に入るべからず。すべからく太華、霍山、恒山、太山、嵩高山に入るべからず。乃ちこの歳を忌む。その方面は皆同じく禁ずるなり。

また万物の老いたる者はその精悉く能く人の形に仮託して以て人の目を眩惑して常に人を試む。ただ鏡中に於てはその真形を易ふること能はざるのみ。ここを以て古の山に入る道士は皆明鏡の九寸以上なるものをもて背後に懸く。然るときは老魅も敢て人に近づかず。或は来りて人を試みる者あれば、則ちまさに鏡中を顧視すべし。これ仙人及び山中の好き神ならば、鏡中を顧みるも、故より人の形の如し。もしこれ鳥獸邪魅ならば則ちその形貌皆鏡中に見はる。また老魅若し来らば、その去るときは必ず却行す。行かば鏡を転じて之に對せしむべし。その後より之を視るに、若しこれ老魅ならば、必ず踵なし。その踵ある者は則ち山神なり。昔し、張蓋（一に蓋に作る）躡及び偶高（一に豪に作る）成の二人竝に雲台山の石室の中に精思す。忽

ち一人ありて、黄練の单衣と葛巾とを著け、往きてその前に到りて曰く、勞するかな道士よ、乃ち幽隱のところに辛苦すと。是に於て二人鏡中を顧視すれば、乃ち是れ鹿なり。因りて之に問ひて曰く、汝はこれ山中の老鹿なるに、何ぞ敢て詐りて人の形と為るやと。言未だ絶えざるに、来りし人は即ち鹿となりて走り去れり。林慮山下に一亭ありて、その中に鬼あり。宿する者あるごとに、或は死し或は病む。常に夜には数十人ありて、衣の色或は黄に、或は白く、或は黒く、或は男、或は女なり。後に鄒（一に鄒に作る）伯夷といふもの之に遇ひて宿し、燈燭を明にして坐して経を誦む。夜半に十餘人ありて、来りて伯夷と対坐し、自ら共に檮蒲（うちば）博戯（はくぎ）（ろく）す。伯夷密に鏡を以て之を照すに、乃ちこれ群犬なり。伯夷乃ち燭を執りて起ち、佯りて燭燼を以てその衣を熱けば、乃ち毛を焦すの氣を作せり。伯夷小刀を懷にして、因りて一人を捉へて之を刺す。初めは人語を作し、死して犬となる。餘の犬は悉く走る。こゝに於て遂に絶す。乃ち鏡の力なり。

上士の山に入るには、三皇内文及び五岳真形の図を持し、所在に山神及び按鬼録、石州社及び山卿宅尉を召して之を問へば、則ち木石の怪も、山川の精も、敢て来りて人を試みず。その次は即ち七十二精鎮符を立てて、百邪を制するの章及び朱官印、包元十二印を以て、住する所の四方を封ずれば、また百邪敢て之に近づかざるなり。その次は八威の節を執りて老子の玉策を佩ぶれば、則ち山神を使ふべし。豈に敢て害を為さんや。余、鄭君の言を聞くに此

の如し。実はまた、その事を具ぐさに知る能はざるなり。

余が師は常に門人に告げて曰く、夫れ人の道を求むること、家の貧しきを憂ふるが如く、位の卑きを愁ふるが如くならば、豈に得ざることあらんや。ただ志の篤からず、近きを務めて遠きを忘るることを患ふ。之を聞くとときは悦びで僣くつとして席すを前すむれども、未だ久しからざるに、則ち忽然として遺わするるがごとし。毫釐かうりんの益えき未だ固からざるに、丘山の損止まず。また安んいずくぞ至言の微妙を窮め、無極の峻崇を成すことを得んや。

抱朴子が曰く、山に入るの大忌は、正月に午、二月に亥、三月に申、四月に丑、五月に戌、六月に卯、七月に子、八月に巳、九月に寅、十月に未、十一月に辰、十二月に酉（十二月に配当する十二支に訛誤あり。今孫星衍の説によりて訂正す）

山に入る良日は、甲子、甲寅、乙亥、己巳、乙卯、丙戌、丙午、丙辰、以上の日は大吉なり。

抱朴子が曰く、九天秘記及び太乙遁甲を按ずるに、云ふ、山に入るの大月忌は、三日、十一日、十五日、十八日、二十四日、二十六日、三十日。小月忌は、一日、五日、十三日、十六日、二十六日、二十八日。この日を以て山に入れば、必ず山神に試みられ、また求むる所は得ず、作す所は成らず。ただ道士のみならず、凡人もこの日を以て山に入れば、皆凶害ありて、虎狼毒虫と相遇ふなり。

抱朴子が曰く、天地の情状、陰陽の吉凶は、芒々乎としてそれまた詳にしがたきなり。吾もまた必ずしも之を有りと謂はず、また敢へてその無きを保せざるなり。然しかも黃帝、太公の皆

信じて仗る所、近代の達者なる嚴君平、司馬遷の皆抛り用ふる所なり。而して經伝には治歷明時、剛柔の日あり。古言に曰く、吉日惟れ戊と。（詩經にあり）自りて来るところあるなり。王者は太史の官を立て、封拜置立するとき、宗廟に事あるとき、天地を郊祀するとき、皆良辰を択べり。而して近才の庸夫自ら脱俗を許し、挙動所為に善日を揀ぶを恥づるはまた戇愚ならずや。毎に今の山に入るものを伺ふにその良時日を得ざるときは、交も下りてその驗あれば、輕しく入るべからざるなり。

玉鈴經ぎようれんを按ずるに云ふ、名山に入らんと欲せば、遁甲とんかふの秘術を知らざるべからずと。而して人の為に委曲ためにその事を説かざるなり。而して靈宝經に云ふ、山に入るには当に保日及び義日を以てすべし。若し日を專にする時は大吉なり。制日、伐日を以てすれば、必ず死すと。又一々に之を道はざるなり。余少くして山に入るの志あり。これに由りて乃ち行きて遁甲の書を學ぶ。乃ち六十餘卷あり。事は卒に精しくすべからず。故にその要を鈔集して以て囊中の立成と為す。然も筆を以て伝ふるに中らず。今その較略を論ぜん。想ふに、事を好む者山に入らんと欲せば、行きて當に訪ね索むべし。之を知る者もまたつひに世に乏しからざるなり。遁甲中經に曰く、道を求めんと欲せば、天内日天内時を以て鬼魅を効し、符書を施し、天禽日天禽時を以て名山に入れ。百邪虎狼毒虫盜賊をして敢て人に近づかざらしめんと欲せば、天蔵に出でて地戸に入れ。凡そ六癸を天蔵と為し、六己を地戸と為すなりと。また曰く、乱

世を避けて、跡を名山に絶ち、憂患なからしめんには、上元丁卯の日、名づけて陰徳と曰ふの時、一名は天心といふものを以てせば、以て隠れ^{かく}淪^{しづ}むべし。いはゆる白日の陸沈にして、日月光なく、人鬼見る能はざるなりと。また曰く、仙道を求めて名山に入る者は、六癸の日、六癸の時、一名は天公日を以てせば、必ず世を度^どするを得んと。又曰く、山林の中に往くには当に左手を以て青竜の上の草を取り、半を折りて、逢星の下に置き、明堂を歴て陰中に入れ、禹歩して行き、三たび呪^{じゆ}して曰ふべし。諸皐太陰將軍独り開け。曾孫王甲開く勿れ。外人の人をして甲を見しむる者には以て東薪と為せ。甲を見ざる者には以て非人と為せと。則ち持つ所の草を折りて地上に置き、左手に土を取りて以て鼻の人中に傳^つけ、右手に草を持ちて自ら蔽ひ、左手をば前に著け、禹歩して行きて癸下に到り、氣を閉ちて住すれば、人鬼見ること能はざるなり。凡そ六甲を青竜と為し、六乙を逢星と為し、六丙を明堂と為し、六丁を陰中と為すなり。☳と☵と比^ひびて既^き済^{せい}の卦^{くわ}を成す。初^{あした}一初二^{あした}跡任^{あした}へず。九跡数然として、相^{いんじよう}因^{いんじよう}仍^{いんじよう}す。一步は七尺、^(又云ふ)_(一尺に作る)合せて二丈一尺^(一に一步三)にして、九跡を顧視す。また禹歩の法は、正しく右足を立てて前に在らしめ、左足をば後に在らしむ。次にまた^(左足を前)_(にし次に)右足を前にし左足を以て、右足に従はしめて併す。これ一步なり。次にまた右足を前にし、次に左足を前にし、右足を以て左足に従はしめて併す。これ二步なり。次にまた^(左足を前)_(にし次に)右足を前にし左足を以て右足に従はしめて併す。これ三步なり。此の如くにして禹歩の道^を畢^はる。凡

そ天下の百術を作すには皆宜しく万歩を知るべし。独りこの事のみならざるなり。

抱朴子が曰く、靈宝經にいはゆる保日とは、支干に於て上の下を生ずるの日なり。甲午乙巳の日のごときは是なり。甲は木なり、午は火なり、乙もまた木なり、巳もまた火なり。火は木より生ずるが故なり。また義日と謂へるは、支干に於て下の上を生ずるの日なり。壬申癸酉の日のごときは是なり。壬は水なり、申は金なり、癸は水なり、酉は金なり。水は金より生ずるが故なり。いはゆる制日とは、支干に於て上の下に克つの日なり。戊子己亥の日のごときは是なり、戊は土なり、子は水なり、己もまた土なり、亥もまた水なり。五行の義にて土は水に克つなり。いはゆる伐日とは、支干に於て下の上に克つの日なり。甲申乙酉の日のごときは是なり。甲は木なり、申は金なり、乙もまた木なり、酉もまた金なり。金の木に克つが故なり。他は皆之に倣ひて、引きて之を長じて、皆之を知るべきなり。

抱朴子が曰く、名山に入るには甲子開除の日を以てす。五色の繒各五寸を以て大石の上に懸くれば、求むる所は必ず得べし。又曰く、山に入るには宜しく六甲の秘祝を知るべし。祝して曰く、臨兵闘者皆陳列前行と。凡そ九字をば常に当に密に之を祝すべし。避けざる所なし。要道は煩はしからずとは此をこれ謂ふなり。

抱朴子が曰く、山中の山精の形は小児の如くにして独足にて走りて後に向ふ。喜びて来りて人を犯す、人山に入りて、若し夜人の音声大語を聞かば、その名を蚊といふ。知りて之を

呼べば、即ち敢て人を犯さざるなり。一に熱内と名づく。また兼ねて之を呼ぶべし。また山精ありて、鼓の如くにして赤色なり。また一足なり。その名を暉まといふ。又或は人の如くにして長九尺あり、裘を衣て、笠を戴く。名づけて金累きんるいといふ。或は竜の如くにして、五色にして赤角あり。名づけて飛飛（一に飛竜）といふ。之を見るときは、皆名を以て之を呼べば、即ち敢て害を為さざるなり。

抱朴子が曰く、山中に大樹の能く語る者あるは、樹の能く語るにはあらずして、その精の語るなり。その名を雲陽といふ。之を呼べば吉なり。山中にて夜火光を見るは、皆久しく枯れたる木の作す所なれば、怪しむことなかれ。山中にて夜胡よるえびすの人を見るは、銅鉄の精にして、秦人を見るは百歳の木の精なれば、之を怪しむこと勿れ。竝に害を為すこと能はざるなり。山水の間にて吏人を見るは、その名を四微しけいといふ。之が名を呼ぶときは即ち吉なり。山中に大蛇の冠幘くわんさくを著くる者を見るは、その名を升卿しやうけいといふ。之を呼べば即ち吉なり。山中にて吏を見るとき、若しただ声を聞くのみにて形を見ざるに、人を呼びて止まざるには、白き石を以て之に擲てば則ち息む。一つの法としては、葦を以て矛と為して之を刺すときは即ち吉なり。山中にて鬼を見るとき、若し来りて人を呼び、食を求めて止まざる者には、白き茅ちがやを以て之に投ずれば即ち死す。山中にて、寅の日に、自ら虞吏ぐりと称する者あるは虎にして、当路君と称する者は狼、令長と称する者は老狸なり。卯の日に、丈人と称する者は兎にして、

東王父と称する者は麋おほじか、西王母と称する者は鹿なり。辰たうの日に、雨師と称する者は竜にして、河伯と称する者は魚、無腸公子と称する者は蟹なり。巳みの日に、寡人と称する者は社中の蛇にして、時君と稗ひつじする者は龜なり。午うまの日に、三公と称する者は馬にして、仙人と称する者は老樹なり。未ひつじの日に、主人と称する者は羊にして、吏と称するものは驢ろなり。申さるの日に、人君と称する者は猴にして、九卿と称するものは猿なり。酉とりの日に、將軍と称する者は雞にして、捕賊と称する者は雉なり。戌いぬの日に、人の姓字を称する者は犬にして、成陽公と称する者は狐なり。亥みの日に、婦人と称する者は金玉にして、神君と称する者は猪なり。子ねの日に社君と称する者は鼠にして、神人と称する者は伏翼なり。丑うしの日に、書生と称する者は牛なり。たゞその物の名を知るときは害を為すこと能あたはざるなり。

或る人間うて曰く、山沢に隠居して蛇虺へびまじしを避さくるの道如何と。

抱朴子が曰く、

昔、円丘に大蛇多くして、又好よき薬をも生じたり。黄帝之に登らんとせしに、広成子は之に教へて雄黄を佩きびしめしかば、衆蛇皆去りぬ。今、武都の雄黄の雞冠の如き色ある者五兩以上を帯びて、以て山林草木に入るときは、蛇を畏おそれざるべし。蛇若し人に中あたるときは、少許の雄黄末を以て瘡きずの中に内いるれば、また登時たたちに愈いゆべし。蛇の種は多けれども、たゞ蝮蛇及び青金蛇の人に中あたるときのみ、至つて急なりとなす。之を治せざること一日なれば、人を

殺す。之を治するの方術を曉らざる人、この二蛇に中てらるれば、即ち刀を以て、傷つきたる瘡肉を割きて、以て地に投ずべし。その肉の沸くこと火もて炙るが如く、須臾に焦盡して、人は活くることを得るなり。この蛇は、七八月毒盛なる時には人を噛むことを得ずしてその毒泄れず。乃ち牙を以て大竹及び小木を噛めば皆即ち焦枯す。

今、道士たるの人の山に入るものは、徒に大方を知るのみにして、之を避くるの道もまた小事にあらざることを曉らざるなり。未だ山に入らざる時、当に預め家に止まりて、先づ禁法を作すことを学ぶべし。日月及び朱雀、玄武、青竜、白虎を思ひて以てその身を衛り、乃ち行きて山林草木の中に到りて、左に三口の氣を取りて之を閉ぢ、以て山草の中を吹く。意に、この氣をして赤色をあらはして雲霧の如くならしめ、数十里の中に弥り満ちて、若し従人あらば、多少となく皆羅列せしめんことを思ふ。氣を以て之を吹くときは蛇を踐むとも、蛇は敢て動かず、また略ぼ蛇を見るに逢はざるなり。若し或は蛇を見るときは、因りて日に向ひて左に三氣を取りて之を閉ぢ、舌を以て天を柱へ、手を以て都関を捻り、また天門を閉ぢ、地方を塞ぎ、因りて物を以て蛇の頭を抑へて、手にて之を縈らし、地に画きて獄と作して以て之を盛るも、また捉へて弄ぶべく、以て頭頸に繞ふも、敢て人を噛まざるなり。禁を解き氣を吐きて以て之を吹くにあらざるよりは、また遂に復び獄を出でて去ることを得ざるなり。若し他人が蛇に中てらるれば、左に三口の氣を取りて以て之を吹けば、即ち愈えてまた痛ま

ず。若し相去ること十数里なる者はまた遙に氣を作して彼が姓名を呼ぶことを為すべし。男ならば我が左の手を祝^{いの}り、女ならば我が右の手を祝^{いの}るべし。彼もまた愈^いゆるなり。

介先生の法は、山中に到りて住するとき五色の蛇各一頭を作^なさんことを思ひ、乃ち氣を閉ぢ、青竹及び小木板を以て屈して之を刺し、左に徊^{めぐ}り、禹^う歩^ほし、蜈蚣^{むか}数干板を作りて以てその身に衣^きんことを思へば、終^{つひ}にまた蛇に逢はざるなり。或は乾姜^{かんきやう}、附子^{ふし}を以て之を肘^{ひぢ}の後に帶び、或は牛羊鹿の角を焼きて身を薰^{くす}べ、或は王方平が雄黄丸を帶び、或は猪の耳の中の垢及び麝香丸^{じやかう}を以て足の爪甲の中に著^つくれば、皆効あり。また、麝^{じや}及び野猪は皆蛇を啖^くふが故に以て之を厭^{えん}するなり。また運日^{運は雲に作るべし}（^{えん}）鳥及び蜈蚣^{えいき}もまた皆蛇を食ふが故に、南方の人の山に入るときは、皆蜈蚣の尾と運日の喙^{くちばし}とを帶びて以て蛇を辟^さく。蛇の人に中^{あた}るとき、この二物を刮^{けず}りて以てその瘡^ぬに塗れば、また登^{たう}時に愈^いゆ。雲日は鳩^{うんてう}鳥の別名なり。又南方の人の山に入るときは、皆竹管を以て活きたる蜈蚣^{むか}を盛る。蜈蚣は蛇ある地を知るときは便^{すなは}ち管中に動き作^{おこ}る。此^{かく}の如きときには、詳に草中を視れば必ず蛇を見ん。大蛇の丈餘にして身の一围以上のものは、蜈蚣之を見て、能く氣を以て禁ずれば、蛇即ち死す。大蛇は、涯岸の間に在る蜈蚣を見るときは、走りて川谷深水の底に入りて逃る。その蜈蚣はただ水上に浮びて禁ずるのみなれども、人は真青にして大^い緋^しの如き物ありて直に下りて水に入りて蛇の処に至るを認むべし。須臾^{しゆいつ}にして蛇は浮び出でて死するなり。故に南方の人は、これによりて、蜈

蛇を末として蛇瘡を治し、皆登時に愈ゆ。

或る人間ひて曰く、江南の山谷の間には諸の毒惡多し、之を避くるに道あるかと。

抱朴子答へて曰く、中州の高原は土氣清和にして、上国の名山には了にこの輩無し。今呉楚の野は、暑湿鬱蒸して、衡山、霍山のごとき正岳にもなほ毒ありて螫すもの多し。また短狐あり。一名は蜮、一名は射工、一名は射影といふ。その実は水虫にして、状は鳴蜩の如く、大さは三合の盃に似て、翼有りて能く飛び、目なくして耳利く、口の中に横たはりたる物ありて角弩のごとし。もし人の声を聞くとときは、口中の物の角弩の如くなるに縁りて、氣を以て矢となし、則ち水に因りて人を射る。人の身に中れば即ち瘡を發し、人の影に中れば病むのみにて瘡を發せず。之を治することを曉らざれば、人を殺す。その病は大傷寒に似て、十日ならずして皆死すべし。また沙蟲あり。水陸ともに有り。その新雨の後、及び晨暮の前に跋涉するときは必ず人に著く。ただ烈日にして草の燥く時にはや、稀なるのみ。その大きさは毛髮の端のごとし。初めて人に著けば、使ちその皮裏に入る。その所在は芒刺の状の如し。小く犯して大に痛む。針を以て挑げて之を取るべし。正赤なること丹の如く、爪の上に著くれば行動す。若し之を挑げずんば、虫は鑽りて骨に至り、便ち周く行走して身に入る。それは射工と相似て皆人を殺すものなり。人この虫ある地を行くときは、所住に還るごとに輒に火を以て炙り焼きて身に遍からしむべし。則ちこの虫は地に墮つべし。もし八物、麝香丸及び度世

丸及び護命丸及び玉壺丸、犀角丸及び七星丸及び薺萐（本十）を帶ぶれば、みな沙蟲短狐を避くるなり。若し卒つひにこの諸の藥を得ること能はずんば、ただ好生麝香を帶ぶるもまた佳し。雄黃、大蒜にんにくを等分にして合せ擣き、雞子たまごの大きき程の一丸として帶ぶるもまた善し。若し已すでに中てられたらば、この藥を瘡に塗りても癒ゆ。赤莧あかひゆ（本廿）を咀みて汁にして之を飲み之を塗るもまた癒ゆ。五茄根（本卅）及び懸鉤草（本、十八）菑藤（明）この三物は皆各単行すべく、以て擣つきてその汁一二升を服すべし。また射工虫（本、四十）は冬天に山谷の間に蟄す。大雪の時に之を索むるに、この虫の在る所には、その雪積留せずして、氣の起つこと灼やき蒸むすがごとし。これを掘れば、地に入ること一尺に過ぎずして得べし。陰乾かげぼしにして末として之を帶ぶれば、夏天に自ら射工おのつかを避く。もし道士にして一禁方及び洞百禁、常存禁及び守真一（地真篇）を知るときは百毒敢て之に近づくずして、諸藥を仮り用ひざるなり。或る人問ふ、道士山居して、岩に棲すみ岫くきに庇かくれ、網褥あんじよくの温あた、かなるものあらざるとき、直にその身をして風濕を畏れざらしめんとせば、その術如何にすべきかと。

抱朴子が曰く、金餅散、三陽液、昌辛丸、葷草、耐冬煎、独搖膏、茵芋玄華散、秋地黄血丸、皆五十日を過ぎざる間に之を服して止むときは、以て十年風濕を畏れざるを得べし。若し金丹の大藥を服せば、未だ虚そらに昇り軽く拳らずと雖も、体は疾を受けず、風に当り湿に臥すと雖も、傷やぶること能はざるなり。この七藥を服せば、皆始めて道を学べるものと謂ふべき

のみ。姚先生はただ三陽液を服して、便ち氷の上に袒臥し、つひに寒え振はざりき。これ皆介先生及び梁有道が石上に臥し及び秋冬に風寒に当り、已に試みて験ありたる秘法なり。

或る人江を渉り海を渡りて蛇竜を避くるの道を問ふ。

抱朴子が曰く、道士已むを得ずして大川を游渉する者は、皆先づまさに水次に於て雞子一枚を破り、少許の粉雜香の末を以て合せて器に攪ぜ、水中にて之をもて自ら洗濯するときは、風波蛟竜を畏れざるを得べし。また東海小童符、及び制水符、蓬萊札を佩ぶれば皆水中の百害を却く。また六甲、三金符、五木禁あり。又の法は、川に臨みて先づ祝りて曰ふべし、卷蓬卷蓬（或は弓逢弓逢に作る）向伯前に導きて蛟竜を避け、万災消滅して天清明なりと。また金簡記に云ふ、五月丙午の日の日中を以て五石を擣きてその銅を下す。五石とは雄黄、丹砂、雌黄、礬石、曾青なり。皆これを粉にして金華池を以て之を浴し、六一神炉の中に入れて之を鼓下し、桂木を以て焼きて之を為す。銅成るときは剛炭を以て之を鍊り、童男童女をして火を進めしめ、牡銅を取りて雄劍と為し、牝銅を取りて雌劍と為し、各長さ五寸五分とす。これ土の数を取りて以て水の精を厭するなり。これを帯びて水行するときは、蛟竜、巨魚、水神、敢て人に近づかざるなり。銅の牝牡を知らんとせば、まさに童男童女をして俱に水を以て銅に灌がしむべし。銅に灌ぐはまさに火中に在りて赤に向ふ時を以てすべし。その時銅自ら分れて兩段と為る。凸起ある者は牡銅にして、凹陷ある者は牝銅なり。各に名を刻して之を識し、水に

入らんとするときは、雄なる者を左に帶び、雌なる者を右に帶ぶべし。但し船に乗りてその身水を渉らざる者は、その陽日には雄を帶び、陰日には雌を帶ぶべし。また天文大字に北帝の書あり。帛に写して之を帶ぶるも、また風波蛟竜水虫を避く。

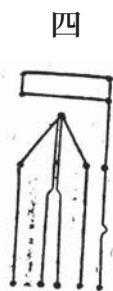
或る人問うて曰く、山川廟堂（一に座に作る）百鬼を避くるの法如何と。

抱朴子が曰く、道士の常に天水符及び上皇竹使符、老子左契及び守真一、思三部將軍を帶ぶる者には鬼敢て近づかず。その次は則ち百鬼録を論じて天下の鬼の名字及び白沢図、九鼎記を知れば、則ち衆鬼おのづか自ら却く。その次は鶡子赤石丸及び曾青夜光散及び葱実烏眼丸を服し、及び白石英祇母散を吞むときは皆人をして鬼を見しめて、鬼は之を畏るべし。

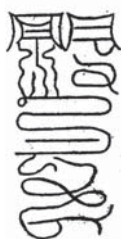
抱朴子が曰く、老君黃庭中胎四十九の真秘符あり。山林に入るとき、甲寅きのえとらの日に白素しらぎぬに丹書し、夜、案中に置きて、北斗に向ひ、之を祭るに酒と脯ほしと各少少を以てし、自ら姓名を説き、再拜して受取りて衣の領えりの中に内いるれば、山川の百鬼万精虎狼虫毒を避くべし。何ぞ必ずしも道士のみならん。乱世に難を避けて山林に入るもまた宜よろしくこの法を知るべきなり。

山に入るの符

抱朴子が曰く、次頁の五符は皆老君が山に入るの符なり。丹を以て桃の板の上に書し、その文字を大書して、板の上に瀾漫びまんせしめ、以て門戸の上及び四方四隅及び道とする所の側の要所に著くべし。所住の処を去ること五十歩の内にては山精鬼魅を避く。戸内の梁柱にはみ

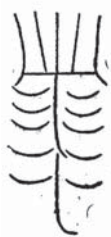


な^{ほじ}施し安く^おべし。凡そ人の山林に居るもの及び暫く山に入るものも皆用ふべし。即ち衆物敢て害せざるなり。三符をば以て相連ねて一板上に著くべし。意謂爾非葛氏（原註に曰く、此六字は疑ふらくは附註の語に入りしものと）



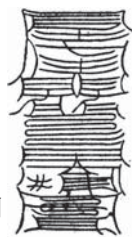
抱朴子が曰く、此の符はこれ老君が山に入るの符なり。戸内の梁柱には皆施すべし。凡そ人の山林に居るとき、及び暫

く山に入るときは、皆宜しく之を用ふべきなり、



抱朴子が曰く、これはこれ仙人の陳安世が授けたる、山に入りて虎狼を避くるの符なり。丹を以て絹に書し、二符各之

を異にして常に帶び、所住の処に著くること各四枚にして、移涉いせふするときは、当に之を抜き収めて以て去るべし。大なる神秘なり。山を開く符は千歳あまつら藥を以てす。名山の門開けて、宝書、古文、金玉皆見はる。之を秘せよ。右一法此の如く大同小異なり。



山に入りて佩帶するの符

抱朴子が曰く、此の符はこれ老君が戴く所の百鬼及び蛇蝮虎狼の神印なり。なづめ棗の心木方二寸を以て之を刻し、再拝して之を帶ぶ。甚だ神効あり。
(疑ふらくは 缺文あり) 仙人陳安世が符なり。



この三符は兼ねて同じく牛馬の屋の左右前後及び猪欄の上に著くれば虎狼を避くるなり。

或る人問うて曰く、昔し聞くに、談昌は或は水上に歩行し、或は久しく水中に居れりと。何の法を以てするか。

抱朴子が曰く、葱涕(明)を以て桂(本、卅)に和して、梧桐の子のみ如くなるを服すること七丸。日に三たび服して三年に至れば、則ち能く水上を行くなり。鄭君言ふ、ただ気を閉ぢて千息の久しきに至ることを習へ。久しければ、則ち能く水中に居ること一日許なるべ

し。眞の通天犀角（本、五十
一上、獸）三寸以上を得て、刻みて魚と為し、之を銜くみて以て水に入れば、
 水常に人の為に開くこと方三尺にして、水中に氣息することを得べし。又通天犀角に、一
 の赤き（或は白
に作る）理すぢの、縊いとすぢの如くにして本より末に徹するあり。この角を以て米を盛りて、群
 雞の中に置けば、雞は之を啄つばまんとして、未だ数寸に至らざるに、即ち驚きて却退す。故に
 南方の人は或は通天犀を名けて駭雞犀と為す。この犀角を以て穀積の上に著くれば、百鳥敢
 て集らず。大霧重露の夜以て中庭に置けば終に沾濡せんじゆせざるなり。この犀獸は、深山の中に在
 りて、晦冥の夕にはその光正に赫然として炬火の如し。その角を以て導たうと為し、毒藥を湯と
 為して、この導たうを以て之を攪あすれば、皆白沫を生じて湧起し、了つひに勢を復すること無し。以て
 無毒の物を攪あすれば、則ち沫あわの起たつこと無し。故にこれを以て之を知るなり。若し異域に行
 くとき、蠱毒こどくの郷有らば、他の家に於て飲食する毎に、則ち常に先づ犀を以て之を攪するなり。
 人の毒箭あに中あてられて死せんとする有らんには、この犀の釵かんざしを以て瘡中に刺すときは、その
 瘡則ち沫出あわでて愈いゆるなり。通天犀の能く毒を煞ころす所以の者は、その性専ら百草の毒ある者
 及び衆木の刺棘とげある者を食ひて、妄に柔滑なる草木を食はざるによれり。この獸は歳に一た
 び角を山中の石間に解く。人或は之を得れば、則ち木を刻みて色理も形状も皆その角の如く
 ならしめて以て之を代ふべし。犀は覺さとること能はずして、後の年にも輒すなはち更に角を解きてそ
 の処に著くるなり。他の犀もまた惡を避けて毒を解けども、然しかも通天の者の妙なるが如きこ

と能はざるなり。或は六戊の符を食ふこと千日、或は赤斑の蜘蛛及び七重の水馬（水上にある小虫）を以て憑夷水仙丸に合せて之を服すれば、則ちまた以て水中に居るべし。又以て蹠の下に塗れば、則ち以て水上を歩行すべきなり。頭の垢だもなほ以て金鉄をして水に浮ばしむるに足れり。況やこれよりも妙なるものをや。

或る人問ふ、道を為す者多く山林に在るに、山林には虎狼の害多し。何を以てか之を避けん。抱朴子が曰く、古の人の山に入る者は皆黃神越章の印を佩ぶ。その広さ四寸。その字は一百二十。以て泥に封じて、所住の四方各百歩に著くれば、虎狼は敢てその内に近づかざるなり。行きて新しき足跡を見るとき、印を以て順に之に印せば、虎は即ち去るべく、印を以て逆に之に印せば、虎は即ち還るべし。この印を帶びて以て山林に行くときは、また虎狼畏れざるなり。ただに虎狼を避くるのみならず、若し山川社廟血食の惡神の能く禍福を作す者有るときは、印を以て泥に封じて、その道路を断たば、復た能く神たらず。昔し石頭水に大なる鼃あり。常に一深潭の中に在り。人因りてこの潭を名づけて鼃潭となす。この物は能く鬼魅と作りて病を人に行ふ。呉に道士の戴昞といふものありしが、偶之を覩て、越章を以て泥に封じて、數百封を作りて、舟に乗りて、この封泥を以て遍く潭中に擲ちしに、良久しくして、大なる鼃の径の長さ丈餘なるものありて浮び出でて敢て動かざりしかば、乃ち之を格殺したるに病める者竝に愈えたり。また小き鼃ありて出でて羅列して渚の上に死したるもの甚だ多

かりき。山中にて卒に虎に逢はば、便ち三五禁を作すべし。虎もまた即ち却き去らん。三五禁の法とは当にすべからく口伝すべし。筆にては委曲にすること能はず。一の法は、直に吾が身を思ひて朱鳥と為し、長さ三丈（又二丈に作る）ならしめよ。而して来れる虎の頭上に立ち、因りて即ち氣を閉ぢよ。虎は即ち去らん。若し暮に山中に宿らば、密に頭上の釵を取りて、氣を閉ぢて似て白虎の上を刺すべし。則ちまた畏るゝ所なからん。又の法は、左手を以て刀を持ち、氣を閉ぢ、地に画きて方形を作し、祝りて曰ふべし。恒山の陰、太山の陽、盜賊起らず、虎狼行かず、城郭完からず、閉づるに金関を以てすと。因りて刀を以て横ふれば、旬日にして白虎の上に中りて、また畏るゝ所なきなり。或は大禁を用ひて、三百六十氣を呑み、左に右を取りて以て虎を叱すれば、虎もまた敢て起らず。この法を以て山に入れば、また虎を畏れず。或は七星歩及び玉神符、八威五勝符、李耳太平符、中黃華蓋印文、及び石流黃散、燒



牛羊角を用ひ、或は西岳公禁山符を立つれば、皆驗あるなり。闕此四符也（原註に曰く、此五字は附註の語の誤りて正文に入りしならん）

この符はこれ老君が山に入るの符にして、下説は文の如

し。又戸内の梁柱に皆之を施すべし。ほどこし凡そ人の山林に居るもの及び暫く入るもの皆之を用ふべし。

抱朴子内篇卷十八 地真（「真一」を守りて
勇を保つべきこと）

抱朴子が曰く、余之を師に聞くに云ふ、人能く「一」を知りて万事畢ると。「一」を知る者は一として知らざる無きなり。「一」を知らざる者は一として知ること無きなり。道は「一」に起りて、その貴きこと偶するものなし。各一処に居りて以て天地人に象るが故に三「一」と曰ふなり。天は「一」を得て以て清く、地は「一」を得て以て寧く、人は「一」を得て以て生き、神は「一」を得て以て靈なり。金は沈み、羽は浮び、山は峙ち、川は流る。これを視れども見えず。これを聴けども聞えず。これを存すれば則ち在り。これを忽にすれば則ち亡し。これに向へば則ち吉。これに背けば則ち凶。これを保てば則ち遐き祥極りなし。これを失すれば則ち命彫み氣窮まる。老君が言に、忽たり恍たり。その中に象あり、恍たり忽たりその中に物ありといへるは、「一」の謂なり。

故に仙經に曰く、子長生を欲しなば「一」を守るときは当に明なるべし。「一」を思ひて餓に至るときは「一」これに糧を与ふ。「一」を思ひて渴に至るときは「一」これに漿を与ふと。「一」に姓と字と服色とあり。男は長さ九分、女は長さ六分にして、或は臍の下二寸四分なる下丹田の中に在り、或は心臓の下の絳宮金闕の中丹田に在り、或は人の両眉の間に在り、それより却行すること一寸なるを明堂とし、二寸なるを洞房とし、三寸なるを上丹田とす。こ

れ乃ち道家の重んずる所にして、世世血を敵りて、口にてその姓名を伝ふるのみ。

「一」は能く陰を成し陽を生じ、寒暑を推歩す。春は「二」を得て以て発し、夏は「一」を得て以て長じ、秋は「一」を得て以て収め、「冬」は一を得て以て蔵む。その大なることは六合を以て階すべからず。その小なることは毫芒を以て比すべからず。昔し黄帝は、東のかた青丘に到り、風山を過ぎ、紫府先生に見えて、三皇内文を受け、以て万神を効召し、南のかた円隴の陰なる建木に到りて、百令の所を觀、登りて若乾の華を採り、丹轡の水を飲み、西のかた中黄子に見えて、九加の方を受け、洞庭を過ぎ、広成子に従ひて自成の經を受け、北のかた洪隄に到り、具淡に上りて、大隗君・黄蓋童子に見えて、神芝の図を受け、還りて至室に陟りて、神丹金訣記を得、峨眉山に到りて、天真皇人に玉堂に見えて、真一の道を請ひ問ふ。堂人の曰く、子は既に四海に君となりて、なほまた長生を求めんと欲するは、貧れるにあらずやと。その問答は具に説くべからざれば、ほぼ一隅を挙ぐるのみ。

夫れ長生の仙方はただ金丹あるのみ。形を守り惡を却くるは独り真一あるのみ。故に古人は尤も重んぜり。仙經に曰く、九転丹、金液經、守一訣は皆崑崙の五城の内に在りて、蔵むるに玉函を以てし、刻むに金札を以てし、封するに紫泥を以てし、印するに中章を以てす。吾これを先師に聞きしに曰く、「一」は北極大淵の中にあり。前には明堂あり、後には絳宮あり。巍々たる華蓋、金樓穹窿。左に罡右に魁。激波空に揚り、玄芝崖に被り、朱草蒙朧として、白

玉嵯峨^さたり。日月光^{ひかり}を垂れ、火を歴^へ、水を過^すぎ、玄を経^へ、黄を涉^{わた}り城闕交錯し、帷帳琳琅たり。竜虎列衛し、神人傍に在り。施さず与へずして、「一」はその所に安んじ、遅からず疾^{はや}からずして「一」はその室に安んず。能く暇あり能く豫^{やす}んじて「一」は乃ち去らず、「一」を守り真を存して乃ち能く神に通ず。欲^{よく}を少くし食を約して、「一」は乃ち留息し、自刃の頸^{くび}に臨むとき「一」を思へば生を得。「一」を知ること難からず、難きことは終^{をはり}に在り。これを守りて失はずんば以て窮^{きは}まること無かるべし。陸には惡獸を避け、水には蚊竜を却く。魍魎^{もつりやう}を畏れず、毒を挟^{はさ}むの虫鬼敢て近づかず。刃^{やいば}も敢て中らずと。これ真一の大略なり。

抱朴子が曰く、吾これを師に聞きしに云ふ、道術の諸經には、思存し念^{つく}作りて以て惡を却け、身を防ぐべき所の者、数千法あり。影を含み、形を藏^{かく}し及び形を守り、無生九變十二化二十四生等の如き、身中の諸神を見るを思ひて内視して見えしむるの法は勝^あげて計ふべからず。また各効あるなり。然^{しか}して或は乃ち思ひて数千の物を作りて以て自ら衛^{まも}ることは、率^{おほむ}ね多く煩雜にして以て大に人意を勞するに足れり。若し「一」を守るの道を知るときは、則ち一切この輩を除棄す。故に曰く、能く「一」を知れば則ち万事畢^{をは}る者なり。真一を受くる口訣は皆明文あり。白牲の血を敵^{すす}り、王相の日を以て之を受け、白絹白銀を以て約を為し、金契^{きぎ}に剋^きみて之を分つ。輕説妄伝すれば、その神は行はれざるなり。人能く「一」を守れば、「一」もまた人を守る。白刃もその鋭を措^おく所なく、百害もその凶を容^いる所なく、敗^{やぶれ}に居て能く

成り、危きあやふに在りて独り安き所以なり。若し鬼廟の中、山林の下、大疫の地、塚墓の間、虎狼の藪、蛇蝮の処に在らるとき、「一」を守りて怠らずんば、衆惡遠くしりぞ進むべし。若し忽ちたまたま偶「二」を守ることを忘るるときは百鬼に害せられん。或は臥して魘おそはるときは、即ち中庭に出て、輔星を視て、固こを握り「二」を守らば、鬼は即ち去らん。若し夫れ陰雨せば、ただ室中に止まりて北に向ひて輔星を見るを思ふのみ。若し兵甲に囲まれて、また生地なくんば、急に六甲の陰中に入りて伏して「一」を守るべし。然るときは五兵も之を犯すこと能はざるなり、能く「一」を守る者は、万里に行き、軍族に入り、大川を渉わたるに、日を卜ぼくし時を択えらぶことを須もちひず。工を起して、移徙して新屋舎に入るにも、皆また堪輿かんよ、星歴を按ずるを要せずして、太歳、太陰將軍、月建煞耗さつかうの神、年命の忌を避けず、終つひにまた殃咎わうきうを懼れざるなり。これ先賢が歴試しるしして驗ありし道なり。

抱朴子が曰く、玄一の道また要法にして、避けざる所なく、真一と功を同じうす。吾が内篇第一をば名づけて暢玄といへるは、正にこれを以てなり。玄一を守るはまた真一を守るよりも易し。真一には姓字長短服色あること玄一に同じ。ただ此の見ゆるの初は之を日中に求む。いはゆる白を知りて黒を守れば死せんと欲するも得ずといふものなり。然しかして先づ当に百日潔斎すべし。乃ち候うかひ求めて之を得べきのみ。また三四日を過ぎずして之を得べし。之を得て之を守るときは、則ちまた去らず。玄一を守り并あはせてその身の分れて三人となること

を思ふべし。三人已に見はるれば、又軫之を益して数十人に至らしむべし。皆己の身の如し。之を隠し之を顕はすには皆自ら口訣あり。これいはゆる分形の道して、左君（左慈）及び薊子訓（葛仙公）の能く一日に数十処に至り、及び客あるとき、座上に一主人ありて客と門中に語り、又一主人ありて客を迎へ、又一主人ありて釣を投じ、賓客は何れの者が真の主人たるかを別つこと能はざりし所以なり。師の言に、「一」を守るには兼ねて明鏡を修む。その鏡道成るときは能く形を分ちて数十人となし、衣服面貌皆一のごとしと。

抱朴子が曰く、師の言に長生せんと欲せば、勤めて大薬を服すべく、神に通ずるを得んと欲せば、まさに金水もて形を分つべし。形分るれば自らその身中の三魂七魄を見て、天靈地祇も皆接見すべく、山川の神も皆使役すべしと。

抱朴子が曰く、生は惜むべし、死は畏るべし。然して長生して性を養ひ死を避くる者も、また未だ勤に始まりて久視を成すに終らざるものあらざるなり。道成るの後にはほゞ為す所無けれども、成らざるの間は為さざる所無し。草木の薬を採掘し、山沢の中に劬勞し、煎餌治作には皆筋力を用ひ、危に登り険を涉りて夙夜怠らざるは、至極の志あるに非ずんば久しきこと能はざるなり。及び金丹成りて天に昇らんと欲するも、その大薬物は皆錢を用ふるものなれば、価は卒に辨ずべからず。されば、当にまた耕牧商販に由りて以て資を索め、累年積勤して然して後に薬を合すべし。合作の日に及びては当にまた斉潔清浄にして人事を断絶し、諸の

不易^{ふえき}ありて、当にまた之に加ふるに神を思ひ一を守り悪を却^{しりぞ}け身を衛^{まも}るを以てすること、常に人君の国を治め將軍の敵を待つが如くにして乃ち長生の功を得と為すべきなり。聰明の睿智を以て經世濟俗の器に任じて、而してこの事を修めば、乃ち必ず得べきのみ。浅近の庸人は志の好むこと有りと雖^{をより}終を克^よくすること能はず。故に一人の身は一国の象^{かたち}なり。胸腹の位はなほ宮室のごとく、四肢の列はなほ郊境のごとく、骨節の分はなほ百官のごとく、神はなほ君のごとく、血はなほ臣のごとく、氣はなほ民のごときなり。故に身を治むることを知れば、則ち能く国を治む。夫れその民を愛するはその国を安んずる所以にして、その氣を養ふはその身を全くする所以なり。民散ずれば国亡び、氣竭^つくれば身死す。死する者は生くべからず、亡ぶる者は存すべからず。こゝを以て至人^{しじん}は未だ起らざるの患^{うれへ}を消し、未だ病まざるの疾^{やまひ}を治す。之を無事の前に医して、之を既に逝^ゆくの後に追はず、民は養ひ難くして危くし易く、氣は清くし難くして濁^{にご}し易し。故に威德を審^{つまびらか}にするは社稷を保つ所以にして、嗜慾^{しよく}を割^さくは血氣を固むる所以なり。然^{しか}して後に真一存し、三七守り、百害却き、年命延ぶ。

抱朴子が曰く、師の言に、金丹大藥を服せば、未だ世を去らずとも百邪は近づかざるなり。若しただ草木及び小餌八石を服せば、適^{たまたま}疾^{やまひ}をして除かしめ命をして益さしむべきのみ。以て外来の禍を禳^{はら}ふに足らざるなり。或は鬼に冒^{をか}し犯^{をか}され、或は大山神に輕^{しの}んじ凌^{しの}がれ、或は精魅^{すたま}に侵^{をか}し犯^{をか}さるるも、唯^{ただ}其一を守ることあらば、以て一切この輩^{ともから}を畏れざるべきなり。次

には則ち神符を帶ぶることあり。若しつひにこの二事を知らずして以て長生を求めんとするは危いかな。四門ありてその三を閉づるも盜はなほ入ることを得べし。況んや盡く開く者をや。

抱朴子内篇卷十九 遐覽（道家の経典の目録）

或る人曰く、鄙人は識見浅くして儒教に拘繫せられ、独り五經三史百氏の言、及び浮華なる詩賦無益なる短文あることを知るのみにして、思を盡してこれを守ること既に年有り。既に生れて多難の運に値ひ、乱は定まることあるなく、干戈と戚と揚とのみ時を得て、芸文は貴ばれず。徒に二天を消して、意を苦しめ思を極め、微なるを攻め、隠れたるを索むれども、竟に禄のその中に在りて、この豊畝を免るゝこと能はず。また精思に損することありて年命に益することなし、二毛は暮を告げ、素志は衰頹す。正に迷を反して以て生くるの道を尋ねんと欲すれども、倉卒にして極り罔く、趨き向ふ所無し。大川を渉らんとして済るべき所を知らざるがごとし。先生は既に三墳五典の書を窮め觀たまひ、また奇にして秘なるものを兼ね綜べたまふ。不審し、道書は凡そ幾卷ありや。願はくは篇目を告げよ。

抱朴子が曰く、

余もまた子と斯の疾を同じくする者なり。昔し、幸に名師鄭君に遇ひて侍したりき。恨むらくは、子弟慧ならずして以て至りて堅きものを鑽り、弥高きものを極むるに足らざりしのみ。時に門人の洒掃に充つと雖も、既に才識短浅にして又年尚少壮なりしかば、意思は専ならず、俗情は未だ盡きずして、大に得る所あること能はざりしは、巨いなる恨と謂ふのみ。鄭君は時

に年八十に出でたれども、先には髪鬢の斑白なりしもの数年の間にまた黒くなり、顔色は豊悦にして、能く強弩を引きて百歩の遠きを射る。歩行することは日々に數百里にして、飲酒は三斗なれども酔はず。山に上る毎に、体力輕便にして、危きに登り險しきを越ゆるに、年少のもの之を追ひて、及ばざるところ多し。飲食は凡人と異ならずしてその穀を絶つを見ざりき。余は余より先に随へる弟子の黄章といふものに問ひしに、答へて言ふ、鄭君嘗て豫章より掘溝浦の中に還らんとせしとき、逆に大風に遭ひ、また前に劫賊多しと聞きて同伴の人々鄭君を引き留めて後伴を須たしめたりしに人々皆糧を携ふること少かりしかば、鄭君は米を譲りて以て諸人に卹み、己はまた食はざること五十日なりしも飢ゑざりき。されどまたその施為する所を見ざりしかば、何の事を以てせしかを知らざりき。火下に細書することは少年の人に過ぎたり。性音律を解して善く琴を鼓して閑坐す。侍坐するもの數人なるに口づから諮問に答へて、言は響を輟めざるに耳は竝に聰聰す。左右にて弦を操る者に教へて長短せしむるに毫釐も差へ過つこと無し。余は晩く鄭君の門人となり方書を見んことを請ひしに、余に告げて曰く、要道は僅に一尺の素絹の上に書したるほどにてこれを以て浮世を度脱するに足れば、多くの書を用ふるを要せざるなり。然も博く涉りたる後には見ざるに勝れること遠し。既に人意を悟り、また浅近の術を得て、以て初学未成の者の諸患を防ぐべきなりと。乃ち先づ道家の教戒を訓ふる書の要ならざるもの百卷に近きを少しづつ余に示したり。余もまた

先に見たる所のもの多かりしかば、それらの者につきてその中の疑事を少しばかり諮問したり。鄭君は言ふ、君は事を甄あきらにするの才あれば教ふべきなり。然しかも君が知る所のものは多けれども未だ精しからず、また意は外学に在りて專一なること能はず。されば、未だ以て深きを経て遠きに渉わたるに中あたらざるのみ。今は自らまさに佳書を以て相示すべきなりと。又漸く短所を得ることを許せり。縑素けんそに写したるものは、積年の中にして見る所を合集すること、当に二百許巻に出でたるべきも終に得べからざるなり。他の弟子は皆僕使えきの役を親みづかし、薪を採り田を耕す。唯余ただのみは厓嬴わうるゐにして他の勞に堪へざれども、しかも以て自らみづか効いたすることなく、常に親みづから掃除し、牀几しょうぎを払拭ふつしよくし、墨を磨すり燭を執り、及び鄭君と与に故書を繕写するのみ。鄭君は余を待たるゝこと先進の者に同じく、余に語りて曰く、雜道書には卷えきに佳事あり。ただ当にその精粗を校かんがへて施行する所を択えらぶべし。盡あんしく誦しやうして以て日月を妨さまたげて意思を勞あすることと事をとせざるべきのみ。若し金丹一たび成らば則ちこれらは一切用ふるの要なし。また或は教授する所あるべきも、宜しく本末を得て、先づ浅きより始めて以て學者を勸進すべし。希准きじゆん階かい由いうする所なきなりと。鄭君また背あへて先づ人をしてその書を写さしめず。皆まさきにその意を分別するを必要とす。久しく之を借かすといへども敢て一字を盗写する者有ることなし。鄭君はもと大儒士なり。晩にして道を好む。よりて礼記尚書を以て教授して絶えず。その体望は高亮にして、風格は方整なるを以て、之に接見する者みな肅然たり。諮問せんとす

ることある毎に、常にその温顔を待ち、敢て輕銳にせざるなり。書の余が処に在る者久しきこと或は一月にして、以て大に写す所あるに足れども、以て敢て竊に写さざるは、まさに鄭君の聰明なるを以て、邂逅に之を知られて、その意を失ふときは、更に小を以て大を喪へばなり。然も、求受の初においてまた敢て斟酌を為さざる所は、時に請ふ所あるのみ。ここを以て徒に河に飲むことを知るのみにて満腹するを得ず。然して弟子五十餘人の中、ただ余のみ見に金丹の經及び三皇内文、枕中五行記を受けたり。その餘人は乃ち一たびもこの書の首題を観るを得ざる者あり。他の書は具に得ずと雖も、皆その名を記せり。今將に子が為に之を説かんとす。後生の書を好む者は以て広く索むべきなり。

道經には、三皇内文、天地人三卷、元文上中下三卷、混成經二卷、玄録二卷、九生經、二十四生經、九仙經、靈卜仙經、十二化經、九變經、老君玉曆真經、墨子枕中五行記五卷、温宝經、息民經、自然經、陰陽經、養生書一百五卷、太平經五十卷、九微（一に都に作る）經、甲乙經一百七十卷、青竜經、中黄經、太清經、通明經、按摩經、導引經十卷、元陽子經、玄女經、素女經、彭祖經、陳敖經、子都經、張虛經、天門子經、容成經、入山經、内宝經、四規經、明鏡經、日月臨鏡經、五言經、柱中經、靈宝皇子心經、竜蹄經、正機經、平衡經、飛龜振經、鹿盧蹄經、蹈形記、守形図、坐亡図、觀臥引図、含景図、觀天図、木芝図、茵芝図、石芝図、大魄雜芝図、五嶽經五卷、隱守記、東井図、虚元經、牽牛中經、玉弥記、猧成記、六安記、平都記、定

心記、龜文經、山陽記、玉策記、八史圖、八宝經、左右契、玉曆經、昇天儀、九奇經、更生
 經、四衿經十卷、食日月精經、食六氣經、丹一經、胎息經、行氣治病經、勝中經十卷、百守
 撰提經、丹壺（一に臺に作る）經、岷山經、魏伯陽內經、日月厨食經、步三罡六紀經、入軍經、六陰
 玉女經、四君要用經、金雁經、三十六水經、白虎七變經、道家地行仙經、黃白要經、八公黃
 白經、天師神器（一に氣に作る）經、枕中黃白經五卷、白（一に帛に作る）子變化經、移災經、压禍經、中黃
 經、文人經、涓子天地人經、崔文子肘後（一に時候に作る）經、神光（一に仙に作る）占方來經、水仙經、尸解
 經、中遁經、李君包元經、黃庭經、淵体經、大素經、華蓋經、行厨經、微言三卷、內視經、文
 始先天經、曆藏延年經、南閣記（關一に關に作る）協龍子記七卷、九宮五卷、三五中經、宣常經、節解
 經、鄒陽子經、玄洞經十卷、玄示經十卷、箕山經十卷、鹿台經、小僮經河洛內記七卷、拳形
 道（一に通に作る）成經五卷、道機經五卷、見鬼記、無極經、宮氏經、真人玉胎經、道根經、候命圖、
 反胎胞經、枕中清記、幼化經、詢化經、金華山經、鳳綱經、召命經、保神記、鬼谷經、凌霄
 子安神記、去丘子黃山公記、王（一に玉に作る）子五行要真經、小餌經、鴻寶經、鄒生延命經、安魂
 記、皇道經、九陰經、雜集書錄、銀函玉匱記、金板經、黃老仙錄、原都經、玄元經、日精經、
 渾成經、三尸集呼身神治百病經、收山鬼老魅治邪精經三卷、入五毒中記、休糧經三卷、探神
 藥治作秘法三卷、登名山渡大海勅地神法三卷、趙太白囊中要五卷、入溫氣疫病太禁七卷、收
 治百鬼召五岳承太山主者記三卷、興和宮宅宮舍法五卷、斷虎狼禁山林記、召百里虫蛇記、万

畢高丘先生法三卷、王喬養生治身法三卷、服食禁忌經、立功益算經、道士奪算律三卷、移門子記、鬼丘法、立亡術、練形記五卷、鄒公道要、甬里先生長生集、少君道意十卷、樊英石壁文三卷、思靈經三卷、童首經、荊山記、孔安仙淵赤斧子大覽七卷、董君地仙却老要記、李先王口訣肘後二卷、凡そ卷数を言はざるものは皆一卷なり。

その次には諸符あり。則ち、自来符、金光符、太玄符三卷、通天符、五積符、石室符、玉策符、枕中符、小童符、九靈符、六君符、玄都符、黃帝符、少千三十六將軍符、延命神符、天水神符、四十九貞符、天水符、青童符、白虎符、朱雀符、玄武符、朱胎符、七機符、九天癸兵符、九天符、老經符、七符、大捍厄符、玄子符、武孝經燕君竜虎三囊辟兵符、包元符、沈義符、禹躡符、消災符、八卦符、監乾符、雷電符、万畢符、八威五勝符、威喜符、巨勝符、採女符、玄精符、玉歷符、北台符、陰陽大鎮符、枕中符、治百病符十卷、厭怪符十卷、壺公符二十卷、九台符九卷、六甲通靈符十卷、六陰行厨竜胎石室三金五木防終符合せて五百卷、軍火召治符、玉斧符十卷。これみな大符なり。その餘の小小は具さに記すべからず。

抱朴子が曰く、鄭君が言に、符は老君より出づ。皆天文なり。老君能く神明に通ず。符は皆神明の授くる所なり。今の人之を用ひて験少き者は、出来久しきを歴て伝写の誤多きに由るが故なり。又信心篤からざるときは、之を施し用ふるもまた行はれず。又これを字を書するに譬ふれば、符の誤る者はただに益なきのみならずして、将によく害あらんとするなり。字

を書することは、人之を知れども、なほ之を写して誤多し。故に、諺に、書三たび写すときは、魚は魯となり、虚は虎となるといふは、このことを謂ふなり。ヒの字と士の字とはただ鋸勾長短の間を以て異なることをなすのみ、然して今符上の字は読むべからずして、誤は覺るべからざるが故にその不定を知ることなし。世間に又体を受け術を使ひ符を用ひて独り効ある者あり。また人の麝香を使ひて便ち能く芳しきものあるが如し。これ自然にして伝ふるを得べからざるなり。しかりと雖も、必ず誤なき符を得て心を正しくして之を用ふるときは、ただまさに真体に及ばざるべきも、之を使ふ者は速に効ありて、皆自ら益あるなり。凡そ道士となりて長生を求めんとせば、志は藥中にあるのみ。符と劔とは以て鬼を却け邪を辟くべきのみ。諸の大符は乃ち之を行ひ用ひて以て仙たるを得べしといふ者はまた専ら抛るべからざるなり。昔し呉の世に介象といふ者ありて、能く符文を読み、誤と否ざるとを知れり。人ありて試みに百病を治する雜符と諸の厭効の符とを取りて、その籤題を去りて以て象に示すに、皆一々抛りて之に名づけ、その誤ある者は便ち人の為に之を定めたりき。これより以来は能く知る者あることなし。

或る人問ふ、仙藥の大なる者は金丹より先なるはなきことは、既に命を聞けり。敢て問ふ、符書の属の最も神なることは如何と。

抱朴子が曰く、余は鄭君の言を聞くに、道書の重き者は、三皇文、五岳真形図に過ぎたる

はなし。古人、仙官、至人この道を尊びて秘す。こは仙名ある者にあらずんば、授くべからざるなり。之を受けて後四十年にして、一たび伝ふ。之を伝ふるには血を翳りて盟ひ、質を委きて約を為す。諸の名山と五岳とには皆この書あり。ただ之を石室幽遠の地に蔵す。道を得るに応ひたる者、山に入りて精誠に之を思ふときは、山神自ら山を開きて人に之を見しむ。帛仲理といふものの如きは、山中に於て之を得て、自ら壇を立て、絹を委き、常に一本を画きて去れり。この書を有するものは常に清潔の処に置き、為す所あらんとする毎に必ず先づ之に白すこと君父に奉ずるがごとし。その経に曰く、家に三皇文あるときは、邪惡鬼、瘟疫氣、横殃、飛禍を避く。もし困病して死に垂んとする者ありて、その道を信ずる心の至れる者には、この書を以て与へて之を持たしむれば必ず死せざるなり。その乳婦の難艱して氣を絶せる者之を持するときは児即ち生る。道士の長生を求めんと欲する者この書を持して山に入れば、虎狼山精を辟け、五毒惡邪皆敢て人に近づかず。以て江海を渉り、蛟竜を却け、風波を止むべし。その法を得るときは、以て変化すべし。工事を起すに、地を問ひ日を択ばざるも、家に殃咎なし。もし新宅及び塚墓を立てんと欲せば、即ち地皇文数十通を写して以て地に布著し、明日之を視て、黄色の著く所の者あらんには、便ちその上に於て工を起すべし。然るときは家必ず富み昌ふ。又他人の葬時に因りて、人皇文を写し并せて己が姓名を書して紙裏に著け、竊に人家の中に内れて人をして之を知らしむることなきときは、人をして飛禍盜賊に

遭ふことなからしむるなり。己を謀議する者あるときは、必ず反りて自ら中り復る。又この文は、先づ潔斎すること百日なれば、乃ち以て天神、司命及び太歳の神を召すべし。日々に五岳、四瀆（江、河、淮、濟）社廟に遊ぶの神も皆形を見はすこと人の如くにして、之に問ふに吉凶安危及び病者の禍祟の由る所を以てすべし。又十八字ありてこれ以て衣中に著くるときは、遠く江海を涉りて終に風波の慮なきなり。又家に五岳真形図あるときは能く兵を辟く。凶逆の人之を害する者は皆還りてその殃を受く。道士にして、時に之を行ふものあらんに、もし仁義慈心を行ふ能はずして、精ならず正しからずんば、即ち禍は家を滅すに至るべし。輕んずべからざるなり。その変化の術の大なる者はただ墨子五行記あり。もと五巻ありしが、昔し劉君安の未だ仙となりて去らざりし時に、その要を抄し取りて、以て一巻と為せり。その法は藥を用ひ符を用ひて、乃ち能く人をして上下に飛行し、無方に隠れ淪み、笑を含むときは即ち婦人となり、面を蹙むるときは即ち老翁となり、地に踞るときは即ち小兒となり、杖を執るときは即ち林木となり、物を種うるときは即ち瓜果を生じて食ふべく、地に画けば河となり、壤を撮めば山となり、坐ながら行厨を致し、雲を興し火を起さしめて、作さざる所なし。その次は玉女隱微一卷あり。また形を化して飛禽走獸及び金木玉石となり、雲を興して方百里に致し、雪もまたかくの如くし、大水を渡るに舟梁を用ひず、形を分ちて千人となり、風によりて高く飛び、無間に出入し、能く氣を吐きて七色をなし、坐ながら八極（方）及び地

下の物を見、光を放つこと万丈にして冥き室も自ら明かなり。これまた大術なり。しかもま
 さに諸星数十を歩すべく、曲折して識り難ければ、能く之を諳んずるもの少し。その淮南鴻
 宝万畢皆この書に及ぶものなきなり。又白虎七変の法あり。三月三日に殺したる白虎の頭皮、
 生駝の血、虎の血、紫綬、履組、流萍を取りて、三月三日を以て合せて之を種うるときは、初
 生の草、胡麻に似て実あり。この実を取りて之を種うれば、一たび生じて、輒ち一たび異な
 り。凡そ七たび之を種ゑて、則ちその実を用ひて之を合するときは、また以て形を移し貌を
 易へ、飛ぶも沈むも意のまゝなるべし。墨子及び玉女隱微と略同じ。これを過ぎては論ずる
 に足らざるなり。この遐覧の篇は道を好む者をして異書の名を知らしめんと欲するが為に作
 れり。鄭君は徒に五經に明にして仙道を知るのみにあらずして、兼ねて九宮、三奇を綜べ天
 文を推歩し、河洛讖記いづれも精研せずといふことなかりしが、太安元年（西紀三〇二年）に季
 世の乱起りて江南の地方将に鼎の沸くが如くならんとするを知り、乃ち笈を負ひ、仙葉の樸
 なるを待して、入室の弟子を將ゐて東のかた霍山（安徽省にあり）に投じ、所在を知ることなし。

抱朴子内篇卷二十

祛惑けふわく
 (詐偽の道十等に惑はさるべからず)

抱朴子が曰く、

凡そ明珠を採ることは、合浦の淵に於てせずんば、驪竜の夜光を得ず、美玉を採ることは、荆山の岫に於てせずんば、連城の尺壁を得ざるなり。師に承け道を問ふことその人を得ざるに、之れを委てて去ることは則ち遅々として、万一にも獲ることあらんを冀ひて之を守るときは、竟に成す所なくして、虚しく事を費し功を妨げんのみ。後に痛悔すと雖もまた及ばじ。世間の浅近の事すらなほ坐ながらにしては知り難し。況や神仙の事をや。聖なりと雖も明なりと雖も自ら曉るに由なし。思を歴て得べきにあらず、類に觸れて求むべきにあらざるなり。誠に師とするところの人の必ず深く博からんを要す。これなほ滄海を涉りて水を掇り、長洲に造りて木を伐るがごとし。独り力の劣るを以て患となす。豈に物の少きを以て憂となさんや。夫れ虎豹の餘す所は乃ち狸鼠の争ふ所にして、陶朱の棄つる所は乃ち原憲・顔淵の無き所なり。従ひて学ぶ所の者にして、遠く淵潭の門を識ることを得ずして、弧陋寡聞の者に値ふときは、彼が知る所は素より狭くして、源短く流促り、倒装して人に与ふれば、吝にして捨てず、分損して以て授くれば、浅薄にして奇無し。その宝秘する所已に精ならざるに、もしまたその粗なる者を料りて以て人に教ふるときは、また安んぞ能く成す所あらんや。譬へ

ば穀を伯夷叔斉の門に借り、寒を黔婁子の家に告げんがごとし。得る所のものは橡栗と縕褐とに過ぎずして、必ず大牢の繕と錦衣狐裘と無からん。或は凡庸の師を守りて之に事へて終に覺らざるものあり。或は幸に知者に値ひても勤めて求むる能はざるものあり。これは覺らざると追ふべからざるとに失するものなり。

人の浅深を知ることとは、実にまた易からず。古人の難しとせるは誠に以あるなり。白石は玉に似たり。奸佞は賢に似たり。賢者はいよいよ自ら隱蔽して、有れども無きがごとくし、奸人はいよいよ自ら衒ひ沽りて、虚にして実に類す。至明なる者にあらずんば、何を以てか之分たん。彼の庸師を守り求めて去らざる者は、その無知を知りて故に止まるに非ずして、誠に以て事ふるに足れりとするなり。達人を見ても之に奉仕する能はざる者は、その実に深きを知りて之に請ふこと能はざるに非ずして、誠に以て異なること無しとするなり。夫れよく要道を知るものは、物に無欲にして世の誉に徇はざるなり。また何ぞ肯て自ら流俗に標顯せんや。しかるに浅薄の徒は率ね誇誕多く、自ら称説して、色を厲しくし声を希にし、以てその虚妄を飾り、以て晩学の者を眩惑せしむるに足れり。而して敢て大言を為して乃ち云ふ、已に名山に登りて仙人を見たりと、倉卒に之を聞くときは清澄なること能はず。之を檢校する者もその偽を覺ることなきなり。

余昔し屢々雑散の道士輩を見しに、貴人の門に走りて、専ら從者をして空名を作為せしめ

て云ふ、それは已に四五百歳となれりと。人適之に年紀を問へば、伴りて聞かざるまねし、笑を含みて俯仰して、八九十と云ひ、須臾にして自ら言ふに、我曾て華陰山に在りて穀を断ちたること五十年、また嵩山の少室に於て四十年、また泰山に在ること六十年、また某の人と箕山に在ること五十年なりと。同人の為にその歴たる所を遍く説き、正に爾して人をして計へて之を合せて已に数百歳の人なりと思はしめんとするなり。ここに於て彼の好める人々は、烟のごとく起り、霧の如く合ひて、その門に輻輳せざるものなし。また術士の或は偶特別なる性質を受くること有りて自然に鬼神を見、頗るよく内占して人の将来及び過去の事を知れども、実には禍福につきて何等の損益あること能はざるものあり。これ譬へば筮に用ふる蓍にも、用ゆる亀の如きのみ。凡そ人その小験あるも見ては便ち呼びて神人と為し、知らざる所は必ず無しと謂へり。しからざれば、或は符水禁祝の法に長じ、邪を治めて効あれども、未だ必ずしも不死の道を曉らざるなり。或は雜術を修行して、能く鬼怪を見れども、年命には益なく、之に問ふに金丹の道を以てすれば則ち率ね皆知らざるなり。これに因りて細に之を験すれば、多く世人を欺き誑して以て財利を収めんとして、為さざる所なし、此等は彼の穿窬の盗と、その途を異にすれども歸する所をば同じくするものなり。夫れ之を空言に託するは之を行事に著すの徴あるに如かざるなり。將に晩覺後学の為にその徴とすべきの偽物を説かんとす。

昔し古強といふ者あり。草木の方を服し、又頗る容成玄素の法を行ふ。年八十許なれどもな
 は聰明にして大に羸老るゐらうせず。時人便ち之を謂ひて仙人となし、或は之を千載翁と謂へり。揚
 州の稽使君（稽含のこと）聞きて、試みに之を宜都ぎとに迎ふ。既に至りて唼鳴掣いんをせいしゆく縮し、知る所は実に
 遠くして未だ皆吐き盡さざるが如き者に似たり。こゝに於て好事の者、声を聴きて響の如く
 に集り、形を望みて影の如くに付き、雲のごとく萃あつまり霧のごとく合ひ、竟に守りて之に事へ、
 饋餉相属きしやうき、常に金錢を餘す。樂大・李少君らんたいりせうくんが漢の武帝に重んぜられしことも之には如かじ
 と思はれたり。常には天門冬てんもんとうを服して廢すてず。則ちその体中に未だ嘗て金丹大藥あらざるを
 知るべきなり。而して古強は曾かつて略書記はくに涉りて頗る故事を識れるを以て、自ら己に四千歳
 を経たりと言ひて、敢て虚言を為し、之を言ひて作はぢずして云ふ、已に堯舜禹湯を見たりと。
 之を説くこと万万実の如し。その言に世の堯の眉は八彩なりといへるは然らず、ただ両眉頭
 甚だ豎たてにして八の字に似たるのみ。堯の人と為なりは長大にして髭髯多く、酒を飲むことは一
 日の中に二斛餘なりしかば世人困りて之に加へて千鍾と云へども、実は能くせざるなり。我
 は自ら屢堯の大に酔へるを見たり。これ聖人なれども、年老いては、事を治むるに軫うた少た壯たの
 時に及ばざりき。及び四凶を去り八元八愷がいを挙げ、舜に頼り用ひたりしを見たるのみ。舜は
 これ孤犢こけいなる小家の児たりしのみなれど、異才ありて隠れて歷山に耕し、雷沢に漁し、海浜
 に陶したりしに、時人未だ能くその奇を賞する者有らざりしが、我之を見たりしに、所在に

徳を以て民を化し、その目はまた重瞳ありしかば、予はその大貴の相を知り、常に之を勤勉慰勞して言ふやう、善く高尚なるを崇^{たつと}べ、富貴ならざるを憂ふるなかれ、大徳已に終りて黄精將に起らんとす、誕^{おほい}に歴数を承くるは子にあらずして誰ぞと。然るにその父は至りて頑に、その弟は殊に悪しく、恒に舜を殺すを以て事となし、かば、吾は嘗て諫^{いさ}め論して曰く、この児は当に卿^{おんみ}が門を興して四海に宗たるべければ、將にその賜^{たまもの}を受けんとするはただ卿が家のみならざるにより、取次^{しゅじ}にすべからずと。俄にして禪を受けたれば、嘗て吾が言の徴ありしを憶^{おも}ひたりと。

又云ふ、孔子の母年十六七の時に吾之を相して貴子を生むべしとなせり。仲尼を生むに及びて眞の異人なり。長九尺六寸にして、その頭は堯^{たけ}に似^に、その項^{うなじ}は皐陶^{かうやう}に似、その眉は子産に似、腰より以下は禹に及ばざること三寸なり。貧苦孤微の境遇なれども、児童たりし頃に祖豆^{そとう}の事を好みたれば、吾はその必ず成就すべきを知れり。その長大なるに及びては、高談して人を驚かし、遠近之に従ひて学を受くるも数千人と録^{しる}されたり。我その語を聴くを喜び、屢々之に往きたり。ただ恨むらくは我れ学ばずして之と覆疏すること能はざるのみ。孔子常に我に勧めて易を読ましめて云ふ、これ良書なり、丘^{きう}は竊に之を好みて、韋編^{いへん}三たび絶ち、鉄槌^{てつてき}(一に搗^こる)三たび折るるに至り、今は乃ち大に悟れりと。魯の哀公の十四年に、西に狩して麟麟死したるを獲たりし時、孔子は以て吾に問ひしかば、吾は之に語りて、これ善祥にあらず

と言ひたるに、孔子は乃ち愴然として泣けり。後に悪しき夢を得て、乃ち吾に会見せんと欲したりしが、時は四月の中なかにして、熱さ盛なりしかば、往くこと能はざりしに、尋で之を聞けば、病みて七日にして歿はつしたりといへり。今に於て髣髴ほうふつとしてその顔色を記憶せりと。

又云ふ、秦しんの始皇しきわう我ひきを將ほうじやうゐて彭城ほうじやうに到りて、周の時代の鼎かなへを引出さんとせし時、吾は秦の始皇に告げて言ふやう、この鼎はこれ神物なり、徳有るときは自おのづから出で、道無きときは淪しつみ亡ぶ、君ただ己を修めよ、これ必ず自おのづから来らん、力を以て致すべからずと。始皇はその時大に吾を怪しむの色ありしが、之を牽ひきたれども、果して出すことを得ざりき。乃ち吾に謝して曰く、君は固まに是れ遠く理を見るの人なりと。又漢の高祖、項羽を説くに皆分明なり。此の如きの事類は具ぐに記すべからず。時人各共に之を識しりて以て戲笑となし、が、凡人は之を聞きて皆その言を信じたり。

又古強は軫うたた惜くらく耄もうして事の機を廢忘することあり。嵇使君曾かつて一の玉の卮さかづきを以て強に与へしに、後に忽ち替に語りて曰く、昔し安期先生この物を以て吾に相遺おくれりと。強は後に寿春の黃整が家に病みて死せり。整はその化し去れるかを疑ひ、一年許にして試みにその棺を鑿うがちて之を視たるに、その屍は宛さながらにしてこゝに在りき。この輩は皆名ありて実なし。世間をして天下に仙あることを信ぜざらしむるは、皆この輩の偽を以て真を乱りし罪なり。

成都の太守なる呉文の説によれば、五原に蔡誕さいたんといへる者ありて、道を好みしが、佳よき師を

得て之に事^{つか}へんとはせずして、家業を廃棄してただ昼夜に黄庭太清經、觀天節詳の如き諸家の不必要とせる書を誦し、日に誦することを輟^やめずして、道は此に盡きたりと謂^{おも}へり。然^{しか}して竟^{つひ}に施し用ふる所を知らず。徒にその浮華の説を美とするのみ。人に遇へば、又之に教へて、ただ読むこと千遍なれば自らその意を得べしとなせり。これを為すこと久しきを積みしかば、家中のものはその坐して衣食を消して異ある能はざるを患^{うれ}へ苦み、己^{おのれ}もまた慙^はぢ忿^いりて以て自ら解くこと無し。こゝに於て家を棄て、仙道成れりと言ひ、因りて走りて異界深山の中に往きしが、又諸の草木の葉を採掘して以て穀を辟^さくべきものを曉^{さと}らず、ただ行く行く薪を売^うりて以て衣食に易^かふるのみ。かくの如くすること三年にして饑^うゑ凍え辛苦せり。人或は之を識るものもあるも詭^{いつは}り知らざるまねす。されど久しくなりては、堪へずして又家に還りしが、黒く瘦^やせて、骨立ち、人の貌にも似ざりしかば、家人は之に、何処より来れるぞや、竟^{つひ}に仙たるを得ざりしかと問へり。因りて家人を欺きて云ふ、吾は天に昇ること能はずして、ただ地仙となりしが、初めて成りしばかりなれば、今は位卑くして諸仙先達の者に応給すれども、漸次に上位に遷るべし。さきに老君の為に数頭の竜を牧せしが、一の班竜の五色なるもの最も好かりき。これ老君が常に乗る所の者なり。吾れ之を守視して勤めず、ただ後進の諸仙と共に博戯して、忽ちこの竜を失へり。竜遂に所在を知らず。この罪の為に責められ、崑崙山の下に送られて、草三四頃^{けい}を芸鋤^{うんじよ}せしめらる。草は皆生細にして中に荒稼^{くわくわい}多ければ、之

を治むるの勤苦は口に述べがたし。法にてはまさに十年にして原ゆさるべし。会たまま偃あく子せん、王喬の諸仙来りて按行す。吾首はじめて之に請ひて、竝に吾が為に作力せしめ、且つ自ら放れ帰れり。常に更に修理して去ることを求むべしと。こゝに於て遂に老死せり。初め誕の遷りしとき、崑崙より来れりと云ひしかば、諸の親故の人々競うて共に之に問ひて、崑崙は何いか似といへり。答へて云ふ、天はその高さ幾里と問はず、要は仰ぎて之を視るとき、天を去ること十数丈に過ぎず。上には木禾ありて、高さ四丈九尺、その穗は車に盈ち、珠玉の樹、沙棠さとう・琅玕らうかん・碧塊へきくわいの樹あり。玉李、玉瓜、玉桃あり。その実みの形は世間の桃李の如くなれども、ただ光明洞徹してしかも堅しとす。須すべく玉井の水を以て之を洗ふべし。便すなち軟にして食ふべし。風の起る毎に、珠玉の樹は、枝條花葉互に相扣撃して、自ら五音を成し、清哀にして心を動かす。吾れ謫たくせられて志を失ひしかば、これを聞きて愴然として悲を含まざるることなし。又崑崙山上を見るに、一面には輒すなち四百四十門ありて、門の広さは四里、内には五城十二樓あり。樓下には青竜白虎ありて蛟蛇みいとして長きこと百餘里、その中の口牙は皆三百斛こくの船の如し。大蜂は一丈ありて、その毒は象を殺す。又神獸ありて獅子と名づく。辟邪、天鹿、焦羊、銅頭、鉄額、長牙、鑿齒たくひの属たぐひ三十六種あり。盡くその名を知るときは、天下の惡鬼惡獸も敢て人を犯さざるなり。その神には則ち無頭子、倒景君、翕鹿公きふ、中黄先生ありて、鹿門大夫張陽字は子淵と与ともに玉闕に備へしむ。老君の竹使符、左右契を帶びざれば、入ることを得ざるなり。

五河は皆山隅より出づ。溺水之を遶り、鴻毛浮ばず、飛鳥過らず、ただ仙人のみ乃ち之を越ゆることを得。その上に住む神鳥、神馬の幽昌、鷦鷯せうめい又は騰黄とうくわう、吉光など呼べる属は皆能く人語して不死なり。真に樂しき仙府なれども、恨むらくは吾れ善くその上に周旋することを得ざるのみと。時に誕がこの言を聞きて了了として之を信ずる者多かりき。

又河東の蒲坂に項曼都かうまんどうといふ者ありて、一子と山に入りて仙を学ぶこと十年にして家に歸れり。家人その故を問ふ。曼都曰く、山中に在りて三年精思せしに、仙人ありて来りて我を迎へ、共に竜に乗りて天に昇る。やや久しくして頭を低れて地を視るに、杳杳冥冥たり。上には未だ至る所あらずして地を去ることは已に絶だ遠し。はなは竜の行くこと甚だ疾くして、頭は昂り尾は低く、人をしてその脊上に在りて危怖嶮巖けんぎせしむ。天上に到るに及びて先づ紫府を過ぐ。金狀玉凡晃晃くわうくわう昱昱として真に貴き処なり。仙人はただ流霞一盃を以て我に与へて之を飲ましめたるに、輒ち飢渴せざりき。しかるに忽然として家を思ひ、天帝の前に到りて謁拝するとき礼儀を失したるが為に、斥けられて来り還り、当に更に自ら修積して乃ち更復するを得べからしむ。昔し淮南王劉安は天に昇りて上帝に見えし時、箕坐きざして大言し、自ら寡人と称せしかば、遂に謫たくせられて天厨を守ること三年なりき。吾は何人ぞやと、河東にては之に囚りて曼都を号して斥けられたる仙人となせり。世にはこの輩多くして、種類一にあらざれば、詳にせざるべからざるなり。これは妄語なるのみなれど人はなほその虚なるを覺らざ

るものあり。況や微茫欺誑きくわう、頗る事類の似たる者によりて之を加益するをや。至明の者にあらずんば、倉卒に安んぞ能く辨ぜんや。

乃ち後た仮託まして、前世有名の道士となる者あり。白和といふ者の如きは、已に八千七百歳と伝言し、時に俗間に出でては又忽然として自ら去りてその在る所を知らず。洛中に道士の已に博く衆事に涉り、洽あまねく術数を練る者ありて、諸の疑難を以て和に諮問せしに、和は皆声につぎて論釈し、少しも疑碍することなかりしかば、遠識の人とせられたり。ただその年寿を知らず。信に能く千年に近しとするも啻ならざるのみ。後に忽ち去りて所在を知らず。一人あり、河北の地に於て自称して白和といふ。こゝに於て遠近より竟に往きて之に奉事せしかば、大に富を致すことを得たり。白和の弟子等は和が再出せるを聞きて、大に喜びて故に往きて之に見えしに、全く非なりしかば、この人も、因りて亡げ走れり。

五經四部の典籍は竝に已に陳ねたりし芻狗すうく、既に往にし糟粕なり。いはゆる足迹あじより出でたるものにして足にはあらざるが如く、書は聖人の作る所にして聖人にはあらず。しかるに儒者は万里に笈を負ひて、以てその師を尋ぬ。況や長生の道は真人の重んずる所なれば、勤めて之を求め、充分に之を問はざるべけんや。然して又その真偽を精しく簡えらばざるべからざるなり。余は古強、蔡誕、項曼都、白和の世間に絶えざらんことを恐る。好事の者は、余がこの書を省みかえりば以て少しくその善と否とに對して沙汰を加ふるを得べし。また仙經に云ふ、仙人

の目瞳は皆方なりと。洛中にて白仲理を見たる者余が為にその瞳の正に方なるを説けり。此^{かく}の如くんば果してこれ異人なり。

附
別
旨(導引の法
ふ述べ)

夫れ精を胎し、神を固むるは、元氣を守ると同じ。ただ出入の息いきを知ることなくして可なり。常に以て氣を生ずることありて、時に鼻を以て引きて、口に入れて吐き、二分を吐きて一分を餘し、口を鼓してこの氣を咽のむときは喉中いぐをして郁然として声有らしむるは、これ元氣を胎するに非ずして、麤氣そを服するなり。麤氣の腹に在るや、元氣と同じく居らざるなり。麤氣は喘息ぜんそくの氣なり。夫れ元氣は至少なれども散じ難くして、麤氣の出入あるが如きに非るなり。且つ呼吸するもなほ自ら聞くことを欲ぜず。況んや咽のみて声有るをや。夫れ入氣の麤なるときは肺を傷る。肺は五臟の華蓋くわがいにして、氣下りては先づ肺に至ればなり。凡そ元氣は麤氣に随ひて出入せざるものなれば、元氣を服するには氣の生死の時を待つこと有る無し。既に外氣を鼓し咽のみて元氣の臓中に入るは、返りて人を傷ふ所以なり。夫れ人のその力を用ふるは皆衆氣を用ふるなり。衆氣とは衆物の氣、飲食の品を謂ふなり。且つ衆氣は只能く重きを挙げ、遠きに致し、体を運らずのみにして、之を存するも人の寿を益すること能はず、之を去るも人をして短折せしむること能はざるものなれば、何ぞ必ずしも禁閉するの要あらん。且つ氣を用ふるの術とは即ち麤氣を用ふることにして、以て山岳を移し、河海を決し、虎豹を制し、賊盜を縛すべし。故に知る、衆氣は麤氣に及ばざることを。麤氣は之を去るべくして、

元氣は出でしむべからず。夫れ氣を保つとは元氣を保つなり。衆氣と麤氣とはあらず。若し元氣を服して臓に満たしむるときは、麤氣自ら除く。即ち自ら麤氣を以て運動して、必ずしも衆氣を用ひざるなり。夫れ休絶するものは、その穀氣の五臓を薰蒸することを患へて之を絶つなり。今既に氣術を修むる時は穀氣は自ら除くを以て、たとひ一日に九たび飡するもまた患を成すこと能はず、終歳食はざるもまた羸困すること能はず。然らば則ち氣を知るの道は遠いかな。

夫れ導引は、名を立て、物に象り、粉絵し、形に表し、図に著すべきにあらずして、ただ名状すること無きなり。或は伸び屈み、或は俯し仰ぎ、或は行臥し、或は倚り立ち、或は躑躅り、或は徐に歩み、或は吟じ、或は息するは皆導引なり。必ずしも毎晨之を為さず、ただ身の理せざることあるを覺るときに之を行ふべし。之を行ふときは皆まさに氣を閉づべし。氣を閉づれば、即ちその氣は衝きて以て通ず。また息の数を立つるを待たず、氣の極まるに似たるを待ちて先づ鼻を以て少しく引入れ、然る後に口より出し吐くなり。氣の閉づること既に久しきときは喉を衝くによりて、若し更め引かずして便ち口を以て吐けば、則ち氣麤にして肺を傷る。かくの如くにしてた疾愈ゆれば則ち已む。身をして汗せしむべからず。汗有るは則ち風を受けて以て揺動するが故なり。凡そ人の骨節を導引するときは声あり。もし大に引くときは声大にして、小く引くときは声小なり。かくの如くにして、筋は緩く、氣は通

ずるなり。夫れ導引は未だ患へざるの疾を療し、和せざるの氣を通じ、之を動かすときは百
関に氣暢^のび、之を閉づるときは三官に血凝る。実に養生の大律にして、疾を祛^{のそ}く^のの玄術なり。

- ・ 「抱朴子内篇」(『道教聖典』小柳司気太・飯島忠夫訳、世界文庫刊行会発行、一九三三年三月)所収。
- ・ 旧仮名遣いは原文のまま。
- ・ 原文の旧字は一部を除いて新字改めた。
- ・ 本文中の句読点は、原文のまま。
- ・ 本文中の振り仮名は原文のまま。
- ・ PDF化には $\text{\LaTeX}$ 2 ϵ でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/sciencelib.html>